ヘヴィーオブジェクト 巨人達の影

鎌池和馬

KAZUMA KAMACHI

イラスト・オブジェクトデザイン

凪良

NAGIRYO

電撃文庫

か-12-27

ヘヴィーオブジェクト 巨人達の影

鎌池和馬

電撃文庫

630

9784048700511

ISBN978-4-04-870051-1

C0193 ¥630E

1920193006308

ASCII MEDIA WORKS

発行● アスキー・メディアワークス

定価: 本体 630 円

※消費税が別に加算されます

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

イラスト・オブジェクトデザイン
凪良 NAGIRYO

結局、戦争はなくならなかった。
でも、変化はあった。
――超大型兵器オブジェクト。
それが、戦争の全てを変えた。

ヘヴィオブジェクト
HEAVY OBJECT
Global shadow 巨人達の影

INDEX

000010 序　章

000012 第一章
ジャンクの墓はレアメタルの山
>>アラスカ戦場跡迎撃戦

000150 第二章
札束の散らばる炭鉱
>>カムチャッカ半島夜間奇襲電撃戦

000280 第三章
名誉に値段はつけられない
>>ヴィクトリア島緊急追撃戦

000412 終　章

【ラッシュ】RUSH

「情報同盟」軍所属の陸戦特化型第二世代オブジェクト。
全長100メートル、最高速度時速530キロを誇る対オブジェクト用駆逐兵器。

移動方式は、まず空気圧を利用したエアクッションで機体を浮かせ、その後キャタピラで地面を削り取るように前進するという方式を採用している。機体質量軽減のため、装甲にはカーボン、アミラド等を含む複合装甲を使用し、高速移動を可能とした。

主砲は連続ビーム式ガトリング砲で、連射時の冷却時間を稼ぐため、左右に一門ずつ配備。特徴的な主砲は、自軍で「ガトリング033」という名で呼ばれる由来にもなった。副砲はレールガン、コイルガンなどを装備。メインカラーリングはグレーで統一されている。

搭乗エリートは、「おほほ」が口癖の女性。自国では国民的アイドルとして活躍中で、パイロットスーツもGカップボディという彼女の魅力を存分に活かす仕様となっている。

Designed by Hirokazu Weber&Co.(07205 Inc.)

height / 163cm

「正統王国」第37機動整備大隊所属オブジェクト
「ベイビーマグナム」に搭乗する「エリート」

ミリンダ

「……どうしてここで
あのにくたらしい女が出てくるの？」

人生を効率良く生きていきたい戦地派遣留学生の少年&
変わり者の貴族にして不良系軍人

クウェンサー&ヘイヴィア

「クソッたれ!!
どこのどの辺が安全でクリーンな戦場だちくしょう!!」

部隊や階級を超えて、戦場での犯罪行為、
不当な捕虜の扱いなどの督戦権限を持つ「黒軍服」の女性将校

シャルロット

「貴君、所属と階級は？」

敵国「正統王国」にて作戦行動中の、
「資本企業」一軍をクライアントに持つ傭兵会社社員

ワイディーネ

「私達は戦場お掃除サービス。
ご用命の際は公式ウェブページの
専用フォームからどうぞ」

ヘヴィーオブジェクト 巨人達の影

巨大兵器オブジェクトが世界のバランスを支配し、物事の全てを決める。シンプルで安全で、クリーンな国際競争を行う場所。それが俺たちの『戦場』だ。こんな最前線から兵士が去っていく一番の理由は、負傷でも戦死でもなく、基地内における男女間の恋愛問題のこじれだったりする。そう。今時、戦場で死ぬなんて流行らない。

――はずだったのだが、

「「クソッたれ!!　どこのどの辺が安全でクリーンな戦場だちくしょう!!」」

爆乳美人上官フローレイティアは、今日も今日とて、ごく自然に戦地留学生クウェンサーと貴族なのに下っ端軍人ヘイヴィアの二人をオブジェクトだらけの戦場に放り込んでいた。

相変わらずな二人の敵は、以前出会った「おほほ」と笑うあのエリート女と、そいつが駆るオブジェクト。ヤバそうな予感バリバリで、しかもなぜか我らがお姫様の機嫌も悪く……これが恋愛問題のこじれってやつなのか？

ハイテンションな近未来アクション、懲りずに第三弾だ！

次に会ったら敵同士。
待っているのは殺し合い。

――とある僻地勤務の兵士のつぶやき

HEAVY OBJECT

global shadow

ヘヴィーオブジェクト
巨人達の影

鎌池和馬
KAZUMA KAMACHI

序章

やあ。

お前はどこに所属してる？

『正統王国』、『情報同盟』、『資本企業』、『信心組織』。

世界的勢力って言っても、色々あるよね。それ以外にも、月面だの空白地帯だの、珍しい場所も含めればもっと増えるかな。

ま、お前がどこに所属してるのかはどうでも良い。

自分の主義主張、趣味嗜好に合わせて好きなものを選べば良い。

そういう問題よ。

世界の半数近くを占める『安全国』は、他の兵器をもろともしない、各勢力が保有する最強のオブジェクトの恩恵を受けて守られている。その他の月面とか空白地帯だって、世情の流れを読んで『大きなトラブル』から回避できるエリアを選べば、それなりの人生を送れるでしょう。

だが。

だがね、もしも、お前がこの世界に何の問題もない完璧な条件に満たされた『理想郷』を求めて各々の勢力を下見しているとしたら……悪い事は言わない、やめておけ。

そんな簡単な話じゃないの。

この世界のどこかにはそういったものがあるのかもしれないが、少なくとも、私の知っている範囲には存在しないね。

必ず何かしらの問題がある。

デメリットは存在する。

はは、ムッとしたね。良い反応よ。それはまだ希望ってヤツを信じている目の色だからさ。

私は素直にこう言うよ。羨ましい。だから羨ましいお前に、私はちょっとした小話をしてやろう。なあに、大丈夫。そんな目をできるお前ならば、この程度の話を聞いたって何にも揺らぎはしないよ。

そう。

そうね。

それじゃあ、ちょいと話をしてやろうかな。

お前が信じている、世界的勢力ってヤツの影を。

第一章　ジャンクの墓はレアメタルの山

〉〉アラスカ戦場跡迎撃戦

1

ウォータースストライダー、というオブジェクトがあった。

最新鋭の第二世代。静電気を利用して雪原を滑るように移動し、前後左右にそれぞれ二門ずつ備わった主砲の下位安定式プラズマ砲で、核でも大破できない敵オブジェクトの装甲を貫通させる怪物機体だ。

並の第一世代では歯が立たないウォータースストライダーだったが、オブジェクトの設計を学びに来た派遣留学の学生と、武勲を立てるためにやって来た『貴族』のレーダー分析官の手によって、木っ端微塵に爆破されたのが、およそ二ヶ月前。

そして今、

「ただいまアラスカ。また一段と冷え込んだようで何よりだ」

「おいクウェンサー。真面目ぶって仕事をするこたねえだろ。サンタクロースの家でも探しに

行こうぜ」

サンタって北欧に住んでるんじゃなかったっけ？」

「『信心組織』の連中にでも聞けよ。いや、炭酸飲料のコマーシャルで服の色を変えたっつーんだから『資本企業』か？　案外、会社の保養施設でくつろいでるかもしれねえな」

『正統王国』に所属するクウェンサーとヘイヴィアの二人は、ブツブツ言い合いながら雪の上を歩いていた。

サラサラした金髪で、ズボンを穿くかスカートを穿くかで見た目の性別が変わってしまいそうなのが、派遣留学生の『平民』クウェンサー。

短い茶髪に、多少は筋肉のついた体つきの少年が、レーダー分析を専門とする『貴族』ヘイヴィア。

彼らが歩いているのは大自然の恩恵を思う存分満喫できる、白一色の冬景色……という訳ではなかった。

確かに、辺りで地肌の見えている場所は存在しない。地平線の向こうまで地面は白で覆われている。

だが、それとは別に、奇怪な金属製のオブジェが散らばっていた。

第二世代のオブジェクトである、ウォータースライダーの残骸だ。小さなネジぐらいなら雪の下に埋もれているが、大きな物だと一〇メートル級の鉄の塊が転がっていたり、くの字に

ねじれた鉄橋のような主砲が、平原を大きく遮る壁になっていたりする。

「我ながらすげえな」

ヘイヴィアが頭を掻いて、うんざりしたように呟いた。

「火山の噴火跡みてえ。見渡す限り瓦礫ばっかりじゃねえか。あの時の爆風は上方向に流れたとはいえ何百メートル先まで飛んでるんだ？」

「キロ単位だろ。しかしまあ、総重量二〇万トンのオブジェクトだからな。そう簡単には回収できない。向こうの軍も、俺達の軍も」

「陰気臭い諜報部の連中がチョロチョロしてると思ったら、そういう事情があったのか。テクノロジーだけでもその場で解析したり、レアメタルを抜き取ったりしてるって訳だ」

「雑用は連中に任せるとして、俺達も自分の仕事をしよう」

言うだけ言うと、クウェンサーは白い雪原から、比較的緩やかな崖を滑るように降りて、数メートル下へと向かって行った。そちらにもウォータースライダーの破片がギラギラと輝いていたが、爆発した箇所や風向きの問題なのか、大きな――一〇メートル以上の規模の残骸は見かけられない。

それが問題だった。

だからこそ、クウェンサーのような工兵の出番なのである。

「よしよし」

クウェンサーは自分が下って来た崖を軽く掌で叩きながら、
「表面ボロボロじゃん。これならお高い『ハンドアックス』を使うのがもったいないぐらいだ」
「『上』も大丈夫みてえだ」
遅れて滑り降りてきたヘイヴィアが、そんな事を言った。
「五メートルも亀裂を入れれば、大量の瓦礫が雪崩れ込んでくるぜ。アメンボ野郎の『脚』も丸ごと一本ある」
「それがヤツへの『足止め』に使える訳だ」
クウェンサーは適当に答えながら、バラバラに分解された電動ドリルを組み立てていく。日曜大工用ではなく道路工事に使うようなモデルで、ドリル部分だけで五～六〇センチはあった。彼は崖に対して水平に電動ドリルを突き刺し、トリガー状のボタンを押す。
崖の壁面にいくつか穴を空けていくクウェンサーは、
「俺が印をつけた所に爆弾を突っ込んでくれ。終わったら、さっき渡した鉄板で蓋をして、上を被せ直す。爆発のエネルギーが崖の奥へ向かうようにするんだ」
「へいへい。ったく、ケーキの上にホイップを絞るのと同じぐれえ面倒な手順だな。グラム単位の値段はプラチナよりも高い爆弾なんだろ。威力だってデカいんだからよ、適当に仕掛けたってきちんと崖を崩してくれるんじゃねえのか？」
「何だよ。愚痴が多いのってドリル用のスペアバッテリーをたくさん抱えさせられる羽目にな

ってるから？」

「レーダー分析官だっつーのにこんな雪ん中で土木工事させられてるから。さっさと爆薬使って帰ろうぜ」

「爆弾ってのは状況に合わせて仕掛け方を変えるのが常識なの。威力の大きな爆薬でも、エネルギーが逃げてしまうようなやり方じゃ大した破壊力は生んでくれない」

「テメェさ、オブジェクトの設計を学びに来たんじゃなかったっけ？」

「好きでやってる訳じゃない。居候は色々大変なんだよ、不良軍人」

一通り崖にポケットを作り終えたクウェンサーも、爆弾の設置作業に移る。

しかし、そこで眉をひそめた。

ヘイヴィアの方も気づいたようで、

「おい、爆弾起爆するための受信装置付きの信管だけを、テスト用に放り込んでみたけどよ。無線の信号に反応しねえぞ。上だか鉄板だかが電波を遮断してんじゃねえのか？」

「クソ、俺が立てた作戦じゃないぞ」

白い息と共にクウェンサーは舌打ちして、

「フローレイティアさんは優秀な指揮官だけど、意外に細部がアドリブだよな」

「あの爆乳には後で責任取って乳を揉ませてもらうが、この状況はどうすんだよクウェンサー」

「無線式じゃなくて時限式に切り替えよう。それなら電波の問題は関係ない」

「起爆時間は？」
「一七〇〇。大体二〇分後」
時刻の方を指定したのには理由がある。『何分後に爆破』でセットするパターンだと、複数の爆弾を一つずつ設置している内に時間が経過してしまい、『全ての爆弾を同時に爆破』できないからだ。
一通り崖の壁面に爆弾をセットし終えると、クウェンサーとヘイヴィアの二人は急いでそこから離れる。なんだかんだで、時間はもう一〇分もない。
「おいクウェンサー、あれだけの量だと具体的に何メートル逃げりゃ安全なんだ？」
「爆風は内側に向くから、衝撃波を考慮しても五〇メートルもあれば耳をやられずに済む。ただ、余裕は持っておいても損はしないぞ」
「フローレイティアは足跡を残すなってうるせえけど、雪原じゃどうしようもねえよな」
「今日は吹雪だから、数分もすれば残らず消えるんじゃないの？」
無駄口を叩きながら、彼らは一〇〇メートルほど離れた。
と、そこでヘイヴィアが外出時に玄関の鍵を掛け忘れた事に気づいたような顔になり、
「ん？　あれ、ミスったかも!!」
「何だよヘイヴィア」
「信管のモード設定し忘れたまま数字をセットしたかも。つまりタイマーじゃなくて、一七〇

〇に周波数を合わせただけかもしれねえ。た、確かめねえと」

「この状況でっ!?　もう爆破まで一〇分ないぞ!!」

「パッと行ってパッと戻ってくりゃ大丈夫だって!!」

「無理に決まってるだろ!!　とりあえず一七〇〇まで待とう。それで爆発しなかったら戻って確認すれば良い。なっ、なっ!!」

「テメエが言ったんだぜ、爆弾は状況に合わせて仕掛け方を変えるモンだって。俺が仕掛けた所だけ音沙汰なしで、テメエが仕掛けた所だけ吹き飛んじまったら、狙った通りの成果は出ねえんじゃねえのか？」

そりゃそうだけど……と、クウェンサーは言い淀む。

そんな彼を促すようにヘイヴィアが、

「行ける行ける。ちょちょいと済ませりゃ良いだけじゃねえか。ほら早く」

「えっ、俺も？　ヘイヴィア一人のミスだよねこれ!!」

困惑するクウェンサーは引きずられるように、二人揃って崖の方へと引き返していく。

距離は一〇〇メートルほど。

その内の三〇メートルを進んだ時だった。

バガッ!!　と。

突如、一七〇〇よりも早く崖が大爆発を巻き起こした。

いきなり巻き起こった衝撃波に、無防備に接近していたクウェンサーとヘイヴィアの二人が思い切りひっくり返った。先ほど、クウェンサーは『五〇メートルも離れていれば安全』と答えていたが、それは身を屈めて耐ショック体勢を取っていればの話だ。無防備に突っ立っていて良いものではない。

クウェンサーはぶっ倒れて雪の中に埋もれたまま、傍らで同じような格好をしているヘイヴィアをグーでポカポカ叩きまくる。

「ばかっ!!　ばかばかばかばかバーカ!!」

「痛ってえ!!　悪かったって!!」

「セットし忘れたどころか、時間が早まってるじゃないか!!　あの辺に設置してたのはヘイヴィアの担当だよな!?　おまけに鉄板のセットも怠ってただろ!!　そうでもなけりゃ、外側にあそこまで派手な爆風が広がるかっ!!」

「早かったおかげで二人とも助かったんだろ。なら結果オーライじゃねえか」

「状況が状況なら、こういう爆破時間のミスで作戦全体が止まる事もあるんだからな！　小隊単位の犠牲が出る事だってあるんだぞ!!」

「クウェンサー、クウェンサーってば」

「何だよ人がヒートアップしてる時に!!　今日の俺は本当に怒っているからな!!　ほら見ろ、結局崖だって中途半端に崩れてるだけで、当初の目的は全然――ッ!!」

「そうじゃなくて、もうすぐ、七〇〇!!　テメェが仕掛けた方が爆発すんぞ!!」

「え――?」

クウェンサーがキョトンとした直後。

第二波の爆発が巻き起こった。

ようやく上半身を雪から起こした馬鹿二人が、先ほどと全く同じ格好で衝撃波に薙ぎ倒される。左右の耳から脳の奥に向けて、突起物で突き刺すような痛みが走り抜けた。

彼らはしばし無言だったが、やがて今度はヘイヴィアの方がグーを握る。

「ばかばかばかばかバーカ!!　テメェだって鉄板の設置ミスってんじゃねえか!!　そうでもなけりゃあんなに衝撃波が向かってくる訳ねえよなあ!!」

「悪かったってっ!!　痛い!　にわか仕込みで偉そうな事言ってすみませんでした!!」

しかし計算外の偶然が働いたのか、崖は大きく崩れていた。

崩壊する崖に引きずられるように、その上にあったウォータースライダーの瓦礫が次々と下段へ転がっていく。ねじ曲がった鉄塔のような『脚』や、一〇メートルを超える装甲の塊などがゴロゴロと、だ。

一定の成果が得られた事で、雪の中で取っ組み合いになっていた二人は動きを止める。

先に口を開いたのはクウェンサーだ。
「ふむふむ。どうやら崖と崖の間を全部塞ぐように、瓦礫は転がり落ちたみたいだな」
「これで崖下を通ろうとしている車両団の通行を妨げられるってか」
ヘイヴィアは眉をひそめて、
「超重量でそう簡単にどかせねえのは分かったけどよ。ホントに大丈夫なのか？　デカい残骸を転がして壁にするってのは、言い換えれば隙間も結構デカそうだけど」
「そのための伏兵がある」
クウェンサーはその辺の雪原を適当に指差して、
「一〇メートル規模の大きな残骸の他にも、数センチ、数ミリ単位の細かい破片だって散らばりまくってるんだ。この辺りに巨大なクレーンとかがやって来ないのも、それが理由。下手に通ろうとすれば、マキビシでパンクする事になる」
「となると、第一段階は成功か」
「ああ」
クウェンサーは必要のなくなった大型電動ドリルをバラバラに分解しながら、
「『情報同盟』軍のオブジェクトを封じ込める、土台ができた」

2

発端は二日前。

例によってぶーぶー言うクウェンサーとヘイヴィアが、アラスカに飛ばされた日の事だ。

「今回の敵は、『情報同盟』軍のオブジェクト。最新鋭の第二世代で、『正統王国』軍が名付けた敵性コードネームはラッシュよ」

銀髪爆乳で和風マニアの上官、フローレイティアがそんな事を言った。

正規の作戦前会議、ブリーフィングではない。

廃材を使ってビリヤードの台を作っていたのがバレて、馬鹿二人が一時間ワンセットの説教を受けた後。形式的なケジメをつけさせると、今度は一転して嬉しそうな顔になったフローレイティアと、その台を使って暇潰しのゲームを行う事になったのだ。

クウェンサーはいかにもうんざりした調子で、

「……アラスカの雪原で第二世代が相手……。嫌な予感しかしませんよ」

「アラスカ極寒環境雪上戦の事、お姫様の前では絶対に言うなよ。あの子は必ずムキになる」

フローレイティアはため息をつくと、先を続けた。

「我々の悪夢、ウォーターストライダーの残骸は、まだこのアラスカに散らばったままなの。あの瓦礫からテクノロジーを解析しようにも、あれだけの質量はそうそう簡単に輸送できないからね」

先代のベイビーマグナムの残骸もある訳だが、そちらについては『正統王国』で調べる意義は薄い。せいぜい、レアメタルを抜き取って再利用するぐらいか。

「味方のオブジェクトに引っ掛けて運んじまえば良いんじゃないですかね」

腐っても『貴族』なのか、それなりに様になる格好でキューを構えながらヘイヴィアは言う。

すると、フローレイティアはますます呆れたように煙管を吹かし、

「ここは相変わらずの激戦区で、複数のオブジェクトが行き来しているのよ。その地道な作業中に別のオブジェクトに狙われたら？　テクノロジー解析のためのお土産が一機増えるだけでしょ」

そんなもんですかね、と適当に言うヘイヴィア。しかし会話した事で集中が乱れたのか、自分で打った手球がポケットへと吸い込まれてしまう。

すると、フローレイティアは口に咥えていた煙管を片手で抜き、

「ヘイヴィア、ミドルキックだから尻をこっちに突き出せ」

「何すか藪から棒に!?」

「うるさい。他の球を一個もポケットに入れられず、手球だけをポケットに突っ込むような間抜けは、尻にキック一発と昔から私の地方では伝えられているのよ。ほら、膝を少し落として、そう、その高さ、動くなよ。避けたら二発」

「ちくしょうっ、ゾクゾク震える声が怖ええんだよこのドS女王っ!!」

泣き言を言う暇を与えず、フローレイティアの美脚が鞭のようにしなった。シッパアン!!というとんでもない音と共に、入隊訓練でそれなりに鍛えたヘイヴィアが飛び上がって尻を押さえてそして床の上を転がった。

「ぎゃおうっ!? ブーツの空調用モーターが、モロにッッッ!!」

そこそこ付き合いの長いクウェンサーでも聞いた事がないヘイヴィアボイスが出るほどだ。

一方、煙管を咥え直したフローレイティアは涼しい顔で、

「うーん。か弱い私はこれだけが得意になってしまったのよね」

「……う、嘘だ。全身をくまなく鍛えてねえと、絶対にあの切れ味は出せねえ……」

呻くヘイヴィアを無視して、フローレイティアは恐怖に震えるクウェンサーからビリヤードのキューを受け取ると、ビリヤードの台へ向かう。

「話を戻すけど、このアラスカでは大破したウォーターストライダーの残骸が散らばってる。ソフト的にもハード的にもお宝が満載。設計上のテクノロジーも電子的なプログラムも、みんな軍事機密だらけって訳よ。他にもレアメタル満載だし、装甲板からは高耐火反応剤の配合率や熱処理のバランスなど、いわゆる『職人の技』が手に入る可能性がある。……当然、『信心組織』軍のウォーターストライダーを吹っ飛ばした戦勝国の我々は、その解析作業という恩恵を受けられる権利を持つけど、恩恵を欲しがっているのは我々だけではなかったの」

キューと手球の白いボールを照準にし、延長線上に狙う球を見定めるフローレイティア。ゲ

ームに夢中になるあまり、彼女はタイトスカートの尻をクウェンサーの方へ突き出している格好には気づいていないようだった。

「数週間前から『情報同盟』の諜報員が潜り込んできた事は摑めていた。が、度が過ぎたのね。解析したテクノロジーを送信するために用意されている、ヤツらの急造アンテナ施設の破壊が命じられたって訳。まあ、向こうも黙っていないから、北極圏のオブジェクトを回してくるでしょうけど」

「それが、第二世代のラッシュ……？」

「クウェンサーはすでに見ているはずよ」

複数のボールがぶつかる甲高い音が鳴り、三番のボールがポケットへ吸い込まれた。フローレイティアは上機嫌な足取りでぐるりと台の周囲を回りながら、

「オセアニア軍事国を解放する際、共闘していた機体だからね。二門の連速ビーム式ガトリング砲がトレードマーク」

その声を聞いて、クウェンサーは思わず額に手をやりそうになった。

「（……例のGカップの『おほほ』かっ!?）」

彼が苦い顔になったのは、単に顔見知りと戦う羽目になったから、ではない。そもそも敵国同士の人間である。

そうではなくて、『おほほ』の操るオブジェクトが強大な戦力である事を知っていたからだ。

特に、先ほども話に出た主砲の連速ビーム式ガトリング砲は、単純な破壊力ならお姫様の主砲よりも強力だ。敵の得意な距離を維持されたら、回避行動を取る暇も与えられず、あっという間に装甲を崩されてしまう可能性が高い。

作戦立案のため、あらかじめ多くの情報を取得しているであろうフローレイティアも、クウエンサーの懸念に気づいているようだった。

「正面切って戦うような真似はしない。上層部の連中も、私達にそんな戦い方を期待してはいないだろうし。そのための『勲章付きの工兵』なんだからね」

「待ってよ待ってくださいよ！　ますます嬉しくないですよ!!　一番ヤバい矢面に俺達を立たせるって事じゃないですか!?　いつも思うんですけどね、何でオブジェクトにオブジェクトをぶつけるって普通の対応ができないんですかこの部隊は!?」

「駄目だぜクウエンサー。この爆乳のゾクゾクした声を聞きゃ分かるだろ。これは俺らに無茶言ってリアクションを期待する時の声だぜ」

まだ尻を押さえているヘイヴィアが涙目でそんな事を言う。

次のボールを狙うフローレイティアは、流石に煙管つきの唇を尖らせて、

「人をパワハラの鬼みたいに言わないように。それに、主役はお姫様でお前達が脇役ってポジションは踏まえているから安心しろ。やるのは簡単な爆破作業っ、んっ――――!?」

語尾が変な風になったのは、キューに突かれた白い手球が、予想よりわずかに斜めに逸れた

からだ。やはり、会話で集中を乱されてしまったらしい。

カンカン!!　と台の縁に何度かぶつかった手球は、そのまま角のポケットへと呑み込まれていく。

「……、」

「……、」

「……、」

三人はしばし無言になる。

気まずい沈黙だったが、それを打ち破るように、フローレイティアは渾身の力で握り締めたキューをクウェンサーの方へ押しつけると、くわあっ!!　と両目を開眼させて、

「次はお前の番よクウェンサー!!　よって手球をポケットに突っ込んだ間抜けな私の尻を思い切り蹴飛ばすのはお前の役目だ!!　さあー!!!!!」

「恥ずかしさごまかすために気合い入れまくるのやめてくださいっ!!　怖いんですよ!!　こんなに力強く尻を突き出されたのはこれが初めてだ!!」

3

そんな訳で、脇役の馬鹿二人はアラスカの雪原をこっそり移動し、敵軍の車両団の足止めを

するため、爆破作業を続けている訳である。
「これで五ヶ所」
すっかり日が暮れて真っ暗になった雪原で、クウェンサーはポツリと呟いた。
「ようやく『迷路』の完成だ」
「『情報同盟』軍のメンテ車両団は戦場を自由に行き来できねえ。主要なルートは俺らが作った瓦礫の壁で覆われているし、抜け道を見つけたつもりでも鋭い破片がタイヤを傷つける。スイスイ動けるのは、正しいルートを知ってる俺らだけ、って訳だな」
「根本的に、ラッシュそのものに対する攻撃にはなってないけどな。ウチのお姫様が直接力負けしてしまったら、元も子もないぞ」
「それがそうでもねえらしい」
「？」
首を傾げるクウェンサーに、ヘイヴィアは意地の悪い笑みを浮かべて、
「例のラッシュは、エアクッションとキャタピラを併用した特殊な移動方法を採用してる。普段は空気の力で機体を浮かばせちゃいるが、高速移動時にはチェーンソーみてえなキャタピラで地面を削り取ってダッシュ力を高めてる。テメェだって知ってるだろ」
「そりゃまあ……」
「静電気で完全に機体を浮かばせているお姫様と違って、ラッシュは地面に接触する時がある」

ヘイヴィアは人差し指を軽く振って、
「つまり、オブジェクトの残骸や細かい破片を呑み込んでキャタピラが誤作動を起こしちまう可能性もゼロじゃあない訳だ」
並の石や岩、コンクリート程度なら、巨大な動力炉によって莫大なエネルギーを得たキャタピラは抉り取ってしまうだろう。
しかし、今回の障害物は、怪物兵器と同じオブジェクトの残骸や装甲板だ。今度ばかりは巻き込んだ怪物キャタピラの方が逆にダメージを負ってしまうかもしれない。
「そう簡単に話が進むもんかね」
クウェンサーはどこか懐疑的だった。
「オブジェクトにはセンサーが山ほどあるんだぞ。向こうだって、雪の中の金属反応ぐらい摑めるんじゃないのか？」
「そこらじゅうに散らばってんだぜ。センサーで反応が分かっていても避けきれないかもしれねえ」
「本当にこのやり方が有効なら、対オブジェクト用のマキビシが真剣に開発されてるもんじゃないの？」
装甲板は高耐火反応剤を使った職人の手作業だぜ。そんなもんにポンポン投入できる安物じゃねえ。それならオブジェクトのスペアパーツに一極集中させた方が効率的って判断されてん

だろ」

「ヘイヴィアは楽天家だな。美人の上官から自信満々に言われると幸運の壺でも迷わず買っちゃうタイプか？」

「ウチの爆乳は人に安心感を与えるタイプの美人じゃあねえなあ」

「……何しろ直属の部隊を編成して、抜き打ちで兵舎のエロ本チェックをするような上官だしね」

「あれさー！　何でよりにもよって全員二〇代のおねーさまだけで固めてんの!?　せめておっさんに発見されんならお互い苦笑いとかで穏便に済ませられるのによー!!」

「それが狙いなんだろ。ところで、ここらで協定でも結びませんかねヘイヴィアさん。エロ本チェックがありそうな時は互いの物資を安全な場所に退避させるっていう」

「無線通信は上が全部管理できる状態だぜ。緊急連絡したら爆乳に筒抜けになっちまう」

「暗喩と合言葉を駆使するとか、色々方法はあるって。そう、そうだな。例えば『こっちは切羽詰まっている』って言ったら内緒話スタートみたいな感じでさ」

「あまり長期間同じ暗喩は使わねえ方が良いな。作戦ごとに変更していくか」

などとブツブツ言っていた二人だったが、彼らは一応、自分達が戦場にいる事までは忘れていない。

「俺らがやった妨害工作がどこまで通じるか、答え合わせができそうだぜ」

ヘイヴィアは軍用の時計で時間を確認しながら、
「そろそろお姫様がラッシュとぶつかる時間だ」
「……もう世間じゃ丸っきり残業の時間帯じゃん。終電までには帰してほしいね」

4

『正統王国』軍のオブジェクトであるベイビーマグナムは、総合マルチロール型と称されている。
しかし俗な言葉を使うなら、第一世代と呼んだ方が通りは良いだろう。
ありとあらゆる環境や天候に対応し、一定の戦果を上げられる機体。パーツの換装さえ行えば海上ですら自由自在に動き回る汎用性。オブジェクト登場時には核兵器よりも強力で核兵器よりも扱いやすいとまで言われた第一世代だが、『列強がオブジェクトを持つのが当たり前』となった現代では、多少状況は変わってくる。
後部から延びる七本のアームに支えられたそれぞれの主砲は、根元がリボルバーのように回転し、状況に合わせて様々な種類・方式の砲を撃てるように設計されている。そういう風に聞くと、さぞかし便利で強力なように思えるかもしれない。
しかし、実際にベイビーマグナムを操縦する操縦士エリートの少女は、こんな感想を抱いていた。

主砲の方式が複数あるという事は、そうしなければならないからだ。

つまり、どんな敵でも一撃で葬るだけの自信がないから、複数の『保険』を用意しているのだ、と。

弱腰な主砲。

その印象が意味するところは、こういう事だ。

オブジェクトが珍しかった時代とは違い、同クラス以上の機体が氾濫するこの現代では、スタンダードな第一世代にはありとあらゆる敵を絶対に葬れる保証などどこにもない。

（分かってる……）

オブジェクトの中心核であるコックピットの中で、華奢なお姫様は一度だけ深呼吸する。複数のフィルターと苛性ソーダで洗浄され、高速思考に最適なように一定の気圧を維持する空気は、ほとんど機械的に彼女のネガティブな意見を抑え込み、思考パターンを整えていく。

（それでも、わたしはせんようにちょうせいされたベイビーマグナムしかあやつれない。だからわたしは、このベイビーマグナムで、せかいとたたかってかつしかない）

気を引き締め、前方に広がるモニターを改めて睨みつける。

すでにレーダーには反応があった。

向こうもこちらの位置を捉えているだろう。

一対一。

【ベイビーマグナム】
BABY MAGNUM

全長…75メートル(主砲最大展開時)

最高速度…時速530キロ

装甲…2センチ×500層(溶接など不純物含む)

用途…戦場制圧用兵器

分類…総合マルチロール型(第一世代)

運用者…正統王国第37機動整備大隊

仕様…静電気+レーザー型推進システム

主砲…回転アーム式兵装×7

副砲…レーザー、コイルガンなど

コードネーム…ベイビーマグナム

メインカラーリング…ホワイト

BABY MAGNUM

世界最大級の一騎打ちは間もなく始まる。

と、そんな風にコックピット全体へピリピリした空気が充満していくのを感じていたお姫様の耳に、外部から通信が入った事を伝える電子音が聞こえた。

『正統王国』軍の正式な周波数ではない。

一般的に、オブジェクトは自軍以外の周波数も片っ端から拾って解析を試みようとする機能が備わっている。それで万に一つでも敵の動きが分かれば恩の字だからだ。実際には複雑な暗号で保護された敵軍の通信は滅多に傍受できないし、できたとしてもこちらを誘導するための攪乱情報である可能性もあるのだから、あまり役に立つとは思えないのだが、こういう無駄な機能も充実しているのが『総合マルチロール型』と言われる所以でもあったりする。

今、ベイビーマグナムが傍受したのは『正統王国』軍でも、敵側の『情報同盟』軍の周波数でもない。ほとんど一般に近いコードだった。どちらの軍でも簡単に拾う事ができる通信で、暗号なども施されていない。

（こちらにきかせるために……？）

怪訝な顔になるお姫様。

スピーカーから聞こえてきたのは、一〇代の少女らしき声だった。

『おほほ、オセアニア以来になりますわね。「正統王国」ぐんのどろくさいエリートさん』

「……、」

迷わず通信を切ったお姫様だが、相手は別の周波数から間髪入れずに連絡を入れてくる。

『きょうふにふるえるのもむりはありませんけど、私はやさしくしてさしあげますから安心してくださいな、おほほ。もちろん、あなたがたの「しろはた」をうけいれる心の広さもありますのよ。そこらでスクラップになってころがっているオブジェクトとはちがってね』

「いちいち、こまかいところまでチクチクと……」

わざわざウォーターストライダーとの戦果についてまで引き合いに出す『情報同盟』軍のエリートの物言いに、お姫様の無表情な瞳に剣呑な光が生まれる。

「『しろはた』なんてぜったいにつかわせない。あなたはここでぶっこわす。ウォーターストライダーといっしょに『おみやげ』にしてあげる」

『あらあら。それだと困りましたわね。私としては、「しろはた」をつかってもらわないといかくどおりのほうしゅうがいただけなくなってしまいますのに。おほほ』

「……？」

『だって、そうでしょう。「しろはた」をつかってもらえば、いきのこった兵士は「ほりょ」としてかくほできる。となれば、おほほ。あなたのぶたいにいる、あの「とのがた」を、私の元へ回収し、スカウトするきかいにめぐまれるってことではありませんの？』

ドウン!!　と。

直後に、お姫様はベイビーマグナムの主砲を迷わず発射した。

大質量のスチール弾を電磁石の力で撃ち出すコイルガンは、当然、有効射程の外にいる『情報同盟』軍のラッシュには掠りもしない。だが、お姫様の目的は達せられた。

今のは威嚇ではない。

殺し合いの開始を意味する号砲だ。

まるで呼応するかのように、前方から巨大なオブジェクトが急接近してきた。わざと有効射程の中へ飛び込んでくるかのように、大きく開けた雪原へと突っ込んでくる。

お姫様の方も、左右へ小刻みにS字のカーブを描きながら同じ雪原へと躍り出る。

彼女の頭を占めるのは、とてもシンプルな言葉だった。

「ないて死ね……ッ!!」

『おほほ！　おほほほほ!!　あの「とのがた」を手に入れたあかつきには、くびわとイヌミミをつけて、ていちょうに扱ってさしあげますから、ごしんぱいなさらず！　むしろ、そんなどろくさいぶたいにいるよりしあわせに決まっていますわよねえ、おほほほほほほほ!!』

互いの通信に使っている電波すらかき乱すように、圧倒的な爆音と共に、二つの超大型兵器から主砲が発射された。

【ラッシュ】
RUSH

全長…100メートル(主砲最大展開時)

最高速度…時速530キロ

装甲…5センチ×200層(カーボン、アミラド等を含む複合装甲)

用途…対オブジェクト用駆逐兵器

分類…陸戦特化型第二世代(エアクッションによる海上移動のみは可)

運用者…情報同盟

仕様…エアクッションフロート＋キャタピラ式推進システム

主砲…連速ビーム式ガトリング砲×2

副砲…レールガン、コイルガンなど

コードネーム…ラッシュ(自国では「ガトリング033」)

メインカラーリング…グレー

RUSH

5

オブジェクト対オブジェクト。
安全でクリーンな戦場。
戦場と『安全国』を綺麗に分ける、公式試合のような国際競争。
この時代の戦争とは超大型兵器同士の殺し合いであり、それ以外の余計な戦死者など出す必要もない。どちらか片方のオブジェクトが破壊された時点で戦争は終了。犠牲となるのはオブジェクトを操っているエリート一人。それにしたって絶対ではない。緊急脱出し、『白旗』と呼ばれる信号を発すれば、それ以上の追撃を行う必要はなくなり、二国間の終戦会議の準備が進められるレベルなのだ。
今時、戦場で死ぬなんて流行らない。
最前線の基地から兵士が去っていく一番の理由は、負傷でも戦死でもなく、基地内における男女間の恋愛問題のこじれにある。
入隊訓練で鍛えた新兵達は、現場の最前線で怠けてレベルを落としていく。
そのはずだったのだが、

「「クソッたれ!!　どこのどの辺が安全でクリーンな戦場だちくしょう!!」」

クウェンサーとヘイヴィアの二人は同時に叫び、白い雪原を転がるように走り回った。

彼らは一機のオブジェクトが激突している場所から一キロ程度離れた場所に隠れていた。そこから双眼鏡やライフルのスコープを使って『試合観戦』と洒落こもうとしていたのだが、戦闘の余波は恐るべき距離まで広がってきたのだ。

恐怖の原因は衝撃波。

本体だけで五〇メートル以上のオブジェクトが主砲を発射するたびに、地響きのような物が白い雪原を這い進み、地面を下から突き上げた。それはクウェンサー達が隠れている一〇メートル級の残骸――元はウォータースライダーと呼ばれていた機体のなれの果てだ――を容赦なく揺さぶり、彼らのいる方へ覆い被さるように倒れてくる。

結果としてクウェンサーとヘイヴィアの二人は、自らが盾に使っていた遮蔽物に殺されそうになり、全力で雪原を転げ回る羽目になった。重量を考えれば、ちょっとした中古車ならリサイクル用の鉄塊に変わってしまうほどのダイナミックな光景だ。

戦場で戦うオブジェクトは、こちらの弊害には気づいていないのか。あるいは戦力外と判断して放って置いているのか。

地上を這う惨めな人間クウェンサーは、墓標に情けない死因を記されないようにするため、雪にまみれながら鬼の形相で走って逃げる。

「くそくそくそくそくそっ!!　ほら見ろいつものケタ違いだ!!　オブジェクト同士の戦いを自分の目で確かめてみれば良いとかさ、小者のくせに高みの見物決めようとしたから罰が当たったんだ!!」

「バチとか何とか『信心組織』みてえな事言ってんじゃねえ!!　バチなんて言葉を使って良いのは巫女さんぐらいだ!!」

「バチってシントーだっけ？　ブッキョーだっけ？」

一度大きく倒れ、白い雪を粉塵のように撒き散らす残骸の陰へと、クウェンサー達は再び隠れ直す。今も断続的に衝撃波は広がっているが、一回倒れたオブジェクトの残骸は、そこで安定した姿勢になったようだった。重力に負けて折れた木がそれ以上動かないのと同じである。

ヘイヴィアは残骸の陰に、うつ伏せになって息をひそめながら、

「……それにしたって情けねえぜ。一度自分を殺しそうになったカタマリに命を預けるなんてよ。お湯を抜かねえで二日目の風呂に入るような気分だ」

「オブジェクト相手にプライドとか語ってたら五秒ももたないよ」

適当に言葉を返しながら、クウェンサーは双眼鏡で戦場を確認する。

戦っているのは五〇メートル以上の怪物なので、ほとんどレンズの補正は必要ないほどだった。

接戦だった。

オブジェクトはその巨体に反して、時速五〇〇キロ近い速度で高速移動する。それも直線的な軌道ではなく、総合格闘技のフットワークのように小刻みな回避行動を取りつつ、全体的には互いが互いを絡め取るような円運動を行っていた。

遮蔽物に隠れて砲弾をやりすごすのでも、チャフやフレアを使って照準をごまかすのでもない。前から飛んでくる砲弾に対し、真横にスライドして回避する。

実際には砲の微細な動きから発射前動作を先読みして行動しているのだが、それにしても、人間の拳を避けるような感覚で壮絶な速度の砲撃をやり過ごす光景は、生身の人間を絶句させるに足る凄まじいものだった。

「……敵の連射性能に感謝だな」

クウェンサーは『情報同盟』軍のラッシュを注意深く観察しながら、小さな声で呟いた。

主砲は連速ビーム式ガトリング砲。連射時間を長くするためのガトリング化だろうけど、実際に実現しているのは一度に三〇秒が限界みたいだ。もっとも、冷却時間を稼ぐために、左右に一門ずつ用意しているんだろうけど」

無制限で永遠にガトリング砲を使われ続けたら、お姫様は小刻みな移動では逃げられなくなる。それは巨大なサーベルを振り回しているのと同じだからだ。しかし時間制限があるのなら、その間だけ全速力で一方向へ逃げ続け、連射の中断と共に方向転換するというやり方で切り抜けられる。

左右二門の主砲を交互に使えば間断のない連射ができるが、その場合、ラッシュ自身の巨体が邪魔をしてしまう。主砲はそれぞれ、左右の側面一八〇度をカバーできるように旋回範囲を決められているからだ。つまり、右の主砲は右一八〇度しか狙えない。球状の本体を挟んで左側へ逃げてしまえば照準の外へ抜けられるのだ。

「……『情報同盟』のおほほは、本体ごと大きく旋回させてカバーしようとしているみたいだけど、お姫様の回避速度にはついていけていないみたいだな」

「おい。おいクウェンサー。ちょっとこれ聞いてみろよ」

と、何やら無線機をいじり回していたヘイヴィアが、こちらに四角い機材を突き出してくる。

「何か痴話ゲンカをキャッチしたぜ」

「？」

眉をひそめるクウェンサーは、とりあえず無線機の方に耳を傾けてみる。

すると、

『おほほ!!　「正統王国」ぐんのどろくさいエリートは、まけいぬらしく、にげあしだけはとくいなようですわね！　むだなていこうなどさっさとやめて、大人しくあの「とのがた」を、Gカップの私にさしだせば良いものを!!』

『あれは、わたしのオブジェクトをメンテナンスするためにいるの。このっ、わたしのっ!!　アンタのイレギュラーな形状のオブジェクトじゃいみがないの。およびじゃないって分かった

ら今すぐ失せろ、もしくは死んで』

ドパッ!!　ガガガガガッ!!　ドウン!!　と次々に砲を撃ち合いながら、二人のエリートは砲撃音より恐ろしい口調でそんな事を叫び合っていた。

無線機を差し出した格好のまま、ヘイヴィアはうんざりした調子で、

「冗談じゃねえぞクソ。今頃はあの爆乳も頭を抱えてんじゃねえのか？」

「ねえヘイヴィア。何これ、どういう事」

「聞きゃあ分かんだろ。そのまんまだよ。これが高度な暗喩や符丁を含んだやり取りだと思うかよ」

「……両軍のエリート同士が戦争使って一人の整備兵を奪い合うって、すごい話だよな。どんだけ実力持った技術屋なんだ？　もしかして、整備関係の工具の特許でも独占してんのかな」

ヘイヴィアはそれ以上何も言わず、にっこりと微笑むと、右手でグーを握って傍らの相棒の顔面をぶん殴った。

一度雪に埋もれたクウェンサーは鼻を押さえて抗議の声を発しようとしたが、その声が飛び出す事はなかった。

戦況が大きく動いたからだ。

ゴッ!!　という、一際大きな爆音が炸裂した。

互いの主砲が交差し、それぞれのオブジェクトに被弾したのだ。

「相討ち!!」

「お姫様は!?」

ヘイヴィアとクウェンサーはそれぞれ叫ぶ。

長期戦になる事を見越して、彼女達は互いの主砲を先に潰してからじっくり料理する方向で戦闘を進めようとしたらしい。

お姫様のベイビーマグナムは、『情報同盟』のラッシュの主砲を片方吹き飛ばしていた。左右一門ずつの主砲は、それぞれの側面一八〇度を旋回範囲としている。その内の片側を爆破したという事は、片側が完全な安全地帯になったという事だ。

対するお姫様のベイビーマグナムだが……、

「おい、ヤベぇぞ」

双眼鏡より高性能なライフルのスコープで確認したヘイヴィアが、ゴクリと喉を鳴らした。

「ベイビーマグナムの『根元』をやられてやがる!!　七本の主砲アームの接続ジョイントが集中する機体後部を抉り取られやがった!!」

ジョイントって、そこやられたら、最悪、七本全部動かせなくなるぞ!?」

「ラッシュに回り込まれるって時に、おほほの主砲を撃ち抜くのに集中しすぎたんだ。そうでもなけりゃ一対一の勝負で背中を撃たれる事なんてねえだろ!!」

緩やかな円運動を続ける一機のオブジェクトだが、そこで砲撃が止んだ。

無線からもけたたましい声は聞こえなくなった。
沈黙。
静寂。
後部ジョイントを撃ち抜かれたお姫様だが、七本ある主砲の内、本当に全て使えなくなったのか、かろうじて動かせる砲があるのかは判明していない。
対する『情報同盟』のラッシュも、片側だけの主砲でどこまで戦闘を続けられるのかは未知数だ。
互いが互いの戦力を、推測という形で探り続けている。
緊張の糸が、戦場の端から端まで張り巡らされるのをクウェンサーは感じた。
どちらかが有効打を持っていると判断した場合、勝負は一瞬で決まる。だが、その判断が本当に正しいかどうかは分からない。やってみたら上手くいかなかった、となると、逆に返り討ちに遭ってすぐさま勝負が終わってしまう。
実際にオブジェクトを操っているエリート自身、おそらく今現在も機体の自己診断をフル稼働させ、機体がどれぐらい使い物になるかを探っている最中なのだろう。それでいて、頭の中では何十何百と戦術のシミュレートを繰り返しているはずだ。
（……どう動く？）
動かない戦場、というのがこれほど息苦しいものなのだと、クウェンサーは初めて知った。

エンジンの故障した潜水艦に乗ったまま、深海の闇の奥まで落ちていくようなプレッシャーを全身に受ける。

そして。

五〇〇秒ほど経って、緩やかな円運動も完全に停止した。

お姫様のベイビーマグナムは、『情報同盟』のラッシュに主砲を向けたまま、バックでゆっくりと動き出した。戦場の雪原から離れるように、自軍の整備基地ベースゾーンへ向かうように、だ。

『情報同盟』のおほほも深追いはしなかった。

呼応するように、ラッシュもバックで開けた雪原から離れていく。

流れが決まれば、後は早かった。

お互いが五〇〇メートルほど移動した所で、二機のオブジェクトは弾かれたように一八〇度旋回し、全速力で撤退していった。

慌てたのは、戦場に取り残されたクウェンサー達だ。

「なっ、何だ？　何がどうなった？」

「ピットインだ」

ヘイヴィアは雪の上から身を起こし、

「オブジェクトの分厚い装甲をぶち抜けるのは、同じオブジェクトの主砲だろ。それをどっち

もやられたんだ。決め手が欠けりゃ勝負はできねえ。一刻も早く整備を終わらせて、相手の復帰を待つ前に突撃できた方が勝ちって訳だ」

「でも、ラッシュの主砲は片方残っているだろ」

「ラッシュの主砲のレイアウト見ろよ学生。機体の左右に一門ずつ。つまり砲の壊れた側へ回り込まれると死角になっちまう。ラッシュにとっても楽しい事態じゃねえ訳だ。下がれるモンなら下がりたかったってのが本音じゃねえのか」

さっきも言った通り、お姫様のダメージは七門の主砲を束ねるアームのジョイントだ。主砲そのものは壊れていないため、『実は撃てる』という可能性も否定はできない。ラッシュは『確実』さを優先させたため、深追いは避けたのだろう。

無論。

ピットインの速度で勝てる事を推測した上で。

「となると……」

クウエンサーの腹の中に、嫌な重圧がのしかかる。

「まずいな。お姫様が撃ち抜かれたのって、七本の主砲アームの接続ジョイントが集中する、後部のパーツだったろ。あそこは人間の手みたいなもんだ。関節がたくさんある場所はデリケートだろ。すぐに交換作業を終わらせられるのか……？」

「対する『情報同盟』は主砲一つ交換すればおしまいだ。単純に考えりゃ、どっちが早く衣装

替えできるかは猿でも分かりそうなもんだが」

言葉の割に、ヘイヴィアの顔色にはそこまでの恐怖はない。

「なあクウェンサー、何のために崖に穴を空けて爆弾を埋め込んだんだと思ってんだよ。連中のメンテナンス部隊の行く手を阻むためだろ」

「そうか」

言われてみれば、という感じでクウェンサーは思い出す。

オブジェクト同士のド派手な戦闘を目撃したせいですっかり忘れていた。

彼らは元々、車両団が通れるような道を塞ぐために行動していたのだ。

ヘイヴィアは肩をすくめて、

「『情報同盟』の高飛車なお嬢様と従者達は障害物競争に引っ掛かる。それで時間を稼いでいる内にお姫様の生着替えが終わっちまえばこっちのモンさ」

「じゃあ俺達はどうする。全速力で基地まで戻ってお姫様のメンテを手伝うか？　少しでも人手があった方が良いだろ」

「アホ。ピットインだっつったろ。俺らがチンタラ基地に辿り着いてもまだお着替えが終わってないようなら、どんだけ時間を稼いだって『情報同盟』に追い抜かれてる。汗水垂らして全速力で帰還した時にゃ、お姫様の作業は済んじまってるよ」

「なら何をやるんだ？　これじゃ手持ち無沙汰だぞ」

「テメェはどこの優等生だよ。手が空いてたら仕事しなくちゃならねえなんてルールはねえだろ。やる事ねえならゆっくりのんびり帰りゃ良いじゃねえか。むしろ、さっさと帰ったらあの爆乳に適当な雑用を押し付けられるだけだぜ」

「そんな、もんか……？」

「そんなもんだよ。なに、目の前でオブジェクト見たから興奮してんのか？　ちっぽけな兵隊二人の力なんてないも同然っ、ないんだったら力を振り絞る必要もねえっ。そもそも、フローレイティア達はちょっと俺らを頼り過ぎだぜ。オブジェクト同士が戦う戦場なんてよ、人間の両手一〇本指でどうこうするようなスケールじゃねえだろ」

そうだよな、とクウェンサーもちょっと賛同しかけた。

ここ最近嫌な偶然ばっかり重なって生身一つでオブジェクトに突撃なんていう世界規模の罰ゲームみたいな事をさせられていたクウェンサーだったが、本来だったら、彼が関わらないまま決着がつく戦争の方が、圧倒的に多いはずなのだ。

気張る必要なんてない。

そもそも、フローレイティア達から命じられた崖の爆破作戦はきっちりこなしている。

与えられた役割をまっとうしたのだから、サービス残業まで全力で行う必要はない。

『情報同盟』軍は計画通り、アラスカの障害物競争に引っ掛かっているのだから、後は時間を稼いでいる間にメンテナンスを終わらせたお姫様が、第二世代のラッシュを撃ち抜いてくれる

だろう。

そこまで考えると、クウェンサーはようやく肩の力を抜いて、

「……じゃあ、ゆっくり帰るとしますか」

「そうそう、それが俺らの基本スタンスだよ。思い出したか？　いっそ、帰りに鹿とか熊とか撃ちに行かねえか。味のねえレーションには不満だらけだが、細かく千切って地面に撒いておけば、獲物をおびき寄せるための餌になるしよ」

「それより、時間があるならウォーターストライダーのテクノロジーをどうにか解析したいモンだね。ほら、そこらじゅうに学術資料が散らばってるじゃん」

「おーおー、学生さんはこんな時まで残飯漁りに熱心だな」

「金儲けに直結してると思えば、人間は誰だって真面目になれるんだよ」

「でもよ、『正統王国』軍だってある程度はもう分析作業を進めてんだろ。データベースの中に設計図だってあんじゃねえの」

「細切れの設計図を繋ぎ合わせた予想図みたいなものだよ。実は取りこぼしているテクノロジーがある可能性は捨てきれない。……ホント、こんなしょうもない戦争なんかより、この宝の山を調べる方がよっぽど有意義なはずなんだけど」

そんな風に気軽に軽口を叩き合いながら雪の上を歩き始めた二人だったが、そこへ上官のフローレイティアから通信が入った。

『クウェンサー、ヘイヴィア!!　まだポイント199ASDにいるね!?　衛星で確認しているからごまかすな、緊急だからつまらないジョークに付き合ってる暇はない!!』

「フローレイティアさん？」

『全部口で説明するのは面倒臭い。携帯端末で衛星画像を確認しながら私の話を聞け』

心中の焦りをそのまま反映したように、フローレイティアは早口で続ける。クウェンサーが慌てて携帯端末を取り出している間にも、彼女はさらに言葉を重ねていく。

『単刀直入に言う。「情報同盟」の第二世代、ラッシュは五〇キロ北方の整備基地には戻っていない。別働隊の車両団をすぐ近くまで出張させて接触を図っている。このまま主砲の交換作業が始まってしまったら、おそらくお姫様より早くメンテが終わってしまうの!!』

「おいおいおい!!」

と、横から口を挟んだのはヘイヴィアだ。

「そのために俺らが崖を吹っ飛ばして障害物競争の壁を用意したんでしょうが!?　その車両団はウォーターストライダーの残骸で道を塞がれて戦場には到着できねえんじゃねえんですか!?」

『車両はね』

フローレイティアは即答した。

ようやく携帯端末で衛星画像を呼び出したクウェンサーは、彼女が何を言いたいのかが分か

って苦い顔になった。

「……見ろヘイヴィア。人力で運んでるぞ」

「はぁ!?　それこそ意味が分かんねえぞ!!　オブジェクトの主砲って何トンあると思ってんだ!?」

『情報同盟』のラッシュは原材料レベルの極端な軽量化が進んでるから、一〇〇トンぐらいか？　でもあれは五門の連速ビーム砲を束ねたものだから、一門につき一〇トン程度だろう。そいつを一〇〇以上のパーツに分解して背負ってるんだ!!　それなら一人当たりの負担は一〇〇キロ！　足止めされてる車両と作業スペースの間を、五往復すれば完了だ!!」

「一〇〇って……この雪原の中、そんなに重たい物持って歩き回れる訳ねえだろ!!」

『素手ならね。「情報同盟」にはパワードスーツ部隊があるの。人間の体力的限界は通用しないみたいね』

顔を歪めるヘイヴィアに追い討ちをかけるように、フローレイティアの声が続いた。

『大型車両では通り抜けられない「残骸の壁」も、人間一人ぐらいならすり抜けられる隙間が残ってる！　連中はそこを突破してラッシュと合流しようとしているのよ!!』

「ヤベえぞオイ……」

ヘイヴィアはゴクリと喉を鳴らした。

「ヤベえって!!　洒落にならねえ！　ラッシュの主砲の分解と組み立ての時間を考慮しても、

こっちが不利だ。このままじゃピットインが終わっちまったら、お姫様は手も足も出ないまま一方的に爆破されちまうじゃねえか!?」

『そうよヘイヴィア。もしかすると空輸のために、ラッシュの主砲は設計段階から『簡単に分解して持ち運べる』ようにできていた可能性もある。だから何とかしてラッシュのメンテナンス作業を妨害しろ!!　敵軍の合流予定地点はお前達がいる場所から二キロ北方！　お前達が一番近い!!』

「無茶だぜクソが」

いきなり突きつけられた死闘への招待状に、ヘイヴィアはガタガタと震えながら呟いた。

「オセアニア軍事国で連中のパワードスーツは見ましたが、あれはライフル弾で抜けるようなモンじゃありませんよ!!　おまけにメンテが必要な状態とはいえ、第二世代のオブジェクトはまだ動いていやがる!!　主砲だって片方は残ってるし、その他の大小一〇〇門近い砲は全方位を警戒してる!!　近づこうとしたってブチ抜かれるのがオチでしょうが!?」

『他に方法があるなら、お前達みたいな問題児に部隊の命綱を預けたりはしない』

フローレイティアも頭を抱えているようで、声色にも苛立ちがあった。

『このままじゃ、アラスカは再び悪夢の戦場になる。それで良いならウォータースライダーの残骸の陰に隠れて丸まっている事ね、ヘイヴィア』

具体的な妨害方法はそっちで考えろ、とだけ言い残し、フローレイティアは通信を切る。思

わず地面に無線機を叩きつけそうになったヘイヴィアだが、かろうじてエコ精神が打ち克った。

ほとんど泣き出しそうな調子で、ヘイヴィアは傍らにいる学生に話しかける。

「ホントに冗談じゃ済まねえぞ……。『美人からのお願い』なんてよ、地獄行きの片道切符の別名じゃねえか!!　これからどうすんだクウェンサー!?」

「決まってんだろ」

クウェンサーは携帯端末の画面を睨みつけながら言う。ラッシュとはオセアニア軍事国で共に戦っているため、『正統王国』軍側のデータベースにも過去の戦闘の行動パターンが記録されている。彼はそれをチェックしているようだ。

「どうにかする方法を考える。じゃないと真っ先にやられるのはお姫様だ」

「おい、俺は今の内に命令無視して逃げちまおうぜって流れで話を進めようと思ってたんだけどよ。なあクウェンサー、待てって!!　ちくしょう、テメェは本当にナイト様だな!!　『平民』にしておくのがもったいねえよ!!」

走るクウェンサーを追い掛けながら、ヘイヴィアはうんざりした調子で叫ぶ。

クウェンサーが目指しているのは、ウォーターストライダーの主砲の残骸だ。まるで鉄塔を無理矢理くの字に折り曲げたような形状の残骸は、ちょうど真ん中の屈折点の所が破れた空き缶のように裂けていた。

裂け目と言っても、幅だけで七〇センチを超える。身を屈めなくても、そのまま人間一人が

中に入れそうなぐらいだった。

クウェンサーは亀裂の中へ体を滑り込ませたが、完全に砲の内部にまでは入らなかった。彼が調べているのは亀裂から覗く、『壁』の断面だ。

そこには直径一.〇センチ、厚さ一〇センチほどの、平たい円筒形の物体がびっしりと埋め込まれていた。おそらくトンネル状の主砲の内部へ、隅から隅まで配置されているはずだ。

断面を観察しているクウェンサーを見ながら、ヘイヴィアは未練だらけの顔で質問してくる。

「おいナイト様。こんな時に火事場泥棒かよ。一体何を探してやがんだ!?」

「電磁石」

端的にクウェンサーは答えた。

「ウォーターストライダーの主砲は、下位安定式プラズマ砲。プラズマ状態となった特殊ガスの方向性を整えるために、砲身内部には大量の電磁石が用意されているはずだ」

「早速、携帯端末で壊れたオブジェクトの設計図でも呼び出しましたか学生さんよ」

「こんなもんは人間の常識レベル」

言いながらも、クウェンサーは両手を動かし続ける。

彼は崖に穴を空けるために持って来ていた大型電動ドリルのパーツを袋から捨てると、主砲の断面から次々と円筒形の電磁石を抜き取り、空になった袋の中へと詰め込んで行った。作業が終わると、一度捨てた大型電動ドリルのパーツの中から、バッテリーだけを拾い上げる。

「電磁石なんてどうすんだ」
「もちろん、鉄にくっつけるために決まってる。オブジェクトの基本的な材質は知ってるだろ」
クウェンサーは主砲の亀裂から外へ抜け出すと、手の甲で砲の側面を軽く叩いて、
「高耐火反応剤を混ぜた鋼だ」
「マジか……。あの怪物相手にロッククライミングするって言うのかよ!?」
「見ろよ」
クウェンサーは質問に答えず、携帯端末の画面をヘイヴィアの顔の前に突き出した。
表示されているのは衛星画像だ。
「フローレイティアさんは相当焦ってたけど、多分実際はほんの少し猶予がある。北方二キロの最短コースは使えないんだ。ウォーターストライダーの瓦礫が一番密集してる。仮にパワードスーツ部隊が乗り越えたとしても、周囲一面も万遍無く瓦礫が転がっているから、組み立て作業を行うための広いスペースが確保できない。彼らは絶対にここから引き返して、一度回り道をする。……つまり、高速移動するラッシュに、一直線に距離を離される事はない。遠回りの過程で、ラッシュの方からこっちに近づいてきてくれる機会があるんだ。何かしらの工作を行う可能性も」
「オブジェクトは『残骸の壁』になっても普通の爆薬では吹き飛ばせませんってか？」
ヘイヴィアは呆れたように言う。

「忘れたのかよクウェンサー。『情報同盟』のラッシュは、主砲が片方残ってんだぜ！　あれが火を噴いたら残骸どころか新品ピカピカのオブジェクトだって撃ち抜かれちまうよ!!」

「破壊だけなら、それで問題ない」

クウェンサーの表情は変わらなかった。

「でも、ラッシュの主砲は連速ビーム式ガトリング砲だ。攻撃された装甲は熱でドロドロに溶けてしまう。パワードスーツを着ているとはいえ、そんな溶鉱炉の中を生身の人間が通り抜けられると思うのか？　ヤツらが背負ってる主砲のパーツにしたって、外装はショックに強いだろうが、内部は精密機器の塊なんだぞ」

「仮にラッシュが遠回りをするとしてだ」

完全にうろたえたヘイヴィアは、うんざりした調子で言う。

「俺らが危険な目に遭うのは何の変わりもねえんだぜ。相手は五・五六ミリ弾の通用しねえパワードスーツ部隊と、全方位を一〇〇門の砲で警戒する第二世代のオブジェクト。こんなもんと二人で戦うなんて自殺行為じゃねえか」

「悪いけど、議論している時間はない。……携帯端末きちんと見ろよヘイヴィア。ラッシュはもう三分もしない内に来る!!　五〇メートルもない所を通過するんだよ!!」

「ふざけんな!!　時間がねえなら早く言えよ俺は逃げる!!」

もう恥も外聞もなく全速力で逃げ出そうとしたヘイヴィアの肩を、クウェンサーが摑む。格

闘術でぶん投げてやろうかと真剣に考えたヘイヴィアだったが、彼の文句を封じるようにクウェンサーの方が先に口を開いた。

「手伝ってくれヘイヴィア」

「嫌だねドSに命令されるなら相手は女性限定だ!!　誰がテメェなんぞと一緒に地獄になんて落ちるか!!」

「どうせ逃げられない。部隊が全滅したら『情報同盟』軍は機動力を駆使して周囲一帯を迅速に走査する。その網の目を潜ったとしても、『正統王国』軍からの救助活動なんてありえない。お前は春を待たずに凍死するのがオチだ」

「……ッ!!」

「捕虜になれば助かるなんて思わない方が良いんじゃないか。俺はただの『平民』だけど、お前は『貴族』だろ。連中の残忍さの矛先は間違いなく俺よりはお前に向かうだろうし、身代金なんて要求されたら末代までの恥になる。家督なんて一〇〇%継げなくなるだろうな」

「マジかよオイ……。じゃあどうすんだ!?」

「だから手伝え、ヘイヴィア」

突きつけるように、クウェンサーはこう言った。

「時間がないんだ」

6

『正統王国』軍からはラッシュと呼ばれ、『情報同盟』軍ではガトリング033と名付けられた第二世代のオブジェクトのコックピットには、エリートの少女が腰掛けていた。彼女はクウエンサーが予測した通り、回り道を余儀なくされている。

『正統王国』軍のオブジェクトとの戦いは、いかに早く主砲の整備作業を完了させるかにかかっている。というよりも、その時点で勝負が決まってしまうも同然だ。

とはいえ、エリートの少女は全速力を出さない。

むしろ、慎重に慎重に速度を落としながら進んでいた。

ガトリング033は空気の力で機体を受けるエアクッション機関と、高速移動用のキャタピラを併用した特殊な機体だ。辺りに散らばるオブジェクトの残骸がキャタピラを傷めるとは思えないが、万が一そんな事になれば、余計なメンテナンス作業を増やしてしまい、その分だけ時間をロスしてしまう。せっかくの時間的優位をふいにしてしまう懸念があるのだ。

(……「かくこうげき」にもたえるオブジェクトが、そんなかんたんにこしょうするとはおもえませんけど。でも、だからこそ、完全によそくのできない『かみのいたずら』がこわいんですのよね、おほほ)

安全策が一つ見えたからと言って、そこで油断してしまう人間は、偶然という因子には勝て

ない。

戦争の勝敗そのものを握るエリートは、安全策を構築した上で、さらに細心の注意を払う必要がある、と少女は思う。

幸い、メンテナンスの難度を考えれば、この慎重な進み方で回り道をしても、『正統王国』軍よりも早く『情報同盟』軍は出撃準備を終わらせられる。

車両団に対する妨害行為もいくつか見られたようだが、パワードスーツ部隊が動いた事で時間のロスは解消されている。

だが、興奮は禁物。

重要なのは平常心だ。

安全策を維持するために焦って全速力を出せば、それが余計なトラブルを招いて安全策そのものを崩してしまう可能性もあるのだ。たとえギリギリのラインであっても、機械のように正確に機体を動かす事。それこそが確実な勝利を得るのだ。

その時だった。

ガトリング033のセンサーが、赤外線の照射を感知した。

誘導兵器の照準を合わせるために使われるものだ。

（……まあ）

ファシュッ!!　と真横の崖上――と言っても、高さはガトリング033の半分もない

――から、白い発射煙が噴き出した。今時の戦場のどこで使うかも分からない、携行型の対戦車ミサイルだ。

（……このていどのぼうがいしかないのなら、「かみのいたずら」とやらもかわいらしいものですわね、おほほ）

発射直後だった。

〇・三秒あっただろうか。

ガトリング033の中でも一番小さな砲が反応した。放たれたレールガンの金属砲弾は、マッハ五以上の速度で一気に突き進むと、砲身から飛び出したばかりのミサイルを撃ち落とし、さらに射手のいたであろう地点を半径一〇メートル規模で吹き飛ばした。ミサイル自身の爆炎が吹き散らされるほどの威力だった。

ズズン……ッ!!　という鈍い震動が雪の大地を揺さぶる。

エリートの少女は意に介さず、作業的に友軍へ報告を行う。

「おほほ、こちらガトリング033。『まわりみち』のとちゅうで『正統王国』ぐんらしきものからのしゅうげきをかくにんしました」

極めて退屈そうな調子で、

「ええ、そのひつようはありませんわ。……どうせ死体なんてのこっていませんし。そうさくするだけむだですわ、おほほ」

7

ヘイヴィアは少し離れた所にある岩陰に身を潜めていた。
携行型の対戦車ミサイルはウォーターストライダーの残骸に固定し、ケーブルを使った遠隔操作で発射させた訳だ。当然、ラッシュが放ったレールガンは、ヘイヴィアの現在位置から離れた所に着弾している。
が、それでもヘイヴィアの全身から汗が噴き出していた。
もしもラッシュ側がヘイヴィアの『狙い』に気づいていれば、迷わず撃ち抜かれていたはずだからだ。
「……クソッたれ。あいつと一緒にいると勝ちに近づくのか寿命が縮むのか分かったもんじゃねえな……」
そのクウェンサーは現在、ヘイヴィアの近くにはいない。
もちろん対戦車ミサイルと一緒に吹き飛ばされた訳でもない。
岩陰からゆっくりと離れ、うつ伏せになると、ヘイヴィアはライフルのスコープを使って周囲の状態を確認する。
クウェンサーはウォーターストライダーの残骸から残骸へと身を隠すようにしながら崖の上

を走っていた。『情報同盟』のラッシュにも様々なセンサーが取り付けられており、ただ身を隠すだけでは簡単に見つかる可能性が高い。にも拘らずクウェンサーが撃たれないのは、

（同じオブジェクトの残骸、か）

ヘイヴィア自身も、分厚い装甲板の陰に隠れている。

オブジェクトの装甲は極めて分厚く、レーダーやセンサー類の走査を弾いてしまう事も多い。その上、クウェンサーが今盾にしているのは、装甲板の中でも耐核用の鉛の層だった。たとえX線を照射してもクウェンサーの位置は分からないだろう。

（しかも砲撃直後で、衝撃波が周囲の雪や細かい装甲の破片なんかを巻き上げてる。白系の迷彩服の人間が多少動き回っても、センサーが異常を検知しなけりゃ肉眼で見過ごされる可能性も出てくる）

その時、ラッシュは峡谷の隙間を潜り抜けるように進んでいた。

ほとんど擦りそうになる挙動でゆっくりと通過しようとするオブジェクト。

そこへ、

クウェンサーが崖から飛んだ。

彼は跳躍の直前に、プラスチック爆弾を崖下へ放り投げて起爆させていた。大量の土砂と雪

がラッシュのカメラや索敵マイク、熱源感知センサーなどの情報を遮る。崖の幅はギリギリだったから、おそらく向こうのエリートは機体の震動などで土砂を崩してしまったか、せいぜい設置された爆弾を使って、遠隔地からの操作で土砂を崩して妨害を行おうとしたと判断するだろう。

ラッシュの形状は、球体状本体の真下に十字状のフロート＋キャタピラを配置したようなものだ。前後左右に延びたフロートの内、左右二つの上方先端には主砲である連速ビーム式ガトリング砲が設置されている。

クウェンサーが着地したのはその上だった。

しかし峡谷の間を潜り抜けるために速度を落としているとはいえ、ラッシュはこうしている今も移動を続けている。クウェンサーは着地はしたものの、勢いを殺し切れずに足を滑らせた。

（うおおわあ!?　くそ、携帯端末で過去の行動パターンを呼び出していても全く役に立たない!!）

そのまま彼は主砲から転がり落ちる。

尻餅をついた所は、ラッシュのフロートの上だった。

（……そういえば、オセアニアでもここに乗せてもらっていたっけ？）

頭上を見上げる。

オブジェクトには大小一〇〇門以上の砲が設置されているが、側面一方にはそれほどの数は

ない。おそらく主砲の稼働領域を確保する事を優先させる、という目的もあるのだろう。

とはいえ、短めの砲身が二〇門近くあった。

クウェンサーは電磁石にロープを繋げると、バッテリー用のケーブルをロープに絡ませる。電磁石に電源ケーブルの先端にあるジャックを差し込むと、青白い火花が散った。彼は遠心力を利用するためロープを軽く振り回す。勢いをつけると真上に向かって電磁石を投げる。塊は小型の砲の根元辺りにくっついた。

ラッシュの装甲板にはカーボン系やアラミド系の素材も使われているようだが、どうにか電磁石を貼り付ける事には成功したようだ。

（さて。顔に汚れが張り付いているようなもんだ。大量のセンサーも、この距離だと役に立たない。大きすぎるっていうのも問題だね）

ロープを両手で摑み、クウェンサーはそのまま真上へ登り始めた。正直に言って、地味だがここが一番辛かった。分厚い手袋をしているはずなのに、あっという間に掌にヒリヒリした、擦り剝けるような痛みが走る。

やっとの思いで登り切る。

砲身の真下に寄り添うように設置された照準用のカメラに映らないように気を配りながら、砲身の真上へ腰を下ろす。ロッククライミングで言うと、断崖絶壁の中にある小さな出っ張りで小休止するようなものか。だがゴールまでは長い。

今の高さは大体二〇メートルほど。
大きな袋の中から追加の電磁石やロープなどを取り出しているクウェンサーの耳に、無線機からヘイヴィアの声が届く。
『テメェは本当に自信満々な顔で行き当たりばったりな事ばかりしやがるよな。仮にラッシュが磁気系のセンサーを持っていたとしたら、電磁石を使った途端に一発で気づかれてたぜ』
「別に偶然じゃない」
クウェンサーは言いながら、少しずつ砲の根元……球状の本体に向けて移動を始める。円筒形の砲の上を移動するのは、自分で想像していたよりも神経を使った。
「オセアニア軍事国でラッシュのフロートに乗せてもらっただろ。あの時に磁気系のセンサーが本体表面に取り付けられていないのは見ている。ついでに、基本的に砲の照準用カメラは砲身下面に設置されていて、上面は無防備だって事も」
『やだやだ。オブジェクトの設計もベッドの中で聞き出した方が早いんじゃねえか？』
ヘイヴィアの軽口を無視して、クウェンサーはオブジェクトの巨体を見上げた。本体だけで全長五〇メートルあるので、ここからだとまだ見上げる形になる。
「顔についた汚れは、二つの目じゃ確認できないのと同じだ。ロッククライミングをしたってエリートにばれる事はない」

8

クウェンサーは装甲の壁面に取り付けた電磁石にロープを通す。

しかし彼がいるのは、丸い球体状のボディの半分以下の位置……つまり、壁は九〇度以上傾いていた。クウェンサーのいる方へせり出しているのだ。フリークライミングのプロならいざ知らず、ほとんど素人同然のクウェンサーでは、ロープの補助があっても登るのは難しい状況だった。ロープを垂直に垂らして真上へ登る方が、まだ楽だっただろう。

かと言って、今さら下りる訳にはいかない。

地面までは二〇メートル以上。下が雪であっても無傷で済む高さではない。なおかつ、オブジェクトの速度も増してきた。一番幅の狭い崖を抜けたからだろう。雪の下にはウォータースライダーの残骸が不規則に埋まっている事も考えると、地面へ飛ぶのは自殺行為にも等しい。

（……上も下も地獄。よくもまあ残業代を請求しないもんだ）

クウェンサーは小さな砲の上で身を屈めたまま、クライミングのルートを確認するため周りを見回す。

『クウェンサー』

軍服に引っ掛けた無線機から、ヘイヴィアの声が聞こえる。

『崖登りも良いけどよ。具体的にどこへ向かうつもりなんだ』

「さあね。とにかくメンテを遅らせる何かを探す！　レーダーやセンサー系をぶっ壊しても良いし、コックピットの隔壁に細工をして開かなくなるようにしても良い！　時間を稼ぐ方法はこれから探すさ!!」

『時間はねえぞ。急がねえと、テメエを連れたままラッシュは「情報同盟」の即席の整備場に入っちまう!!　そうなったら脱出時に俺の方から陽動を仕掛けるのも難しくなるぞ！』

そんな言葉を聞きながら、クウェンサーは砲台の上で、袋の中から新しい電磁石を取り出す。強力な手すりとなる電磁石だが、そのままでは何の役にも立たない。

砲の上のクウェンサーは、太いケーブルを電磁石のジャックへ差し込んでいく。

バヂッ!!　と青白い火花が散った。

怯みそうになる心を抑え込み、クウェンサーは電磁石を数メートル頭上……ラッシュのボディへと投げつける。

ガチリという硬質な音と共に、取っ掛かりのない球体状の装甲へ新たな接点が出来上がる。

（……表面に張り付いている兵隊は、コックピットからは見えない。とはいえ、砲台のカメラの前を通る訳にはいかない。カメラは基本的に砲身の真下。回り込むようにロープを通して、砲台の上から足を乗せるようにしないと……）

『クウェンサー、まずい!!』

ヘイヴィアからの鋭い声が突き刺さった。

一瞬、何の事か分からなかったクウェンサーだが、すぐに事情は伝わった。

ラッシュの表面全体には、大小一〇〇門以上の砲が設置されている。

その砲が。

まるでスタジアムの観客が行うウェーブのように、順序良く小刻みに動き出したのだ。その流れは、風で草原が波打つように、一気にこちらへ近づいてくる。

（……砲の動きの誤差から、余計なものがぶら下がってたり乗っかってたりしないか確かめるって訳か!!）

クウェンサーは足場に使っていた砲から足を離し、両腕だけでロープにぶら下がった。

直後、砲台のウェーブがすぐ真下を突き抜けていく。

どうにかやり過ごした。

そう思ったクウェンサーの両腕に、ガクンという嫌な感触が伝わった。

（電磁石が……ッ!?）

バッテリーは一つ。電磁石は複数。電磁石の数を増やせば増やすだけ、一つに費やせる電力は弱まってしまう。すると当然、電磁石が装甲に貼りつく力も少なくなってしまう訳だ。

ずずず……と、装甲表面に貼り付いた電磁石が、少しずつ下がって来ているのが分かった。

クウェンサーは慌ててロープを摑み直し、少しでも上へ登ろうとする。

幸い、ここは球体の真ん中近くだ。

今は傾斜が九〇度を超えているが、球体の半分を越えてしまえば、今度は傾斜がクウェンサーの味方をしてくれる。上り坂を上るだけで済むのだから。

（落ちるなよ……）

ヘイヴィアのように正規軍の訓練を受けていれば、足でロープを引っ掛けて体を支える方法も学んでいたかもしれない。しかしクウェンサーはそんな方法を知らない。ほぼ両腕の力だけで、必死に登っていく。

（頼むから、ここで落ちるなんて言わないでくれ……!!）

ガッ、と。

クウェンサーの手が、ロープを登り切り、接点に使っていた電磁石そのものを摑む。

何とか球体の半分以上『上方』へと身を乗り上げる。

ここから先は上り坂だ。

（これで、何とか……）

クウェンサーは白い息を吐く。

さらに効果は弱まるが、追加の電磁石を使って次の手すりを作る。とはいえ、先ほどのように全体重を預ける必要はない。急な上り坂のための足掛かりを作れれば良いので、今までよりも負担は減る。おそらく問題はないだろう。

「ヘイヴィア。聞こえるか、ヘイヴィア？」

無線機で話しかけたが、応答はない。

距離が離れてしまったからだろうか。『情報同盟』はパワードスーツ部隊を使って近場で主砲の交換作業を行うという話だったが、それでも多少遠ざかる事に変わりはない。

クウェンサーは背中に背負ったプラスチック爆弾の事を思い浮かべながら、

（……さて、どこを狙う？　オブジェクトを爆破するって話じゃない。できるだけメンテナンスを遅らせるためには、どこを傷つければ良い……？）

そもそも手持ちの爆弾で壊せる箇所があるのかどうかも定かではない。オブジェクトは核攻撃にも耐えられる怪物兵器だ。補助のセンサーやレーダーなどは核攻撃で破壊されてしまうだろうが、それでもプラスチック爆弾『ハンドアックス』程度なら凌いでしまうかもしれない。

（外から真っ向勝負で壊しに行くのは至難だな。そもそも、生身の兵隊がトライするようなやり方じゃない）

となると……、とクウェンサーは新たな狙いを定める。

やはり、やるとすれば、あそこしかないだろう。

しかし、悠長に作戦の確認をしている暇はなかった。彼が張り付いているオブジェクトの方に、新たな動きがあったのだ。

砲。

そこに取り付けられたカメラのレンズが、一斉にキュイっと妙な音を立てた。

これは……、
（まずい）
クウエンサーの喉が干上がる。
（一斉射撃!?）

9

『情報同盟』軍の第二世代、ガトリング033のコックピット内では、操縦士エリートが指先を細かく動かしていた。
巨大なモニターに複数のウィンドウを表示させるが、今のところ、怪しげな影などは見つけられない。センサーなども使っているが、オブジェクトにとっての『近距離』とは数百メートル単位だ。本当の意味で間近にいる敵には反応しづらいという欠点がある。
彼女が『懸念』を抱いた理由は簡単だ。
「……ガトリング033にはりつくようなしきんきょりで、何かしらのでんぱがそうしんされていたはずなんですけどね。おほほ」
小さなウィンドウに表示された警告文に従い、エリートの少女は『確認作業』を行った訳だ。
生憎、電波の送受信が確認されただけで、具体的にどんな情報だったのかまでは分からない。

有人かもしれない。
無人かもしれない。
と、
（おほほ。全てのほうをうごかして、そのじゅうりょうから、ほうをあしばにしているものはいないというのはしょうめいしたんですけど）
そうした作業を経て、エリートの少女は判断を行う。おそらくは無人。無線電波の正体は発信機か何かで、敵国のオブジェクトの照準を補正するものなのかもしれない。
エリートは指先を動かし、ガトリング０３３のありとあらゆる砲に命令を出す。
（ねんにはねんを入れて、たいさくをこうじておきましょう。おほほ）
やるべきは一斉射撃。
ガトリング０３３に搭載された、大小一〇〇門以上の砲を一気に撃つ。
照準は気にする必要はない。
撃つという行為に意味がある。
（おほほ。げんみつには、はっしゃに伴う『しょうげきは』や『ふくしゃねつ』で、うるさい虫を叩きおとすんですけどね）
レールガン、コイルガン、レーザービーム、下位安定式プラズマ砲。
いずれの砲にしても、発射と共に莫大な余波を発する。オブジェクトの砲を基地周辺に配備

できないのは、その余波があまりにも大きすぎて味方を巻き込みかねないという懸念があるからだ。

仮に何者かが張り付いていたとしても、小型装置を接着させられていたとしても、ガトリング033が一斉射撃を行えば、装甲全体を衝撃波や輻射熱が舐める事になる。

無線電波を送受信しているのが有人であれ無人であれ、振り落とされるのは確実だ。

「ふむ」

エリートは記録用のレコーダーボックスにアクセスし、オブジェクトに備えられた無数のカメラやセンサーの情報を引き出す。ちょうど、狭い崖を抜ける時のものだ。

カメラにはブレた影しか映っていないが、熱を探知するセンサーには何かしらの反応があったように見えたのだが……。

（まぁ、何であれ）

エリートは冷酷に、人差し指で機材を押す。

（平伏すものにはじひを与え、はむかうものにはようしゃをしない。それがオブジェクトうんようのきほんなんですのよね。おほほ）

直後。

容赦なく、全ての砲が発射された。

莫大な衝撃波や輻射熱が、オブジェクト自身の装甲を完璧に覆い尽くす。

無線電波の消失を確認し、エリートの少女は上機嫌でガトリング033を走らせる。

10

衝撃波は人間の意識を飛ばすほどの威力だった。
輻射熱は皮膚も軍服もまとめて焼き焦がすほどの高温だった。
オブジェクトの球体状ボディの全面に及び、逃げ場はないはずだった。
当然、クウェンサーも。
ただし。
例外はある。

ラッシュの補助センサーが集中している箇所だ。

確かにオブジェクトの砲は莫大な衝撃波や輻射熱を生み出す。しかし、自分自身で放った余波で、自分自身のセンサーやレーダーを破壊してしまうようには作られていない。
つまり、砲の配置や密度をあらかじめ調整し、本当にデリケートなレーダーやセンサー類には余波がぶつかりにくいように設計されているのだ。

クウェンサーはとっさにそこへ潜り込んだのだ。

（……前に、うっかりベイビーマグナムのセンサー群に寄りかかってお姫様とばあさんの二人から死ぬほど怒られたからな。もっとも、この手のセンサー群はサポート的なものであって吹き飛ばされても戦闘は続行できるみたいだけど）

鋭敏なセンサーの近くに向かうという事は、自分の存在をエリートに知らせてしまうかもしれないリスクもある。しかしクウェンサーは行動によって幸運を摑んだ。それ以上の動きがなかったという事は、エリートは今の一斉射撃で侵入者が『落ちた』か『いなかった』か、どちらかだと判断したようだった。

（……ヤバいヤバい。ひょっとして、これがバレたのか？）

クウェンサーはスイッチを切った無線機に目をやり、シャーベットのように凍りかけた冷や汗を拭う。白い息を吐き出すと、

（……ここからが本番だ）

背負ったバックパックから、彼は粘土状の爆弾を取り出す。

一番デリケートなセンサーの並ぶこの区画であっても、太い柱などの集合体であって、爆弾だけで吹き飛ばすにはかなりの労力がかかりそうだった。

（やっぱり、あそこしかないか）

そう考えるクウェンサーだが、それには多少の運がいる。

彼一人だけの行動で攻められる箇所ではない。
ただし、攻められれば、確かに大きな戦果を上げられる。
（安全策だけじゃダメだ）
クウェンサーは思う。
手の中で粘土のような プラスチック爆弾を練りながら、
（あの怪物兵器と立ち向かう事自体、リスクの塊なんだから）

11

『情報同盟』軍の第二世代、ガトリング033は雪原でゆっくりと停止した。
何かしらのマシントラブルが起きた訳ではない。
パワードスーツ部隊との合流地点だった。歩兵はバラバラに分解した主砲の連速ビーム式ガトリング砲のパーツを集めていた。後はこれを組み立てて交換作業を行えば、敵対する『正統王国』軍のオブジェクトを、整備基地ベースゾーンごと襲う事ができる。
エリートは通信機能を使って、パワードスーツを着た整備兵と連絡を取り合う。
『ジュリエット』の中断を確認。これより主砲の交換作業に入ります』
「ピットインはお早めにおねがいしますわ、おほほ。せっかくさくをろうしても、じかんをむ

だにつかってはいみがありませんからね」

オブジェクト対オブジェクトの戦争では、整備基地ベースゾーンをオブジェクトで襲撃するのは一般的には『マナー違反』だ（厳密なルールではないため、別に守る必要もないのだが）。しかし敵対するオブジェクトが整備基地ベースゾーンの中にこもり、戦場に出てこないのであれば、こちらは基地ごとオブジェクトを破壊するしかない。

そういう名目で。

整備基地ベースゾーンを襲う事ができる。

（……おほほ。そのばあい、れいの「とのがた」を失ってしまうリスクもありますけど）

シートに深く身を沈め、傍らから酸素吸入用の小型スプレーを取り出して、高Gの戦闘で失ったスタミナを少しでも回復させようとするエリート。

（そのばあいは、仕方がありませんわね。手中に収めたいとはおもいますけれど、いのちをかけるほどではありませんし、おほほ）

主砲の交換作業はすぐにでも終わるだろう。

少し前に行った戦闘記録を画面に呼び出す。敵対するオブジェクトの破壊箇所は、こちらよりも深刻なはずだった。向こうの整備兵がどれだけ優秀だったとしても、この差は埋められないだろう。

（かてる）

エリートはスプレーで圧縮された酸素を吸い込みながら、薄い笑みを浮かべる。
即席の自己暗示は、エリート自身のコンディションを調整するための手段の一つだ。
（おほほ。私だけの力じゃない。私と、私のぶたいと、オブジェクトのガトリング033。その全てがてきにまさっている。そうかんたんにはほころびない。ここからのぎゃくてんはありえない。だからかてる。私がかつ）
その時だった。
赤い警告のウィンドウが表示された。
訝しげに見るエリート。照準関係のセンサーに、妙な誤差が生まれている。
（……おほほ。気に入りませんわね。このチクチクするかんじ）
傍目には大した差ではないだろう。このままでも戦える。しかし、オブジェクトを己の手足としているエリートにとっては耐え難い誤差だった。
細い指先を動かしていくつか調整を行うが、誤差は修正できない。
ソフト的な問題ではない。
センサーそのものが、物理的な問題を抱えている。
「せいびへい！　センサーAからEまでを再チェック!!　0・5から0・7のごさがありますわ。おほほ、『しゅどうこうかん』なら私も出ます!!」
『それでは作業時間に大幅な遅れが生じます』

突然言われた整備兵は、うろたえながらも答える。

『〇・五から〇・七なら許容範囲内です。主砲交換後、至急「正統王国」軍との交戦を始めてください！　もう時間がありません!!』

「何をばかな!!　おほほ、オブジェクトという大きなてきとたたかうからこそ、わずかなごさもみとめられないといっているのです!!」

『本当に時間がないんです！　本作戦では、主砲以外の交換は想定されていません!!　レンディーファロリート中佐から命令を受けている以上、覆せば軍法裁判にかけられます！』

分からずやめ、とエリートは吐き捨てる。

元々、このピットインは作戦を有利に展開させるための『上乗せ』だ。土台の土台となっているオブジェクトの性能を劣らせてしまっては意味がない。センサーに誤差があるまま戦って、こちらのガトリング033が撃破されてしまったら、誰が責任を取ると言うのだ。

整備兵は動かない。

そもそも、繊細なセンサーの調整は、整備兵の立ち合いの元、少女が自らの手で行うものだ。

「ええい!!　おほほ、なら私が1人でやります!!」

そう思ったエリートは、コックピットから外へ繋がる数十の隔壁を開放した。エレベーターを使って、コックピットそのものを外壁まで押し上げようとする。

しかし、コックピットの上昇は行われなかった。

それより前に動きがあった。

初めは音だった。

布を擦るような音。それが坂道を滑り降りる音だと分かった時には、もう遅かった。

振り返る暇も、シートベルトを外す余裕もなかった。

「失礼、マドモアゼル」

真後ろから聞こえる声。

首筋に当たるヒヤリとした感触は、刃の短いナイフか。

「淑女の寝室に忍び込むつもりはなかったが、生憎と時間がない。大人しく言う事を聞いてもらうぞ」

敵対者の声には聞き覚えがあった。

『正統王国』軍の仲間からはクウェンサーとか呼ばれていた少年のものだ。

「ごしんぱいなさらず」

エリートの少女はシートベルトで体を固定したまま、肩をすくめて息を吐く。

「本来なら、こちらからまねくつもりでしたのよ。おほほ」

12

クウエンサーはラッシュのコックピットに潜り込んでいた。
プラスチック爆弾の『ハンドアックス』を使ったのだが、爆破のためではなかった。粘土状の爆弾をセンサーの頂点に貼り付けて、感度を鈍らせたのだ。仮に誰かが気づいて取り外そうとした場合、適当な砲身の中に潜り込み、敵兵の視線と爆風から逃れる場所を確保した上で爆破し、整備兵へダメージを与えるつもりではあったが。
時間がないのは分かっている。
しかしセンサーに異常があればエリートは黙っていないだろう。
自分でセンサーの具合を確かめるにしろ、『言う事を聞かないと戦わない』と言って整備兵と交渉するにしても、エリートは隔壁を開けてオブジェクトの外に出ようとする。
そこへ逆に、コックピットから繋がる出口近辺で待機していたクウエンサーの方が、オブジェクトの機内へ潜り込む。
外からは破壊できないオブジェクトであっても、内側からは違う。
（……作戦でも何でもない。こんなのはほとんどギャンブルみたいなもんだったが、ようやく最高のカードが回ってきたぞ……）
お姫様と整備兵の婆さんの間柄ですら、繊細なセンサーの微調整にはかなり細かく口を出しているようだった。完全に自分の意を汲んでくれるようなパートナーに恵まれていなければ、お姫様も自分の手で直接センサーに触れていただろう。ドキュメンタリー番組などで、工具を

手にしたエリートを見る事もある。

オブジェクトが『体の一部』になっているエリートにとって、センサーのわずかな誤差は、度の合わないメガネを掛けさせられているようなもので、実戦的な理由というよりは、集中力を削ぐ要因として絶対に看過できない事のようなのだ。

（……命を賭けるのはエリート一人。自分の機体のコンディションに、完全主義的なデリケートぶりを見せてもおかしくはない。一秒一瞬が惜しいピットインの最中じゃ、ほんの二、三言のやり取りでさえ、『自分が動いた方がマシ』って思い込ませてしまうだろうし）

クウェンサーがエリートの首に突きつけているのは、サバイバルキットの中にある、調理用の小型ナイフだ。刃渡りは親指ほどしかない。

椅子の後ろから腕を回すような格好になっているクウェンサーは、

（何だ……？　随分と低いな）

思わず眉をひそめてしまう。

オセアニア軍事国で聞いた話では、ラッシュのエリートはGカップのナイスバディという事だったのだが……。

実際に見てみると、その少女はせいぜい一〇歳程度の年齢でしかなかった。身長は一三〇センチあるかどうか。当然、Gカップなんて訳がない。そもそもブラジャーというものを知っているのかどうかも怪しい体型だった。

着ている特殊スーツについても、自覚があるのかないのか、ぴったりと全身に張りつくような赤いアンダーの上から、白いスクール水着のようなものをまとうデザインだった。お姫様同様、迷彩に気を配っている様子はない。

どうやらモニター越しに反射するクウェンサーの顔色を見たのか、エリートの少女はナイフを向けられながらも、どこか余裕のある声色で、

「おほほ。おどろきまして？『情報同盟』はしんじつを『せいぎ』、きょこうを『あく』とします。ただし、てきたいしゃへのこうげきとして、いとてきに『うそ』をつくことがあるんですのよ」

「嘘だろ、おい」

クウェンサーはちょっと真剣に顔をくしゃくしゃと歪めた。

頭の中で思い浮かべていたGカップのナイスバディにさよならを告げ、彼はもう一度、

「……ぐしゅ、嘘だろ……ひっく」

「ちょっと。そんな、なみだまでうかべられてしまうと、さすがにカチンときますわよ。この体つきだって、それはそれでよろしいものでしょう。おほほ。これでも一応、『ほんごく』ではうたっておどれるアイドルエリートとしてかつやくちゅうなんですのよ」

「でも公式プロフィールではGカップのナイスバディだろ。どうやったってごまかせないじゃん!!」

「おほほ。ですから、ダミーはスクリーン上でフル3DCGに。……そこでウソつきとよばれるのはしゃくですわよ。これでもモーションにはきちんと私のデータをつかっているのですからね」

あらゆるデータをネット上で管理し、真実と虚構を戦略的に使い分ける『情報同盟』の事だから、ひょっとしたらあそこの民衆は、戦時下のプロパガンダなんてどうせ都合良く調整された嘘っぱちに決まっているし、感情移入さえできればヴァーチャルでも構わない、とでも思っているのかもしれない。

「ちなみに、このかいわも外には伝わっています。そろそろはういされているころではありませんかね。おほほ」

「関係ない。このオブジェクトを操れるのはアンタだけだ。下手な行動をすれば、ここでエリートの命にケリをつける。進んでやりたいとは思わないけど。……この会話も外には聞こえているんだよな？」

ひとまずガキのくだらないたわ言を無視して、クウェンサーは本来の任務に移る。

彼はコックピット内を見回した。

異様だった。

空間のサイズは直径一メートルほどの球体。その前面に巨大なモニターが張り付いているところまでは、お姫様のベイビーマグナムと同じ。

ただし、ベイビーマグナムは操縦桿やボタン、キーボード、トラックボールなど複数のインターフェイスを用意しているのに対し、こちらのラッシュには一つしか系統が用意されていない。

キーボード。

それも階段状に、三段重ねで大量のキーボードが並べられていた。さらにその三段重ねが、コックピットを取り囲むようにUの字状に広げられている。本当にこれが効率的な配置なのか、クウェンサーには分からない。他のエリートにも分からないかもしれない。このラッシュを操る少女にしか通用しない論理で設計されているに違いない。

Manual interface "JULIET"。

キーボードの余剰スペースに刻まれた刻印は、もしかするとエリートの少女の名前なのだろうか？

（……やっぱり、オブジェクトはエリートにしか操れないか……）

一瞬でも淡い希望を持った自分が馬鹿みたいだ。

ナイフを握る手に改めて力を込め直し、クウェンサーはできるだけ低い声で告げる。

「まずはコックピットの隔壁を全て閉じろ。外がうるさいようだけど無視して良い」

「おほほ。それではあなたのたいろをたつだけですわよ」

「良いから早く。意味のない脅しのために、女の子の肌に刃を通したくはない」

「まだ女の子扱いしてくださるところはほめてあげますわ。おほほ」

クウェンサーは、少女の首で寝かせていた刃を立てた。

エリートは肩をすくめて『降参』と意思表示すると、適当にキーを叩く。細い五本の指が、常人ではありえない、電動ミシンのような動きをした。エリートの意を汲み、コックピットから外部へ繋がる通路に、数十の隔壁が閉じる。

流石に外部も警戒し、整備兵から複数の通信が送られてきた。

だが反応はない。

当たり前だ、クウェンサーがエリートの身動きを禁じているのだから。

「おほほ、せかいで1ばんじゃまの入らないラブシートへいらっしゃい。……それにしても、ナイフ1本でオブジェクトジャックだなんて、あいかわらず、ぜんだいみもんがお好きなようですわね」

「言う事だけを聞いて、必要のない事は黙っていれば良い。それでアンタは助かる」

「次は何を？　しゅほうで『自由のめがみ』でもうってさしあげましょうか？」

「何もするな」

クウェンサーは鋭く命令する。

「メンテナンスが終わっても動くな。整備兵からの通信にも応えるな。ウチのお姫様が準備を終わらせるまで、いや、チェックメイトを宣言するまで指一本動かすな。それでおしまいだ」

「あら。おほほ、そんなことを言って良いんですの？」
「余計な真似はするなよ。こっちも慣れてない。緊張で腕が震えた拍子にスッパリなんて事もありえる」
「ちがいますわよ。おほほ」
エリートの少女は笑顔すら浮かべて言う。
これが場数の違いか。敵国の人間にナイフを首筋に当てられて笑っていられる神経が、クウエンサーには信じられない。
しかし、エリートには確かに余裕があった。
その意味を、もう少し考えてみるべきだったかもしれない。

「私が『たづな』をにぎらなければ、ガトリング０３３はどこまでも『ぼうそう』しますわよ？　おほほ」

何を言っているのか理解できなかった。
直後に答えが来た。
ぐんっ!!　と。
クウエンサーの体が慣性の巨大な力に振り回され、ノーバウンドで壁に叩きつけられたのだ。

ラッシュの周囲にあった整備用の車両が一気に蹴散らされ、整備兵達が悲鳴を上げながら退避するが、クウェンサーは外部の事になど気に掛けている余裕がない。

「がっ!?」

肺から酸素が一気に奪われる。

手の中からナイフが落ちる。

オブジェクトが急に動いた。それは分かったのだが、今のはほとんど無重力状態に近かった。単に足を踏ん張ってどうにかできる力ではない。高速にブレる視界の中、ベルトで座席に固定された少女のニヤニヤした笑みが見えた。

刃物の戒めを失った少女は、通信を介して味方の整備兵に連絡を取る。

「おほほ。しゅほうのこうかんさぎょうはおわりましたわね」

『ガトリング033、そちらの異常は伝わっています。まさか「正統王国」軍の敵兵を同乗させたまま出撃しようとしているのですか!?』

「だとしたら、何だと言うのです。どのみち、オブジェクトのかくへきをがいぶからこじあけるほうほうなどありません。そして今は、1分1びょうのこうでいによってせんきょくが大きくかわるピットインのさいちゅう。すすむしかないのですよ。ここでぶざまに『しろはた』をあげたくなければ」

『しかし……ッ!!』

「なら、あなたが『しろはた』をあげますか？　あなたのどのけんげんで？　たかが生身のできへい1人のために、オブジェクトがぶつかり合うせんそうをだいなしにしろとでも？」

エリートの少女はゆっくりと、しかし揺るぎのない声を発する。

「よって、今ここでろんじるべきは私の身の安全などではありません。しゅほうのメンテナンスがおわっているか否か。私のガトリング０３３はせんとうをぞっこうできるか否か。どうなんですか。ガトリング０３３は、たたかえますか」

『……』

「こたえなさい。せんりゃくじょうのひつようじこうです」

『えっ、ええ。主砲の交換作業はつい先ほど終了しました。ですが、オーダーにあったセンサーの方はまだ――』

「なら、けっこう」

エリートの少女は遮るように言った。

通信相手の整備兵にではなく、倒れて咳き込んでいるクウェンサーに向けるように。

「そんなじょうたいのガトリング０３３をあやつる気はないので、仕方がありません。今回は、『せんりゃくＡＩジュリエット』に任せてみようとおもいますわ。おほほ」

「……!?」

ＡＩ、という単語にギョッと身を強張らせるクウェンサー。

『待ってください!!　ジュリエットの完全機体制御はまだ第二次試験中のはずです！　誤検知・誤判断による誤射の可能性が高まり、友軍へ犠牲が生じるリスクが……!!』

「対オブジェクト用の、50メートル大の反応にのみこうせんするようにレベルをしぼればもんだいありませんわ、おほほ」

『ですが、現状のジュリエットはあまりにも危険過ぎます!!　最大戦力であるオブジェクトの全権を与えてしまっては、どれほど被害が拡大するか……ッ!!』

「おほほ。なんどもくりかえさせないでくださいませ」

エリートの少女は遮るように告げた。

「ぐんきのマニュアルなどにしたがっていれば、このせんそうにはいぼくします。せんとうをぞっこうできるしゅだんがある以上、私はこのたたかいをかってにおわらせるつもりはありませんわよ。おほほ」

通信を切ったエリートは、見せつけるような視線を送り、

「『情報同盟』がオブジェクトの『むじんかけいかく』をすすめている。そんなウワサぐらいきいたことはありませんか？　おほほ」

「まさか……」

クウェンサーは床に崩れたまま、呻くように言った。

「ＡＩの研究は非実用的だ。ＵＡＶの定期巡回軌道みたいな単純な動きならともかく、エリ

ートの臨機応変な高速戦闘を上回るほどのプログラムは完成していないはずだ」

「『正統王国』ぐんおとくいの、アンジェリナ・リストのはなしですか？　おほほ」

「……」

「おほほ。たしか、ＡＩひていろんしゃのかがくしゃたちが、よってたかってＡＩに『ふつごうなテスト』をくりかえし、ＡＩの『じゃくてん』や『しっぱいれい』をもうらしたろんぶんでしたわね。ぼうそう、ていし、あやまったがくしゅう……さまざまなパターンがあったようにおもえますけど」

「アンジェリナ・リストはオブジェクト級の戦略ＡＩを組み上げる上での、世界標準の『壁』だ。『正統王国』軍のデータベースにも公式登録されているし、ネット上で一般公開されている論文だから、『情報同盟』軍でも研究の参考にされているんじゃないのか？　……動きの単調なＵＡＶならともかく、あれだけ複雑高度で巨大な『オブジェクトというシステム』を、徹底的に心身を改良したエリートの思考を上回る速度と柔軟性で操縦するＡＩを作る事は、今の技術じゃ不可能だって」

「おほほ。ＡＩは『しょうりへのさいたんコース』をえらびすぎるがゆえに『からめて』によわく、また『がくしゅうパターン』に対応できないじょうきょうにおちいったばあい、からぶりばかりを行うからはなしにならない、とでも？」

「……」

「まあ、完全な『むじん』とは行きませんけどね。おほほ。フルスペックかいほうじのガトリング033は、私の手であやつられているのではありません。せんりゃくAIジュリエットがきほんてきなそうじゅうを行い、エラーやバグがはっせいしたときだけ、私の手でミスをしゅうせいする。つまり」

ニヤリ、と。

エリートはこれまでとは質の違う笑みを浮かべてこう言った。

「私が手をはなしたら、ガトリング033は『だいぼうそう』してしまいますわよ？」

声を最後まで聞く事はできなかった。

怪物兵器のオブジェクトが全力で活動する事。

それが何を示すのか、クウェンサーは直後に思い知らされる事になる。

巨大な慣性。

その力が、クウェンサーの体内をみしみしと軋ませた。

「ぎっ、あ……!?」

前後左右への揺さぶり。

呼吸すらもままならなくなるほどの重圧。

「ぐあああああああ

リング033のこうそくせんとうにはついていけませんわよ」

たった一〇歳程度の少女は、腕置きに備え付けられていたドリンクをストローで吸うほどの余裕を見せて、クウェンサーに話しかけてくる。

『情報同盟』軍は戦略広報用に、フル3DCGのモデルで『Gカップのエリートの理想像』を作って、民衆もそれを（嘘と知っているかどうかはさておいて）受け入れていたらしい。それは、彼らの最終目標が『AIによるオブジェクトの管理』であるため、ヴァーチャルな理想像を受け入れやすい土台ができあがっていたのかもしれない。

そして、

「まだまだ、せいぜい9Gといったところです。キャタピラをつかったばあい、しゅんかんてきに12Gをこえることもありますけど……。まあ、ふつうの人ならよちがいなく気を失うレベルですけど、がんばってたえぬいてくださいませ。おほほ。本来ならそくざに『情報同盟』ぐんへひきわたすべきところを、わざわざ『とくとうせき』へごしょうたいしてさしあげたのですから」

一二G。

普通の人間では耐えられない事が実証されている領域。しかし、彼女にとっては、これが寝室のようなものなのだ。これを『自然』と感じられるように、エリートの体は徹底的に造り変えられているのだ。

その価値観に、クウェンサーはゾッとする。

（これが、エリート……）

口の端から泡のようなものを出しながら、クウェンサーは思う。

（オブジェクトに乗って戦うためだけに体を改造された人間。くそ、まるで深海魚と潜水で勝負するみたいだ……）

現場の兵士は、よく冗談交じりにこんな事を言う。

現代の戦場なんて退屈だ。俺達に戦争をさせたかったら、あのエアコン付きのオブジェクトをこっちにも回してくれ、と。

だが。

冗談じゃない。

実際にこんな怪物を押し付けられたって、寿命を縮めるだけだ。血管が破裂するどころか、眼球そのものが物理的に飛び出すんじゃないかと思うほどの激痛に苛まれるクウェンサーは、改めて思う。こいつを平気な顔で乗り回しているヤツはまともじゃない。人体を内側から造り変えない限り不可能だ。

クウェンサーは壁際の床に投げ出された状態で、腕を伸ばそうとする。

エリートの少女を取り囲むように、大量のキーボードが配置されている。その小さなキーを少し叩くだけで、この悪夢のような苦痛を止められるかもしれない。

しかし、実際には腕を動かすどころか、指先をぴくぴくと震わせるのが限界だった。単に体が動かないのではない。

頭の奥、思考や感情といった部分にまで強烈な重圧が締め付けてくる。

「さて、と」

手枷も足枷も使わず、機体の慣性だけで敵兵をねじ伏せたエリートの少女は、ドリンクを傍らに置くと、改めて、〇本の指を周囲のキーボードへ突きつける。

彼女が操縦するのではない。

暴れ馬の手綱を握るように、戦略ＡＩが瞬間的に弾き出す数百数千のコマンドの中から、不要だったり競合していたりする命令文を取り除くだけ。

「それでは、『ほしいもの』ももらいましたし……今日のおしごとをおわらせるとしましょうか。おほほ」

ガォン!!　とキャタピラで大きく雪を弾き飛ばし、第二世代のラッシュが雪原を大きく突き進む。モニターの中の景色が一気に速度を増す。

スピーカー越しに、クウェンサーは聞き慣れた音を耳にした。

自分の整備基地で使われている緊急出撃用のサイレンだ。『正統王国』軍の車両団までは、もう数キロの所まで迫っていた。念のために配備されていた戦車が慌ててオブジェクトの進路上から離れていくのが分かる。

（くっそ……ッ!!　お姫様の方はどこまでメンテを済ませた……!?）

ベイビーマグナムは七本の主砲を束ねる機体後部のジョイントを撃ち抜かれていた。パーツを交換するためには、まず七本の主砲と大破したジョイントを全て外し、一から組み直すしかない。

どう考えても、ベイビーマグナムがこの短時間で七本の主砲アームを完全に使える状態に戻せるとは思えない。

にも拘らず、お姫様のオブジェクトが、車両団の中から出撃した。

戦う意思を見せる事で、車両団への無用な攻撃を抑え込もうとするかのように。

「おほほ。出てきましたわね」

エリートの少女は笑みを浮かべた。

これまでとはまた違う。どこか残酷な色が浮かんでいる。

「わざわざ、こうせいどのセンサーでかくにんをとるひつようもありませんわ。どうやらうごかせるのは1もんだけ。おほほ、7もんあるしゅほうの中で、1つだけでも本来の出力を出せるようにした、くにくのさくですわね」

大小合わせて一〇〇門以上の砲を持つオブジェクトだが、オブジェクト同士の戦闘の場合、とどめを刺せるのは主砲クラスの兵装だけだ。そういう意味では、七門の砲を低出力で動かせるようにするより、一門の砲を最高出力で動かせるようにした方が、確かに理には適っている。

しかし。

それは、あくまでも『勝負の舞台に出る資格』をキープしているだけだ。『七門の主砲をフルに使って、敵のオブジェクトと互角に戦う事』を前提としている以上、一門しか主砲の使えない今のベイビーマグナムは、他の機体と比べて圧倒的に力不足なのは間違いない。

「……わざとアームの動きを止めて、油断を誘っているだけかもしれないぞ」

「おほほ。きょこうは『あく』ですわよ。あなたはこううんにも、この私にほかくされたのです。早い内に『情報同盟』のルールをまなんでおくことをおすすめしますわ」

そろそろ血でも吐きそうな顔色になっているクウェンサーを放っておいて、エリートの少女は軽快にキーを叩く。どうやら無線の調整をしているらしい。味方の軍と連絡を取り合おうとしているのかとクウェンサーは思ったが、そうではなかった。

彼女は『正統王国』軍のお姫様に向けて、意図的に傍受されやすい周波数で通信を放ったのだ。

「おほほ。『正統王国』のどろくさいエリートさん。すなおに『しろはた』をあげれば、あなたたちのいのちまではうばわないとせんげんしているはずですが？」

『……ざんねんだけど、ぐんのきやくにはオブジェクトはかいまえに「しろはた」をあげるようなマニュアルは存在しない』

「まあいいですわ」

タタタン、とエリートの少女はリズム良くキーを叩き、

「別におもいやるぎりもありませんし。それなら、けいきよくふきとばしてさしあげますわ。おほほ」

本格的な戦闘が始まった。

一定の距離が開いた状態で、両者の機体がそれぞれ左右にスッと移動した。反発する磁石同士を無理矢理にくっつけようとするような挙動だった。一機のオブジェクトは互いに円を描きながら高速に移動し、搭載されている砲を発射していく。

お姫様も戦闘のプロだ。

七門ある主砲の中で一門しかまともに動かせない悲観的な状況だが、そういった不利な形勢に引きずられない。とどめを刺せないとはいえ、ベイビーマグナムには一〇〇門近い砲が残っている。お姫様はそれを使い、地面の雪を吹き飛ばしたり、敵のセンサーを眩ますように威力の弱いレーザーを浴びせたり、といった方法で攪乱行動を起こしつつ、動きの鈍ったところで虎の子の主砲を撃ち込んでいく。

しかし。

お姫様がそうであるように、『情報同盟』軍の少女もまた、生粋のエリートだ。

オブジェクトを操縦するために存在する人間。

オブジェクトの操縦を取り上げられたら全てを失ってしまう人間。

極限まで肉体を鍛え上げ、高G対策に血液量を調整し、大量の酸素を供給できるよう、人工的な鉄分の投与まで行った特殊な少女は、一〇Gに届く異常な環境下でも鼻歌混じりにキーを叩き続けた。

攪乱など通じない。

一つのセンサーが封じられても、即座に複数のウィンドウを表示させ、様々な角度から情報を取得して高速戦闘を続行していく。

全ての攻撃を避けられないのは承知の上で、唯一致命傷を与えられる主砲だけは確実に回避する大胆な高速移動を繰り返す。

キャタピラを利用した小刻みな高速移動を何度も行いつつ、少しずつベイビーマグナムを崖の壁面など地形的に追い詰めるルートへと誘い込もうとする。

このままだとお姫様が劣勢に立たされる。

（くそ……操縦を、妨害して、やる……ッ!!）

吐き気を必死に抑えながらクウェンサーはそう考えるが、床に倒れたまま、指一本を動かす事さえ困難だった。起き上がればすぐ届きそうな位置にたくさんのキーボードがあるが、この高G下では横から手を伸ばす事はできない。

と、そこでエリートの少女は機体を急激に振った。クウェンサーの体が空中を踊り、エリートの少女の座席にすっぽりと収まる。

「おほほ。『ジュリエット』任せでてもちぶさたですし、どうせなら2人でベタベタイチャイチャしましょうか」

「な……ぐぇ……何言ってん……ッ!?」

今もクウェンサーには壮絶な慣性の力が加わり、ろくに返事をする事もできない。まるで重たい板を胸の上から押し付けられているような感じで、呼吸すらも万全ではない。

すると、ラッシュの無線装置の向こうから、お姫様の声が飛んできた。

『……クウェンサー……？』

「な、何故(なぜ)そんな不審者に声をかけるような重たいトーンなのか教えていただきぐぶえ!?」

「おほほ！　おほほほほ!!　もはや『正統王国』のどろくさいエリートに入り込むよちなどないということですわ!!　さあて見せつけてやるとしましょうね。2人でほおずりしている写メでもおくらせていただきます。はいチーズ！　……あら、かくへきのせいでてんぱがしゃだんされているせいか、『正統王国』のまどぐちへおくることはできないようですわね」

『クウェンサー……。もうしわけないけど、これはラッシュとのたたかいだから。……何でそこにいるのかはしらないけど、さっさとだっしゅつしないとまとめてふっとばすよ』

「ま、待て、待って。今、内側からラッシュの動きを何とかするから……」

ミシミシと座席に押し付けられたまま、それでもクウェンサーはエリート用に設置されたキーボードへ震える指先を伸ばそうとするが、エリートの少女からたしなめられるように手の甲

を叩かれてしまう。

ろくに力の入らないウェンサーの手は、それだけで弾かれる。

（……く、そ……たったこれだけの事ができないなんて……）

巨大な画面はウィンドウで分割され、いくつもの情報が躍っていた。

操縦しているのは戦略ＡＩジュリエット。

そのＡＩがどんなコマンドを発しているのかを表示するためのものだろう、樹形図のようなものが表示されたウィンドウもあった。瞬時に一〇〇も一〇〇〇も表示されるラインに対し、エリートの少女は高速でキーを叩いていくつかのラインを赤く色分けし、遮断していく。これが彼女の言っていた『手綱を握る』という行為か。行動から徐々にムラや硬さが失われていくのは、ＡＩが戦況に慣れて『学習』の更新を始めたからか、あるいはエリートの少女の方がＡＩの癖を摑んで効率良くコマンドを『修正』できるようになってきたからか。

「……が、ア、あああ……ッ!!」

慣性の重圧によって、さらに内臓を絞り上げられるクウェンサー。

口の端から血を垂らすクウェンサーのポケットから、何かがこぼれ落ちた。それは携帯端末だ。小さな機械が床を滑るのを見て、エリートの少女は微かに嘲笑う。

「おほほ。いくらコックピット内とはいえ、そんな安物で私のインターフェイスにかんしょうすることはできませんわ。『正統王国』のスパコンにたよろうとしてもむだ。分厚いかくへき

はしんごうを完全にしゃだんしてしまいます」

エリートの少女が勝ち誇ったように言っていたが、クウェンサーは無視して遠く離れた携帯端末の画面を睨みつける。

戦略ＡＩジュリエット。

今も繋がっている、お姫様とエリートの少女の通信。

手元にあるプラスチック爆弾。

ろくに身動きの取れない状況で、巨大なモニターに血走った目を向けていたクウェンサーは、やがて静かにこう思った。

糸口が見えたかもしれない。

13

その時、ベイビーマグナムを操るお姫様は浅い呼吸を繰り返していた。

状況は刻一刻と変化する。前面の巨大モニターにはめまぐるしく新たな情報が表示され続ける。眼球の動きを捉えて機械に命令を送るデバイスを使っても、その処理が追い着かなくなりそうになる。二〇万トンの巨体を何度も何度も小刻みに左右へ振り、『情報同盟』軍のラッシュからの攻撃を回避しながら、慣性の重圧に体力を奪われていく。息を吸い込んでも半分も体

に取り込めないような状況の中で、『オブジェクトを操縦するためだけに最適化された』彼女の脳が、極限の演算速度を叩き出す。

拮抗。

一進一退。

しかし互いに押し合う戦況が単純でない事を、お姫様は感じていた。七門ある主砲の内、使えるものは一門しかない。これを潰されたら終わりだ、という事もあるのだが、懸念はそれだけではなかった。

もっと曖昧な、勝負師の運のような話だ。

何というか、状況が横滑りを始めようとしている……そんな感じがするのだ。単純な一本のライン上で行われていた押し合い。そこに新たなベクトルが生まれた事で、一気に、崩れるように、戦況が激変するであろう『予感』がひしひしと伝わってくるのだ。

（まずい……）

劣勢への兆し。

排水溝の栓を抜いた途端、風呂の上に浮かべていた船が呑み込まれていくかのような、戦況の変化に対して悪い方向に巻き込まれる危険性が高まっていく。

それが分かっていながら、お姫様は状況の流れを変えられなかった。今の高速戦闘だけで精一杯なのだ。打破するためのコストを余計に払っている暇がない。

その時だった。

『……クウェンサーからベイビーマグナムへ……』

絞り出すような声が聞こえた。

機内に設置されている通信装置からだ。しかし、周波数は『正統王国』軍の軍用通信のものではない。ついさっきまで罵り合っていた『情報同盟』軍のラッシュと同じものだった。

（……やっぱりガチで向こうにのりこんでいるのかな……？）

そんな事を考えるお姫様の耳へ、続けてクウェンサーからの通信が聞こえてきた。

『こ、こっちは切羽詰まっている。いざって時のために一つだけお願いしても良いですか？』

「なに？」

『もしも俺がここでくたばったら、整備基地ベースゾーンの兵舎に婚約指輪があるから、故郷の幼馴染みのアンジェリナちゃんにそいつを返しておいてください……』

「……、」

ズドバアアア!!　と。

戦況の流れを無視して、ベイビーマグナムの主砲がいきなり火を噴いた。

放たれた下位安定式プラズマ砲を、ラッシュが急激な動きで回避する。

お姫様は無表情ながら、普段よりもわずかに瞳孔を大きくし、操縦用のレーザーをより強く受け入れつつ、極めて冷静な声でこう言った。

「……ごめんなさいクウェンサー。うちぬかれるならコイルガンと、レーザーと、かいあんていしきプラズマほう、どれが良いかってきくのを忘れちゃった」

『うぐえええ!?　き、緊急回避の慣性の力で、体の中でとんでもにゃい事に……!?　ばかっ、真面目に戦え!!　このままじゃその辺に散らばってるウォーターストライダーにあっさりやられた時と同じ目に遭うぞ!!』

「クウェンサー、ほりかえしてはいけないくろれきしをほりかえしてしまったね？　……しかもあっさりって言いやがった」

さらに勢いを増す砲撃と連続的な回避行動に、クウェンサーは無線越しの嗚咽で答えてくれているようだった。

「ところでクウェンサー、他に何かあるなら今の内にきいておくけど？」

『うっぷ、そ、そう？　じゃあお言葉に甘えて。実は「安全国」のレストランで働いている、ＡＩのように冷静な異邦人エッタちゃんともゴニョゴニョあったので、そっちについても兵舎のネックレスを渡ぐぶうえええええええっ!?』

すると今度は、ラッシュが本来の戦略上では不必要と思われる、左右への回避行動を何度も取った。さらに『情報同盟』軍のエリートが口を挟んでくる。

『……おほほ。私としましても、そのおさなじみやゴニョゴニョについては少々本気でといつめたくなってきましたわね』

『ぶっふ!?　や、やめ、機体を高速で小刻みに動か……!!』

理不尽な責め苦を受けているらしきクウェンサーだったが、そこでふと彼が改めて叫んだ。

『チャンス!!』

「？」

『クウェンサーからベイビーマグナムへ!!　聞こえるか!?　ラッシュのエリートは機体を戦況とは関係なく動かしている。悪状況から抜け出すには今しかない！　右へ回避しろ、右へ大きく回避!!』

「……、」

『ムッとしてないで!!　お願いだから言う事聞いてーっ!!』

お姫様はその指示に眉をひそめた。

彼女の戦術の組み立てには相応しくない。オブジェクトの事はオブジェクトを操る彼女が一番良く知っている。だからこそ、操縦に関しては素人同然の少年の言葉に、即座に従う事へためらいを覚えていたのだが、

『このままじゃ崖の壁面に追い詰められて、身動きの取れなくなった所を主砲で撃ち抜かれるだけだ!!　俺を信じろ、勝つための方法はある!!　だから右へ回避しろ！　大きく!!　そうし

ないと吹き飛ばされるぞ!!』

追い詰められつつあるのは事実だ。

そして、クウェンサーはラッシュのコックピットに侵入している可能性が高い。モニターの表示内容から、ラッシュの戦術を先読みしているのかもしれない。

「――――、」

覚悟を決める事にした。

お姫様は手首を埋め込むように握り締めていたレバーを大きく動かす。

ぐんっ!!　とベイビーマグナムが右へ大きく回避行動を取り、彼女の華奢な体へ強大な慣性の力が加わった。

しかし、

『おほほ、けんとうちがいもはなはだしいですが、さすがにきいててイラッときますわよ』

エリートの少女の口調に、ほんのわずかな冷気が帯びた。

ラッシュの機体が振り回され、慣性の力が生み出されているのだろう、クウェンサーらしき人物の苦痛の息が、無線越しに聞こえてくる。

連速ビーム式ガトリング砲の光弾が、ベイビーマグナムのボディをわずかに削った。続けざまに放たれる大量のビーム砲は、さらにお姫様の主砲の一つをグシャグシャに潰して宙に舞わせる。

構わずにクウェンサーは叫ぶ。

『……げうっ……!?　つ、次は左、小刻みにターン!!　主砲を下位安定式プラズマ砲へ変更し、ぐっ!?　ラッシュの前面に発射!!　そしたら……副砲のキラースコール!!　狙いは左手側に……あるウォーターストライダーの残骸!!　げほっ、そいつの懐の雪をレーザーで溶かして転がせば……障害物にできる!!』

『おはは、おほほほほほほ!!　何をねらっているかはしりませんが、どうせおそすぎますわ!!　仮にあなたがコックピット内のじょうほうから私のせんじゅつを伝えようとしても、あなたのそくどではおそすぎるのです!　「正統王国」ぐんのどろくさいエリートがこうどうをおこすときには、もうコマンドはおわっているのですよ!!』

敵の言う通りだった。

クウェンサーの指示は、かろうじて残っていた攻撃のチャンスをみすみす棒に振るようなものだ。一〇〇手先にチェックメイトするのが分かっている状況で、その猶予を半分以上縮めてしまうようなものだ。こうしている今も、ベイビーマグナムの装甲は薄く剝がされ、いくつもの砲が引き千切られて雪のアラスカを汚していた。いくつもの警告ウィンドウが表示され、整備基地ベースゾーンでモニタリングしているオペレーターから悲鳴のような声が飛んできている。

ゴグンッッッ!!　とベイビーマグナムの挙動が唐突に阻害された。

芯に近い所へ、敵の主砲が激突したのだ。ガトリング式に束ねられた砲身から数千数万のビーム砲が飛ぶ。分厚い装甲がオレンジに輝き、あっという間に掘削されていく。火花が散り、空気が爆発的に膨張し、ジェットエンジンのように『傷口』から烈風が吹き荒れた。その膨大な風がベイビーマグナムの高速移動を制動させたのだ。

『さあ、かくごはできましたか。おほほ』

決定的な位置にクイーンを置こうとする者の口調で、ラッシュの操縦士エリートは告げる。

『これで決定打です!!　自らの手元にあった、「しろはた」というカードを切らなかったことを、じごくのそこでこうかいしなさい!!　おほほほほほほほほほほほ!!』

お姫様は奥歯を噛んだ。

機械が自動的に脱出装置を作動させようとしているのを、止めようとするべきかどうか、その判断すら迷ってしまうほどだった。

『信じろ』

だが。

無線の向こうから、クウェンサーだけが諦めずにこう言った。

『これで勝てる』

ガキュンッ!!!!!!　という、分厚い歯車が割れるような音が炸裂した。

何が起きたか分からなかった。
無理もない。
原因は、ベイビーマグナムではない。自分の機体で起きた異常ではないのだから、お姫様がその理由を理解できなかったとしても、何の不思議もない。
となると、
「クウェンサー……？」
お姫様は、ポツリと呟いた。
そう。
一瞬前まで戦場の王者として君臨していたはずの、『情報同盟』軍のラッシュが、雪の中でピタリと動きを止めていたのだ。

14

突然起こった機体の停止。
クウェンサーは床の上を引きずり回されたが、ダメージを受けたのは彼だけではない。
その事実が生み出した莫大な慣性の力は、流石にラッシュのエリートの少女であっても、そ

の呼吸を一瞬止めざるを得なかった。

「がう……っ!?　なん、何が……!!」

咳き込みながら、しかし少女は苦痛よりも疑問を先に口から出した。

『情報同盟』軍の第二世代、ガトリング０３３は戦略ＡＩジュリエットの高速判断によって稼働していた。エリートの少女の役割はオブジェクトを一から一〇まで操縦する事ではなく、ジュリエットが一秒の間に数百数千と弾き出すコマンドの中から、バグやエラーとなるものを選んで消去する事……つまり、暴れ馬の手綱を握って、望む方向へと導いてやる事だった。

にも拘らず、ガトリング０３３は全く動かない。

戦略ＡＩが停止しているのではない。ジュリエットは今も猛烈な速度で計算を続けている。

ただし。

その莫大な高速計算の結果、無尽蔵に吐き出されるコマンドの全てが、ガトリング０３３の行動へ繋がらないのだ。

いかにエリートの少女が優れた御者であっても、馬の方が勝手に思い悩んでしまい、一歩も前へ進まないのであれば意味はない。馬の腹を踵で蹴っても鞭で叩いても全く反応しないのでは、御者の価値そのものが否定されてしまう。

戦略ＡＩの思考が行動へ伝達されるための、歯車が抜き取られたかのようだった。

ジュリエットがどれだけ高性能だろうが、エリートの少女がどれだけ優秀だろうが、ガトリ

ング033の行動に繋がらないのであれば、それはただの絶体絶命だ。

「ほ、ほほ。おほほ」

エリートの少女は、コックピットに座ったまま、ゆっくりと首を回した。

彼女は床に倒れたままのクウェンサーの顔を見ている。

取るに足らない相手と判断する事ができなくなってしまっている。

「一体、何を……私のガトリング033に何をしましたの……？」

クウェンサーは、即座に答えなかった。慣性の力に体を締め付けられていたダメージがあるのだろう。口をパクパクと動かして深呼吸を行う少年は、やがて薄く笑って、こう言った。

「……クイズ番組でもご所望なのか……？」

「お、ほほ。じょうきょうなら、分かっています」

少女の小さな肩が、震える。

困惑と、怒りによって。

「なぜかジュリエットが、せんきょうにひつようのない『がくしゅう』をかってに行っているということぐらい!!　それがさまざまなバグやエラー、コマンドゆうせんどの『きょうごう』などを次々とおこしていることぐらい!!　私のしゅどうの『しゅうせい』がおいつかないぐらい!!　その上でしつもんしているのです！　じょうきょうではなく、りゆうを!!　あなたは一体ジュリエットに何を行ったのですか!?」

「リスクの再計算をしているんだろうさ」
クウェンサーは体を起こす事もできないまま、ただ口だけを動かす。
口調には疲労と苦痛が滲んでいたが、弱々しさはなかった。
超大型兵器オブジェクトを操るエリートと、対等の敵対者として少年は君臨していた。
アンタには見えていない『戦況の変化』ってヤツをジュリエットが鋭敏に感じ取った結果、ラッシュをどう動かすべきか、その優先順位が大きく変わってしまったんだ」
「なん……」
「ただ残念だな。戦争の勝敗を左右するオブジェクトを操る戦略ＡＩには、白旗を揚げて安易に降参する機能なんてなかったんじゃないのか？　おかげで、明らかにチェックメイトな状況にも拘らず、ジュリエットは何とかして打開をしようと高速計算を続けてしまう。……ラッシュの身動きが止まったのは、超高速で空回りを続けるジュリエットが『長考』に入ってしまったからさ」
「そんな……そんなばかな!!」
エリートの少女は反射的に否定した。
「おほほ!!　私のガトリング０３３はあっとうてきにゆういでした!!　あのじょうきょうで、『正統王国』のどろくさい『だい１せだい』などにまけるはずがありません！　たとえ、むせんで、あなたから何かしらのアドバイスをうけていたとしても、チェックメイトになどなるは

ずが……!!」

「アドバイスをしていたのは、お姫様に対してじゃない」

クウェンサーがきっぱりと言うと、エリートの少女の動きが止まった。

構わずに、続けて少年はこう告げた。

「アンジェリナなんて名前の幼馴染みなんていてたまるか。エッタっていうのは何の愛称に使われるんだっけ？　あれはもっと別の、『正統王国』軍のデータベースに収められている報告書を指すための、分かりやすーい単語だよ」

「アンジェリナ……報告書……エッタ……ジュリエット……まさか!?」

「わざと敵軍とコンタクトを取ろうとしていたアンタなら、分かっていたはずだ。ベイビーマグナムとラッシュの間を繋いでいた通信は、他の兵士達の無線機にだって届いていたんだぞ」

15

少し前。

ベイビーマグナムとラッシュが高速で砲撃を行っていた頃、ウォーターストライダーの残骸が散らばる雪原を移動している影があった。

ヘイヴィアである。

彼は無線機から流れてくる、クウェンサーの声に耳を傾けていた。
一見すると、それはラッシュの通信機器を使って、お姫様に向けてアドバイスを送っているように聞こえたが、
（こっちは切羽詰まっている。確かエロ本チェック用の内緒話の合図だったな。異邦人ってのはラッシュの事だろ。ＡＩって、ワードが飛び出してきたけど、アンジェリナから察するに、こりゃストレートな意味で受け取って良いのかね……）
「ちぇー。クウェンサーの野郎、美形天才貴族ヘイヴィア様に頼りすぎだぜ」
ヘイヴィアは適当に呟く。
携帯端末の画面には、ウォーターストライダーの設計図が表示されていた。『正統王国』軍が、破壊した敵機のテクノロジーを自軍のオブジェクトに応用するために、残骸から解析したものだ。
（右だの左だのターンだの、色々面倒臭せえ指示だな）
本体だけで全長五〇メートルにもなるオブジェクトは、その設計図も膨大なものになる。ヘイヴィアはクウェンサーの指示通りに画面をスクロールさせていき、必要な機構にチェックをつけていく。
（で、後は地図を使って、そのパーツが戦場のどこに転がってるかを確認して……）
「到着とうちゃーくっと」

チェックをつけたところと同じ場所で、ヘイヴィアは立ち止まった。
ウォーターストライダーの残骸の中でも、折れ曲がって横たわる、主砲の下位安定式プラズマ砲だった。
「ったく、ぶっつけ本番でクウェンサーの野郎の思惑が理解できちまうってのも、気持ち悪りいよなあ。以心伝心なら女とお願いしたいぜ」
彼は背負っていたバッグを下ろす。
中に入っていたのは、大量のバッテリーだ。電動ドリルの予備として用意されていたものである。
元々、ヘイヴィアに与えられていた任務は、クウェンサーと一緒に崖に穴を空け、中に爆薬を仕込んで、効率的に破壊行為を行う事だった。メインとなるクウェンサーをサポートするため、ヘイヴィアも様々な『荷物』を背負わされていたのだ。
とはいえ、いくら何でも、こんなバッテリーでオブジェクトの主砲を起動させる事はできない。
ヘイヴィアとしても、そのつもりはない。
「……ま、赤外線の照準装置さえ動きゃあ『ごまかし』にはなるからな」
彼はくの字に折れて半ばから装甲の破れた主砲の側面を覗き込むと、中に手を突っ込んで、巨大な電磁石を取り出した。コイルを形作るために円筒状の容器に巻きつけてあるリード線を一度解くと、改めて巻き直し、別のコイルを新しく作り出していく。

「変圧器の基本はー、電磁誘導を利用する事ー」

適当に歌いながら、ロの字の鉄芯を使って大きいコイルと小さいコイルを用意したヘイヴィアは、丸太のように巨大な赤外線照準装置へと向かった。

並の砲撃ではびくともしない装甲に覆われてはいるが、完全に手出しができないのであれば整備もままならない。ヘイヴィアは工具を使って装甲板の蓋を開けると、中にあったケーブルと変圧器、バッテリーを繋げ、さらには『ハンドアックス』の電気信管に組み込まれていた無線起爆装置を分解し、即席の装置に組み込んでいく。

これで、無線機のスイッチ一つで、ウォーターストライダーの赤外線照準装置を自由に作動させられるようになった訳だ。

「確か、ウォーターストライダーの主砲は全部で八門あったっけ？　ま、二門も手を加えりゃあ十分だがな」

ヘイヴィアは携帯端末で『正統王国』軍のデータベース上にある、『破壊した敵機のテクノロジーを応用するための』設計図に目を通しながら、移動を再開する。

途中、『情報同盟』軍が巨大な残骸の多さに辟易して乗り捨てたのだろう、放置してあったオフロードカーを見つけて内部に乗り込みながら、

「ラッシュのＡＩにいらん計算をさせて混乱を促すためとはいえ、何だか俺ばっかり働き盛りだよなー」

ヘイヴィアの目的は単純明快だった。

雪原のあちこちに散らばっているウォータースライダーの照準装置だけでも機能を回復させ、手元の無線機によって適時操作できる状態にする事。

そして、ラッシュの戦略ＡＩに『ウォータースライダーの主砲はまだ動く状態で、常にその危険性を考慮しなければならない』と誤判断させる事。

後はヘイヴィアが八つの主砲の照準装置を『一定の法則』に従って高速でオンオフを繰り返し、戦略ＡＩへ『本来なら必要のない計算』や『本来なら必要のない間違った学習』を続けさせ、高度な計算能力をひたすらに空回りさせ続ける事。

情報ソースは手元にある。

アンジェリナ・リスト。

『正統王国』軍の中において、ＡＩ研究は非現実的だといわしめるようになった、ＡＩの問題点や失敗例などを無数に記述したレポートだ。

もちろん、これだけではラッシュの戦略ＡＩの弱点とはならないだろう。

最先端のＡＩ研究を行う『情報同盟』軍では、その対策もすでに講じられているだろうから。

言ってしまえば、コンピュータウィルスと、適切な対策を施されたコンピュータの関係。

だが、基礎さえあれば応用もできる。

ようは、アンジェリナ・リストをただ利用するのではなく、亜種のウィルスを作り出すよう

に、新しい問題点を自らの手で作り上げてしまえば良いのである。
そのための知識や技術は、すでに備わっていた。
普段はライフルを抱えて戦場を走り回っているからイメージしにくいかもしれないが、ヘイヴィアーウィンチェルの本来の役職はレーダー分析官。
戦場を盤とみなし、オブジェクトを駒とみなし、その動きから敵機の癖や弱点を探し出す専門家なのだから。

16

「お、ほほ……。アンジェリナ・リストを利用した、しこうの……からまわりですって……？」
クウェンサーの話を聞いていたエリートの少女は、ラッシュのコックピットに座ったまま、小さな体をわなわなと震わせていた。
ようやく床に倒れた状態からゆっくりと身を起こしたクウェンサーは、慣性の影響で鼻や耳から溢れた血を拭う。そうしながら、ガトリング033同様に動きを止めてしまったエリートの少女へ、さらに追撃するように言葉を放った。
「良いのか？　ジュリエットを止めるなら今しかないぞ」
「ほ、おほほ……。それは、一体……」

「こうしている今もラッシュは無駄な思考の空回りを続け、無数のバグやエラー、競合を次々と生み出している。もはやエリートの思考速度を使っても対処できないほどにな」

「……」

「AIは単なるプログラムじゃない。自分で学習する機能があるからこそ、メリットもデメリットも生じる。……このままじゃ、爆発的に問題点は増幅していくぞ。『間違った方向へ急速に学習していくAI』なんて、早い段階で強制終了するしかないだろうな。やらなきゃジュリエットのスクリプトが致命的に自壊するだけだ」

言いながら、しかしクウェンサーはニヤニヤと笑っていた。

強制終了の持つ意味を、正しく推測できるのだろう。

（くっ……。たしかに、このじょうきょうではジュリエットを『きょうせいしゅうりょう』するしかないでしょうが）

エリートの少女は、思わず唇を噛んだ。

（オブジェクト自体が巨大でふくざつなシステムであり、しかもてっきのうごきやせんきょうのへんかをせいかくにシミュレートするひつようのあるせんりゃくAIは、そうかんたんにオンオフできるものではありません……。1ど『きょうせいしゅうりょう』してしまえば、『さいきどう』にはじかんがかかる……!!）

そして、戦略AIを主軸とした運用を前提としている以上、そのAIを強制終了する事が、

どれほどのリスクを抱えているかは問うまでもない。

ジュリエットがこのまま空回りを続けようが、手動で強制終了してしまおうが、待っているのは圧倒的に不利な状況のみ。

いつの間にか、勝ちか負けかの選択から、負けの中から何を選ぶかの選択へとランクダウンさせられてしまっていた。

直接的な戦況の激変に震えるエリートの少女は、しかしそれとは別に、こうも思っていた。

「……」

この少年は普通じゃない。

確かに直接的に動いていたのは、この少年の相棒の方だろう。しかし、やはり、この状況で最初に突破口を考案し、戦況を動かすために適切な『きっかけ』を作り出したのは、コックピット内にいるこの少年なのだ。

仮にこういう作戦をとっさに思いついたとして、起死回生の一手を打とうとしたとして、そんな練習抜きの一発勝負で完璧にこなせるものか？　事前の打ち合わせも何もなく、暗喩を織り交ぜた誤解を招きやすい通信内容だけで、正確な意思の疎通などできるのか？

幅広い危機に対処するためには、それだけの基礎を積み重ねる必要がある。

そして最も恐ろしいのは、『正統王国』軍のこの少年は、こんなトラブルが起こる事など微塵も想像していなかったところにある。

専門の特化した訓練など受けていなかった。
しかし元々あった守備範囲の中に収まっていたため、即興で対処する事に成功した。
それは。
一体、どれほどの懐の広さがあれば、成し遂げられるのだろうか。
「どうするんだ？」
クウェンサーが、最後通牒を放った。
「ジュリエットを自壊させるか、強制終了させるか。自分で終わり方を選べよ。……今はおそらく協力してくれた味方の不良軍人が状況を説明してお姫様を押さえてくれていると思うが、それは何の確約もない。上官がテクノロジーの入手より破壊を優先して命令一つ出したら、即座に主砲で撃ち抜かれるぞ」
「ほ」
そして。
エリートの少女は、小さな肩を動かした。
笑っているのだ。
「ほ、ほほ。おほほ。おほほほほほほほほほ!!　みとめましょう。ええ、みとめましょうとも!!　これでジュリエットはてづまりです。このままこうそくけいさんをさせても『からまわり』をつづけるだけでしょうし、私の手で『きょうせいしゅうりょう』させるしかないでしょ

う!!」

ですが、とエリートの少女は唇を動かした。

「それでおわりとはおもわないことです」

バチン!!　と耳に障る甲高い音がコックピット内に響き渡った。

エリートの少女が、無数のキーボードの中にあるキーの一つを勢い良く叩いた音だった。

直後、全てのモニターと照明から光が消える。

一瞬の闇。

ありとあらゆるシステムが機能を停止させたその証明。

だが。

宣言通り、そこでラッシュは停止しない。

ジジジザザガガ!!　と、複数のノイズの集合体のような雑音がクウェンサーの耳を叩いた。同時に、たった今光を失ったはずの照明やモニターへ再び光が灯る。ガッシャ!!　という機械音と共に、エリートの少女を取り囲んでいた無数のキーボードの角度が、再調整されていく。

より人間に扱いやすいように。

より高速で一〇本の指を動かしやすいように。

「フルキータッチ、かいほう」

宣言があった。

エリートの少女の顔には、笑顔があった。これまでの、余裕のある特権階級の表情ではない。互いに剣を構え、戦場で宿命の敵と相対した時に浮かべる、極めて野蛮な笑みだった。

「おほほ!!　ガトリング033はジュリエットをしゅじくにし、私が『しゅうせい』を行う形でそうじゅうしていますが、別に、そうでなければあやつれないなどと言ったおぼえはございません!!　その気になれば、私1人の手でも十分にあやつれるのですよ!!」

一〇〇門の砲、それ以上の数のセンサーやレーダーからの情報、キャタピラとエアクッションを組み合わせた複雑な推進装置、莫大な出力を生み出す動力炉。

それら全てを、少女は一〇本の指で制御すると宣言しているのだ。

とても、普通の人間の思考ではなかった。

一般的な戦車でさえ四～五人で操縦するのがセオリーであるはずなのに、徹底的に心身に改良を施されたエリートには、そんなセオリーさえも通じない。

普通の人間なら意識もしない、コンピュータの裏側で行われている処理。それを全て、アルファベットや数値を一つ一つ手打ちで高速入力していくだけで、コンピュータの処理能力を上回ると言っているのだ。

そして。

戦闘が続行できるのであれば、ベイビーマグナムとラッシュ、どちらが優勢であるかは火を

見るより明らかだ。

ベイビーマグナムは確実に追い詰められている。

このまま続けば、爆破させられるのはお姫様の方だ。

「おほほ。たしかに、ジュリエットのじゃくてんをついた、そのしゅわんはみとめてさしあげてもよろしいですわ」

エリートの少女は、一〇本の指をキーボードの上でピタリと止める。

まるで、敵の後頭部に銃口を押し付けるかのような、緊張を孕む静止。

「ですが、だからこそ。ますますあなたを手に入れたくなってしまいましたわ!!　これほどの『きてん』、これほどの『おうようりょく』。これさえ私のぶたいのものになれば……!!　まったく、ほほ、まったく、おほほほほほほほほほほほ!!　あなたという人は、どうして、どうしてそこまで私の心に火をつけるのでしょうね、おほほ!!」

だが、

「やめておけ」

クウェンサーはそう呟いた。

彼は、自分の耳から垂れた血を指で拭って、コックピットの床へとゆっくりと這わせた。

「悪あがきだ。そんなやり方じゃ、ウチのお姫様にゃ勝てないよ」

「おほほ、何をこんきょに――」

言いかけたエリートの少女の口が、そこでピタリと止まった。
クウェンサーの指は、床に赤い文字でこう書いていたのだ。
爆弾が仕掛けられている。
エリートの少女は、ギョッとした顔でクウェンサーを見た。彼は続けて、床に血文字でこう書いた。
通信を切れ。裏でモニタリングしているものも含めて全部。
「な、にを……？」
バン!!　とクウェンサーは掌で壁を叩いた。
声に出すなと。
それだけはするなと。
このチャンスを活かせなければ確実に助からないと、目線だけで訴える。
エリートの少女の戸惑いなどに付き合っている暇はない。
「……」
数秒、少女の細い指先がキーボード上をさまよった。やがて彼女はスイッチを切り替える。
その指先の動きを確認してから、クウェンサーはのろのろとした挙動で、ようやく体を起こし

た。

「……そこだ。コックピットの座席の裏側の陰。床に直接、プラスチック爆弾が仕掛けてある。おそらく『非常用』ってヤツだろう。エリートには聞かされていなかったのか？」

少女はしばらく座席から動かなかった。そして、何故か首を横に振った。何かを否定してはしがっているようだった。だがクウェンサーは応じない。沈黙があった。エリートの少女は震える手でシートベルトを外し、ゆっくりと立ち上がる。彼女は恐る恐る座席の裏に回って覗き込んだ。

そこで、エリートの少女は眩暈のように体をよろめかせた。

「なぜ？」

ポツリと。

小さな呟きだけが、機内に響く。

「なぜ、こんなものをせっちするひつようがあるのです。おほほ、オブジェクトやエリートを失うことは、わたしたちのぶたいにとっては死もどうぜんであるはずなのに」

「オブジェクトは核でも破壊できない怪物兵器だ。そして、エリート一人の意思で稼働する。規律を重んじる軍じゃあ、エリートの暴走の危険性を常に考えているんじゃないのか。万が一、オブジェクトが自分の基地に向けて主砲を向けたら、誰にも止める事はできないんだからな」

クウェンサーは壁に背中を預け、ゆっくりと息を吸い込みながら言う。

「特にラッシュは、戦略ＡＩによって制御される機体だ。プログラムにバグがあったり、エリートの処理能力が追い着かなくなれば、それだけで暴走の危険性は高まる。だから、そういった時のために『内側から緊急停止』させる裏道を作っておいた。おそらくコックピットの他にも、ジュリエットのメインコンピュータ内にも同じ爆弾が仕掛けられているはずだ」

「……、」

「でも、一番問題なのはそこじゃない」

彼が何を言おうとしているのか、エリートの少女も理解しているだろう。

クウェンサーは自分の血で濡れた人差し指で、爆弾の設置された場所を指差し、

「起爆装置のカウンターが稼働し始めてしまっているって事だ。戦略ＡＩの重大なエラーと連動していたのかもしれないな」

「ありえません！　ほ、おほほ。わっ、私は、ガトリング０３３のエリートです！　こんなかんたんにきりすてられるはずが……!!」

「エリートは重要だ。でもそれもまた、軍の都合によるだろ」

クウェンサーは吐き捨てるように答える。

「俺はエリートが切り捨てられる瞬間を見た事があるぞ。このアラスカ方面でウォーターストライダーにやられた時、お姫様は部隊が撤退するための囮にされた。エリートの価値なんて、万全で動くオブジェクトとワンセットじゃないのか。……まして、お前の場合は『ジュリエッ

ト』とパブリック用の精密3Dモデルさえあれば、エリートが死亡した事を国民に伝える必要すらないかもしれないんだ。バックアップに心当たりはないか？　ネットワーク上の記憶領域に保存されているとか」

「くっ!!」

エリートの少女はもう一度コックピットの椅子へ飛び込み、通信装置のスイッチへ手を伸ばそうとする。

しかしクウェンサーはこう言った。

「やめておけよ。向こうは爆弾の存在を知らせていなかったんだろ。だとしたら、連中は爆弾の存在を問い質そうとした途端に、無線で遠隔起爆させかねないぞ。それこそ、『エリートが裏切るかもしれない可能性』を与えてしまったと判断するんだろうから」

エリートの少女の指が、寸前のところでピタリと止まる。

身動きの取れない少女に、クウェンサーはさらに続ける。

「何でコックピットやメインコンピュータに、ピンポイントで爆弾を仕掛けてあると思う？　できるだけ被害を最小に留めて、内装だけを交換して再利用するように計画されているからだ。基本的にガトリング033は専用に調整されたアンタにしか操れない。でも、パーツのフレームだけを流用して、別のオブジェクトを建造し直してしまえば、短時間で別のエリートが操る機体へチェンジさせる事もできる。いざとなれば暴走したエリートを切り捨てて、最低限のコ

ストで次の計画へシフトできるようになっていたんだ」

「私は、私はうらぎりもぼうそうもしていません!!　ほ、ほほ。せんりゃくAIジュリエットの『ごがくしゅう』は、プログラムてきなぜいじゃくせいであって……!!」

でも、ベースゾーンの指揮官は状況からそう判断した。勝てるはずの場面で急に動きを止めたラッシュを見てな。『情報同盟』軍にとって重要なのは、ラッシュでもエリートでもない。戦略AI『ジュリエット』だろ」

「……ッ!!」

ギリギリ、とエリートの少女は拳を握り締めた。

ゆらりと座席から立つと、壁に背中を預けて座り込んでいるクウェンサーの顔へ、小さな拳を叩き込んだ。一発二発ではない。続けて、何度も、何度も、何度も、何度も、力を込めて思い切り彼の顔を殴り続ける。

「あなたがっ！　あなたのせいでっ!!　私は、何も、わるくないのに……!!」

鈍い音が続いた。

少女の肩は震えていた。

スタミナが切れたのではない。

屈辱と、怒りと……隠しようのない恐怖が、彼女の体を揺さぶっていた。

「どうするんだ」

クウェンサーは切れた唇を動かし、エリートの少女に尋ねた。

「このままじゃ、あと一〇分でプラスチック爆弾が起爆する。量はそうでもないけど、密閉されたコックピットの中で爆風が広がれば、まあ人間は助からないだろう。状況は確認できたか？　じゃあどうする？」

「――――、」

エリートの少女は、振り上げた拳をピタリと止めた。

ぶるぶるという震えが最大に達した。分厚い壁に覆われたコックピットは、彼女にとってのゆりかごだったのだろう。そこに生命の危機が発生した事で、生まれて初めて閉所恐怖症のような怯えを感じたのかもしれない。

浅い呼吸を繰り返し、身動きの取れなくなった少女を見て、クウェンサーはため息をついた。

「脱出装置は？」

「？」

「脱出装置の制御はどの辺で行っているんだ。俺はオブジェクトの設計を学ぶために戦場へやってきた派遣留学の学生だからな。俺が調べてやる。爆弾と連動しているなら、無闇に装置を作動させるのはまずい。装置に繋がっているコードを処理してから動かさないとな」

ボコボコに顔を腫らした状態で、クウェンサーは壁に手をつけて、ゆっくりと起き上がった。

エリートの少女は、わずかに逡巡していたようだったが、

「だ、だっしゅつそうちは、いすの中にくみこまれているはずです。おほほ」

「そうか。ウチのお姫様と同じだな」

呟きながら、クウェンサーは軍服のポケットから小型の工具類を取り出した。コックピットの椅子のネジは特殊な形で、対応した工具は『正統王国』軍のツールにはなかった。が、彼は小さなペンチを取り出すと、ネジの頭を挟み、直接回してしまう。

四つのネジを外すと、小さな板が取れた。

内部に複数のケーブルと、ベルトを締めるのに使う圧縮空気のコンプレッサーが見えた。彼は中身を眺めて、

「……あるな。やっぱり連動するように細工されている。でも複雑な方式でコードが繋がっている訳じゃない。映画に出てくる、パズルみたいな時限爆弾って訳でもなさそうだ。これならすぐに終わる」

言うと、クウェンサーはエリートの少女の肩を摑み、コックピットの椅子へと座らせた。

「もう一度ベルトを着けろ。コードを切ったら射出する。それで何とかなるだろ。ここはまだ『ルールのある戦場』だからな。手順さえ踏んでいれば、脱出装置が空中で撃ち抜かれたり、雪原で追い掛け回されたりはしないだろ」

「な、なぜ……？」

「これは戦争だ。だから親切心なんてない」

クウェンサーは椅子の後ろに回り、板を外した所から内部へ腕を差し込みながら答える。

「さっきも言ったろ。俺はオブジェクトの設計を学ぶために、派遣留学でやってきた学生だ。究極的に言えば、戦争の勝敗なんてどうでも良い。……自分達の命さえ脅かされなければな。で、その学生からすると、操縦士エリートを追い出して、ほぼ無傷で敵国のオブジェクトを鹵獲できるなんてチャンスは、一攫千金に繋がる鍵だ。『情報同盟』軍の第二世代なんて、普通に考えたら絶対に調べられないからな」

ベルトで体を固定されたまま、パチパチと瞬きするエリートの少女。

そんな彼女に、クウェンサーはこう言った。

「……これは一度だけだ。次に会ったら敵同士。待っているのは殺し合い。お姫様には内緒にしてくれよ。敵国のエリートを見逃したなんて話になったら、軍法裁判にかけられるかもしれないんだから。普通なら国家間の取引に使ったりするみたいだし」

パチン、という音が聞こえた。

クウェンサーが脱出装置と爆弾を繋ぐコードを切断した音だろう。

これで脱出装置は使える。

椅子の前へ回った彼の腕が、脱出装置用の赤く色分けされたキーへ向かう。

そこでエリートの少女は気づいた。

「ちょ、ちょっとまちなさい！　だっしゅつそうちは、私1人しかしゃしゅつしません。それ

にプラスチックばくだんのきばくそうち自体はまだうごいているのでしょう!?　このままでは、あなたはとりのこされて――」

「そうだよ」

クウェンサーは、あっさりと言った。

「後はこっちでやる。……だから言っただろう、こいつは一獲千金への鍵だって。命を賭ける程度の価値はあるんだよ。少なくとも、軍の上層部の連中が思い描く利権のために殺し合いをするよりかはな。さっさとエリートを射出して戦闘不能状態を示さないと、事情を知らないお姫様がこいつをブチ抜いてしまう。そうなったら、学術的価値もクソもなくなるんでね」

「まっ――」

「生き残れよ。そのためのお膳立てはしてやるから」

エリートの少女がそれ以上拘泥する前に、クウェンサーは脱出装置の赤いキーを思い切り叩いた。

トンネル状の通路を遮っていた数十の隔壁が一気に開く。ルートの確保を確認すると、エリートの少女を乗せた座席が勢い良く射出されていった。

トンネルを出るまで、一〇秒もないだろう。オブジェクトの外装まで到達した所で、さらにエリート自身が座席から飛ばされ、パラシュートが作動するはずだ。

「……、」

これで戦争は終わりだ。

一人取り残されたクウエンサーは、よろよろと後ろへ下がり、そこで壁にぶつかった。

背中を預けたまま、ずるずると座り込む。

先ほどまで座席のあった床にポツンと残されている、エリートを殺すために設置されたプラスチック爆弾の存在感が、加速度的に膨らんでいく。

17

『情報同盟』軍のガトリング033の戦略AIジュリエットはプログラムを停止させ、完全手動操縦技術を会得しているエリートの少女も、機体の外へ脱出した。

事実上ガトリング033は動けなくなったため、アラスカでの戦争も終結した。当然ながら、『正統王国』軍の勝利である。

「……、」

パラシュートで雪の上に落下し、背を向けて走るエリートの少女に、『正統王国』軍のオブジェクトからの追撃は来なかった。ここは規律と秩序によって支配されたクリーンな戦場であるとでも語るつもりか。屈辱に唇を噛むエリートの少女だが、かといってここから逆転する事はできない。撤退を許されたのなら、一刻も早く立ち去るのが敗者の務めである。

冷たい雪の上を、何キロも何キロも歩き続けた。
最新技術の特殊スーツに包まれた体も、徐々にぬくもりを失っていった。
敗北の味を噛み締めていたエリートの少女は、そこで雪が押し潰されていく音を聞いた。だが人の足音よりものっぺりとしていた。それは『情報同盟』軍のオフロード車両だった。エンジン音は敵を招くため、『情報同盟』軍ではハイブリッド車を採用しているケースが多い。モーターの方が、圧倒的に音を小さくできるからだ。馬力や走行距離の関係で、完全な電気自動車にできないのがネックらしい。今のところは、勾配の激しい地形ではガソリンエンジンを、敵と接触する可能性が高い場合はモーターを、と使い分けているようだった。
エリートの少女の前で停車したオフロード車両のドアが開き、そこから整備基地ベースゾーンの指揮官が降りてきた。レンディ＝ファロリート。褐色の肌に銀の髪を持つ、二〇歳前後の女性だった。近年流行りの若輩将校というヤツである。
こんな前線に指揮官が直接やってきたのは、エリートに対する敬意の表れか。あるいは、戦争が終結し指揮官が『本来の現場』に留まる必要もなくなったためか。
「良かった……。とりあえず、あなたは生き残ったようね」
レンディはそんな事を言って、頬を緩めた。
エリートの少女は黙って、自分の指揮官へ目をやる。その硬い表情を、レンディは敗北のショックによるものだと判断したようだった。

「ひとまずは撤退ね。オブジェクトの残骸からテクノロジーを解析しようとしていた諜報部には恨まれるでしょう。彼らのデータ送信施設は『正統王国』軍に破壊される運命だろうし。でも、このまま肉弾戦の泥沼を行うほどの義理もない。ここはデジタルに対処しましょう。すでに残骸からある程度の情報は手に入れていて、一定の成果は得た後だったようだし、上もそれほどこだわっている様子もない。私達が『温存されるべきカード』と判断されたのは幸運だったわね」

背の低いエリートの少女と目線を合わせるため、レンディは屈むような格好になる。

親や先生のような態度。

だが、エリートの少女は忘れない。

コックピットの中に爆弾が設置されていた事を。そして、事態が劣勢になった途端に起爆の命令が決定された事を。

「ガトリング033を失ったのは痛いけど、『情報同盟』軍は操縦体系や戦略AIに重きを置くから大丈夫。ジュリエットはバックアップがあるし、私達はまだやれる。オブジェクトを一から建造すると三~四年はかかるけど、現在建造中のオブジェクトに横槍を入れて、私達好みにレイアウトを変更すれば、そこまで時間を掛けなくても復帰できる」

「……」

「最大の問題は『正統王国』軍にガトリング033を回収され、戦略AI『ジュリエット』に

関するデータやテクノロジーを分析されてしまう恐れがある事だけど……そっちについても心配しなくて良いわ。ガトリング033の主要回路や記憶装置には情報隠蔽用の電熱線がある。回路を直接焼けば重要なテクノロジーは全て抹消できるから――」

パアン!!　という甲高い音が発せられた。

レンディ＝ファロリートの頬からだ。

掌で指揮官の顔を引っ叩いたエリートの少女は、硬い声でこう言った。

「次、あのようなことをしたら、私はあなたたちのベースゾーンへしゅほうを向けますわよ」

平手打ちを喰らったレンディの方は、訳が分からないという顔でエリートの少女を見た。そこまでとぼけるのなら構わない。エリートの少女は自分の頬を片手で押さえるレンディを無視して、オフロード車両の後部座席へと向かった。

（……あの少年）

異様な雰囲気に押し黙る運転手も気にせず、エリートの少女は思う。

（……うさんくさいたてまえをならべるプロのぐんじんよりも、ああいったエンジニアをふところがたなにしておいた方が、安全かもしれませんわね。……おほほ、これではより1そう欲しくなってしまいますわ）

18

一方、クウェンサーはラッシュのコックピットの中で、自分の無線機を耳に当てていた。今までは分厚い隔壁に遮られて電波は送受信できない状況にあったが、脱出装置が作動した事によって、トンネル状の通路はぽっかりと口を開けていた。そのため、無線機を使用できるようになったのだ。

通信相手は爆乳の上官だ。

「戦闘終了。『情報同盟』軍の第二世代をほぼ無傷で手に入れました。情報処理専門の人員……電子シミュレート部門の人達をここに寄越してください。当然、『情報同盟』フォーマットに詳しいスタッフですからね。ジュリエットとかいう戦略ＡＩはコマンドの競合で動きを止めていますが、長時間放っておくとオートスキャンやセルフ再起動なんかを始めて挙動を取り戻したり、情報保持のために動力炉を起爆したりするかもしれません」

『了解、クウェンサー。ウォータースライダーに続いて二機目か。ここは「正統王国」軍にとって宝の山だな』

「こいつを分解する時は声を掛けてくださいよ。上層部とやらに掛け合って、優先的に回していただけるとありがたいです」

『んー、保証はできないなぁ。敵国の最新テクノロジーの解析作業は国家プロジェクトになるかもしれないし。一学生に参加させて、重要な精密回路を傷つけて解析不能にしてしまった

……なんて事は、上も回避したいだろう』

そう甘くはないか……とクウェンサーは息を吐いた。

とはいえ、ラッシュが解析されればその報告書は軍のデータベースにアップロードされるだろう。そこからでも学ぶべき事は多いはずだ。設計士への道は一つではないのだから、ここは拘泥しないで割り切るべきかもしれない。

フローレイティアとの通信を切ると、クウェンサーはゲホゲホと咳き込んだ。今回は強い慣性の力のせいで、体の内側を傷つけられた。耳や鼻から血が出るレベルである。整備基地ベースゾーンに帰ったら、一度きちんとした検査を受けた方が良いかもしれない。

そんな事を考えていたクウェンサーは、無線機に新たな通信が入った事に気づく。

ヘイヴィアからのものだった。

『よう、ナイト様。向こうのＡＩを誤学習させて動きを止める作戦は成功したみてえだな。俺様に感謝しやがれ。ひょっとすると、来年の新兵教練マニュアルには新しい戦術が書き加えられるかもしれねえぞ』

『『情報同盟』軍だって二度も同じミスは繰り返さないよ。次に会う時までに、必ず対策を講じてくる。一回使った手は古い手だ。常にアップデートし続ける戦場じゃ、後生大事に抱えた情報なんてあっという間に価値が死ぬ』

『おまけに、コックピットにはエリートの暴走阻止のためにプラスチック爆弾まで仕掛けてあ

ったって？』

「おかげでエリートはあっさり脱出したけどね。どうやらフルキータッチでもラッシュは動かせたようだし、仲間内で揉めていなかったら戦闘はさらに長引いていたんじゃないか」

ふうん、とヘイヴィアは気のない声を出した。

そして、

『その爆弾、「ハンドアックス」じゃねえの？』

クウェンサーは、わずかに黙った。

彼はチラリと視線を投げる。

プラスチック爆弾は確かに設置されていた。その名は『ハンドアックス』。グラム単位の値段はプラチナよりも高い、『正統王国』軍で開発されている爆弾だった。当然ながら、『情報同盟』では製造されている訳がない。

起爆装置にしても、ペン状の無線付き信管を分解して液晶を取り出し、有線起爆用のコードと組み合わせて、それっぽくデコレーションを施しただけだ。

やがて、クウェンサーは無線機に向かってこう言った。

「……これは戦争だ。親切心なんてないよ」

『ちょいと残酷なやり口ではあるがな。だが、あくまでも「ちょいと」のレベルだ。徹底しちゃいねえ。フルキータッチの手動操縦を阻止するためなら、エリートを殺すって方法もあったはずだぜ。エリートが生きている以上、後継機に乗って戦場へ帰ってくる可能性も否定はできない。あの時点ではまだ「情報同盟」軍から「白旗」は揚がっていなかったし、やろうと思えばできたんじゃねえのか？』

「それを言うかね」

クウェンサーはため息をついて、

「何機ものオブジェクトを爆破している身で偉そうな事は言えないけどさ、ここはアラスカだよ。何があったか忘れたとは言わせないぞ」

『くくっ、まあそりゃそうだわな。人間ってのはいけないね、やられる時は死ぬほど文句を垂れてるくせに、やる側に回るとその事を忘れそうになっちまう』

「頼むから、お姫様やフローレイティアさんには黙っていてくれよ」

『そんな事のために軍の規律を乱したのかって怒られるからか？　お姫様も、見物静かだけど、オブジェクト同士の勝敗に関してはやたらと過敏になる悪癖があるしな』

「違う。痛いところを突かれて不貞腐れそうだからだよ。腹いせに雪原二〇キロダッシュとか命じられても困るだろ」

『くっく。その前にテメェはお姫様の機嫌について悩んだ方が良いんじゃねえのか？　ラッシ

ユのエリートとよろしくやってた時にも、色々と爆弾発言があったようじゃねえの。幼馴染みのアンジェリナちゃんだのレストランのエッタちゃんだのってのは誰なんだって大荒れしているってよ』

『は？　あれはアンジェリナ・リストを指してただけだってば!!　ヘイヴィアは俺の指示通りに動いていたんだから分かってるはずだよね!?』

『えー？　別に誤解を解かなきゃいけねえって理由は、俺の側にはねえもんなあ？』

というかそもそも何でお姫様に弁解しなきゃいけない雰囲気なの？　と悩むクウェンサーなど気に留めず、ヘイヴィアは笑いながら一方的に通信を切った。

誰の声も聞こえなくなったラッシュのコックピットの中で、クウェンサーは天井を見上げてこう思う。

次に会ったら敵同士。

待っているのは殺し合い。

第二章　札束の散らばる炭鉱
＞＞カムチャッカ半島夜間奇襲電撃戦

1

CS☆ミリタリーチャンネルっ!!

「歌って殺せる戦場アイドルレポーターのモニカです！　さて今回は『正統王国』軍の第二七機動整備大隊へやってきました!!　テーマはこちらっ！　軍の世界で活躍する女性達！　です!!　王と騎士の歴史から続く軍隊は男性重視と思われる時代もあったようですが、そんなものは今は昔!!　最新の戦場、その第一線で頑張る女性指揮官やエリートなど、彼女達の素顔に迫ってみたいと思いますっ!!」

夜の整備基地ベースゾーンにきゃぴきゃぴとした少女の声が響き渡る。

なになに何だよあれ……？　と兵舎のトレーラーから顔を出したヘイヴィアは、強力なライトで照らされ、複数のカメラに囲まれた芸能人を発見する。

「……CS放送？　何が戦場レポーターだよクソッたれ。完全に棒読みのグラビアアイドルじ

やねえか」

「おやヘイヴィア。お前はああいうのに接近されるのに比例して鼻息が荒くなるタイプじゃなかったの？」

この寒いのに散歩でもしていたのだろうか、寄って来たフローレイティアが小声で話しかけてきた。

ヘイヴィアは肩をすくめて、

「お守りについては例外です。良いんですかあれ？　せっかくの夜間作戦なのにライトばしばし光らせていますよ」

「あくまで基地の中だけだ。侵攻作戦を生中継させる訳ではないからね。実際の戦場もここからは遠い。それに、軍の意向というヤツでもある」

「は？」

「昔も今も、メディアの力は偉大って事。番組で面白おかしく取り上げてくれれば、新兵募集の際にはプラスに働くし、国民の血税の使い道とやらでも激怒されなくて済むかもしれない。……ま、グラビアアイドルの笑顔にふらふらと吸い寄せられてきたルーキー達が、その後どれだけしごかれるかは知らないがね」

「アクション映画の撮影に動員されるよりかはマシってトコですか」

そんなもん、とフローレイティアは細長い煙管を咥えながら、

「かくいう私も、今からインタビューだ」

「軍と国家への貢献、お疲れ様っすー……」

「本当よね。番組のテーマ聞いたかヘイヴィア？　軍の世界で活躍する女性達だとよ。当たり前すぎて今さら取り上げる理由がさっぱり理解できん」

「そうだ、俺、有能な女性将校と比較対象されるダメ当社比にされるの嫌なんで、ここらで失礼させてもらいますね」

男だろうが女だろうが、使えるヤツは使えるし使えんヤツは使えんだけどなあ、と首をコキコキ鳴らしながら呟いていたフローレイティアは、そこで思い出したようにこう言った。

「そうそうヘイヴィア。あと二時間経ったらカフェインの支給制限を解除する。時間になったら兵舎の連中を叩き起こして喉に死ぬほど熱いコーヒーを流し込んでやれ」

「……半端な時間を指定されると余計に眠れなくなりますよ」

「無理にでも寝ておけ。五分でも一〇秒でも良い。今回の作戦は夜通しよ」

細長い煙管を指で摘み、その先端で遠くの闇を指し示しながら、

「夜間奇襲電撃戦。寝ぼけ眼で任せられる作戦じゃないからね」

2

一方、クウェンサーはベイビーマグナムの整備場にいた。

整備兵のばあさんの下働きをしながらオブジェクトの勉強をしていたクウェンサーは、整備場の外から聞こえてくる物音に眉をひそめる。

「……なんか表が騒がしいな」

「テレビばんぐみのさつえいだって、フローレイティアは言ってたよ」

そんな言葉を返したのは、エリートのお姫様だ。

夜間作戦に備えて、基地の警備を除いて、兵士達の半数は早めの睡眠を取っていた。が、作戦開始時刻に合わせるため、婆さん達、整備兵はそういった休みを返上して機体の整備作業に追われている。まあ実際に作戦が始まってオブジェクトが出撃してしまえば、整備兵は現場の歩兵ほど神経を張り詰める必要もなくなるので、睡眠時間を調整する必要はないのだろう。

ところが……、

「お姫様は夜間作戦の一番太い柱だろ。眠らないで大丈夫なのか？」

「大丈夫。それに、コックピットのざせきにすわっている方がおちつく」

そんなもんかね、と呟くクウェンサー。

そもそも、この操縦士がどんな格好で眠っているのか、クウェンサーには想像もつかなかった。今の特殊スーツを着たまま寝転がっている絵しか思い浮かばない。

「……クウェンサーの方はねないで平気なの？」

「俺、なんだかんだで身分は『学生』じゃん。正規の軍人じゃなくて。なんか、今回のデリケートな電撃戦じゃあ最前線には送られないみたいなんだよね。ま、それでも後方支援として戦場に放り込まれるのは変わらないんだろうけど。そんなに気を配る必要はないんじゃないの」

そこで、整備兵のばあさんが手すりをスパナでガンガン叩きながら、

「やれやれ。最前線だろうが『安全国』だろうが、鉛弾が一発でも当たれば人は死ぬもんじゃ。戦争やっている以上、簡単に気を抜くのはやめるべきじゃないのかね」

「それを言ったらオナニーだって心臓止まる危険がありますよ。ごく稀にね。考え過ぎたって仕方がない事もあるんじゃないですか」

おなに？　と首を傾げているお姫様の方を見ないで、携帯端末上の図面に目をやりながら、隔壁開閉用のモーターの調子を確かめるクウェンサー。彼がいるのはオブジェクトの上面に近い場所だが、それより下の層では溶接用の眩い火花がいくつも散っていた。

「核攻撃を防ぐような怪物兵器って言っても、装甲は普通の溶接やボルトで留めるものなんですねえ」

「強度を保つ事も重要じゃが、戦場で手早くメンテナンスを済ませられる能力も同じぐらい必要なものじゃからな。カーレースのピットインなんかも、オブジェクト設計の実験場として利用されているようだし。……小僧も、前のアラスカ方面で思い知らされたじゃろう？」

言うだけ言うと、整備兵の婆さんはローカルなネットワークを使ってクウェンサーの携帯端末にメールを送る。着信表示が整備用の図面を上から覆い隠した。

顔を上げるクウェンサーに、婆さんは首を横に振って自分の作業へと戻って行った。詳しい事はメールを読め、という事なのだろう。

携帯端末を操作すると、そこには溶接用ガスを中心とした、いくつかの資材の名前と数が羅列されていた。足りないから取りに行け、と言いたいらしい。

「（……ちぇー。設計に関係のない雑用を押し付けられても困るんだけどなあ）」

「何か言ったか小僧？」

「メールの意味ないですよね!?　直接伝えられる距離じゃん!!」

なおもブツブツ言いながら作業を切り上げて、足場に取り付けられた階段へ向かうクウェンサー。途中、何やらお姫様が肩をわなわなさせながら、

「……クウェンサー。ばあさんともメアドこうかんしていたの？」

「何だよ、その見境のないケモノを見るような目は」

アイしているのは君だけだぜベイベー、と付け加えると、お姫様はぷいっと顔を逸らしてコックピットの方へ向かってしまった。どうやらフラれたらしい。今日はダーツを投げたら的を逸れ、店の主人が大切にしているサボテンに突き刺さったぐらいにはツイていないようだ。

何度も何度もグネグネと曲がる階段を下って地上へ向かう。オブジェクトの全高は五〇メー

トルを超えるため上り下りも馬鹿にはできないのだが、派遣留学の下っ端学生クウェンサーにはエレベーターを使う権限など存在しないのだった。くたばれ体育会系。

整備場の中も結構冷え込んでいたが、ドアを開けると突き刺すような冷気が真正面から襲いかかってきた。

思わず整備場の中に留まろうとするクウェンサーだが、建造物の中から『テメエさっさと出て行ってドア閉めろよ!!　こっちも寒みいんだよ!!』という複数の殺意ある視線を投げつけられ、泣く泣く厳寒の地へと飛び出していく。

彼は携帯端末の注文リストを確認しながら、

（……もー、一往復で運べる量じゃないじゃんよ。俺もヘイヴィアみたいに戦場免許取ろうかな。そしたら軍用トラクター使えるだろうし）

問題はそんな暇があったら設計の勉強をしろよという点か。

（あの人使いの荒いババアどもの事だ。免許を取ったら取ったで、雑用の量が倍増するだけな気もするしな。安易な選択は危険という事か）

これなら台車よりもソリの方が楽そうだ、などと考えながら、クウェンサーは深い雪をザクザクと踏んで倉庫の方へ向かう。そちらも大型車両の上に載せてあるんだから、車の方からこっちに近づいてきてくださいと切に願う。

その時だった。

「貴君」

いきなり仰々しい言い方で呼び止められた。

？　と振り返るクウェンサーは、こちらに近づいてくる軍服の女性を発見する。歳は二〇代前半。見慣れない女性だった。艶のある茶色い髪に、雪のように白い肌がコントラストを作っている。この大隊の所属人数は八〇〇人を超えるため、知らない顔があってもおかしくはないのだが、それにしても異様だった。

そもそも軍服が違う。

環境に合わせた迷彩を基調とするクウェンサーと違い、女性のものは黒をメインに、金の縁取りをされた豪奢なものだった。縁のないメガネが知的な印象を高めているが、単なるインテリにしては妙な威圧感があった。下は黒のタイトスカートだが、どうやら装飾の意味合いが強いらしい。ほとんどズボンと変わらないような分厚いタイツを穿いている。豊かな胸には見た事もない勲章がいくつも取り付けてあった。一目で偉い人だと分かるのだが、実際の戦場でこんなキラキラされたら狙い撃ち間違いなしな感じである。

襟元の階級章を見たが、何故かプレートは真っ赤に染まっていた。

女性は白い手袋に覆われた両手を口元に寄せて、白い息を当てながらクウェンサーの前に立った。軍服は偉そうだが、そういう仕草には女の子らしさが垣間見える。

クウェンサーはキョトンとしたまま、第一印象をそのまま口に出した。

「えーっと……『貴族』さんですか？」

「いや、私は『平民』出身だよ。そのせいで色々と苦労させられる事もあるがね。それよりも貴君の事だ。少し質問させてもらっても構わないかな」

「はぁ」

「確認しよう。ベイビーマグナムの正規整備兵及び操縦士エリート以外の隊員は警備以外すべて兵舎待機。一時間後の作戦前会議まで可能な限り睡眠を取る事、と命令が出ているはずだが」

「はっ、はひっ!?」

ヤバい、相手はお堅い委員長タイプだ!!　と警戒心をマックスにするクウェンサー。彼もオブジェクトの整備に付き合っている訳だが、『正規』整備兵ではない。彼は派遣留学の学生であり、正式な兵科も工兵だった。

「いやっ、あの！　すみません!!　でも整備兵から資材搬入の要請を受けておりましてっ！　そちらが終わり次第、兵舎の方には戻りますから!!」

「貴君、所属と階級は？」

「……え」

クウェンサーが疑問の声を発したのは、質問の意味が分からなかったからではない。チューができそうな距離まで接近した黒い軍服の女性が、いつの間にか腰のホルスターから式典用のリボルバーを抜いていたからだ。そしてクウェンサーの胃袋の辺りに硬い感触が押し付けられ

ている。

女性は、うっすらと微笑んだままもう一度尋ねてくる。

「所属と階級は？」

その時、女性の肩の所にある部隊章が見えた。クウェンサーのものとは違う。

つまり、

（……こいつ、明らかにウチの部隊の人間じゃない!?）

あれ、いつもは学生学生で通していたけど厳密には何の階級なんだ!?　正式な書類には面倒な名前を書いていたような気がするけど間違ったらズドンか!!　とクウェンサーは突然の状況にパニックを起こしかける。

と、女性はダブルアクションでそのまま引き金を引けるにも拘らず、わざわざ親指でハンマーを押し上げ、分かりやすい金属音を鳴らしてから、非常にゆったりした速度でこう言った。

「所属と階級」

「がっ学生です!!　派遣留学の学生！　兵科は工兵ですが大隊内のどこの部隊にいるのかは結構微妙ですハイ！　ヘイヴィアと一緒に怒られる事もあれば整備兵のばあさんに説教される事もあります!!」

自殺志願としか思えない支離滅裂な回答をするクウェンサーだったが、黒い軍服の女性はチッと軽く舌打ちすると、獲物を逃した肉食獣のようにふらりと離れていった。

「学生、か。それは残念。私の管轄じゃあない」

「？」

黒い軍服の女性は、わざわざクウェンサーに銃口を向けてから、親指を使ってゆっくりとリボルバーのハンマーを下ろす。ばぁん、とふざけた調子で女性は呟き、

「私の督戦任務は、正規軍人専門だからな」

3

「おいクウェンサー。『黒軍服』のオネーサマにやられたって？」

「夜道を歩いていたら、いきなり古びたリボルバー突きつけられて『所属と階級は？』だって。日本列島のクチサケレディの同類なのかあれ。ヘイヴィア、トクセンってなに？」

作戦前会議ブリーフィングのために多くの兵士が集められる中、クウェンサーとヘイヴィアは香りもクソもない、単なる眠気覚ましの黒い飲み物をチビチビ飲んでいた。支給品のコーヒーはファストフード店よりもセンスが足りない、とクウェンサーは本気で思う。

ヘイヴィアはカップを脇に遠ざけながら、

「督戦ってのは言葉が生まれた頃とはニュアンスがズレてきてな、今の『正統王国』軍じゃ戦場の監督……つまり俺らの見張り役って事だ。兵士が現場で犯罪やってねえか、捕虜の扱い

に不備はねえか、作戦中の問題とか、一つ一つチェックしていく連中だな」

「見張り役って、ウチの部隊にも専用の憲兵隊はいるだろ。軍の警察みたいなの」

「その治安維持用の憲兵隊が暴走してる可能性も視野に入れて、外部の第三者機関の手で徹底的に、だとさ」

「なるほど。寮の管理人のお姉さんっていうほど優しくはなさそうだ」

『黒軍服』は『正統王国』軍の中枢にある独立機関で、各部隊を好きな時に好きなだけ督戦する権利と、違反者が拘束命令に従わない場合に『緊急時措置』を行う権利を持つ。……テメエが味わったのが例の『緊急時措置』って訳だ」

「……明らかに拡大解釈しているな」

「だが需要があるのは確かだ。戦争はオブジェクト任せだからな。暇な歩兵が基地の内外でいろんな問題を起こす可能性は否定できない。……ま、怒らせない方が無難な相手だが、正直テメエにゃ関係ねえだろ。『黒軍服』は特定条件下では階級の上下に拘らず対象を拘束するふざけた権利を有しちゃいるが、その対象は正規兵及び現地で調達した非正規戦闘要員だけだ。テメエは『たまたま爆薬の取り扱いを知っていた「安全国」の学生』だから、分類上は民間人扱い。『黒軍服』の管轄をギリギリですり抜けてやがる」

「たまたま戦場に送り込まれて、たまたまオブジェクトを爆破する民間人、ねえ」

「そう言うなって。俺はテメエが羨ましいよ。浅い眠りから覚めたらあっちもこっちも『黒軍

服』だぜ。このクソ不味いコーヒーよりよっぽどブラックじゃねえか。でも、みんなビクビクしてる中でテメェだけはフリーパスって訳だ。おい、試しにカタブツ姉ちゃんのスカートめくって来いよ。多分テメェなら謝り倒せば何とか許してもらえるぜ」

「冗談。『督戦活動中の事故』なんて扱いで鉛弾をブチ込まれるのはごめんだよ」

クウェンサーは苦いどころか喉が詰まるような感覚のするコーヒーに辟易しながら、

「……しかし、そんな部隊が『本国』からやってくるなんて、フロ・レイティアさん、一体何やったんだ？」

「いやあ、『黒軍服』の姉ちゃん達がやって来ちまった点については、俺らは偉そうな事何にも言えねえんじゃねえかなあ……」

そんな事を言い合っていると、前方の檀上へ爆乳の上官がやって来た。彼女はリモコンでプロジェクターを操作しながら、

「兵士諸君。サンタクロースを待っている訳でもないのに、このクソ寒い真夜中にカフェイン摂取任務ご苦労。これより作戦前会議を行う」

やや硬い調子の声を聞いたヘイヴィアが眉をひそめた。

「（……あん？　何だよあの爆乳。いきなり不自然なリップサービス始めやがって。切れ味とタイミングに欠けてやがる。今更こんなブリーフィングで緊張するようなタマかよ？）」

「（……ヘイヴィア、ヘイヴィア。会議室の右後ろの端。高性能のハンディだから分かりにく

いけど、CSのテレビカメラが入っている）」

「（……面倒臭せえの極みだなオイ!!　それで柄にもねえ事言ってやがんのか目立ちたがりの上官サマはよ!?）」

「（……ミリタリー番組が入っているのって、入隊者志願数を増やしたり納税者を納得させるためのプロパガンダの一環なんだろ。あれ、ひょっとしたら本人の意思じゃなくて『軍の意向』ってヤツなんじゃないかなぁ。ほら、フローレイティアさんの唇の端がひくひくしてる）」

「（……ま、確かにむさ苦しいおっさんよりも美人の上官映した方が華にはなるがよ）」

どうやらフローレイティアがいっぱいいっぱいになっているのは周りにも伝染しているようで、彼女がギロリ眼光と共に『質問は!?』と言うとハイハイはいハイはい!!　とあちこちから不自然な数の手が挙がった。今は小学校の算数の授業中なのか。

ヘイヴィアは苦笑しながら、

「（……くっくっ、もー泥沼じゃねえかよ。おいクウェンサー、ここは色男の俺らが助け舟を出してやろうぜ。そしてあわよくば後で優しく踏んづけてもらおう）」

「（……とか言って、『もうすぐ生理ですか』とかド級のセクハラぶつけてカメラの前での反応を楽しむ気だろ。俺は本当に助け舟を出すからな）」

一通りの質問が終わった後、ひょいっと片手を挙げてクウェンサーが発言する。

「資料には目を通しましたが、隊員間でもう一度意思統一を行う事で作戦時の齟齬をなくし、

無用なリスクを回避する一助にしたいと思います。上官殿にはお手数ですが、順を追って説明をしていただけないでしょうか」

うむ、とフローレイティアが頷く。

一度流れが断ち切れた事で、銀髪の爆乳は自分の調子を取り戻したらしく、

「今回の任務は『信心組織』が管理する、カムチャッカ半島東海岸線の軍用炭鉱を襲撃する事よ」

ようやくいつもの調子が戻った声を聞きながら、ヘイヴィアは傍らのクウェンサーに質問する。

「（……目を通したってナニよ？）」

「（……嘘も方便）」

「この軍用炭鉱はオブジェクトの動力炉であるJPlevelMHD動力炉の燃料として採掘・搬出されている事を諜報部が摑んでいる。ここを撃破する事で、間接的に『信心組織』軍全体の動きを少しずつ阻害する事ができる、という訳ね」

人為的なプラズマを利用して発電する動力炉だが、意外な事に石油や天然ガスといった近代的な化石燃料よりも、旧来の石炭を加工した方が効率は良いという報告が出ている。

「ところが、連中もこちらの布陣には気づき始めていて、一足先に第二世代のオブジェクトを派遣してきた。到着前に炭鉱を叩きたかったが、諜報部の工作は失敗に終わったのよ」

「向こうのオブジェクトは？」

クウェンサーが質問すると、フローレイティアはプロジェクターのリモコンを操作し、自分の背後に巨大なビデオ映像を表示させた。

「三ヶ月前、太平洋上で『信心組織』軍と『情報同盟』軍がぶつかった時の隠し撮りがある。我々はウィングバランサーと命名。主砲は大型の砲身に不釣り合いな小口径のコイルガン。おそらく『細く鋭く速く』のタイプね。長射程高命中率で、着実に損害を蓄積させていくって事。空気の噴射で浮かぶエアクッション機関をベースにした、パーツ換装なしの完全水陸両用性能を持つ第二世代よ。詳しい予測スペックは各自の資料にある通りだが、正直に言おう。手強い。ベイビーマグナムをそのままぶつけるべき相手ではないね」

細い指でプロジェクターのリモコンを操り、上官は自分の背後のスクリーンの表示を巨大な地図へと切り替える。

「戦場であるカムチャッカ半島の東海岸線は、ヤツらの第四次潜水艦基地建造計画と大規模なベーリング海地震が重なって、海岸線に沿った一五〇キロ、内陸へ向かう九〇キロほどが巨大なリアス式海岸のように変貌している。……ようは、戦場は蜘蛛の巣のように崖が広がっている訳よ。水陸の移動にフロートの換装を必要とするウチのお姫様には、あまり良い地形とは言えない」

並の崖なら砲で切り崩して平らにならすという方法もあるけど、潜水艦用に海底を掘られた

あのリアス式海岸だと、崖を崩しても埋められないかもしれない、とフローレイティアは言う。

「その上、『信心組織』側はリアス式海岸の各所に大型レーダーを配備し、ウィングバランサーの照準精度を格段に向上させているものと推測される。ただでさえ移動に手間取る地形で照準補正されたまま戦闘に挑めば、高い確率でお姫様が撃ち抜かれるでしょう」

そこで、とフローレイティアはプロジェクターの表示を切り替える。

地図上にレーダー施設などを含む赤い点を付け足したものだ。

「お姫様とウィングバランサーがぶつかる前に、こっそりとレーダーに小細工を行う。こちらで用意したプログラムを流す事で、ヤツらの照準補正情報を意図的に狂わせるのよ。つまり、『狙いにくい』ように再調整してしまう訳ね。これが成功すれば、今度は逆にお姫様の方が一方的にウィングバランサーを狙い撃ちにできる」

「でも、異常に気づかれちまったらレーダー施設の補助を切り離して、ウィングバランサーが独自に動くんじゃあ？」

ヘイヴィアが質問するが、フローレイティアは気軽に答えた。

「あれだけの規模よ。スイッチ一つで蛍光灯みたいにオンオフできるほど簡単じゃない。一分でも二分でも切り替えに手間取ってくれれば問題ない。ウチのお姫様の精度を甘く見てもらっては困る」

「じゃあ、お姫様の他に、隠密で動く歩兵部隊が必要って訳ですか」

「ええ。それも二手」

フローレイティアはリモコンを操作し、さらに地図上に二本の矢印を追加する。

「複数のレーダー施設を束ねているデータケーブルの元まで到着できれば妨害プログラムを流し込める。ただし、そこまで接近するには蜜蜂みたいに密集するＵＡＶ群の監視網をかいくぐらなくてはならないの。率直に言う。それができれば苦労はしない」

「ＵＡＶ……無人航空機……」

「カメラ付きの高価なラジコン飛行機ね。そこで、ストレートにデータケーブルを目指すのではなく、まずはこのＵＡＶ群を無力化する。カムチャッカ半島東海岸線のＵＡＶ群の制御は基本的にプログラムによる自律飛行。ただし三〇分に一度、電波時計のように軌道修正プログラムを流し、飛行ルートを微調整する。……何しろ、入り組んだ崖の中を飛ぶ機体も多いからね。放ったらかしだと、わずかな誤差で壁に激突してしまう。一機五万ユーロ相当のＵＡＶが。連中はそれを防ぎたいようだけど、そこに付け入る隙がある」

「つまり、電波を使って妨害用のプログラムをＵＡＶ制御網へ流すという事ですか？」

「ポイント2。ここがギリギリの地点よ。ここへ来たＵＡＶ一機をまず感染させる。一五〇秒以上の電波放射は逆に勘付かれる危険があるから注意しろ。続いてＵＡＶに無線でアクセスした制御施設へ妨害プログラムを移し、そこからカムチャッカ半島東海岸線防衛用のＵＡＶ全機へと一気に広めていく。こっそり全システムを制圧したら、後は一斉にデータをいじってやれ

ば良い」

「敵さんの基地の連中は、ループした録画映像を延々と眺める羽目になっちまうって訳ですか。お決まりの手だ」

ヘイヴィアが面白そうに言う。

フローレイティアはスクリーンの表示を切り替え、簡単なチャートを映しながら、

「手順の確認をする。まず、沿岸のポイント1へ少数の部隊が向かい、大型レーダー施設を束ねる地中のデータケーブルを掘り起こして妨害プログラムBを流し、ウィングバランサーの照準補正機能を逆手に取る。効果が現れたら、最後の仕上げにお姫様が全速力で出撃。崖と崖の間にある細長いルート3の丘を通れば、一直線にウィングバランサーの射程圏内へ近づける。向こうの照準が正確な状態なら、間違いなく返り討ちに遭う位置取りだけどね。そしてターゲットが射程に入り次第、調子の出ない『信心組織』の第二世代を吹き飛ばす。完了後、軍用炭鉱へ降伏勧告を送り、九〇〇秒の猶予を与えて人員に避難のチャンスを与えたのちに、オブジェクトの火力で一気に爆破。……このスケジュール通りに進めば、私達は夜明け前にシャンパンを水鉄砲にして遊ぶ事ができるって訳よ」

「（……わお、って事はもう冷蔵庫の中にはキンキンに冷えたアルコールが準備してあんのかよ）」

ただし、とフローレイティアは付け加える形で、湧き立つ兵士達に釘を刺す。

「作戦途中、ウィングバランサーの照準補正機能へ介入する前に、ＵＡＶ群に見つかれば即アウト。当然、撃墜しても異常は敵軍に知れ渡る。『信心組織』のＵＡＶは自由落下型爆弾を二基積んでいるが、たとえ鼻先まで近づかれても絶対に攻撃するな。……異常を知られれば即座にウィングバランサーが動き出す。こちらに支援を求めても無駄よ。正面からの激突では、お姫様でも勝てる見込みは少ないからね。救助には、行けない」

フローレイティアはプロジェクターの表示を切り替え、カムチャッカ半島近海の情勢を表示させた。

「我々『正統王国』軍の友軍である、第二四機動整備大隊と第二世代のインディゴプラズマが、ダミーとして半島東側の海上に展開している。ウィングバランサーは、そちらのインディゴプラズマと睨み合う形で動きを止めているの。チャンスは一度。気づかれれば骨すら『本国』へ帰れないものと思え。奇襲側が失敗した場合、『白旗』は無視される可能性が高い。連中も頭に血が上るでしょうからね」

質問は？　とフローレイティアが締めくくるように言うと、流石に沈黙が訪れた。

そんな中、クウェンサーが手を挙げる。

「こっちは一機、敵は一機ですよね。……力技で押しても勝てないものなんですか」

「大型レーダー施設との連携が万全なら。基本的なオブジェクトの性能よりも、特殊な地形や

付随する設備が実力を底上げしている状況ね。インディゴプラズマもあてにするな。我々が失敗し、戦況が不利になったと分かれば、沖へと逃げて被害を減らそうとするでしょう。貴重な第二世代を消耗してまで、我々の撤退時間を稼いでくれるとは思えない。それがクソッたれな『賢明な判断』というヤツね」

録画されていますよ、とクウェンサーが指摘すると、フローレイティアはこほんと咳払いをしてから締めくくった。

「今立っている場所がどれだけヤバいか、分かってくれた？」

4

周囲は真っ暗闇。

奇襲作戦であるため、ペンライト一つ点ける事を許されない黒一色。

ＵＡＶに赤外線や電磁波などを感知されるのを恐れて、ライフルのスコープにある補正機能もかなり制限された中、いくつかの足音が微かに鳴る。

『正統王国』軍の兵士達だ。

彼らは時折ライフルのスコープを覗いて、電子的に補正された映像情報から地形を確認しつつ、暗闇の中を進んでいる。

「間違ってる。こんなの絶対に何かがおかしいぜ……」

そんな兵士の一人、寒冷地用のコートに身を包んだヘイヴィアが、吹雪の夜に呟いた。

しかし、いつもツッコミを入れているクウェンサーはどこにもいない。代わりに、隣を歩いている東洋人の少女が、白い息を吐きながら口を開いた。

「何がですか？」

「それはな、ミョンリ。このヘイヴィア様が一番ヤバい最前線に投入されてるっつーのに、クウェンサーの野郎が後方待機で済んでやがる事だよ」

「フローレイティア・カピストラーノ女史は、クウェンサーの野郎もまとめてこっちに放り込みたかったみたいだがね」

と言ったのは、大柄な黒人の男だった。彼は通信用の大きな機材を背負っている。今回は交信距離の短い無線機の電波をこの大きな通信機でまとめて、指向性の超音波で長距離間の通信を行うようになっていた。理由は簡単で、敵軍側のＵＡＶに傍受されないようにするためである。

「ただ、例の『黒軍服』が睨みを利かせているからな。厳密な分類上では民間人に属するクウェンサーを最前線へ向かわせる訳にはいかんのだろう」

「クックマンの言う通りですよ。それに、別に基地でのんびりしている訳ではないのでは？」

ミョンリと呼ばれた東洋人の少女が口を挟む。

「彼らはポイント2……つまり『信心組織』のＵＡＶ群の無力化に向かったんでしょう」

「世の中のルールを理解するんだミョンリ。あいつが俺より・ミリでも楽をしてる時点でそれは罪なの」

口を尖らせるヘイヴィアに、茶色いポニーテールにそばかすの白人の少女はこちらを振り返った。

「何だ。普段の相棒がいなくて寂しくなっちゃったの？」

「黙れよウェスティ。何でテメェはそう男と男をくっつけたがるの？　生物として不自然な流れだろ」

「ヘイヴィアだって女と女がくっつく分には拒絶しないくせに」

「その二人が俺を好きって言ってくれねえと意味ねえじゃんか」

この四人がポイント1……大型レーダー施設の情報網に破壊工作を行う兵士達の全貌だった。

ヘイヴィア、ミョンリ、クックマン、ウェスティ。最年長のクックマン以外は全員ティーンエイジャーである。引率の先生だな、とクックマンは苦笑していた。

彼らが歩いているのは湿った岩場だった。

周囲は吹雪いているが、地下の炭鉱の暖房が、ダクトの排気となって所々から溢れ出しているらしい。そのおかげで、雪の解けているエリアが点在しているのだ。ヘイヴィア達は可能な限り雪のない場所からない場所へと渡っていくように移動していた。

「足跡については、あくまで目安だ」

と、クックマンは言う。

「足元を気にし過ぎて周囲の警戒を怠っては元も子もない。幸い、この天候なら多少の足跡を残してもすぐに消えてくれるだろう」

「視界も気になるね」

ウェスティは白と黒の二色に分けられた戦場を見回した。

「見渡す限りガランガラン。地形の凹凸以外に遮蔽物何にもないじゃん。普通、炭鉱って言ったらいろんな建物が入り組んでいるものなんじゃないの？　それがせいぜい、土砂を搬出するための大型ダンプぐらいしかないなんてね」

「可能な限り、あらゆる施設を地下に設けているのだろう」

「何のために？」

「潜水艦基地建造計画を利用して作られた炭鉱だからな。軍用地下施設の建築法の実験でも兼ねているのかもしれん」

「すっげえ地形」

クックマンとウェスティの話を聞いているのかいないのか、ヘイヴィアは暗闇の中で目を凝らし、崖の端から下を覗き込んでいた。

海面まで一〇メートル、対岸まで二〇メートル程度といったところか。潜水艦基地の名残が残っているという事は、水深は結構あるだろう。

落ちたら死ぬ。

と思ったのは、単純な高さの問題ではない。寒冷地なので海面が丸ごと分厚い氷に覆われているのだ。氷が砕けているのは波のせいか、船舶の行き来でもあるのか。その大きな塊の一つは、白熊ぐらいなら寝そべっても沈まなそうだ。『着水で衝撃が緩和される』とか、そんな優しい事はないだろう。

「海に沿って一五〇キロ、内陸に向けて九〇キロ。こんな調子で蜘蛛の巣状態かよ。人間の技術力ってのは恐ろしいな」

「時代遅れの潜水艦基地建造計画を四度も行っている時点で、色々なウワサが飛び交っていましたもんね。『信心組織』は潜水型オブジェクトを建造していて、その補給部隊を編制するためにこんな大規模工事を行っているとか」

ミョンリの言葉に、ウェステイが口を挟む。

「蓋を開けてみりゃ出てきたのは大量の石炭。潜水艦基地建造って言っておけば、いくら土砂を掻き出しても怪しまれないしね。時代遅れだから戦略的価値が低くて他の勢力から攻め込まれる機会も減った訳だし、良いカモフラージュになったってトコかしら」

「でも、今回は『正統王国』軍が制圧に乗り出したんだろ」

「アラスカの情勢が一段落したおかげかもしれん。ベーリング海に安定した補給路を用意できるようになったから、カムチャッカ半島にも大規模な侵攻を行えるようになったのは事実だ」

「……って事は、上は軍用炭鉱の機能停止だけじゃなくて、このまま居座るつもりなのかもしれねえのか。クソッたれ、おかげで俺らが複雑な作戦の必要性に迫られたって訳だ」

「それにしても、こんな複雑な地形じゃ、ウィングバランサーも動きにくいものなんじゃないんですか？」

「さあな」

クックマンは通信機の肩紐を直しながら答える。

「敵機については詳細が分からん状態だ。ひょっとしたら長い脚でも格納していて、崖を越えるための架橋装備を備えているのかもしれん」

「あん？　予測スペックのデータにゃそんなもんなかったろうがよ」

「諜報部の資料と電子シミュレート部門の結果だけが全てではない。現物とぶつかっていない以上、予想を超えた隠し玉がある可能性も考慮した方が良い」

そういうもんかね、とヘイヴィアは呟き、周囲に目をやった。

「で、どうすんだ大将。先に進むにゃこの崖を渡って向こう岸に行かなきゃならねえぞ」

「地図だと、三キロ北方に吊り橋があるわよ」

「数少ない移動用ルートには必ず監視がついているだろう。カメラ一台置いておけば安全を確保できるのだからな。逆に言えば、連中の想定から大きく外れたルートを通れば、それだけ発見されるリスクは減ってくれる」

言いながら、クックマンは身振りでミョンリを指し示した。彼女が背負っているものを下ろすと、

「……マジかよ？　萎んだゴムボートって……」

「一度降りて、海面を渡って、再び上る。橋を渡らずに崖を越えるには、一番シンプルな方法だろう？」

5

ヘイヴィア達から五キロほど離れた所を、クウェンサーは歩いていた。

「わお、オーロラ出てやんの。設計の俺には宝の持ち腐れだよ。環境学者志望の学生さんの方が良いんじゃないの、こういう役目はさ」

「いちいち嘆くなよデカブツマニア。極端な環境の厳しさを知っておきゃあ、後で設計の『遊び』の参考になるってもんよ。寒さでプラズマ用のガスの通りが悪くなる……なんつー間抜けな展開になる心配もなくなる訳だ」

馴れ馴れしい調子で話に応じたのは、黒人の少年だった。言葉は汚いが、発声はハキハキとしている、妙な口調の人間だ。クウェンサーと違って細々としたマシンに興味があるらしく、今も無人偵察車両……ようはカメラ付きのラジコンを背負っている。

クウェンサーはうんざりした調子で、

「ナッツレイ、極寒環境なら『安全国』の中の冷凍庫で十分だろ。ウチの学校にも大きなのがあったよ。材料の実験ついでにアザラシ飼っていた」

「そういう風に自分に言い訳しておけよ。人生をハッピーにするコツってのはさ、どんな状況でも必要なものを吸収する方法を見つける事じゃん」

「お前はいつでもテキーラ呑んでいそうな性格しているな。なあ、チャールズもこんな雪遊びを超越した寒さはうんざりだろ。……チャールズ？」

返事がないのを不審がって、クウェンサーは振り返る。そちらには線の細い白人の少年がいた。俯いたまま、一言も発しない。クウェンサーの視線に気づくと、ただでさえ俯いていた状態から、さらに首をひねって逃れようとしているようだった。

「あいつは駄目だ。普段はあんなヤツじゃねえんだがよ。一度ホームシック入っちまうとああなっちまう。首から除湿剤でもぶら下げておきてえぐらいだ」

ナッツレイと呼ばれた黒人の少年が肩をすくめて言う。チャールズとは親しいのか、声を憚る様子もなかった。

「だが悪いヤツじゃあねえんだぜ。専門はオブジェクトの通信ソフトウェア関連でな。今回の妨害プログラムにも一枚噛んでやがる。ハッキングの腕なら電子シミュレート部門以上なんだ。それ以外は何にもできねえがな。僕らの勝利の半分はあのジメジメしたインテリの手柄になる

って訳よ」

クウェンサー、ナッツレイ、チャールズ。

面子を思い返し、クウェンサーは思わず白い息を吐いた。

「普通じゃないよ。何で軍事作戦の中核に、揃いも揃って派遣留学のガキを任命するかね」

「言ったろ。元々今回の作戦はチャールズの妨害プログラム頼みなんだ。フォローする役もチャールズが最大の力を発揮できるメンバーが望ましい。そしてチャールズは混気の多い人見知りだった。学生で固めてあいつの緊張をほぐした方が、成功の可能性は高い」

「人の事言えた義理じゃないけど、半分素人の集まりだぞ。初っ端で全滅したらあの上官サマはどうするつもりなんだ？」

「だからクールな生徒会長を回してくれたんじゃねえの？」

ナッツレイに促され、恐る恐る首を回すクウェンサー。少し離れた所に、黒いコートを纏い、大型の無線機を背負った茶色い髪の女性が歩いていた。

「……どう考えても俺達のピンチを救ってくれるとは思えないけど」

「整備基地ベースゾーンでダラダラ警備やってるメタボな連中よりかは機敏に動くだろ。フローレイティアちゃんだって馬鹿じゃあねえ。人間を適材適所に回そうってぐらいは考えてくれているさ」

「そうかなあ……？」

クウェンサーがチラチラと『黒軍服』の方を見ると、ナッツレイは何故だか楽しそうな様子で、

「生徒会長のお名前はシャルロットちゃんだってよ。督戦任務が終わったら帰っちまうんだろ。それまでには何とかして口説いておきたいもんだよな。聞いたところじゃあ『平民』らしいから、面倒臭せえ家の事情とかに縛られる心配もなさそうだしよ」

完璧に自分のペースだけで話を進めるナッツレイ。

こいつは成功率の低さを弾幕の厚みで補うタイプみたいだなあ、とクウェンサーは適当に予測をつけながら口を開く。

「派遣留学の時間も無限じゃないんだぞ。そんな調子で実践的な技術とやらが身に着くもんかね」

「必要なら留年でもして時間を延ばすよ。大前提はハッピーだろ？　ジメジメしたままじゃ頭の中にゃあ何にも入らねえよ。そもそも、何でそんなに焦ってんのよ。志望は設計士だっけ。そんなに金持ちになりてえもんかよ」

「是非ともなりたいね。ガキの頃、家の近くに有名な『貴族』の家があったんだ。そこの金髪の女の子は、死ぬほどワガママでムカつくご令嬢だった」

クウェンサーは呟くように言う。

「ある日、その子の家が没落したんだ。あれだけ盤石だった、街が丸ごと爆撃されてもあの大

きな屋敷だけは無傷で残っていそうだった、それぐらい強靭な『貴族』の家があっという間に借金まみれだ。相当恨まれていたんだろう。逃げたあの子の一家を使用人までが追い掛け回していたよ。街中がおかしな空気になっていた。ウチの親父が匿わなければ、ワガママでムカつくご令嬢は母親と一緒に何回レイプされていたか分からなかったと思う」

「そりゃまた、お前ん家のパパってすげえのな。憧れちゃうよ」

「有名な『貴族』の家だって、ちょっとしたきっかけで倒れてしまうんだぞ」

ナッツレイの軽口を無視して、クウェンサーは続ける。

「今でも目に焼きついている。あれだけいつも威張り散らしていた『貴族』サマがさ。『平民』の小さな家の、チーズ用の食料倉庫の中で肩を寄せ合って震えていたんだ。……盤石って、いくら稼げば手に入るんだ？　『貴族』でも不確かな金額を、『平民』が普通に頑張って手に入れられるものなのか。そんなもん、特殊なルートに進むしかないだろ。オブジェクトの設計士になるぐらいしか道は残っていないよ」

「そうかい」

ナッツレイはクウェンサーから一歩遠ざかり、チャールズの方へ身振りで合図を送りながら、

「なら、お互い派遣留学同士、手っ取り早く金持ちになるルートを目指そうや。チャールズ！　そろそろヤツらのＵＡＶに仕掛けるポイント2だ。送信アンテナの設営なら手伝うぜ」

離れていくナッツレイの背中を少しだけ眺めていたクウェンサーだったが、実のところ、彼

らにはそれぐらいしかやる事がない。チャールズに手を貸すため、クウェンサーも集まろうとしたところで、今まで無言だった『黒軍服』のシャルロットから声を掛けられた。

「貴君」

「何ですか？」

「すまないが、貴君らの話は私の耳まで届いてしまっていた」

「私語はまずかったですか」

「そういう事を言いたいのではない」

「不純ですかね」

「焦る想いは理解できない事もない。だが、私には貴君の父上のような方は十分に揺るぎない存在であると感じられたがね」

シャルロットの口調からは、若干ながら、事務的な硬さが取れていた。

人間だから当然と言えば当然なのだが、彼女もまた、一応は世間話をする機能があるらしい。

「……実情を知らないからですよ。ウチの親父はしがないサラリーマンです。経済状況一つでいつ首を切られるかも分からない。いつもペコペコ頭を下げている。社内の人事で多少一喜一憂したって、会社が丸ごと潰れてしまったら何の意味もない。血統を証明できない身分なんてのはそんなもんです」

「そんな状況でも、貴君の父上は没落『貴族』に手を差し伸べたのだろう。十分に素晴らしい

父上だと思うよ。もしも本当に職を失ったら、シャルロット＝ズームの名を貴君の父上に教えてやってくれ。そのような人物になら、向いている仕事を紹介してやれそうだ」

何だか親父に世にも珍しい遠隔モテ期が到来してしまったらしい、とクウェンサーは適当に考える。残念なのは歳が離れすぎている事と子持ちである事のダブルパンチか。家庭の一員として、親父がグラつかない事を切に願う。

「貴君。ちなみに、その没落した『貴族』はその後どうなったのかね」

「血統局と連絡を取って、身分証を変えてきちんと再出発しましたよ。いつまでも食料倉庫を占拠されたままじゃ困ります。確か、ワガママでムカつくご令嬢はどっかでアイドルやっていたかな」

「クウェンサー！」

ナッツレイの声が飛んできた。どうやら世間話をしている内に送信アンテナの設営が終わってしまったらしい。チャールズの足元にはスーツケースを広げた程度の大きさのアンテナが展開されている。

クウェンサーとシャルロットはナッツレイ達の元へと近づいていく。

「俺達にやる事ってあるの？」

「これ」

と、ナッツレイは暗視機能のついた双眼鏡を投げてくる。

「ＵＡＶから見えない位置からデータを送信するってのがポイントでな。つまり、送信アンテナ使って妨害プログラムを流すチャールズは、肝心のＵＡＶの位置が分かりやしねえ。で、誰かが空飛ぶターゲットの位置を追い掛ける必要がある訳よ」

「俺が？」

「僕はアンテナの設営やった。チャールズはこれからデータ送信のお仕事。で、他に分担してねえのは誰？『黒軍服』のお姉ちゃんに任せて手ぶらで帰るってのはハッピー過ぎねえか？」

「分かったよ。くそ、実はＵＡＶからも発見されやすい、一番ヤバい役回りなんじゃないのこれ？」

「いいや」

と、シャルロットが遮った。

「私が何もしない理由にはならないだろう。私も彼に付き合おう。……どうにも動きが素人臭いしな。一人で任せてあっさり発見され、空から爆弾を落とされても敵わん」

「（……クウェンサー、物陰に隠れてよろしくやる時は僕も呼べよ。寒冷地だから人数増やした方が温まるぜ）」

「その台詞、貴君が正規の軍人ならすでに発砲しているが？」

ここはわずかに起伏した丘の低い所だ。『信心組織』軍のＵＡＶはこちらまでやってこないため、丘を壁にしていれば発見される事はない。……が、ＵＡＶの位置も目視できない。そこ

で、クウェンサーとシャルロットが伏せたまま丘の上へ向かい、できるだけ身を隠したまま双眼鏡でＵＡＶの位置を確かめる訳だ。その情報を元にチャールズが送信アンテナの向きや出力を操作し、妨害プログラムを流し込む。

電波状況が半端だと、妨害プログラムの一部が破損した状態でＵＡＶの中に入り、不発で終わる危険もある。ＵＡＶの位置情報は重要なのだ。

見つかれば一発でおしまい。

流石に丘の上から顔を出すと緊張が走るが、そんなクウェンサーにシャルロットが言う。

「……硬くなるな。予定の飛行ルートを通っていればＵＡＶは二キロ離れた所を飛んでいる。この吹雪の中なら、じっとしていればそう簡単には見つからんよ。赤外線センサーも、その断熱性のコートがあればかなり遮断できる。この辺りのＵＡＶのルートは崖の中ではなく、もっと上のようだしな。地上から空を見るのと、空から地上を見るのは、距離は同じでも感覚は全く違う」

「そんなもんですかね」

「北北西に小さな点。双眼鏡で確認しろ」

ギョッとしたが、暗視機能を使って改めて確かめてみると大きな鳥だった。

「鷲ですかね？」

「その奥だ。もう一つ点がある。夜行性でもない鳥がこんな時間帯に起きているのは、あれの

物音に追い立てられているからかもしれないがね」

んん？　と眉をひそめて双眼鏡を動かすと、確かにあった。ＵＡＶだ。長さ二メートルほどの円筒形のボディの側面から、二枚の直線的な羽を伸ばした機械の塊。巡航ミサイルを小さくしたような感じだが、最後尾にある推進機関はプロペラだった。速度よりも飛行時間を優先させた結果だろう。

「見つけました。北北西一九〇〇メートル先。崖のラインに沿って、高さ一五メートルの所を東へ移動しています。……つまらないセンスです。機能美だけを突き詰めるとああなっちゃうんですかね」

「形状がシンプルなのは旧式のランチャー車両を再利用して発射できるようにするためだともウワサされているがね。ともかく位置を教えてさっさと仕事を済ませる事にしよう。本来の業務以外の仕事に辟易しているのは貴君らだけではないのだからな」

「そうですね。チャールズ。ターゲットはＢＣ９。時速一五〇キロ程度でＢＦ９へ。崖をなぞっているようだから地形を確認してカーブの予測をつけろ。チャールズ？」

返事がないのは例のホームシックのせいか、と双眼鏡を覗いたままクウエンサーは考える。

しかし違った。

直後に、アサルトライフルの射撃音が連続した。

まず後方で何かが撃たれた。『信心組織』軍のものではない。ヘイヴィアが撃っていたのと同じ音だった。だが振り返る猶予はない。肩を震わせるのが限界だった。続く銃声と共に背中に鋭い衝撃が走り抜けた。肺の中の空気が一気に吐き出される。襲撃者はライフルを連射しながら真横に薙いだらしい。伏せた状態からさらに地面へ叩きつけられたクウェンサーの視界が揺らぐ。首が強引に動かされ、傍らのシャルロットも背中を撃たれた事を思い知らされた。

悲鳴を上げる暇もなかった。

口の中に溢れる血の味を感じながら、クウェンサーの意識が急速に遠のいていく。

6

死んだ。

そう思っていたシャルロットズームだったが、意外にも自分の肩が揺さぶられている事に気づいた。うつ伏せに倒れていたはずの体も、いつの間にか仰向けにされている。

（……そうか……大型の無線装置を背負っていたな……）

襲撃者は背後から射撃してきた。背負っていた機器のおかげで柔らかい肉をライフル弾が貫くのを防いでいたのだ。対人用に『留まる』ように弾丸が設計されていたのが幸いした。普通

のライフル弾なら通信機どころか自動車ぐらいは貫通する。
それでも、相当の衝撃が体の芯まで通っていた。
「クウェンサー……貴君は無事だったか」
「プラスチック爆弾のケースを背負っていたおかげで。でも、チャールズが……」
彼の手には千切れたドッグタグがあった。それだけでシャルロットは友軍から戦死者が出た事を理解した。
「もう一人いたな。ナッツレイとか言っていた……。彼はどうした」
「消えました」
短い返答だった。
「遠ざかる足跡は一人分だけ。ケースにめり込んでいたライフル弾は『正統王国』軍のものでした。そして『信心組織』軍はUAV主体で歩兵の巡回を寄越しているって話はありません」
「……チッ。銃声が妙に近かったのが気になってはいた。敵兵にあの距離まで近づかれれば気づいて当然だったし、殺す気で撃つだけならあの距離まで近づく必要もないはずだった」
シャルロットは起き上がり、背負っていた大型無線機の調子を確かめたが、完全に壊れていた。防弾ベスト代わりになっただけでもマシだった。これ以上を求めるのは酷かもしれない。
クウェンサーは雪の上についた足跡の先に目をやりながら、
「単なる敵前逃亡か『信心組織』軍のスパイだったのかは分かりませんが、ナッツレイは今後

クロとして扱うべきでしょうね」

「経緯はどうあれ、自発的に『正統王国』軍を攻撃し『信心組織』へ逃げ込もうとしているなら、その時点で敵性工作員として扱われるさ。……このタイミングで、しかもウィルス送信を行っていたチャールズを殺害しているところから察するに、ただのパニックを起こした少年兵とはとても思えないがね」

「問題があります」

「聞こうか」

「ナッツレイはチャールズと一緒に送信アンテナと妨害プログラムの入ったノートパソコンを破壊しています。ＵＡＶに妨害プログラムを流せない以上、作戦は続行できません。至急、本部やポイント1へ向かう部隊と連絡を取らなければ」

「……私の無線機は火花を散らしている最中だ」

「俺の無線はあなたの機器を経由して長距離通信を行うタイプです。つまり、連絡手段は一切ない」

「加えてもう一つ」

シャルロットは肩に提げていたアサルトライフルを両手で構え直した。

「銃声に気づいてすぐにＵＡＶがやってくる!!　自由落下型爆弾を二基も積んだ面倒臭い機種が山ほど飛んでくるぞ。まともにやり合ってもこちらが消耗するだけだ!!　何しろ相手はい

くら消耗しても人命は減らないんだからな!!」

「ナッツレイの野郎は!?　足跡を追えば見つかるかもしれません!!」

「撤退に決まっているだろうが！　この作戦は続行できない。獲物を追うには出遅れ過ぎた。本部やポイントIへの連絡方法を考えるにしても、今は身の安全を確保するべきだ！　ここで私達が全滅してしまえば、永遠に悪い状況を伝える事はできなくなる。何食わぬ顔で生存者を騙るナッツレイが再び『正統王国』軍に戻ってくるかもしれない！　最低でも、ヤツがスパイである事は必ず報告する。分かったか!?」

「は、はい。でも、空からやってくる敵にどう逃げるんです!?　低速のＵＡＶとはいえ、時速一〇〇キロを超える速度で飛んでくるんですよ!!」

「……なあに、心配はするな。幸い、ＵＡＶが絶対に入って来られないルートはある。繰り返し崖を飛ぶのに細かい軌道修正プログラムが必要なＵＡＶには、そこまで際どいアクロバットはできないだろう」

言って、シャルロットは銃口である方向を指し示す。

三〇〇メートルほど先にあるのは、

「炭鉱の、入口……？」

ヘイヴィア達も、都合良く物事が進んでいない事を直感していた。

「……ヤバいぜクソが」

呻くように、ヘイヴィアは呟いた。

言われなくても、その場の四人全員が理解していた。

目の前に迫る危機。

闇の中でも分かる巨大な影。

無数の光点は砲の先端近くに取り付けられたセンサーなどが放つ、周期的に波長を変更している光波か。闇に紛れるという最低限の配慮すら行わない方針は、その兵器らしいと言えばそれ以上の言葉は必要ないだろう。

その正体は、

「ちくしょう!!　何でウィングバランサーがこっちに来てやがんだよ!?」

異様な機体だった。

中心となるのは全長五〇メートル級の球体状本体。足元の推進機関は、二重の巨大な同心円だった。球体と二つの同心円を繋ぐ『脚』のようなものが、一〇本近くも延びていた。推進方

式は空気で機体を浮かばせるエアクッションらしいが、あの大量の『脚』は何を意味しているのだろうか。

主砲は機体前方中央に設置された大型のコイルガン。ただし口径そのものは小さい。おそらく加速性能を徹底的に追求させた『細く鋭く速く』というヤツだ。

同格のオブジェクトを貫くほどの破壊力を持つ主砲を中心に、レーザーや連速ビーム砲などの様々な副砲が、球体のあちこちに配置されていた。ただし、球体下方は大量の『脚』に包まれているため、どちらかというと半分より上側に砲は集中している。

球体の後方には、四枚の羽のような物が見えた。

急旋回時にかかる負荷を軽減するために振り回す、錘の役割を担うのだろう。

当然ながら、生身の兵士がまともにやり合って勝てる相手ではない。

そして、ウイングバランサー側もその事を理解しているのだろう。多機能なセンサー類を使えばあっという間に発見できる位置にいながら、オブジェクトは砲撃をしてこない。そのまま真っ直ぐこちらへ接近してくる。相手にする気がないから素通りするつもりか、あるいは通行の際、ついでに踏み潰していくつもりか。

ヘイヴィアは無駄と知りつつ、手近な岩の陰へ飛び込みながら、周囲の味方に声を掛ける。

「おい、何でウイングバランサーがこっちに近づいてきてると思うよ!?」

「し、知るか。わ、我々の後方はベイビーマグナムの整備基地ベースゾーンだ。……た、例え

ば、例えばだぞ。雑兵に興味がなさそうな素振りをしている事を鑑みれば、ヤツが目指している場所は……」

答えたのは黒人の大男、クックマンだった。彼も別の岩陰に身を潜めている。

ウェスティに手を引っ張られるような格好で身を伏させられたミョンリが、震える声で尋ねてくる。

「でも、『信心組織』軍のオブジェクトは、我々のインディゴプラズマと睨み合っていたんでしょう!?　そんな簡単に持ち場を離れられるものなんですか!!」

「その友軍サマはさっさと撤退を始めたんじゃない？　作戦に綻びが見えたので、可能な限り被害を軽減させるとか何とか適当な言い訳をしてさ」

（……クウェンサーの野郎、しくじりやがったのか!?）

無線機を使って文句の一つでも言ってやろうとしたヘイヴィアだったが、応答は一切なかった。向こうも向こうで、何かしらのトラブルに見舞われているのかもしれない。

だが深く考えている暇はなかった。敵は待ってくれない。もう一〇〇メートル以内まで接近してきている。

「……どうする」

一番年長のはずのクックマンが、眼球をグラグラ揺らしながら呆然と呟いた。

「どこへ逃げる!?　逃げてどうにかなるのか!?　射程が違い過ぎるし威力も半端ではない。遮

蔽物に身を隠した程度で見逃してくれるほど、センサー類だって甘くはないぞ!!」

「馬鹿やめろ!!　パニクってんじゃねえよ！　普通に戦ってもどうにもならない相手だっつーのに、うろたえて時間を潰したらどうなる!?　より一層死にやすくなるだけだろうが!!」

ヘイヴィアは叫び返し、クックマンの動揺を抑え込もうとする。

この大柄な黒人はチームの柱なのだ。

ここが折れたらミョンリもウェスティも全員が倒れてしまう。

「考えろよ。考えようぜ。ライフルの銃口に白いハンカチつけて振り回したって敵は見逃してくれねえ。だから考えるんだ」

ヘイヴィアの言葉が染み込むまで、クックマンには数秒の時間が必要なようだった。

やがて、彼はようやく頷く。

ヘイヴィアも息を吐いた。

（……クソッたれが。チームメイトを激励して協調を取り戻すとかさ、こんなのは俺の役目じゃねえぜ）

「そうだな。一つ一つ情報を確認しよう」

クックマンは岩陰に背を預けたまま、太い指で前方を指し示す。

「崖があるのは分かるか」

「それがどうした。オブジェクトが本気になりゃ、あの程度の距離じゃ百発百中だぜ。一番み

みっちい砲でも十分に届く」

「ヤツはハナっから歩兵なんぞ相手にしようとはしていない。にも拘らずこちらへ向かっているのは、後方にある整備基地ベースゾーンを直接襲うためだ」

「つまり？」

「まさかここから狙う訳ではあるまい。となると、ターゲットに近づくため、あのオブジェクトは崖を越えようとするはずだ」

「越えるって……」

ヘイヴィアは一瞬呆れたような声を上げかけたが、即座に考えを改めた。

「まさか、ウィングバランサーに架橋装置が内蔵されてるかもしれねえって話をここで持ち出す気か？」

「架橋装置って、あれですよね」

と言ったのはミョンリだ。

「車両団に川を渡らせるための、伸縮式の鉄橋を備えた大型特殊作業車。ウチみたいな移動式の整備基地ベースゾーンには重宝されているって話を聞きましたけど」

「クックマンの野郎は、その伸縮式の鉄橋がウィングバランサーに組み込まれてるって推測してる訳だ。だが、確証があるって訳でもねえんだろ」

「わざわざ直進してそのまま崖に落ちるために、こちらへ接近している訳ではあるまい」

クックマンは指先を動かし、ミョンリやウェスティに改めて姿勢を低くするよう指示を出しながら、

「……だとすれば、かろうじて勝算がある」

「架橋作業中に妨害入れて、オブジェクトを崖に落とすってのか？」

「あれだけ大量の『脚』を複雑に仕込んでいるのが妙に気になる。もしかすると、『脚』自体が架橋装置として伸縮するのかもしれない。そして既存の架橋装置は大体六〇メートル級で五分程度の作業時間を要する。つまり、その間は無防備になるという事だ」

「でも、オブジェクト相手に私達の豆鉄砲が通じるとは思えないわよ」

ウェスティは疑問を口にしたが、ヘイヴィアは諦めに似たため息をついた。

「架橋装置を伸ばしている間は、爪先立ちと同じでバランスが悪い。その時を狙って集中砲火を浴びせてバランスを崩すって言いてえんだろ」

「ヤツがこちらを甘く見ている今が最後のチャンスだ。本気で警戒されたら一発で反撃される」

クックマンの声を聞きながら、ヘイヴィアはスリングベルトを使ってライフルを肩に引っ掛け、代わりに携行型対戦車ミサイルを両手で持ち替えた。

同じようにミサイルを装備していたのはミョンリだったが、彼女は使い慣れていないのだろう。小さな手をもたつかせるミョンリからウェスティがミサイルを取り上げると、クックマンに向かって放り投げた。

「重心の位置に気を配れ。合図と共に一気に撃つぞ」

「クソッたれ。この部隊はどこの誰と組んでも命懸けになりやがる」

ウイングバランサーは幅一〇メートル、水面まで一〇メートルの崖を越えるためにこちらへ接近していた。本体とフロートを結ぶ脚がギチギチと音をたてる。

崖上の岩陰に隠れたまま、クックマンが携行型対戦車ミサイルの砲身を指先で軽く叩いて小さな音を出す。三、二、一。ヘイヴィアは息を止め、クックマンと共に別々の岩陰から身を乗り出した。

しかし。

彼らのミサイルが発射される事はなかった。

予想外の事が起きたからだ。

『信心組織』軍のオブジェクトには、架橋装置など搭載されていなかったのだ。

もっと、シンプルな方法で崖を越える機構が備わっていた。

ボシュッ!!!!!　と。

圧縮空気の吐き出される音と同時に、鋼の巨体が一五〇メートルほど上方へ跳んだのだ。

その瞬間。最初に感じたのは暴風だった。オブジェクトが大ジャンプの際に足元に噴き出

した圧縮空気の一部が、崖を越えたこちらまで向かってきたのだ。そう考えたヘイヴィアは、そこで鼓膜が破れそうになるほどの激痛に顔をしかめた。単なる風の強さだけではない。空気の圧力そのものが大きく変動したかのような錯覚すら感じる。

そして。

その後に起きた光景を前に、ヘイヴィアはミサイル用の照準装置から顔を離し、ポカンと口を開けたまま真上を見上げていた。まるで、ホームラン確定の高さを飛んでいくボールを目線だけで追い掛ける外野手のような格好だった。

二〇万トンの巨体が、大きく弧を描いていた。

あまりにも非現実的な光景を前に、彼の思考は完全に停止していた。

そんな彼の前で、空中のオブジェクトに変化があった。推進装置は二重の同心円かと思っていたが、違ったのだ。まるで切り分けられたパイナップルの缶詰のように、二〇近い小さな扇形へ分裂したのだ。それぞれの『脚』へ分裂したオブジェクトは、地面の細かい凹凸に対応させるかのように、無数の関節を微調整させていく。

最初に我に返ったのはクックマンだった。

「伏せろ!!」

「――――、う、ええ?」

「ヤツの推進装置はエアクッション、空気の力だ!! あれだけの巨体を支えるために、どれだ

【ウィングバランサー】
WING BALANCER

全長…120メートル(詳細不明)

最高速度…時速470キロ

装甲…4センチ×250層

用途…局地的防衛用兵器

分類…完全水陸両用第二世代

運用者…信心組織

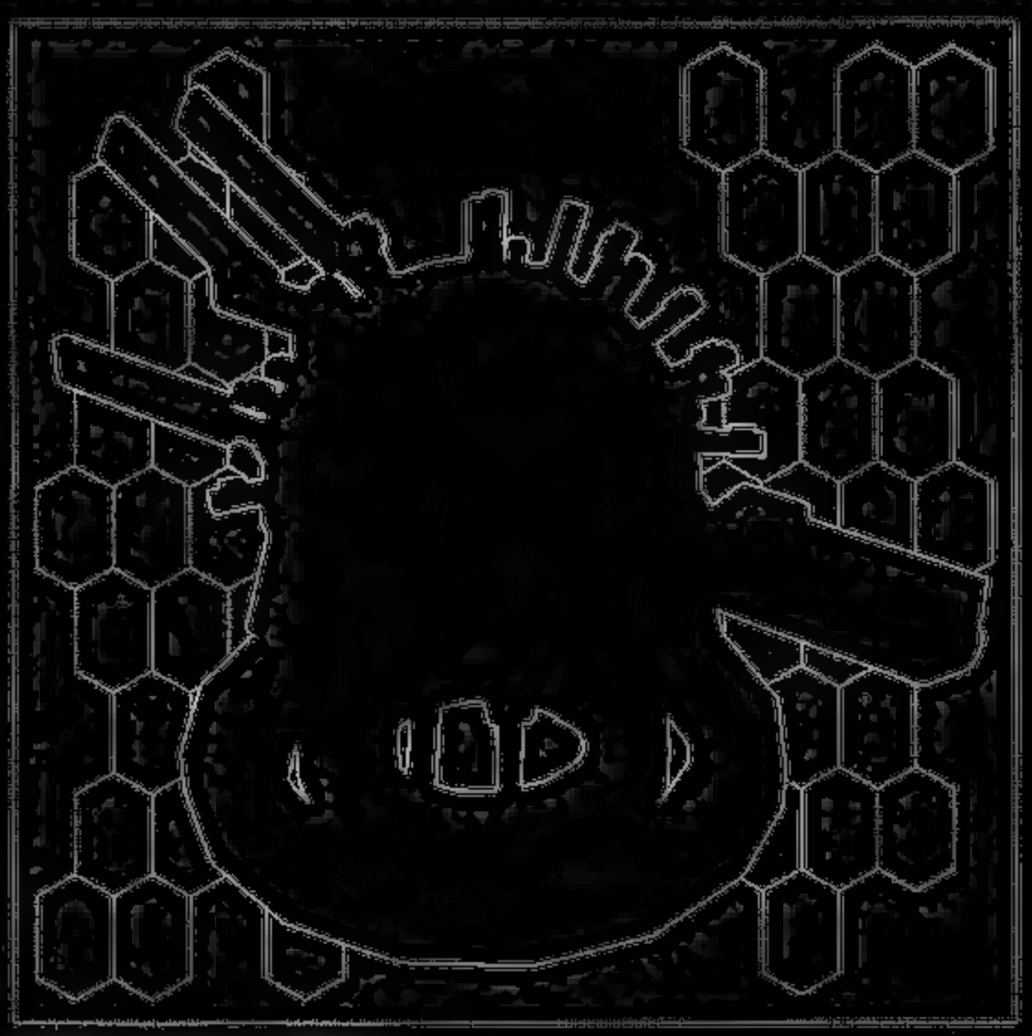
仕様…エアクッション(詳細不明)

主砲…大規模小口径コイルガン

副砲…連速ビーム砲など

コードネーム…ウィングバランサー(自國では『アークエンジェル』)

メインカラーリング…ホワイト



WING BALANCER

けの圧縮空気が撒き散らされると思う!?」

返事をする暇などなかった。

クックマンは岩陰に背中を押しつけ、ウェスティとミョンリはとにかくその場で完全に伏せた。ヘイヴィアは近くにあった炭鉱の出入り口へと転がり込む。

直後だった。

ウィングバランサーが崖の対岸……ヘイヴィア達四人の間近に落下した。

二〇万トンの巨体はそれでも地面に接触しなかった。人工的な空気のクッションが強引に抑えつけたのだ。ただし、風船と違って空気を閉じ込める壁は存在しない。クッションに使われた莫大な空気は、押し潰されたままに四方八方へと撒き散らされていく。

結果。

ゴッ!! と、衝撃波のような暴風が、無力な歩兵達をまとめて薙ぎ払う。

地面に伏せていたはずのウェスティの体が引き剝がされて、一〇メートルも水平に吹き飛ばされていく。岩陰に隠れたクックマンは、その岩ごとまとめて崖下に落とされていた。炭鉱へ身を隠したはずのヘイヴィアは暴風を免れていたが、出入り口から飛んできた巨大な塊が直撃し、壁まで叩きつけられていた。地面から毟り取られた岩でもぶつけられたのかと思ったが、その正体はミョンリだった。

砲撃など、必要なかった。

あまりにも巨大なオブジェクトは、生身の歩兵を殺すのに攻撃用の兵器を一つも使う必要がなかった。

（クックマン、ウェスティ……ッ!!）

ギリギリと歯軋りをするヘイヴィアだが、炭鉱の外へ飛び出すつもりはなかった。彼ら二人はまともに暴風を浴びて吹き飛ばされた。地面を引きずり回され、今頃は全身にヤスリをかけられたようになっているはずだ。生きているとは思えない。

ヘイヴィアは一度周囲を見回した。

ここは炭鉱の入口だが、辺りにカメラのようなものはない。

ウイングバランサーがこちらへ注目していない事を確認してから、ヘイヴィアはぐったりしたミョンリの肩に手を置いた。

「ミョンリ、動けるか!?　ミョンリ!!」

「う……うう……」

ミョンリは首を横に振っていた。意識が朦朧としているのかと思ったが、違うようだ。彼女は泣いていた。ヘイヴィアに体を支えられているのに、ふらふらと手足を炭鉱の出口の方へ向けようとしている。

完全に現実から目を逸らそうとしている。

理解できない事もなかった。こんなのは各国政府が掲げるクリーンな戦争なんてものではな

い。ヘイヴィアだって、できる事なら全部投げ捨てて不貞寝してしまいたかった。

だができない。

それをやれば、待っているのは確実な死だ。

「頼むぜおい。しっかりしやがれ!!　俺らはまだ生きてる！　炭鉱の奥へ逃げ込めば助かるかもしれねえ!!」

「やだ、もうやだ……。早く行かなきゃ。みんなを助けないと」

なおも焦点の定まらない瞳を出口に向けているミョンリに、ヘイヴィアはサバイバルキットの中からアンモニアの瓶を取り出した。蓋を開けてミョンリの鼻に近づけると、咳き込むような音と共に、ようやく彼女は理性のある瞳でヘイヴィアを見た。

「あの二人は……あの二人はどうするんです？」

「理解しろミョンリ。あいつらは、もう……」

「分かっています!!」

怒鳴るように、ミョンリは遮った。

「分かっているんです。そんな決まりきった事を議論したいんじゃないんです。あの二人の遺体は、どうするんですか？　せめてドッグタグぐらい回収してあげないと」

「できたらとっくにやってる」

吐き捨てるように、ヘイヴィアは言った。

自分の声色が思ったより平淡な事に、彼は自分で驚いていた。

「遺品なら整備基地にもある。兵舎を調べればあいつらの髪の毛だって残ってるだろ。今は死者に付き合う暇はねえんだ。俺らだけでも生き残るぞ。通信の中核はクックマンごと失われた。俺らの小型無線機じゃ爆乳の上官まで連絡もつかねえ」

「炭鉱の奥に逃げ込めば……って言いますけど、『信心組織』軍の軍事施設なんですよね。いくらUAV主体って言っても、施設内部には人間の兵士がいるはずですよ」

「そうだ」

ヘイヴィアは乾いた唇を強引に動かして、笑みの形を作ろうとした。

それは見事に失敗した。

「だが、あのオブジェクトの前に戻るよりかは一〇〇倍マシだろ」

8

ヘイヴィアとミョンリの二人は炭鉱の奥へと向かう。

入口のすぐ奥にあったのは、簡易式の検問のようなスペースだった。大型機材搬入用の踏切のようなゲートと、その横に人間が通るための小さな門があった。人間用の門はプレハブのような簡単に組み立てられる直方体の建物で、前と後ろに扉が一つずつ用意されている。

警戒するヘイヴィア達だったが、警備の人間がいる様子はなかった。

白々しいＬＥＤ電灯だけが、設備を照らし出している。

「くそ。いっそ真っ暗闇の方がまだマシだぜ。予想以上に影が伸びてやがる」

「あっちのプレハブは何なんでしょう？」

「エアカーテンか何かの施設だろうな。入っていく時より、出ていく時の方が厳重にやられるパターンじゃねえか」

「鉱山内の粉塵を落とすための？」

「そういう名目で、石炭を隠し持ってねえかどうか徹底的に調べるための」

「そんな、金山じゃないんですから」

そんな事を言い合いながら、ヘイヴィアとミョンリは踏切のようなゲートを乗り越えて先へと進む。

その先の坑道は、幅は二メートル前後、高さは五メートルほどだった。炭鉱という割に内部は清潔で、天井も壁も地面も明るい色の樹脂のようなもので固められていた。

軍用の懐中電灯を使う必要はなかった。

当然、この施設で働く人達のためのものだろう。等間隔でＬＥＤ電灯が並んでいて、坑道全体を薄明るく照らし出していた。

「壁の樹脂は何なんでしょう？」

「……この辺りはもう石炭が採れねえんだな。だから四方八方固めて、無駄な粉塵が舞い上がるのを防いでる。肺に重い障害を残すかもしれねえし、粉塵爆発の原因になったりもするからな」

「何で埋蔵量が分かるんです？　実はこの壁の向こうに別の資源が眠っているかもしれないじゃないですか」

「超音波を使えば分かるんだと。それに、もしも新しい資源が見つかった時は簡単に崩して掘り進められる。重々しいコンクリートじゃなくて、わざわざ樹脂を使ってんのはそのためだろ」

「物音が聞こえないのもそのためでしょうか」

「手当たり次第に掘って迷路みたいにしてるんだろうぜ。入口付近は、始業時間と終業時間ぐらいしか人の出入りはねえのかもしれねえ」

そうであってほしいと、二人とも願っていた。

こんな狭い場所で『信心組織』軍の兵士と鉢合わせになり、銃撃戦になったら勝ち目はない。銃声は次から次へと新しい敵兵を呼び寄せ、あっという間に包囲されてしまうだろう。

ところが、

「おかしいな……」

「見張りの兵が一人もいませんよ」

「考えてみれば、炭鉱の出入り口にもカメラ一つなかったな。ルートが固定されている以上、

そこに一つでも設置していりゃ、侵入者の可能性を大幅に減らせられるはずなのに」

「ここ、軍用炭鉱……ですよね？」

「そうじゃなきゃおかしいだろ」

ヘイヴィアとミョンリの二人は、小さな部屋へとやって来た。

無人の空間だった。

おそらく作業員の休憩所になっている場所なのだろう。わざわざ採掘現場から遠くに休憩所を作っているのは、多少利便性は悪くても、騒音や粉塵から遠ざかりたいという心理が働いているのかもしれない。

簡素なソファや冷蔵庫、電子レンジなどが置いてあった。

さらに際立っているのは、壁に貼り付けられたポスターのような物だった。

「……これ、『正統王国』の言葉ですかね」

「それにしちゃあ、文法が随分と間違ってねえか」

「『信心組織』の軍用炭鉱に、何でこんなものが？」

ヘイヴィアは休憩所のテーブルの上に置いてある物を手に取った。『正統王国』用の言語の辞書だった。ページはボロボロになっていて、背を除く三方の側面が黄色く変色していた。よほど繰り返し読み込んだのだろう。あちこちのページに付箋が貼ってあったり、蛍光マーカーで色分けされていたりする。

彼はパラパラと辞書のページをめくりながら、
「妥当な線なら、スパイ養成所ってトコか？」
「本気で言ってます？」
「……だよな。軍の諜報部が本格的に工作員を育てるつもりなら、逆にこんな杜撰な言葉遣いにやならねえよな」
言いながら、ヘイヴィアはソファ近くに置いてあった段ボール箱の中身を覗き込んだ。何らかのパーティで使ったものだろう。様々なプラスチックの飾り付けや、手描きの横断幕のようなものが丁寧に仕舞われている。
広げてみると、そこには少々文法のおかしい『正統王国』言語で、こう書かれていた。

『正統王国』にいる将来のお友達みんなへ。
少ないですが、飲み水井戸の工事費用の足しにしてください。

何だこれ……とヘイヴィアは本気で驚いていた。
仮にも軍用炭鉱の施設の中に、こんな敵国を擁護するような文字列の存在が許されるとは思えない。皮肉や嘲弄ではなく、本気で相手国の事を考えてこんな内容の横断幕を作っていたとしたら……。

「ここ、軍用炭鉱じゃねえのか……？」

「むしろ、反戦団体の施設かもしれません」

ミョンリが親指と人差し指で摘んでいるのは、『信心組織』軍の方針からはかけ離れた、ひどく平和的な内容の書かれた会報だった。

「洒落や冗談ではなさそうですよ。こっちには、ここ二年の具体的な送金額が記載されています」

情報は食い違っていた。

しかし。

何故、どこで、どうやって食い違った？

9

クウェンサーとシャルロットの一人も、地下空間で怪訝な表情を浮かべていた。

シャルロットは坑道を照らすＬＥＤ電灯に顔をしかめている。どうやら、自分の影が壁に伸びているのが気に入らないらしい。

樹脂で固められた床を歩きながら、クウェンサーは質問する。

「……随分と下りましたよね？」

「二〇〇メートル以上は下っているだろうね」
「やめてくださいよ。改めて正確な数字を言われると、途端に疲労が増してきます」
「私は聞かれた事に答えただけだ」
シャルロットは大して表情を変えずに、
「炭鉱なら一般的に一キロ、場合によっては四キロ以上も掘り進めるものだ。この辺りはまだまだ玄関だよ――」
言いかけた彼女の口が、唐突に動きを止めた。
肩に紐で提げていたはずのアサルトライフルを、まるで知恵の輪のように、滑らかに素早く取り外し、流れるようにコッキングレバーを引いて、両手で構える。
ガサリ、という物音とほぼ同時だった。
爆弾しか持っていないクウェンサーには援護のしようがない。ライフル弾を浴びないようにするため、彼はとっさに樹脂で覆われた壁に背中を押しつけた。
その時だった。
坑道の角から何者かが顔を出した。
寒冷地用の分厚いコートを着込んだその人物は、二〇代前半ぐらいの女性だった。
おそらく炭鉱の作業員だろう。
表情には怯えがあるが、彼女は少しずつこちらへ近づいてくる。

両手で何かを持っていたが、それは決して銃ではなかった。

（救急箱……？）

怪訝な顔をするクウェンサーの耳が、カチリという小さな金属音を捉えた。

シャルロットがアサルトライフルを構え直した結果、肩紐を繋げる金具がぶつかった音だった。

ライフルの銃口は、作業員の女性の体の中心を正確に狙っている。

そしてシャルロットは警告も発しなかった。

引き金に触れている人差し指が、躊躇なく動く……ッ!!

「――ッ!!」

ぞわり、とクウェンサーの指先に嫌な震えが走った。

その感覚に逆らわず、クウェンサーはとっさにシャルロットのライフルの銃身へと飛び付いた。

「……ッ!!　どけっ!!　貴君!!」

短い声と共に、クウェンサーの視界が回った。銃を奪おうとする敵兵に対する近接格闘術の一種なのだろう。そう気づいた時には、彼は背中から地面に落ちていた。衝撃に、呼吸の仕方を忘れそうになる。

「が、は……っ!!」

仰向けで呻くクウェンサーは、ようやく作業員の女性が救急箱を放り捨てて逃げ出すのを見た。だがシャルロットの動きに容赦はない。作業員が角の向こうに消えるより早く、改めてライフルを構え直す。

「だめ、です!!」

「黙ってろ!!」

声を掛けられた事でほんのわずかにタイミングを外されたのか、五・五六ミリのライフル弾が作業員の背中を撃ち抜く事はなかった。

作業員が完全に消える。

シャルロットは舌打ちすると、起き上がろうとするクウェンサーを押し戻すように、その鼻先へライフルの銃口を突きつけた。

「説明を」

「……げほっ……こ、ここは軍用炭鉱ですけど、あの作業員の服装と装備、身のこなしから察するに、軍人じゃありません。おそらく徴用されている民間出身の労働者でしょう。炭鉱が二～三シフト制だったら、この時間帯にいてもおかしくはありません。大体、民間人でもなければ、この状況で救急箱なんて持ってくるとは思えません」

「だから何だ。箱の中身が銃器でないという保証はどこにある？　そもそも丸腰の彼女が仲間に報告すれば、すぐに大量の作業員が押し寄せてくるぞ。それとも、この現代戦で女に武器

は向けないなんて気障な台詞を吐くつもりじゃないだろうな？」

「……この状況で派手な銃声と死体を作ったら、それこそ逆効果です。あっという間に取り囲まれるに決まっているでしょう」

「ふん。そういう建前か」

シャルロットは苛立った様子で銃口を逸らした。

学生や民間人は督戦の対象ではない、というのが、かろうじてクウェンサーの寿命を繋げたようだった。

「だが、それなら貴君の手で作業員を安全に無力化するべきだったな。これでは危機的状況は変わらんよ。この軍用炭鉱はＵＡＶ主体で警備しているようだが、完全に兵がいないかどうかの確証はない。それに、民間の作業員だって何十人、何百人と坑道に押し寄せれば、十分な脅威になるぞ。ヤツらは『正統王国』軍の制服を着ているというだけで、容赦はしなくなるはずだ。民間人を逃がしたから、なんて単純な事例だけで見逃すとは思えない」

「……分かっていますよ。すみません」

「そう思っているなら早く立て。一刻も早くここから遠くへ移動しよう。蟻の巣のような坑道が一〇〇キロ以上広がっているとはいえ、所詮は狭い屋内だ。向こうに居場所を悟られれば勝ち目はなくなると思った方が良い」

樹脂製の壁に手をついて立ち上がるクウェンサー。

そんな彼に、シャルロットは腰のホルスターから豪奢なリボルバーを抜き取ると、軽く放り投げた。

「銃器は所持していないようだな。部隊の方針かもしれないが、緊急時だ。私の権限で貸し与えておく」

「ええと、ありがとうございます」

「戦力としてじゃない。自殺用だ」

シャルロットの言葉に、リボルバーの重みが、気に増したような気がした。

「作業員は民間人である可能性が高いが、だとすれば、一発でスマートに殺してくれるような兵器は所持していないかもしれない。土木用の工具で即死もできずに体を砕かれ続けるのは酷だぞ。だからそういう覚悟もしておくんだ」

「……」

「これは貴君が作業員を逃がした結果生じたリスクだ。戦場の選択とはこういうものなのだと学んでおけ」

かくかくと頷きながら、クウェンサーは受け取ったリボルバーから弾丸を一発抜いて暴発の危険性を排除した上で、ブーツと足の隙間へと銃身を差し込んだ。

二人は早足で坑道を歩く。

できるだけ早く、少しでも遠くへ進みたいのは事実だが、他の兵や作業員から奇襲を受けた

ら元も子もない。

クウェンサーは樹脂で固められ、ツルツルの天井を見上げながら、

「一〇〇メートル……か。この上は崖下の海底かもしれないんですね」

「彼らの採掘計画がきちんとした理論に基づくものだと願おう。違っていたらいつ水没するか分からないぞ」

「それにしても」

換気が行き届いているのか、それほどジメジメした印象もない空気を一度吸ってから、クウェンサーはこう切り出した。

いつ取り囲まれるか分からない緊張を、少しでも紛らわせたかったのだ。

「一、四と二七の合同作戦。さらには『信心組織』軍のウィングバランサー。ただの炭鉱を巡る攻防にしては、妙に大規模な部隊を展開させているとは思いません？」

「軍用炭鉱を制圧すれば、オブジェクトの燃料の供給量を減らす事ができ、それは敵対勢力の動きを詰まらせる一助にも繋がるという話は聞いていないのか」

「炭鉱なんてそこらじゅうにあるでしょう」

「それら一つ一つへ少しずつダメージを与えていく事で、総合的な国力の低下に繋げられるのではないか？」

「双方合わせてオブジェクトを三機も使って？　もしもナッツレイが本当に『信心組織』軍の

スパイだったら、あれだけ浸透していたスパイまで消費して？　一度本性を出したスパイは、どれだけ深く潜っていた人間でもそこから離れざるを得なくなるっていうのに」

クウェンサーは眉をひそめた。

「山ほどある炭鉱の一つにそれだけの価値があるなら、もっと狙いやすい採掘場へ標的を変更するのが筋じゃありませんかね。率直に言って、ここまで大規模に部隊を展開させるほど、執着するような材料があるとは思えません」

そこまで言ったところで、彼らは別の坑道へ出た。

地面には簡素なレールが取り付けられていて、手近な壁には電動のパネルのようなものが設置されている。レールの上には、バスタブ程度の大きさの小さな車両が停まっていた。

「電動のスライドリフトの一種だろうな。もっとも、乗るのは人ではなく石炭の方だが」

「……」

「どうした」

「石炭じゃないかもしれません」

言いながら、クウェンサーはスライドリフトへ身を乗り出して、底の方に残っていた黒い岩石に手を伸ばす。大きな岩をソフトボールぐらいに砕いたような塊だった。

石炭と言えば黒い塊、というイメージがあったシャルロットは、クウェンサーに突きつけられても何を伝えたいのか理解できず、小さく首を傾げてしまった。

そこで、クウェンサーはザラザラした塊のある一点を軽く撫でて、
「……ここに透明な粒があるの見えますか？」
「何だこれは」
「炭素の塊」
即答してから、クウェンサーはゆっくりとした声で言い直した。
「ダイヤモンド」
ピクリ、とシャルロットの眉がわずかに動いた。
しかし、その先を説明する事はできなかった。

だんっ!!　と。
突然横の細い坑道から伸びた手がクウェンサーを摑み、壁へと背中を叩きつけたからだ。

何が起きたのか理解するのに時間が掛かった。
シャルロットはとっさにライフルを構えようとしたようだったが、その動きが途中で止まった。顎を上へ突き上げるように、襲撃者がクウェンサーへ拳銃の銃口を押し付けられているから、ではない。
襲撃者の顔に見覚えがあったのだ。

「……よおクウェンサー、こんな所で何してやがる」
「ヘイヴィア……？」
「テメェがヘマしたせいでこっちはボロボロだ。クックマンとウェスティは死んだよ。ここで頭ブチ抜くとは言わねえが、返答次第では手足に風穴ぐらいは空けさせてもらうぜ」
「ナッツレイだ」
答えたのは、クウェンサーではなくシャルロットだった。
正直、普段と違う鬼気迫るヘイヴィアの顔を間近で見て、クウェンサーは声も出なかった。
その間に、シャルロットの冷静な声だけが伝わる。
「貴君らの部隊の中に『信心組織』軍の諜報員がいた。私達もチャールズという学生を失った。事前に看破できなかった責は負うつもりだが、彼だけを一方的に糾弾するのは誤りだ。一番に断ずるべき相手は他にいる」
「……その台詞だけで、笑って仲直りしろとでも？」
「どうしてもと言うのであれば仕方がない」
そう告げると、シャルロットは改めてアサルトライフルを構え直した。
今度こそ、ためらいはなかった。
「私の任務は督戦だ。軍規に反し作戦全体の効率を悪化させる因子を、確実に始末するのが私の仕事だ」

チッ、とヘイヴィアは舌打ちした。
クウェンサーの顎から忌々しそうに拳銃をどけると、彼はシャルロットに頭を下げた。
「すみません。引き際を作ってもらうために、汚れ仕事を押し付けてしまいました」
「どうせ本気で撃つ気はなかっただろう」
シャルロットはライフルの照準から顔を離すと、ほんの微かに笑みを作る。
そんな彼らのやり取りを見て、ようやく物陰から東洋人の少女、ミョンリが顔を出してきた。
クウェンサーは重たい息を吐いて、
「……生き残ったのはこの四人だけか」
「裏切り者も入れりゃ五人だがよ」
ヘイヴィアは拳銃をホルスターに戻しながら、
「上もそろそろ泥沼になってんだろ。お姫様とウィングバランサー、真っ向からぶつかれば勝ち目はねえって話だ。いつまでもつかは分からねえ。俺らもそろそろどう進むか決断した方が良いかもしれねえぜ。作戦会議をしようかクウェンサー。持ってる情報全部話せよ」
「あのう」
と、ミョンリが横から口を挟んだ。
「ところで、クウェンサーさんが持っているのは何なんですか？」
「これ？」

クウェンサーはソフトボールほどの黒い岩を軽く持ち上げて、さっき言った言葉をもう一度口にした。

「ダイヤモンド」

10

整備基地ベースゾーンで、フローレイティアは苦い顔をしていた。

こうしている今も断続的に重たい震動が足元を揺さぶり、天井からパラパラと細かい塵のようなものが降ってくるのが分かる。

ヤバいかも。

純粋にそう思う。大規模なレーダー施設の支援を受けたウィングバランサーは、縦横無尽の高速移動でベイビーマグナムを追い詰めていた。網の目のように走る崖に対し、『ジャンプで飛び越える』という馬鹿げた移動方法を持つウィングバランサーは圧倒的に相性が良いのだ。反面、ベイビーマグナムの方は行動範囲を限定され、思ったように回避行動を取る事ができない。

（……洋上に控えていたはずの友軍、インディゴプラズマはだんまりか。くそ、負けないために用意した援軍が負けた時の事を考えて行動しやがって）

このままベイビーマグナムが押されれば、ウィングバランサーの矛先が整備基地ベースゾー

ンにまで届く。

その前に『白旗』を揚げて撤退するべきか。

敵軍が奇襲作戦を仕掛けた相手に対して紳士的に取り合ってくれれば――という、極めてポジティブ思考が実現すればの話だが、それでベイビーマグナムと整備基地ベースゾーンの壊滅は回避できる。

ただし、奇襲作戦のために先行させた兵士達を回収するだけの余裕はなくなってしまうだろう。

ただでさえ無線が通じず可能性はゼロに近いが、それを完全なゼロにするには、また別の覚悟がいるものだ。

「……悩みどころだな」

タイミングが悪い、という事もある。

CS放送のスタッフ達が見学に来ている、という状況で整備基地ベースゾーンを壊滅させてしまった場合、マスコミ関係者の死が民衆に良からぬ『火』を点ける危険性もある。『君主議会』とまではいかないだろうが、『評議員』程度なら辞任に追い込まれるかもしれないほどには。

（しかし……）

フローレイティアはデスクの上にある無線機に目をやる。

（ついさっき入った情報が本当なら、やはり撤退は後味が悪い。だからといって、民間人であ

るCSの連中に必要以上のリスクを共有させる訳にも……）

その、面倒臭いCS放送スタッフと言えば……、

「ちっくしょー。何なんですかもう……」

低く呻くような、少女の声が耳に入った。

壁際では、体育座りの戦場レポーター、モニカがウジウジしている。どうやら顔や体表に莫大な保険を掛けているタイプの芸能人らしく、『安全国』のテレビ局と芸能事務所と軍関係者が協議を行ったところ、彼女だけは『一番安全な場所』へ隔離するように……という結論が出てしまったのだ。

一番安全な場所はオブジェクトのコックピットですが、と真顔で答えてやりたいフローレイティアだったが、危険度はここも似たり寄ったりだよなあ……というのが本音だった。例えば今フローレイティアが操作しているノートパソコンをモニカがひょいっと覗き込んだら、それだけで銃殺の可能性が浮上するのだから。

ただ、当のモニカの方はそうした危険性について全く認識していないようだった。理由は簡単で、

「やだやだやだ!!　もーやだあ!!　鉄道かミリタリーかインターネットか……。何かしらの『特色』をつけておいた方が売りやすいとか言っちゃってさー、あんのクソマネージャー!!　こんな汗臭い基地なんて興味ないんですってば!!　馬鹿じゃねえの。これで砲撃受けて顔面焼

け爛れたら売り込むどころかグラビア生活さようならじゃないですか!!」

という事だった。

つまり、戦場レポーターというのは宣伝戦略の一環であって、本人は軍事技術や経験とは縁遠い存在なのだ。今までの仕事も、完全に支配圏を確立し、のんびりと警備活動を行っている基地や、戦闘と戦闘の合間で比較的安全な時期に突撃取材……といった事がほとんどだったのだろう。

それで本人が飽きたか客層から飽きられたかは知らないが、『次のステップ』として、比較的穏当な戦闘行為を行っている、実戦下の整備基地ベースゾーンでの取材活動を行うようになった訳だ。

「しかもさー！　しかもよー！　せっかく興味もねーミリタリー色を選択したっていうのにさー、あの野郎どこにもいないじゃないですか!!　どうなってんですかー何のために私こんな極寒の基地でガクガク震えなきゃならないんですかー!!」

モニカは体育座りのまま、体を左右に振りながら、神様みたいなものに文句を言い続けている。

「くそ!!　あの小間使い!!　せっかくモニカ様の復興を見せつけてやろうと思ってミリタリー選んだのに、クウェンサーの野郎はどこにいるんですかー!?」

？　とフローレイティアは眉を怪訝な風に動かした。

小間使い？
クウェンサー？

11

地上では、『正統王国』軍からはウィングバランサーと、『信心組織』軍からはアークエンジェルと呼ばれるオブジェクトが、採掘施設の防衛部隊と通信のやり取りを行っていた。

最初に大型レーダー施設の管制官から。

『今なら「正統王国」軍の第一世代を仕留められる。ヤツが率先して前へ出ているのは、実力に自信があるのではなく後方の整備基地を撤退させるための時間を稼ぐつもりだ。安全を考えれば、これ以上引っ張らずにここで仕留めておくべきだ。沖合いに逃げた別のオブジェクトが、再び機を見てこちらへ接近してくるかもしれない』

応える形で、アークエンジェルから。

『まだだ。しとめるだけならかんたんだ。あんな「だい1せだい」にまけることなどありえない。だが、たんじゅんにたおしてしまっては我々のもくてきはたっせいされない。今はさそいにのる形でチャンスをまつべきだ』

四人はお互いの持っていた情報を交換した。
分かったのは両方の部隊で犠牲が出た事。大型無線機は共に失われた事。
そして、
「おいおいおいおい。って事はあれかよ、ここは軍用炭鉱じゃなくてダイヤモンド鉱山だったつーのか？　超音波機材で埋蔵量を調べていたのもそっちの方だったのか」
「いや、最初は本当にただの炭鉱だったんじゃないかな。新たな調査で思わぬ副産物が見つかった。だから」
「『正統王国』軍もそれまで気に留めていなかったカムチャッカ半島へ、一気に制圧作戦を展開させたって訳なのかよ。ホントに利権の戦争じゃねえか」
「ダイヤモンドの産出は、南米、オセアニア、アフリカなどに依存した状況だ」
と、シャルロットが言う。
「それら産出地の勢力図もそろそろ固まりつつある。推定埋蔵量に疑問を持たれている地域も少なくない。この状況で、『全く新しい、安定した供給源』が現れる事は、市場が丸ごと一つ生み出されるに等しい。どの勢力も喉から手が出るほど欲しいだろう」
「こっちとしては、ここが『軍用』炭鉱じゃなかったって事が驚きだよ」
クウェンサーは呆れたように呟いた。

彼はミョンリから手渡された、反戦団体の『会報』に目をやる。

そこには手に入れた収益がどういう風に貢献されていくのかを示す表や、その活動に採掘場でどれぐらいの人数が動員されているかなどが記されている。流石にダイヤモンドが産出されている事は伏せてあるようで、炭鉱と表記されているが。

動員数の欄を見ると、一万五〇〇人の作業員が活動しているとある。

「……しかも、作業員は『信心組織』の反戦団体らしいヤツらで、『正統王国』の貧しい人々に飲料用井戸を与えるための寄付金を稼ごうとしているだって？　俺達は一体何と戦おうとしていたんだ」

「座標自体は軍事施設として登録されている」

シャルロットが付け足すように口を挟んだ。

どこか苦い顔をしているのは、『反戦団体』の作業員に銃口を向けた事を思い出しているからか。

「ただ、現場で働く作業員に争う気はないようだな。作業員が見当たらないのは、上の騒ぎを聞きつけて退避したのかもしれない。崩落した時に救助を待つための避難部屋などが、あちこちにあるはずだからな」

「つまり、話を総合するとだ」

ヘイヴィアが締めくくるように言う。

「……俺ら『正統王国』軍の上層部は何らかの方法で、このカムチャッカ半島東海岸線にダイヤモンドがザクザク眠っている事を知った。だから急遽オブジェクトを差し向けて、戦う意思のない平和主義者だらけの炭鉱を襲撃しようって訳なのか!?　それじゃ、ダイヤモンド鉱山を守るためにやってきたウイングバランサーは完璧に正義の味方ポジションじゃねえか!!」

戦争なんて子供向けのコミックのようにはいかない。その原動力にはドロドロとした利権が絡んでいる事も多々あるはずだ。

分かってはいた。

ただ、

「露骨すぎる。これじゃどう考えても俺達が悪者だぞ……」

項垂れるような格好で、クウエンサーは呟いた。

しかし、それまで黙っていたミョンリがふとこんな風に切り出した。

「違うかもしれません」

「何がだよ、ミョンリ」

「戦争の目的」

自分自身で考えをまとめながら、ミョンリはヘイヴィアの顔を見て、それからクウエンサーやシャルロットにも順番に視線を投げた。

「ダイヤモンドじゃないかもしれません」

「何だって？」

クウェンサーが聞き返すと、ミョンリは一度だけ小さく首を縦に振った。

彼女は言う。

「『信心組織』軍の動きが気になるんです。本気でダイヤモンド鉱山を守るつもりなら、そのど真ん中で敵国のオブジェクトを待つでしょうか？　私達『正統王国』軍はアラスカからベーリング海を渡って侵攻する事は向こうにも予測できたはずです。なら、鉱山に辿り着く前に、海の上に防衛線を築こうとするのが筋じゃないですか？」

「それは……」

クウェンサーはわずかに言い淀み、そこからさらに口を開いて、

「ヘイヴィア達の話だと、ウィングバランサーは宙を跳ぶんだろ。この半人工的なリアス式海岸の地形にマッチしてる。大型レーダー施設と組み合わせて、少しでも有利な条件でウチのお姫様と戦いたかったんじゃないのか？」

「それよりもっと合理的な理由があります」

「？」

クウェンサー、ヘイヴィア、シャルロットの三人が怪訝な顔をした。

そんな彼らに、ミョンリはこう言った。

「良いですか。この鉱山で働いているのは『信心組織』の中でも珍しい、他の勢力と対話を望

む平和主義者の人達です。いくつかの大掛かりな慈善事業を行っているという事は、個人個人がバラバラに活動しているというよりは、有力団体が丸ごとやって来ているんじゃないでしょうか。戦争を続けたがっている軍の上層部からすれば、目の上のたんこぶみたいな存在でしょう」

つまり、と彼女は一度区切ると、

「そういった人達を各地から一ヶ所にかき集めた上で、オブジェクト同士の戦争の渦中に放り込んで抹殺したがっている……とは考えられませんか？」

流石にクウェンサーもギョッとした。

「……じゃあ、ダイヤモンドの情報は、俺達『正統王国』軍を動かすための餌に過ぎなかったっていうのか？」

「『信心組織』は思想の集団だ」

シャルロットが、ゆっくりと口を開く。

「そんな彼らなら、思想を恐れる事もあるかもしれない。『戦わない』という思想を。『信心組織』の上層部は間違いなく、世界規模のこの戦争を継続し、最終的な勝利を手にしたいと考えている。だから、『戦勝の利益』を求める上層部にとっては邪魔なんだろう。『平和的な解

決を求める思想を広めようとする集団』というものが」

ミョンリは頷く。

「……『信心組織』軍は反戦団体に早急な対処をしたかったけど、自分達の手で虐殺・粛清を行えば、さらに反戦の輪を広めてしまうだけになるかもしれません。でも、反戦団体が手を差し伸べていた『正統王国』軍のオブジェクトに殺されてしまったら……」

「相手を信頼しようとしていた分、より大きな反動を伴って憎悪は膨らんでいく」

シャルロットがそんな事を言う。

督戦任務の中で、人の作り出す負の感情を強く見せつけられてきたからだろうか。彼女の言葉は、静かだがズシリと重たく響いた。

ヘイヴィアは慌てたように、

「待て待て待て！　まだ憶測だろ。ミョンリの考えが的を射ている確証はねえんだぜ」

「憶測に憶測を重ねるけど」

クウェンサーは真上を指差して、

「お姫様とウィングバランサーは、まともに戦えば勝ち目はないって話だったろ。にも拘らず、未だに坑道内のスピーカーから勝利宣言は発せられてない。いくら何でも、軍の象徴であるオブジェクトを撃破すればパレード状態になるものだろ。機体の強さは絶対だ。奇跡なんてものが入り込む余地はない。なのに今でもお姫様が生き残っているっていうのが、すでに『信心組

織』軍の怪しげな動きを象徴していないか？」

「……つまり、まともに戦う気がねえってのか。ウイングバランサーの方には」

「ベイビーマグナムを誘導して、本当の標的のいる方へ照準を合わせようとしている」

シャルロットは早口で告げた。

「どちらのオブジェクトが鉱山内に攻撃を仕掛けるかは問題じゃない。戦闘の過程でいずれかのオブジェクトが砲撃を撃ち込めば目的は達成させられる」

「でもよ」

ヘイヴィアは否定材料を探して安心したがっているような調子で、

「この採掘場って、海岸線に沿って一五〇キロ、内陸へ九〇キロもあるんだろ。オブジェクトの砲撃を使ったって、全域を潰せるのか？」

「採掘場の深さは一〇〇〇から四〇〇〇メートル程度。となると、怖いのは上より極寒の海水じゃないでしょうか。複数ある特定のポイントを砲撃するだけで、坑内は莫大な海水によって溺死と凍死のリスクで埋め尽くされます」

「後は『混戦の中で』を『敵国が動いたせいで』に少しずつ情報をいじっていきゃあ、何も知らねえ『信心組織』の民間人は一気に扇動させられちまうって訳かよ」

「このままじゃ泥沼だ」

クウェンサーが焦りをそのまま口に出した。

「お姫様が利用される前にケリをつけないと、大変な事になるぞ。この鉱山で働いているのって何人だ。ええと……『会報』によると、一万五〇〇人か。その全員が『信心組織』の国策のために皆殺しにされてしまう」

「ここが単なる炭鉱だったのなら、大幅な機械化で人員削減されていただろう。だが、ダイヤモンド鉱山となると話は別だ。細かい原石を傷つけずにより分ける作業には、人の手が必要だからな」

シャルロットは即座に答える。

そこで、ヘイヴィアが口を挟んだ。

「けどよ。具体的にはどうすんだ？　確かに『信心組織』軍の連中がヤバい計画を企ててるのは分かるけどよ、俺らの手でどう止める。まさかと思うが、生身の俺らの手でウイングバランサーをどうにかしろってんじゃねえだろうな」

「できればここに留まっていたいとか言うつもりか？」

クウェンサーはわずかに息を吐いて、

「『信心組織』軍の最終的な標的がこの鉱山だとすると、この中にいるのが一番危険な気がするけどな」

くそっ、とヘイヴィアは吐き捨てる。

ミョンリはわざわざ小さく手を挙げて、

「では、具体的にはどのように動きます？」

「お前達はポイント1へ向かう部隊だったよな。大型レーダー施設とウィングバランサーを繋ぐ照準補正情報を逆手に取るため、妨害プログラムを流すための。電子機器はまだ生きているか？」

「ええ。でも、まさか……」

「やる事は変わらない」

クウェンサーはミョンリが取り出した携帯端末を多少いじくり、妨害プログラムを自分の端末にもコピーさせながら、

「違っているのは俺達の存在がバレているかどうか。でも、上の方から響いてくる震動が収まらないのを考えると、今のところウィングバランサーはお姫様との戦いに夢中になってると思う。この間にポイント1へ近づいて妨害プログラムを流す」

「難しいぜそりゃ」

ヘイヴィアが呻くように言う。

「その方法で何とかなるなら、爆乳の上官だって最初っからあんな複雑な作戦は計画しなかったろ。お姫様の登場をラストに回したのは、そうしねえともたねえからだ。そして現在、お姫様は予定を繰り上げて舞台に上がっちまってる。このまま進めても自分で行き止まりに向かうだけだぜ」

「予定が悪い方向にズレた以上、万全の態勢で安全な計画なんて期待できない。……少なくとも、生身の歩兵が二〇万トンの塊に突っ込んでいくよりははるかにマシだと思うけど？」

「ちくしょう。何で『逃げる』っつー賢明な判断ができねえのかねテメェは!?」

クウェンサー達四人は坑道の中を進む事にした。ポイント1へ向かうとはいえ、地上のルートは無数のＵＡＶが飛び交い、二機のオブジェクトが激突する激戦区だ。少しでも安全な道を進んだ方が良い。

（……どこに隠れているかは知らないけど、作業員が近くにいないのは幸いだったな）

別に人道うんぬんの話ではなく、こんな狭い坑道にパニックを起こした人達が押し寄せたら、悪意がなくても圧死させられる可能性もあったからだ。

内部はツルツルした樹脂の壁で覆われていたが、所々には剝き出しの黒い岩肌があった。そういった所は坑道の作りも甘く、崖に湿った木でできた橋が渡してあるだけの場所などもある。クウェンサー達は、ポイント1近辺からやってきたヘイヴィア、ミョンリに先導されながら坑道の中を歩いていく。

その時だった。

ピシリ、という細い音をクウェンサーは耳にした。

横合いの樹脂でできた壁に、薄い亀裂が走っていた。頭上では今もオブジェクトが戦っている。その震動で坑道全体が揺さぶられ、壁にひびが入ったのかと思った。

だが違う。

ゴッ!!　という耳をつんざく破砕音と共に。

いきなり岩肌を崩し、その奥から巨大な機械の塊が突っ込んできたのだ。

四人はそれぞれ坑道の前後へ飛び、転がるようにして機械の塊を回避する。反対側の壁の樹脂へ激突し、ミシミシと軋んだ音を立てる機械の塊を、粉塵越しにクウェンサーは凝視した。

「パワードスーツ……!?」

軍用兵器ではないだろう。手足のパーツがやたらと太い割に、装甲には妙な隙間があった。ボディを動かすのに必要な機構も丸見えで、防備よりも整備のしやすさを優先しているためだろう。

「くそっ、何だこりゃ！　鉱山の採掘用モデルか!?」

パワードスーツの向こう側からヘイヴィアの声が聞こえる。向こうは坑道の奥……目的地の方だ。つまりクウェンサーはパワードスーツに道を阻まれた事になる。

クウェンサーの背筋に悪寒が走った。

鉱山の作業員じゃない。

クウェンサー達が予測した通りの人物像だとすれば、ここの作業員はこんな行動に出たりは

しない。

（……分かるよ卑怯者）

無機質なカメラのレンズと、目が合った。

（……このクソスパイが。鋼鉄の向こうで馬鹿笑いしているのが筒抜けだぞ!!）

岩盤を削り取り、掘り進めるために作られた無骨なアームがクウェンサーの頭へと向かってくる。ガリガリギリギリと、重たい歯車のような音が響いてくる。

避ける暇はなかった。

クウェンサーの小奇麗な頭部が、太い指先で丸ごと摑み上げられる。

ヘイヴィアはとっさにアサルトライフルを構えた。

だが、それを制止したのは他ならぬクウェンサーだった。

「があ……ッ!?　げ、う、よせヘイヴィア!!」

「何でだよ!!」

「あんな分厚い装甲に撃っても貫通するはずがない!!　あちこちに跳弾が散ったら死ぬのは俺達の方だ!!」

「けどよ!!」

ヘイヴィアは照準装置から目を離そうとしない。

だが事実として、ライフル弾ではパワードスーツの装甲を撃ち抜く事はできない。

そしてこのまま放っておけば、ほんの数秒でクウェンサーの頭部は握り潰されてしまう。

その時だった。

ガッキン!!　という鈍い金属音が坑道に響き渡った。

横合い。

パワードスーツが突き破って来た壁の穴から、新たな人影が現れた。彼女は採掘用のツルハシを振り下ろし、パワードスーツの掌と手首を繋ぐ関節部分の隙間へと、その先端を鋭く突っ込んだのだ。

パワードスーツと一口に言っても様々な用途・機種があるが、採掘用のモデルは一般的に、関節部分の気密性にはあまり気を配っていない。むしろ放熱のため、積極的に隙間を空けている傾向がある。

装甲と装甲の隙間に潜り込んだツルハシの先端は、内部の機構にまで食い込み、手首の動きを強引に食い止めていた。

パワードスーツの指先の動きが止まる。

地面から浮いていたクウェンサーが、ボトリと落ちた。

「が……あ!?」

呻き、地面に伸びるクウェンサーの手を、誰かが摑んだ。

『正統王国』軍の兵士ではない。

以前、救急箱を持ってこようとしていた、『信心組織』の、そして反戦団体の作業員の女性だった。

「早く!!」

ややイントネーションのズレた、しかし『正統王国』の人間にも伝わる英語で、作業員はそんな事を叫んだ。

「いつまでもはもたない!! 今の内に離れないと……ッ!!」

ミシミシミシッ!! という鈍い音が聞こえたのはその時だった。

手首の関節部分にツルハシを突き刺したまま、パワードスーツが強引に腕を動かした。ボギン!! と何かが砕ける音と共に、破壊されたツルハシが地面に落ちる。あの程度では、パワードスーツの馬力を抑える事はできなかったのだ。

パワードスーツが、その巨大な拳を握り締め、思い切り振り上げる。

狙いはクウェンサーか、

(いや違う!!)

とっさに彼は作業員の女性を突き飛ばした。

直後、女性を狙っていた拳が空を切り、樹脂で覆われた坑道の床に激突した。

樹脂が砕け、岩盤に亀裂が走り、震動と共に粉塵が舞い上がる。

「貴君!!」

叫び声と共に、床へ転がったクウェンサーはシャルロットに引っ張り上げられた。そのまま引きずるように距離を取らされる。

「作業員は!?」

「こっちで回収してるよ!!」

答えたのは、パワードスーツを挟んだ坑道の向こう側にいるヘイヴィアだ。作業員の女性は何か言おうとしていたようだが、粉塵のせいで激しく咳き込んでいる。

「ヘイヴィア、ミョンリ、そのまま下がれ!!　下手に応戦するなよ！　ライフルを使えばどうなるかは分かるな!?」

「おいふざけんな!!　こっちにゃ対戦車ミサイルだってあるんだぜ!!」

「生き埋めになりたいのかお前は!?　良いから下がるんだ!!　早く!!」

「分かったよ、クソったれのナイト様!!　作業員は適当な所で解放しておく。テメエもテメエで勝手にくたばったりするんじゃねえぞ!!」

多少ためらうような空気があったが、やがて複数の足音が遠ざかって行った。先行したのは民間の作業員を連れているヘイヴィアとミョンリ。こちらに残っているのはクウェンサーとシャルロットだ。

ギチギチギチギチ、と油圧の機構を不気味に響かせ、パワードスーツは完全にこちらへ体を向け直す。

三メートル以上の体躯は、坑道をほぼ完全に埋め尽くしていた。脇をすり抜けたり足元を潜り抜けたり、といった方法でやり過ごせるとは思えない。

シャルロットはゴクリと喉を鳴らしてから、クウェンサーに声を掛けた。

「さて貴君。我々はどうするべきだと思う」

「念のため確認しますけど。あの中身、一体誰だと思います？」

無言で破壊された壁からこちらへ体を向け直すパワードスーツを見て、シャルロットは端的に答えた。

「このタイミングで奇襲を仕掛けてくるヤツなど、あの裏切り者しかいないだろう」

「なら、ナッツレイのクソ野郎にはきっちり借りを返しましょう」

12

とはいえ、クウェンサー達は真正面から採掘用パワードスーツに突っ込んだりはしない。軍用モデルではないとはいえ、岩石の塊を効率良く砕き、軽度の落石・崩落から搭乗者を守るように設計された建設重機だ。ライフル弾程度でどうにかなる相手ではない。

不幸中の幸いなのは、速度が出ない事か。余計な震動を誘発してしまう事で、無用な崩落のリスクを避けるという意味合いもあるのだろう。走って退却するクウェンサー達が即座に捕ま

るような事はなかった。そして採掘用のモデルであるため、敵には飛び道具は存在しない。

「この関係は今だけだ」

シャルロットは苦い調子で呟いた。

「すぐにスタミナの問題が浮上するぞ。起伏の激しい坑道の中では、あっという間に体力が奪われる。そしてパワードスーツとの差を詰められる。その前に突破口を見つけなければ、私達は二人まとめて丸めた肉団子にされるだろう」

「距離を稼いでいるのは逃げるためじゃありません」

彼女の隣を走るクウェンサーは、背負ったバッグからプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出しながら、

「吹き飛ばしても余波に巻き込まれないようにするためです」

「言われてみれば、貴君の兵科は工兵だったか。だが密閉された坑道内では、衝撃波は屋外よりも長距離へ伝わっていくぞ」

「ストレートに使えばね。ですが、ちょっと頭を使えば軽減できます」

言いながら、クウェンサーは信管を突き刺した『ハンドアックス』を壁と地面の接点である角の近くへ放り投げた。さらに走りながら、量を少なくした『ハンドアックス』を天井に向かって放る。粘土状の爆弾はそのまま樹脂の天井へと貼り付いた。

「貴君、まさか……」

「念のため、両手で耳を塞いでおいてください」

言いながら、クウェンサーは背後を振り返る。

採掘用パワードスーツが今まさに地面に置いた『ハンドアックス』を踏みつけたところだった。クウェンサーは無線機のスイッチを親指で操作し、二つの信管に命令を送る。

起爆した。

ただし、それは採掘用パワードスーツの足元にあった爆弾ではない。その後に少量設置した、天井の爆弾の方だ。

樹脂の壁が崩れ、ガラガラと音を立てて土砂のシャッターがクウェンサー達とパワードスーツを遮る。

そこで、もう一つの信管が起動した。

土砂のせいで電波が通らない事を見越して時間差で起動するようにセットしていた、『壁の向こう』にある本命の爆弾に対して。

ドゴッ!!!!!　という爆音と共に。

クウェンサー達の体が薙ぎ払われた。

多少距離を取っていて、間に土砂の壁を設けておいたにも拘らず、彼らの体が床に転がされ

るほどの衝撃波が坑道を突き抜けた。樹脂の壁にビキバキと亀裂が走る。まるで風呂のパイプ洗浄のCMのように、大量の粉塵が坑道を一気に通過していく。

「……貴、君……。あと……少……だった、ら……飛ん……破片……手榴弾……なっていた……ところ、だぞ」

すぐ近くでシャルロットが何か文句を言っているようだったが、一時的に聴覚のおかしくなっているクウェンサーには聞き取れなかった。

咳き込みながら、彼は粉塵の向こうを覗き込む。

その時だった。

轟!!　と空気が大きく動くのを肌で感じた。粉塵が引き裂かれる。その奥から、不器用な動きで巨大な塊が接近してくるのをクウェンサーの視覚は捉えた。採掘用パワードスーツだ。足元が多少黒く焦げていたが、動きに違和感はなかった。予想以上の頑強さだ。

シャルロットに腕を摑まれる。

そのまま引っ張られる形で、クウェンサーは強引に退却させられる。

「あの程度の爆発じゃ駄目だったのだ!!」

ようやく、聴覚が復活した。そして最初に聞いた言葉はとても絶望的な声色だった。

「でも、あれ以上の爆薬を使ったら俺達も生き埋めになりかねません!!」

「貴君、設置方法を考えるんだ」

シャルロットは顔の汚れを腕で拭いながらそんな事を言う。

「爆風の向きを調整し、集束する事でも破壊力は調整できる。そして無用に衝撃波を広げなければ、それだけ生き埋めにされるリスクも減る。必要なのは鋼板などの分厚い――」

そこで、声が途切れた。

後方から迫る採掘用パワードスーツに新たな動きがあった。

鉄のグローブのような腕を使い、傍らの壁を切り崩す。そしてサッカーボールほどの大きさの塊を摑み取ったのだ。

（ヤバい……!?）

声を出す暇もなかった。

パワードスーツがその膂力をフルに使って、岩石の塊を投げつけてきた。

文字通り砲弾のような勢いで飛んできた塊に対し、シャルロットはクウェンサーの体を横へ突き飛ばした。岩石の塊はシャルロットの伸ばした腕をわずかに掠めた。彼女の細い体が、不自然なスピンを描いて地面へ叩きつけられる。

「シャルロットさん!!」

「チッ。服を引っ掛けただけだと思ったが、そのまま腕を折られるとはな」

起き上がろうとして、シャルロットは顔をしかめる。

「おまけに足もやられたようだ。こちらはひねっただけみたいだが、これ以上は進めない」

「くそっ!!」

叫ぶと、クウェンサーはシャルロットの折れていない方の腕を取った。そのまま自分の肩に回し、強引に立ち上がらせる。彼女が肩に掛けていたアサルトライフルも拾い上げた。

「貴君、やめておけ。その方法では被害を拡大させるだけだ」

「黙ってください」

アサルトライフルの銃身の下部にはグレネードのようなものが取り付けられていた。しかし冷静に確かめてみると、それは爆発物を発射するためのものではなく、レーザー発振器を大量に束ねて散弾銃のように組み合わせた機材だった。

当然ながら、レーザーと言っても、オブジェクトに搭載されるような、鉄板を引き裂くようなものではない。

敵の誘導兵器の照準をごまかすための装備なのだ。

（……IRジャマー……。ようはレーザーポインターを束ねただけのオモチャか。こんなもんでパワードスーツとどう対抗しろっていうんだ!!）

「私は貴君の部隊の人間ではない。貴君は派遣留学の『学生』であり、状況は緊急時判断が認められるほど絶望的だ。私を見捨てたとしても軍法で処罰される事もない」

「それを言っているなら、今から俺達が助けようとしているのは敵国の民間人です」

「貴君、話を聞け」

「良いですか」

遮るように、クウェンサーは言う。

こうしている今も、採掘用パワードスーツは着実にこちらへ近づいてくる。

「極東の島国は世界で初めてオブジェクトを作った国です。設計志望の人間として、そこについては多少感心しています。でも、俺はあそこの国で使われている四文字熟語でどうしても気に入らないものがある。何だか分かりますか」

「東洋文化については詳しくない」

「美人薄命」

クウェンサーが一息で言うと、シャルロットはわずかに彼の横顔を見た。

やがて、ため息と共に彼女は告げる。

「過大評価しすぎだよ」

「そうは思わないから体を張っているんですよ」

シャルロットの体重を支えながら、クウェンサーはさらに先へ進む。

しかしこのままではじきに追い着かれる。

あちこちを見回していたクウェンサーは、そこで坑道から横に分かれる別の道を発見した。

中を覗いてみると、かなり広い。バスケットボールの公式試合ができそうなほどの空間で、天井まで三階分ぐらいの高さがある。

「採掘ではなく、その後の工程のための作業場だな。向こうの方には複数のスライドリフトのレールを束ねたターミナルがある」

ただ、空間そのものは広くても、内部はかなり入り組んでいた。大量の機材が搬入されているのだ。蛇腹状に何度も折れ曲がるベルトコンベアや、『ふるい』を機械化したような大型装置。必要のなくなった岩石を捨てるためのタンク状の物体がいくつも並び、より細かい最後の仕分けを行うための、手作業用の細長いテーブルなどもある。

ただ、ここにも作業員はいなかった。

機材やテーブルの上には、黒く割れた岩石などがそのまま置き去りにされている。

元々、今は休憩中だったのか、それとも破砕音や爆発音などを聞いて慌てて避難したのか。そこまでは分からない。ただしいくつかの機械からは駆動音が響いていたし、触ると温かい装置も多かった。

シャルロットは複雑に設置された装置群を眺めて、

「これなら隠れられるスペースもあるかもしれない」

「しらみ潰しに調べられたら見つかります」

「捜索中に外へ出て、出入り口を爆弾で塞げば……」

「採掘用モデルなら土砂を掘る事もできるでしょう」

「ならどうする気だ？　広いスペースを利用して大量の爆薬を使ってみるか。それともスライ

ドリフトを使って一気に逃げるのか」

「それは……」

言いかけた時、出入り口の辺りで大きな音がした。

採掘用のパワードスーツが踏み込んできたのだ。

猶予はない。

作業場は広く、多数の大型機材が入り組んでいるため、即座に発見される事はないだろう。だが息をひそめるだけでやり過ごせるほど甘くはない。ためらえばためらった分だけ、クウェンサー達は確実に追い詰められるはずだ。

クウェンサーは小声でシャルロットに声を掛ける。

「（……あいつは何とかします。そこに隠れていてください）」

「（……貴君!!）」

呼び止めるような声が聞こえたが、クウェンサーは無視して入り組んだベルトコンベアの真下を進む。人差し指ほどの太さの柱に支えられたベルトコンベアは、身を屈めれば潜り抜ける事ができた。

クウェンサーは『ハンドアックス』を取り出しながら、手作業を行うための細長いテーブルに近づいた。テーブルの上には様々な道具が散らばっていたが、それを見た彼は小さく舌打ちする。

（……駄目だ、ここにある分だけじゃ足りない。ここが読み通りの採掘場なら、必ずあれがあるはずなのに）

あちこちに目をやるクウェンサーは、そこでピタリと動きを止めた。

作業場の壁際に、鋼鉄製の金庫が置いてあった。

サイズは大体本棚と同じ程度で、扉には古めかしいダイヤル錠があった。

「あれか」

クウェンサーは呟くと、金庫へと近づいていく。不用心な事に、金庫の近くには工具箱が置いてあった。おそらく巨大な機材の整備を行ったり、木材を切り出して棚やテーブルを追加するためのものだろう。

彼は工具箱を開け、中からL字のバールを取り出した。

扉の隙間に金属製の先端を差し入れ、てこの原理で強引にこじ開ける。

金具の破砕音は、予想よりも大きなものになった。

クウェンサーは金庫の中に目的の物を見つけると、掌の上で平べったくなった『ハンドアックス』を押し付ける。変形した爆薬を摑み直すと、今度は手近な装置のメンテナンス用の蓋を強引に取り外した。ノートの半分ぐらいの厚みの鋼板だ。足で踏みつけて凹凸をつけ、そこに爆薬を貼り付けると、電気信管を突き刺す。

その時だった。

子供が組み立てた積み木の山のような一連の機材の塊が、真下の柱を引き抜かれたように一斉に崩れてきた。機材の真下を採掘用のパワードスーツが突っ込んだのだ。バキバキと鉄の塊を踏み潰し、引き裂きながら、パワードスーツは一直線にこちらへ向かってくる。

「く……!!」

見つかったのだ。

あれだけの音を出せば、位置を知られてもおかしくはない。

クウェンサーが爆薬を足元に設置し、近くのテーブルをひっくり返して爆薬の上に置き直すのと、パワードスーツがクウェンサーへ襲いかかってきたのは同時だった。

かろうじて避けた。

そう思った直後に衝撃が走った。

鋼の巨体そのものは回避できたのだ。だが、パワードスーツが巻き込んできた装置の残骸が飛び散り、破片のいくつかがクウェンサーに直撃したのだ。歯を食いしばろうとしたが、絶叫は止められなかった。すぐには立ち上がれない。腹を引きずるような格好で、腕を使って地面を進む。

採掘用パワードスーツがこちらを向いた。

その太い腕が、ゆっくりと伸びる。

何かを仕掛けているのは、向こうも理解しているだろう。だが、そのための対策を講じる必

要はないと判断したようだった。一度、クウェンサーの仕掛けた爆弾を分厚い装甲でやり過ごす事に成功したのも理由の一つにあるかもしれない。

確かに、爆風だけではパワードスーツは倒せない。

ただし、

「……そのパワードスーツで何を採っているのか、諜報員のお前なら詳しく知っていたんじゃないのか？」

クウェンサーは笑って、無線機を操作する。

「ダイヤモンド。世界で一番硬い鉱石だぞ」

キュガッ!!　という爆発音が間近で炸裂した。

意図的に歪めた鋼板によって爆風の向きを調整された上で、プラスチック爆弾の『ハンドアックス』の表面に多数埋め込まれたダイヤモンドが、散弾のように撒き散らされた音だった。

それらは分厚い金属の塊で構成された機材へ次々に風穴を空けていった。ツルツルの樹脂でできた壁にいくつもの亀裂を入れた。そして、言うまでもなく一番近くにいた採掘用のパワードスーツへ、豪雨のように降り注いだ。

本来、弾や砲は硬すぎても砕けてしまい、威力を出せないため、ダイヤモンドは不向きだ。

だが、軍用ではない、採掘用のモデルを貫くには充分な破壊力があった。鋼板の隙間に潜り込んだ無数の宝石は、凶弾の嵐と化した。

派手な音と火花が弾け飛び、あれだけ巨大だった採掘用のパワードスーツがふわりと浮いた。装甲は割れていた。油圧の部品を稼働させるための黒いオイルが地面にこぼれている。それは、別の色の液体と混じり合っていた。赤くて錆びた鉄の匂いのする液体だ。

パワードスーツはもう動かない。

クウェンサーはゆっくりした動作で起き上がると、至近距離からの散弾攻撃を浴びて破壊されたパワードスーツへ視線を投げる。

「……すげぇな。キラッキラ。ダイヤモンドまみれじゃん」

吐き捨てるように、彼は言った。

「良かったな。世界で一番豪華な死に化粧だ」

13

クウェンサーとシャルロットは地上を目指した。

ヘイヴィアとミョンリの二人が先行してしまったため、クウェンサー達にはポイント1へ繋がる順路が分からないのだ。

「ヘイヴィア達の方は無事に逃げ切ったみたいですね」
「貴君が気にする作業員も、今頃は適当な場所で解放されている事だろう」
「……まだ怒ってます？」
「いや、今回ばかりは貴君の方が正しいよ。結果論だがね。率直に言って、殺さないで良かった」
相変わらずクウェンサーはシャルロットに肩を貸したままだった。彼女が肩に掛けていたアサルトライフルも、クウェンサーが持ち運んでいる。
「迷路のように入り組んだ坑道で時間を潰してしまうよりは、上に出た方がまだマシだ」
「地上からポイント1へ向かうんですか」
「その前に、整備基地ベースゾーンへ連絡を取りたい。彼らはまだ正確な事態を摑めていない。何ができるか分からないが、情報だけでも伝えておいた方が良い。私達の無線機では長距離通信はできない。しかし、基地に近づけば連絡は取れる」
何度も折れ曲がった上り坂を進み、彼らは地下の採掘場の出入り口までやってくる。
顔を出して外の様子を確認した。
夜の闇に、この世の終わりみたいな光景が広がっていた。
全長五〇メートルを超える怪物兵器同士が砲撃戦を繰り広げている。塊のような爆風が地面を舐め回し、所々で崖がクッキーのように崩れていた。甲高い音が鼓膜を叩き、ボディブロー

のような衝撃を腹へ伝えてくる。コイルガンの砲弾がオレンジ色の軌跡を描き、下位安定式プラズマ砲が青白い閃光を発する。北極圏の暗闇が、人工的な兵器によって強引に引き裂かれていた。

「UAV群が見えません」

「これだけの爆風だ。巻き込まれれば制御を失って墜落する。だから引き返させたのだろう。何しろ、一機五万ユーロだからな」

となると、一足先にポイント1へ向かったヘイヴィア達が妨害プログラムを流せる確率は多少上がったのではないだろうか？

（……あの弱腰のヘイヴィアが逃げ出していなければの話だけど）

もっとも、向こうからすればいつまで経っても合流の兆しのないクウェンサー達を『逃げやがった』と思っているのかもしれない。しかし、今はいちいち誤解を解いている暇はない。

改めて状況を確認する。

戦況は『正統王国』軍の方が不利だった。

ウィングバランサーは特徴的なオブジェクトだった。二つの同心円状の推進装置と本体の球体を繋ぐ二〇本近い脚。機体前方中央に設置された巨大なコイルガンの主砲。そして重心や急旋回時の慣性に合わせてバランスを保つための『錘の翼』。過去の海戦時の映像データにはなかったが、今は崖を飛び越すように繰り返し何度も跳躍していた。

「すごい。ヘイヴィアの報告通りだ。本当にあの巨重が飛び跳ねている……」
「過去の戦闘時には隠していたのか、あるいは平面状の海戦時では跳躍する必要性を感じられなかったのか。何にしても厄介な敵だな」
シャルロットの言っている事に間違いはなかった。
ウイングバランサーの利点は、とにかくその移動範囲の広さだった。複数の崖で切り分けられ、ガラスにひびを入れたようなカムチャッカ半島は、ベイビーマグナムにとっては面倒な地形だった。とにかく移動できる範囲が狭く、それはつまり回避行動を取りづらい事も意味している。対して、ウイングバランサーには崖を跳躍する機能がある。自由に跳ね回る事で有利な距離を維持し、大幅な回避行動を実行し、お姫様を完全に翻弄している。
唯一の救いは、ウイングバランサーが移動性を最重要視したあまり、肝心の兵器としての破壊力をおろそかにしたところか。現に、お姫様の機体は数ケ所がボコボコにへこみ、七本ある主砲もいくつかがねじれていたが、被害はそのレベルに留まっていた。すでに主砲を何発か浴びているはずである。本来であれば動力炉を撃ち抜かれていてもおかしくない状況だった。
クウエンサーは肩を貸していたシャルロットを採掘場の出入り口近辺の地面に下ろしながら、
「シャルロットさんは無線で連絡を。基地にいるフローレイティアさんに現状を伝えてください」
「ここからではまだ遠い。私達の通信機器では整備基地ベースゾーンまでは届かない」

「オブジェクトを経由するんです。ベイビーマグナムのアンテナを使えば基地まで届きます」
「なるほど」
シャルロットーズームは小さな機材を取り出しながら、
「……しかし、『信心組織』軍の傍受アンテナに引っ掛かる可能性は否定できないな」
「ウチの暗号の複雑さを信じましょう」
小型の通信機を使って整備基地に『信心組織』軍の意図の説明を始めるシャルロット。すると、自分の装備を利用されている事に気づいたのだろう、お姫様の方からクウェンサーへ連絡が来た。
『……クウェンサー、まだ生きていたの？』
「そろそろ『特技はしぶとく生き残る事です』って自己紹介しても良いような気がするよ」
吐き捨てるようにクウェンサーは答えた。
「状況は？」
『へとへと。ベースゾーンの方のてったいさぎょうはすすんでいるけど、たとえうみに出たところでにげきれない。ウィングバランサーには、パーツかんそうなしで水上に出られるきのうがついている』
「……飛んだり跳ねたり海の上を進んだり……。やっぱり時代はエアクッション型なのかなぁ。お姫様のはいちいちパーツ換装しなくちゃいけないから面倒だよ」

『でもそくどは大したことない』

若干ムッとしたように、お姫様は早口で付け加えた。

『つうじょうかんきょうでほうげきせんを行えば、私のオブジェクトがぜったいにかっていた』

「そう言えば『情報同盟』軍のラッシュも、メインのエアクッションの他に高速移動用のキャタピラを併用していたっけ」

『……どうしてここであのにくたらしい女が出てくるの？』

より一層声が低くなるお姫様。

どうやら、おほほとは本格的な犬猿の仲らしい。

こうしている今も小刻みな移動を繰り返し、ウイングバランサーからの砲撃を回避しているというのだからとんでもない。

「加勢したいけど情報が足りない。戦ってみて、相手の特徴とか分かったか？　動き方から重点的にどこかを庇っているとか」

『足回りかんれんがやっぱりデリケートみたい。しゅほうで足元をねらおうとすると、大ジャンプしてがけをとびこえるくせがあった』

「……まあ、砲の威力から推測するに、移動力を奪われればどうしようもなさそうだしな」

『あと、せなかの羽をうちぬいたときも、もうれつなはんげきをしてきた。多分あせっていたんだとおもう』

見れば、ウィングバランサー後方上部に取り付けられた翼の枚数は三枚だった。不自然なバランスだ。四枚にすれば均等になるのに、と思う。

（……となると、ウィングバランサーの脚を狙うような攻撃を考案するところから始めるのがベターか。莫大な圧縮空気によって機体を浮かばせる機構と、空中でも確実にバランスを保つための翼。どこかに反撃の糸口はないのか？）

その時だった。

ウィングバランサーの動きに明確な変化があった。今までは、主砲を含め、ありとあらゆる無数の砲をベイビーマグナムへ突きつけていたのだが、その向きがいきなり変わったのだ。

そう。

クウェンサー達の方へ。

「気づかれた!?」

カメラやセンサーなどで位置を把握されたのか。あるいは無線電波の送信元を追跡されたのか。ともあれ、オブジェクトに狙われたらひとたまりもない。たとえ走って逃げても、砲の衝撃波や余波だけで生身の人間など吹き飛ばされてしまう。

ウィングバランサーは一切容赦しなかった。

照準を合わせると同時に、即座に砲撃が来た。

『クウェンサー!!』

そこへ、ベイビーマグナムが勢い良く割り込んだ。ごんッ!!!!!!　という分厚い金属音が複数響いた。五〇メートルを超えるオブジェクトが生身の兵士の盾になったのだ。

その時、いきなりウィングバランサーの狙いが逸れた。

特にクウェンサー達が何かをした訳ではない。盾になるため、ベイビーマグナムも動きを止めていた。この状況で向こうが狙いを外す理由がない。

考えられるとすれば、

（ヘイヴィア達、ポイント1の妨害プログラムか!?）

しかしウィングバランサーは止まらない。

圧縮空気の噴き出す音が耳についた。

そう思った時、夜空を流れるオーロラに影が生じた。オブジェクトの巨体だ。崖を飛び越える要領で、ベイビーマグナムを一気に飛び越えようとしたのだ。

ウィングバランサーの下面は足回りに関する機構だけが集中しており、砲らしい砲は一切なかった。ただし、あれだけの巨体を支えるほどの空気の塊を扱う機体だ。着地と同時に周囲一帯へ暴風が吹き荒れる。そんな事になれば、たとえ身を伏せてもちっぽけなクウェンサーの体は数十メートルも吹き飛ばされてしまう。

『っ!!』

お姫様はとっさに真上に砲撃を行った。大小一〇〇門近い砲が唸る。だが不幸だったのは七

門ある主砲の内、上方攻撃を得意とする砲が機能不全を起こしていた事か。主砲以外の砲にしても戦車とは比べ物にならない破壊力を秘めるが、同じ怪物兵器のオブジェクトに対しては決定打を与えられない。

見上げるクウェンサーの前で、二つの同心円状の推進装置が一〇近くに分裂した。パイナップルの缶詰のように切り分けられた複数の扇形が、クウェンサーを突き刺す槍のように構えられる。人間で言うと足の裏に当たる部分だった。そこに様々な大きさのレンズが取り付けられているのを、クウェンサーは発見した。

小さな『糸口』。

その直感に抗わず、クウェンサーはスリングベルトで肩に引っ掛けていたアサルトライフルを両手で構え直し、その銃口を真上に向ける。

だが、

（時間が、足りない……ッ!!）

ウィングバランサーが間近に落ちる。

その直前で、ベイビーマグナムの一番小さいコイルガンが発射された。ウィングバランサーに向けて、ではない。クウェンサーから少し離れたところにあった巨大な岩を狙い撃ったのだ。

彼の盾になる位置へ、砕けた岩石を配置するために。

衝撃波の煽りを受けてクウェンサーがひっくり返るのと同時に、ウィングバランサーが地面

に着地した。その巨体を中心に、全方位へと暴風が撒き散らされる。
岩陰に身を隠し、雪の上に伏せていたにも拘らず、クウェンサーの体が数メートルも浮かび上がった。だがこれでもマシな方だった。遮蔽物がなければ数十メートルは転がされていたはずだ。
ゴンゴン!!　と、ウイングバランサーの主砲が唸る。
お姫様はとっさに高速で回避行動を取るが、球状ボディの右手側の端を抉られる。
七本の主砲アームが反撃に移ろうとした瞬間、ウイングバランサーの等分された脚部が再び軋んだ音を立てた。
大きく跳ぶ。
ベイビーマグナムを飛び越え、その死角となる位置をキープするために。
あの位置はまずい。
とっさにクウェンサーはそう思った。
先ほどの主砲一連射すら、ベイビーマグナムをチェックメイトの位置へ追い込むための布石に過ぎなかったのだ。
着地後の次の一撃で、確実にお姫様は撃ち抜かれる。
クウェンサーは雪の上を転がりながら、ライフルの照準補正装置のカバーを開けた。今のままでは『出力』が足りない。

そう。

彼が利用したがっているのは、ライフル弾そのものの破壊力ではない。

そんなものではオブジェクトには全く通用しない。

（……圧縮空気を閉じ込めて緩衝材に使うエアクッションなら、本来は底面積が広い方が効率は良いはずだ。にも拘らず、何でウィングバランサーはわざわざ足回りをバラバラに分解して、底面積の利点を放棄してしまう？）

クウェンサーの頭上をウィングバランサーが通過する。

圧縮空気の噴出口とは別に用意された、複数のレンズがキラリと光る。

（……それは地形の凹凸に対応するため。エアクッションは地面と機体底面が平行になるように圧縮空気を発する事が重要になる。だから実際には陸上よりも水上の方が実用化が進んでいる。一点だけが盛り上がった大地で使うと、その突起の部分が引っ掛かってしまう恐れすらあるから。ウィングバランサーはその辺りの問題を解決するため、足回りを一〇近くに分解し、地面の凹凸を計測して、常にピッタリと張り付けるように配慮をしている訳だ。だとすれば、地面の凹凸の計測方法は……）

クウェンサーはサバイバルキットの調理用ナイフの先端を使い、照準補正装置内の小さなネジを回す。それはレーザーの照射量を調整するためのダイヤルだ。

カバーを閉じる事すらせず、彼はアサルトライフルを真上に向けて、

（……あのレンズ!!　赤外線だ!!）

一気に指を動かす。

照準補正用の赤外線レーザーが真上へ照射される。

ウイングバランサーの地形計測用の脚部レンズへ浴びせかけるように。

計測に用いられるものと同じ赤外線を使用する事で、誤作動を誘発させるために。

「粘るなクソッたれ!!　ここで落ちてしまえ!!」

クウェンサーは叫ぶ。

だが、これだけでは足りない。

ウイングバランサーの下部全体にわたってびっしりと取り付けられた数百数千の赤外線センサーに対し、クウェンサーが手にしているのはライフルの先端に取り付けられた、ちっぽけな照射装置だけだ。これでは相手のセンサーを完全に潰すには至らない。

（ここまでやっても……!!　くそ、他に何か!?）

しかし。

クウェンサーのアサルトライフルには、ある専用の追加装備が取り付けられていた。

ＩＲジャマー。

誘導兵器の照準をごまかすため、レーザーポインターのような発振装置を大量に束ね、散弾銃のように赤外線レーザーを照射するための特殊な装置だ。

引き金を一気に引く。

人間の目には見えない光線の密度が、一気に増す。

ギュイ!!!!!!　と、ウイングバランサーの複数のレンズが痙攣（けいれん）したように揺（ゆ）れ動く。地面を認識できなくなっているのだ。

着地の基準を失ったウィングバランサー。

しかしそれでも二〇万トンの巨体は落下を続けている。

『避けて!!』

お姫様に言われるまでもなかった。

ほとんど転がるような格好で、クウェンサーは真横へと移動した。

直後だった。

カムチャッカ半島にクレーターが生じた。

衝撃波（しょうげきは）が撒（ま）き散らされた。

クウェンサーの体が、想定以上の距離を大きく跳んだ。硬い地面を転がされ、体中のあちこちが切れた。しかしエアクッションが機能していた頃に比べれば格段にまともだっただろう。

やはり誤作動は成功したのだ。

「くそ……あの野郎はどうなった……？」

痛む体を動かし、強引に身を起こすクウェンサー。

落下の衝撃を抑え込む事ができず、ウィングバランサーの一〇近くある脚の半数以上が地面へ直接激突し、破壊されてしまった。そして残る脚だけでは巨体を支える事はできなかった。そのまま沈み込むような格好で、ウィングバランサーは動きを止めてしまっていた。

そうなってもまだ戦意はあるのか、主砲を動かそうとするウィングバランサー。しかし機体の向きを変える事もできないため、ベイビーマグナムがちょっと回り込むように移動するだけで、簡単に砲の圏外へ逃げる事ができた。そしてベイビーマグナムはいつでも主砲を撃てる。これでチェックメイトだ。

クウェンサーはお姫様へ短く指示を出した。

「降伏勧告」

『そのまえに、ねんのためにそくめんからウィングバランサーのしゅほうをうちぬいておく』

轟音が発せられ、『信心組織』軍の最後の抵抗がねじ伏せられた。衝撃波の余波を受けてクウェンサーの体がまともに転ぶ。

口の中に入った雪を吐き出しながら、クウェンサーは採掘場出入り口近辺へ置いてきたシャルロットの方を見た。彼女は岩壁に背中を預けたまま、軽く手を振っていた。どうやら彼女も無事だったらしい。

これでカムチャッカ半島を巡る戦いは終わったのだ。

『信心組織』軍が狙っていた、反戦団体に対する虐殺と、それを利用して『正統王国』への戦闘意欲を高める国策は挫かれたのだ。

そう思っていたクウェンサーの耳に、通信機越しのフローレイティアの声が飛んできた。

『ポイント1、ポイント2、まだ生き残っていたか!!　無線が通じないから全滅したと思っていたよ！　悪運が強いのは何人いる!?　とにかくすぐにそこから離れろ!!』

「フローレイティア、さん？」

お姫様のオブジェクトに備えられた大規模アンテナを経由して、クウェンサーは整備基地ベースゾーンとの通信を行う。

すぐに返答があった。

『一連の首謀者の狙いが分かったの。戦闘のどさくさに紛れてカムチャッカ半島東海岸線の採掘場で働く「信心組織」の民間人を虐殺する事よ!!　「正統王国」軍と「信心組織」軍の戦争を継続し、より多くの戦力を投入させようとするために!!　どいつもこいつも戦勝の手柄ばかり狙っているようだが、通常の作戦通りに戦争が終わると自分達の手でそれを摑めない。だから「条件を整える」ためにわざと戦争期間を延ばして調整しようとしているの!!　そのきっかけを作るために、連中は採掘場を利用した。だから動ける者はできるだけ採掘場から離れなさい!!　このままでは砲撃に巻き込まれる!!』

「それなら大丈夫ですよ」

肩の力を抜いて、クウェンサーは言う。

何らかの理由で情報の取得に遅れが生じているようだが、フローレイティアの悩みは杞憂だ。

「『信心組織』軍のオブジェクトは行動不能です。もう戦闘は終わりました。ウィングバランサーが採掘場の民間人を殺害する可能性は失われました」

『……ええ。ウィングバランサーの方はね』

不吉な響きがあった。

時限爆弾のコードを切断したはずなのに、まだタイマーのカウントダウンが止まらないような焦燥感が伝わってきた。

フローレイティアは、続けてこんな事を言ったのだ。

『でも、この戦争を激化させたいのはウィングバランサーだけじゃない』

「まさか……」

カムチャッカ半島には、何機のオブジェクトが展開されていた？

一機目は、『正統王国』軍のベイビーマグナム。

二機目は、『信心組織』軍のウィングバランサー。

そして。

三機目は、沖合いへ撤退した『正統王国』軍のインディゴプラズマ。

今さらながら、クウェンサーは気づかされる。

ナッツレイは『信心組織』軍のスパイではなかった。

より激しく、より大規模な戦争を待ち望んでいる者は、『信心組織』軍だけではなかったのである。

つまり。

彼は同じ『正統王国』軍の、第二四機動整備大隊から派遣されたスパイだったのだ。

低い振動音が聞こえた。いつの間にか、水平線の向こうへ逃げていたはずのオブジェクトが再びカムチャッカ半島へと接近していた。その主砲が、照準を合わせるためにゆっくりと動いているのが分かる。

ウィングバランサーにではない。『信心組織』軍のオブジェクトはすでに行動不能に陥っている。ベイビーマグナムにでもない。同じ『正統王国』軍同士で撃ち合いをする理由がない。

インディゴプラズマは何もない場所へギチギチと主砲を突きつけていた。

いいや違う。

見何もない、しかし実際は地下に広がるダイヤモンドの採掘場へ向けて、確実に照準を合わせていた。

「やめろ……」

クウェンサーの脳裏に、反戦団体の会報や、救急箱を持った作業員の顔などが浮かぶ。

一万五〇〇人、という具体的な数字が出てくる。

そんな彼の目の前で、お姫様のベイビーマグナムが動いていた。しかしそれはインディゴプラズマを攻撃するためではない。ここからでは距離の問題もあるし、軍規の問題として、未だにあのオブジェクトを攻撃して良いのかどうか判断できないからでもあった。

つまり。

お姫様は先ほどと同じ、クウェンサーやシャルロットを庇うために機体を動かしたのだ。これから巻き起こるであろう、破壊と惨劇を予見した上で。

「やめろォォおおお

海水と混ざり合って入道雲のような水蒸気の塊を作り出す。もはや採掘場は単なる生き埋めの地獄では済まなかった。大量の海水が流れ込み、封じ込められた人々へさらに壮絶なとどめを刺していく。

クウェンサーには、そんな凄惨極まりない光景を眺めている暇はなかった。ベイビーマグナムに盾になってもらっていたはずなのに、機体を回り込むように伝播してきた衝撃波が彼の両耳へ襲いかかって来た。一瞬で彼の体から力が失われ、そのままストンと真下へ落ちる。指先に震えがあった。それを無理に押さえつけ、クウェンサーは起き上がろうとする。

爆撃は一〇分以上も続いた。

一瞬あれば空母の内部を丸焼きにできるほどの破壊力を秘めたオブジェクトが、一〇分間も民間人へ攻撃し続けたのだ。

「……」

悪夢のような砲撃の後に、静寂が訪れた。もはやクウェンサーには言葉がなかった。泥と煤にまみれた顔を拭う余裕すらもなかった。彼の眼前に広がる光景は、何もかもが崩壊していた。赤い炎、黒い煙、オレンジ色の溶岩、白い水蒸気。地獄を描く絵の具の色は決まっていた。人肉の肌色や鮮血の赤などがここからでは見えなかったのは、救いなのだろうか。どちらにしても同じ事だ。どうせ採掘場にいた人々は皆殺しにされている。

インディゴプラズマは、大きく旋回した。

悠々と、真の戦勝者を気取るような格好で、殺戮者が沖合いへと退却していく。

追う気力はなかった。

クウェンサーの勝利条件は、単なる破壊では得られないものだった。

『ポイント1、ポイント2、生存者は報告を』

無線機からフローレイティアの声が聞こえてきた。死にましたと本気で答えてやりたかった。しかしそこで、銀髪の上官はこんな事を言った。

『心配はいらない。「信心組織」の反戦団体一万五〇〇〇名は無事よ。元々、あそこが炭鉱の他に秘密のダイヤモンド鉱山としても機能していたのが幸いだった。彼らには逃げ道が用意されていたの』

「……？」

『カムチャッカ半島東海岸線がベーリング海地震と第四次潜水艦基地建造計画とが重なって、複雑なリアス式海岸に似た地形を広げていったとは説明したね。そう、あそこには本当に潜水艦基地が存在した。普通、コストの関係から潜水艦を輸送用に使う事はない。でも、カムチャッカ半島からはそのコストに見合うほどの、貴重な価値のある鉱石が産出されていた』

「ダイヤモンド搬出用の、輸送用潜水艦……？」

『一〇〇隻二〇〇〇隻なんて数じゃなかったな。まあ、貴重な軍資金だから輸送中に横取りされるのを防ぎたかったんだろう。本命、陽動と合わせてそれなりの数が必要だった訳だ。今回の

件で利用されるまでは、ダイヤモンド鉱山の存在自体も隠しておきたかったに違いない。採掘場で働く連中には、それを逆手に取らせてもらった。採掘場を効率良く全滅させるように計算された攻撃だ。逆に言えば、死角に入ってしまえば何とかなる。インディゴプラズマは海水を利用しようとしていたから、潜水艦が『穴』に吸い込まれないかは流石に心配したがね』

「でも……」

まだ状況を信じられないのか、クウェンサーは思わず否定的な事を口走っていた。

「でも、どうやって……？」

『採掘場の内部と無線で連絡を取り合っただけよ。反戦団体の誰かがウチの戦死者の装備を回収したらしくてな。その中にあった周波数のデータを基に、採掘場の大規模なアンテナを利用してこちらへ連絡してくれた訳だ。私達は「正統王国」で彼らは「信心組織」。正直、話を信じてくれる保証はなかったが、彼らはきちんと耳を傾けてくれた。施設内の設備についても説明をしてくれた。だから、私達は彼らに避難のための手順を伝える事ができた。だが間一髪だったよ。何しろ反戦団体の数は一万人を超えていたからね。一時間前から動き出してはいたが、退避完了はギリギリだったぞ』

現在は『正統王国』への亡命手段の説明を求められているところだ、とそこまで聞かされて、クウェンサーにはようやく実感が湧いてきた。

（そうか……。坑道で俺達と初めて鉢合わせた作業員が救急箱を持っていたのは、彼女達が連

絡を取り合っていたから……）

『さっきも言ったが、無線が全く通じないからポイント1とポイント2は全滅したと思っていた。だからお前達とは齟齬があったんだ。まったく、いきなり戦場のど真ん中に戻って来た時は本気で焦ったよ』

インディゴプラズマの計画は成就しなかった。

採掘場の人達が無意味な虐殺を行われる事もなかった。

『今、ヘイヴィアとミョンリの方からも連絡が入った。民間の作業員を一名保護していたようだが、そちらも無事だそうだ』

民間人からは犠牲は出なかった。

誰一人。

『この勝負、他人の言葉を信じる事ができた、私達の勝利よ』

フローレイティアが締めくくるように、そう言った。

14

クウェンサーは『黒軍服』のシャルロットに肩を貸していた。彼女の片腕は折れ、足首も捻挫している。オブジェクトはクリーンな戦争を行うと言ったヤツはちょっと出てきてほしい感

じである。

「話聞いたかよ」

近くを歩いているヘイヴィアがそんな事を言ってきた。

「例のインディゴプラズマの第二四機動整備大隊が正式に『声明』を発表したってよ。上の『評議会』やら『君主議会』やらは揉めてるようだけど、これでほぼ決定だな。次の敵は同じ『正統王国』だぜ」

「……嫌な話だね。いつかのフライド評議員を思い出しちゃうよ」

「おーおー、幼女のエリート手駒にしてたクソジジィか。いたっけなあそんなヤツ」

クウェンサーとヘイヴィアがほのぼのと悪態を垂れていると、横からミョンリが口を挟んでくる。

「さ、サラッと言わないでくださいよ。分かっているんですか。それって内戦って事じゃないですか」

ミョンリの顔色にどこか陰りがあるのは、クックマンやウェスティといった戦友の顔を思い浮かべているからかもしれない。

シャルロットは黙っていた。

一言も発しない。

身内を調査し必要があれば裁きを下す督戦専門の『黒軍服』としては、今回の事態は忸怩た

る想いを刻みつけているのだろう。

クウェンサーは、シャルロットに肩を貸したまま、

「……俺達、何のために戦っているんだ？」

「少なくとも、正義や平和のためじゃねえな」

ヘイヴィアは吐き捨てるように答えた。

「俺は『貴族』の家を継いで、テメエはオブジェクトの設計士になる。今までと変わらねえよ。一、四は敵と分かったんだ。なら、せいぜい踏み台にさせてもらおうぜ」

その時、遠くにいた中年の少尉が太い声で呼びかけてきた。何かしらの作業を手伝えという事なのだろう。

「ちくしょう。また雪かきか何かだぜ。こんな事なら、俺が美人に肩を貸してりゃ良かった」

「早い者勝ち」

「分かってるよクソッたれ。おい行くぞミョンリ。こっちもせめて可愛いお嬢ちゃんと一緒に作業しねえと楽しい思い出になりゃしねえ」

「え、え？」

瞬きするミョンリを引きずるような格好で、ヘイヴィアは中年の少尉の元へと走って行った。

クウェンサーの方は、負傷したシャルロットを救護用の大型ヘリに運ぶ事が優先される。

今まで黙り込んでいたシャルロットだったが、やがて彼女はクウェンサーの首に腕を回した

状態で息を吐いて、
「……まったく、こんなのは私の仕事じゃないよ。私は督戦専門の『黒軍服』だぞ」
「それを言ったら俺は派遣留学の『学生』ですよ」
「実際にウィングバランサーを大破させたくせに」
「買い被り過ぎですよ。ベイビーマグナムが支援してくれなければ、ウィングバランサーが着地しただけで吹き飛ばされていました。そもそも、歩兵だけだったら、ウィングバランサーは脚がやられた後も大小無数の砲で抵抗してきたはずです」
「ただまあ」
一度区切るように間を空けて、シャルロットは言う。
「あの緊急時に、あそこまで部隊の勝利に貢献したんだ。これは叙勲があるかもしれないな。多分、戦勝特別個人勲章辺りなら該当すると思う」
「え？　でもそれは正規軍人の勲章でしょう？」
「今言ったのは民間人でも授与できるさ。ウォーターストライダー大破時にも表彰されていただろうが。それと一緒」
「……本当に？」
「本当だ」
そこまで言うと、シャルロットはほんの少しだけ唇を緩めた。

「実を言うと、私は君のファンでもあった。だから嘘はつかないよ」

「？」

「馴染みのバーでは君達二人組がオブジェクトを破壊するたびに、マスターが新しい記念カクテルを作ってくれるからな。今ではすっかり君達の動向が気になって仕方がないのだよ」

「それはファンとは呼ばないでしょう……」

呆れたようにクウェンサーが言った時、ばさりという小さな音が聞こえた。彼の軍服のポケットから、雪の上に何かが落ちたらしい。クウェンサーは足元に目をやって、ギクリと身を強張らせた。

煙草の箱ほどのサイズの、小さなラバー製の箱だった。

蓋の留め具は外れていて、中身が少しこぼれていた。

透明な粒だった。

俗に言う、ダイヤモンドと呼ばれている鉱石だった。

「……貴君」

督戦任務を主目的とする『黒軍服』のシャルロット　ズームの声色が、ウルトラ冷え切っていた。

クウェンサーは即座に思った。

もう笑うしかない。

「は、はは。あははははははあははははははあははははははあ

第三章　名誉に値段はつけられない
〉〉ヴィクトリア島緊急追撃戦

1

輸送機の中だった。

数十機の編隊の中身は、様々な車両や機材ですし詰め状態だろう。そんな中で、フローレイティアの乗っているものだけは上質な調度品などの『将校の私物』ばかりがあった。というより、そのためにわざわざ輸送機を一機追加しているような状況だ。

ここまで区別しなくても良いのにな、とフローレイティアは思うのだが、どうやら今回輸送機を提供した空軍の連中はそういったもてなし方が好みらしい。派手なドッグファイトをする時代ではなくなったので、デリバリーの作法を学ぶ事にしたのだろう。

「第二世代のインディゴプラズマを統制する『正統王国』軍第二四機動整備大隊は、アラスカルートから大西洋を渡ってヨーロッパへ帰還しようとしている模様です。現在、北極圏のクイーンエリザベス諸島近海の分厚い氷を砕きながら東方へ移動中。すぐに効率が悪いと気づいて

陸上へ上がろうとするでしょう。手近な所では、ヴィクトリア島辺りが上陸ポイントに使われる可能性が高そうです」

電子シミュレート部門の女性オペレーターからの声を聞きながら、指揮官のフローレイティアは静かに煙草の煙を吐いた。

「……しかしまあ、攻撃決定までこんなに時間を使うとはね。本来ならベーリング海を封鎖すれば、インディゴプラズマと二四を切り離す事ができ、すぐにヤツらの物資は底をつくはずだった。対応が遅れたせいでアラスカに潜ませてあった部隊と合流し、物資の補給も完了。ヤツらは今頃戦勝パーティでもやっているかもしれないな。……それにしても、『君主議会』のお偉い連中は枕片手に話し合っているのか」

「歴史的に見ても珍しい現象ですし、二四もそれを見越しての計画だったのでしょう」

「CS放送の連中がインタビューに来ていたのは幸いだったな。おかげで一部始終の証拠映像には事欠かなかった。もっとも、バラエティ番組の制作スタッフもまさか自分達の撮影した映像がしかめっ面の軍上層部や王侯貴族の目に触れるとは思っていなかったろうけど」

「沿岸警備隊は明確な敵を前にして指を咥えて通行を見守るしかできなかった事を、今後数ケ月は悪夢として見続ける事になるかもしれません」

「今時、そこまで熱心な兵士は稀だよ。私も含めてね」

嘲笑するようにフローレイティアは笑う。

「だがようやく、これで二四も正式に『我々の敵』だ。遠慮なく吹き飛ばせる。いくらオブジェクトを保有している大隊とはいえ、連中が保有しているのは一機だけよ」

「ええ。少なくとも、『正統王国』軍全体と渡り合えるレベルとは思えませんね」

「こちらの戦力は。オブジェクトは何機使える？」

「アラスカ方面で展開されているのは我がベイビーマグナムと、スノウクエイク、アクティブスレッジの三機です。一週間ほどあれば、ヨーロッパから大西洋を渡って、五機の追加があるそうですが」

「……そいつは保身第一『評議会』のお歴々が大西洋上の防衛ラインに当てようとしているものだろう。こちらに協力する訳ではない。たとえ私達のオブジェクトが爆破されても、一歩も動くなと命令されているはずよ」

そもそも時速五〇〇キロ近く出せるオブジェクトなら、大西洋を渡るのに一週間もかかるはずがない。向こうは『整備基地の装備を運搬するため時間がかかる』などの言い訳を重ねるつもりだろうが、すでに本音は透けて見えている。ようは、大戦力は大西洋に留めておきたいのだ。

「……それよりも、スノウクエイクやアクティブスレッジが二四と同調している、なんて話はないでしょうね？　この状況で背中を撃たれたらひとたまりもない。編隊に乱れがあると察知されれば、アラスカ方面を狙う他勢力が動くとも限らないし」

「失礼ですが、一二四の過激思想に共感できる人物がいるとでも？　一応、友軍には『黒軍服』が督戦に向かっているようですが、おそらく税金の無駄遣いになるでしょう」
「ま、所詮は頭のイカれた『貴族』サマの妄言か」
「では、一二四の追撃作戦はいかがいたしましょう」
そうね、と呟いてフローレイティアはホワイトボードに貼り付けられた巨大な地図に目をやった。彼女はテーブルの上に置いてあった羽ペンを摑むと、ダーツを投げるような格好で、地図の一点へ勢い良くペン先を突き立てる。
「これ以上ヤツらを進めるとあれがあるし……ヴィクトリア島。ここでインディゴプラズマを粉々に吹き飛ばす」

2

クウェンサーとヘイヴィアは、後部が開いた輸送機から氷の大地へと降り立っていた。
アラスカ方面北方、北極圏にあるヴィクトリア島で急遽建造された野戦飛行場である。
「……良くもまあこんなカチンコチンの場所に着陸できるもんだ。これが滑走路？　アイスホッケーできるんじゃねえの」
呆れたように言うヘイヴィアは、クラクションを鳴らされ、慌てて道を譲る。下り坂状のカ

ーゴドアを利用して、航空機の中から大型の軍用車両が次々と滑走路へと出てきた。

クウェンサーは寒冷地用のコートの上から自分の体を抱き締めつつ、

「お姫様は？」

「とっくに着いてるだろ。俺らは後方で整備基地の構築。そうそう何度も最前線に飛ばされてたまるかっつーの」

呆れたように言うヘイヴィアは、そこで額を押さえて頭上を見上げた。

「しっかしインディゴプラズマもクレイジーな事をしやがると思っちゃいたが、まさか悪名高いプライズウェル　シティ・スリッカーの部隊だったとはな。ここ二～三年影が薄かったけど、一体いつスカウトに声掛けられて秘密裏にエリートの道を目指し始めたのやら」

「どちら様？」

「血統主義者。言ってしまえば嫌味な『貴族』の典型例よ」

横から口を挟んだのは、細長い煙管を咥えたフローレイティアだ。整備基地が構築されるまではやる事がないのか、多少手持ち無沙汰な印象がある。

「自分を中心とした特定の集団でのみ、戦争と政治を操る事を至上の目的と勘違いしている馬鹿野郎ね。数十年前に完全廃止された奴隷階級の復活も提唱している。何でも、『正統王国』の経済状況が停滞しているのは労働力の不足にあるとか言ってね」

「その身分階級の刷新に利用しようとしているのが『言語』だ。シティ＝スリッカーは熱烈な

言語保護活動家でもある」

「言葉の話せる話せないで差別するアレの事？」

「そう。シティースリッカーは『正統王国』正式言語の衰退を最も恐れてやがる。他言語バンドのメンバー暗殺や外語学校の爆破など、数件のテロの後ろ側にいるともウワサされてるぐらいだ」

いずれも嫌疑不十分だがな、とヘイヴィアは付け足した。

クウェンサーは眉をひそめながら、

「……確かに、使用者や継承者が不足して言語が絶滅する、なんて話はたまに聞くけど、シティースリッカーってヤツが危惧しているのは『正統王国』正式言語だろ？　世界的勢力の一角のオフィシャルだぞ。そんな簡単に絶滅するものかよ」

「『正統王国』正式言語は、かつてのフランス語を軸にヨーロッパの各文化のものをまとめ上げた文体よ。それはクウェンサーも分かっているはずね」

フローレイティアは笑いながら、自分の肩を軽く叩いた。

そこにある部隊章にはいくつかの文字列が記されていたが、

「ところが、軍の部隊章に使われているのは？」

「……英語」

「軍事用語やインターネットのタグ、プログラム言語なんかは今でも英語を基準にしてる場合

が多い。オブジェクト以前の旧時代からの名残だが、積み重ねた分だけ使いやすいのも事実だ。……が、例のシティースリッカーはそういった事が許せない。レストランのメニュー一つまで全て『正統王国』正式言語で埋め尽くさなければ気が済まねえって訳だ」

「どっちが言語文化を破壊しているか分からないな。ナッツレイの野郎は、そんなヤツに心酔して俺達の背中を撃ったのかよ」

「言語保護活動ってのは、ちょっと味付けを工夫すると美しいものに見えるから不思議なんだ」

ヘイヴィアはニヤニヤと笑いながら言う。

「『貴族』でも『平民』でも、同じ言葉が話せるなら、みんな友達で良いじゃねえか。男でも女でも、大人でも子供でも、肌の色が違っていても。言葉が通じるならみんなで笑顔を共有できる。それはなんて素晴らしい事なんだろう!!　……ってな」

「裏を返せば、言葉の通じない人間とは笑顔を共有するつもりもないし、人間扱いするつもりもないって訳だろ」

「ナッツレイは黒人だった」

「それを言ったらクックマンだって黒人じゃないか。ミョンリは黄色人種。『正統王国』は古い時代の王と騎士の文化を軸にしているけど、今じゃもう黒人の『貴族』だって珍しくない。そんな言葉に踊らされるような『士台』があるとは思えないけど」

「実際にあったかどうかなんて関係ねえんだ。ナッツレイ自身が『そう思われているかもしれ

ない』って心のどこかで思っていて、そいつをプライズウェル＝シティースリッカーがつつく事ができりゃあな」

「シティースリッカーは血統主義者でもあるんだよな……」

「そう。マフィアと同じで、自分の周りは血縁で固めるやり方だ。根っこのところじゃ赤の他人への信頼なんてない。『駒』の選別に言語を使ってるようなものなんだろ」

後味の悪い話だった。

シティースリッカーからすれば、得意分野の戦術を行使しただけ、なのかもしれないが。

「自分以外はどうでも良いのよ」

フローレイティアが、二四の統率者の評価を総括するように呟いた。

彼女は緩く煙を吐きながら、

「だからヤツは『貴族』の中でも浮いていた。それがヤツを焦らせた。今回の件は、軍事的に貢献を果たす事で『正統王国』内での発言権を増し、そこから言語保護活動に繋げようとしたみたいだけど……結果は分かっているよね？『信心組織』の民間人虐殺は阻止され、火種を作るのには失敗。混乱に乗じた情報操作も連鎖的に不発となった。ヤツの工作は露見し、権威は地に落ちた。じきに『貴族』としての地位も正式に剝奪され、哀れ『没落』扱いにされるでしょうね」

「でも、その前にヤツは次の行動に出た」

クウェンサーが呟くと、フローレイティアは軽く肩をすくめて、
「大西洋を渡って『君主議会』を脅し、政治の軌道修正とやらをしたいのか、あるいは東米の『情報同盟』の都市でも襲って権威を回復させるとか言い出すのか。何をするにしても傍迷惑で、軍上層部も完璧に期待してはいない。ここまで来るとちょっと叮哀想ね」
手を緩める気はないけど、と彼女は気軽に言った。
「プライズウェルーシティースリッカーの目的は『正統王国』の転覆なんてものではなく、今ある制度の中でおいしいポジションをキープする事。圧倒的な武力を保持し、いつでも『君主議会』に有効な意見を提示できる立場を入手する事。そんなトコでしょうね」
「敵はインディゴプラズマ一機だけなんですよね」
「だが、ここはプライズウェルーシティ＝スリッカーの荘園みたいなものよ。私財で運営していた非公式の兵器工場があったともウワサされている。移動中に物資の補給を受けたり、図面にはない兵器を搭載する恐れもある。油断していると手痛いしっぺ返しを喰らうかもね」
「でも、こっちは二機で向こうは一機だぜ」
ヘイヴィアはおどけるような調子でクウェンサーに言う。
「向こうが何を追加装備しようが、根本的な数が違う。俺らの勝ちは揺るがねえさ。デメリットは同じ『正統王国』軍同士で殺し合う後味の悪さぐらいだ」
「確かに、最終的な勝利なら私達が確実にもぎ取るでしょう」

フローレイティアは簡単に頷いたが、
「……ただし、その過程でこちらにも被害が出る可能性がある事を忘れるなよ。ウィンチェル家の跡取り息子は、勝利の目前でつまらない流れ弾を浴びる気はないんだろう？」
そっけない調子の声に、ヘイヴィアはおどけた格好のまま硬直する羽目になった。

3

数時間後。
大規模な車両団で構成される整備基地ベースゾーンが出来上がると、フローレイティアは早速隊員を集めて作戦前会議ブリーフィングを始める事にした。
「敵は間もなくやってくる」
プロジェクターを使って背後のスクリーンに地図を表示させながら、彼女はこう切り出した。
「敵は第二四機動整備大隊と第二世代のインディゴプラズマ。同じ『正統王国』軍人と思う必要はない。彼らはすでに『正統王国』の看板に泥を塗り、『君主議会』から正式に敵対勢力と判断されている。民間人を含む無用な被害の拡大を防ぐため、我々は同部隊と首謀者プライズウェル＝シティ＝スリッカーを確実に討つ」
どよめきはなかった。

インディゴプラズマの性質は、敵国とはいえ民間人の大量虐殺を目的としたカムチャッカ半島での行動を鑑みれば明らかだったからだ。この時代の戦争は『安全国』と『戦場』を区別する。三七を指揮するあのフローレイティアが、無線を通じて民間人を潜水艦へ誘導するという『作戦の上ではメリットを生まない行為』を行っていた事からも明らかだ。そのラインを割る戦力は、何にも増して最優先で撃破するべき対象なのだ。

「インディゴプラズマはその名の通り、下位安定式プラズマ砲の運用に特化した第二世代となる。個体としても強力だが、その上で歩兵部隊との連携も視野に入れた戦術を構築しているらしい。……この辺りは同じ『正統王国』軍ね。私達の戦果を分析し、自分達の力として取り込もうとした結果だろう」

あちこちから皮肉げな拍手が起こり、クウェンサーは閉口した。何も虐殺者に力を与えるためにオブジェクトと戦ってきた訳ではない。

重苦しい空気を払うため、クウェンサーは敢えて質問する。

「こちらの具体的な行動は？」

「基本的にはこのヴィクトリア島の海岸線で仕留める。ベイビーマグナムとスノウクエイクが陸上から進行を阻み、アクティブスレッジが海上から後追いする形で退路を断つ構図ね。二四も真っ向から勝負する事はないでしょう。おそらく歩兵部隊の工作がある。三対一の状況では勝ち目がないから、まずはこちらの連携を切り崩す作戦を展開させるはずよ」

「情報には要注意？」

「互いの足を引っ張り合えば、一対一より惨めな戦果に終わる……と二四は信じてアクションを起こしてくる。実際、そこまで簡単に戦争は進まないでしょうけど、無用な混乱が被害を拡大させるリスクは十分にある。確実に勝てる戦争で無駄死にしたくなければ、総員、気を引き締めるように」

その後、具体的な部隊の展開方法が説明された。今回は通常よりも多くの歩兵が投入されるようだ。一〇〇名以上の人員配置は、それだけフローレイティアが第二四機動整備大隊の歩兵部隊を警戒している証だろう。

作戦前会議ブリーフィングが終わると、出口に向かう兵士達に混じって、ヘイヴィアがこちらへ近づいてきた。

「ようヒーロー。テメェどっち方面？」

「F方面」

「なら一緒だな」

「進路上に爆弾を設置して、二四の歩兵部隊の車両を足止めするんだっけ？」

「おいおいやめようぜ。この土壇場で内容確認なんかやっても、無駄に緊張が増すだけじゃねえの。いつからそんなお利口さんになっちまったんだ」

「俺だってこんな受験前夜みたいな詰め込みしたくないよ。そういうのが嫌だから派遣留学し

ている訳だし。でもやっておかないと死ぬかもしれないんだぞ。インディゴプラズマは私財で拡張しているから『正統王国』軍の設計図はアテにならないってウワサもあるし。ウィングバランサーの時に、相手の機能を読み違えてひどい目に遭ったばかりじゃないか」

「……ジャンプするオブジェクトが実在するなんて事、誰にも予測できねえよ」

うんざりしたようにヘイヴィアは言う。

話し合いながら会議場を出ると、見慣れない男達が数人、廊下の壁に背を預けて座り込んでいた。格好が明らかに軍人ではない。汚れたおっさんとしか表現のしようがない連中の横を通り過ぎながら、クウェンサーはヘイヴィアに質問した。

「何あいつら？」

「CS放送のスタッフじゃねえの？　ミリタリー番組の。カムチャッカ半島から休む間もなくこっちに来たろ。『黒軍服』の連中は作戦上の理由で離脱したけど、テレビ番組の連中にはその余裕がなかった。だからここで輸送機が『安全国』に引き返すまでの間、待機しているかもしれねえ」

「こんな不祥事の真っ最中なのに、良くマスコミに外出制限がかかっていないな」

「普通なら情報保持って名目で営倉にブチ込まれてもおかしくはねえわな。ただ、ウチの爆乳は基本的に恐ろしいが、そういうところでは変に筋を通すのは美点だと思うぜ」

「……で、これから戦争始まるんだよな？　大丈夫なのか」

「知るかよ。元々そこらへんのトラブルも覚悟して最前線の整備基地まで取材に来たんだろ。少なくとも、誓約書の端の方には小さな文字でそう書かれてんだろうさ。でなければ、あの爆乳が許可を出すはずがねえ」

結局優しい人なの優しくない人なの上官サマは……？　と、クウェンサーは一度だけ振り返り、すっかり疲弊した調子のカメラマン達の顔を見た。彼らが期待していたのは『クリーンなオブジェクト同上が行う、公式試合のような戦争』だったのではないだろうか。

とはいえ、今さらそんな事に言及しても仕方がない。

クウェンサーには彼らを『安全国』へ帰す権限はないし、輸送機を操縦する腕もない。

「……となると、タレントも残っている訳か」

「おー、すごかったぜ。あそこまでいくと昔懐かしいアイドルって分類かもしれねえな。白とピンクの迷彩服だったぜ。ありゃあ、きっといちごミルクの中で銃撃戦をするつもりだな」

「この状況でサインしてくださいって言ったら不謹慎かなあ」

「戦勝パーティのどさくさに紛れりゃ何とかなるかもな」

その時、通路の角からレーションのパッケージをいくつか手にしたお姫様が出てきた。彼女もクウェンサー達に気づいたようで、こちらへ近づいてくる。

「ありゃ。これからベイビーマグナムに乗るところ？」

「うげー、相変わらず不味そうなレーション。なあ、もうちょっと平和な時にさ、一緒にスト

ライキやらねえか？」

国家反逆罪に問われそうな提案をするヘイヴィアをサラリと無視して、お姫様はクウェンサーの方に目を向ける。

「……なんか、ばあさんのようすがおかしかったんだけど」

「は？」

「クウェンサーも、じじょうはしらないみたいね」

はあ、と重めのため息をつくお姫様。どうやら気になっているらしい。

ヘイヴィアの方はさして重要に感じていないようで、

「そりゃ出撃前なら多少ナーバスになったって仕方ねえだろ。今回はオブジェクトの他にも、最前線に投入される歩兵も多いみたいだし。あれかもよ、家族のように心配していますってヤツ？」

そうなのかなあ？　と首を傾げながらオブジェクトの整備場へ向かっていくお姫様。

「……」

その背中を見送っていたクウェンサーだったが、

「あん？　おいクウェンサー、どこ行くんだよ。もうすぐ出撃だぜ」

「寄り道」

「そうかよ。ならとっととばあさんの所に行って悩みを聞いてきやがれ」

「そんなお人好しじゃないよ。最近戦闘ばっかりで設計の勉強の時間がないからさ。少しでも整備場に顔を出して知識を詰め込んでおきたいだけ」

「言い訳は良いって色男。老婆のハートをキュンキュンさせてこい」

何やら一人で納得しているヘイヴィアを放っておいて、クウェンサーは整備場の方に向かう。お姫様は早足でオブジェクトへ向かったのか、途中で追いつく事はなかった。

中に入ると、時間の流れが違っていた。

圧倒的に早い。

物や人の速度が尋常ではない。

カムチャッカ半島ではウィングバランサーと戦って、損害も少なくなかった。さらに続けての今回の戦闘。可能な限り修復しておきたいという考えがあるのだろう。何しろ、

（……相手は『正統王国』軍の登録から除外された反逆者。通常の戦争のルールも通用しない。『白旗』が使えない以上、敗北は虐殺を意味するからな）

一歩後ろは崖っぷちである。できるだけ多くのものを詰め込んでおきたいという気持ちは不思議なものではないはずだ。

「小僧」

と、背後から声を掛けられた。

振り返ると、整備兵の婆さんが工具箱を持って歩いているところだった。

「今は緊急戦闘時態勢じゃ。いちいち素人にレクチャーしている暇はないぞ」

「元々『目で盗め』って言うタイプでしょうが。自分の吸収力がどこまで現場で使い物になるのか、試しに来たってだけです」

ふん、と婆さんは一度だけ息を吐くと、指先でクウェンサーを招いてから再び歩き出した。お姫様の言う通り、やはり口数は少ない。戦闘直前だから、というだけでもないだろう。むしろ周囲の整備兵達は妙に高揚したような調子で、無理矢理な発破を掛け合っている。こちらの雰囲気の方が、本来の整備兵達のものなのだ。

整備兵の婆さんが向かったのは、オブジェクト本体の周囲を取り囲む鉄骨状の足場ではなく、そこから少し離れた所にあるクレーンだった。と言っても、港や造船所にあるような、運転席が数十メートル上方に取り付けられているものだ。

クレーンの運転席を地面に下ろさず、空中の突き出た足場から、直接運転席外周の手すり付きスペースへ飛び移るという、大変心臓によろしくない手順で二人は移動する。

「い、いつものクレーン車じゃないんですね」

「『正統王国』軍フォーマットじゃが、機材の何割かはヴィクトリア島の部隊から借り受けたものじゃ。輸送機に全て積み込める訳ではないからのう」

となると、第三七機動整備大隊の正式な車両のいくつかは、まだカムチャッカ半島に置いてあるのだろうか。

そんな事を考えていたクウェンサーに、整備兵の婆さんは双眼鏡を放り投げた。
「目で見て盗むだけなら高台に上った方があちこち観察できて楽じゃろう。現場としても、リズムの分かっていないヤツにうろちょろされると面倒じゃしな」
「トゲトゲしてるなあ……」
呆れたように言いながら、クウェンサーはクレーンの運転席に入る。
広い。一〇人乗りのワンボックスカーが丸ごと一つ入りそうなぐらいだ。座席は中央に一つあり、その周囲に様々なボタンやレバーなどが取り付けられている。さらに、
「……うわっ、足元透明。高所恐怖症の人を放り込んだら何でもしゃべりそうな感じですね」
「この手のクレーンは下方の視界を確保できなければどうにもならんじゃろうが」
「でも実際、このクレーン本当に使っているんですか？　なんか電気ポットとか雑誌とか寝袋とか、生活感溢れる小物で埋め尽くされているんですけど」
「さっき借り受けたと言ったじゃろう。向こうは好意で回してくれたものでも、こちらの現場では使い物にならん機材も多い。休憩所代わりになっとるだけでもまだマシじゃ」
ふうん、とクウェンサーは呟いて周囲を見回す。
暇潰しの道具が多い。床にはいくつかのボードゲームが広げられたままになっている。他にも見た事もない機械系の専門雑誌が乱雑に放り投げてあったり、インターネットで馬券の買えるタイプの競馬情報誌に蛍光ペンで線が記されていたりする。そんな中に、デジタル写真立て

があった。黒い髪の儚げな女性が佇んでいる。クウェンサーは手に取って、婆さんに尋ねた。

「これは誰のです？」

「儂のじゃ」

「へえ。ばあさんの娘さん？　それともお孫さん？」

「それは儂じゃ」

「!!!??」

バッ!!　とクウェンサーはデジタル写真立てから顔を上げ、それからもう一度画像データへ目を戻し、

「……ま、満月の晩だけ若返ったりする特技が……？」

「阿呆。昔撮ったもんじゃ。背景の街並みを見りゃ分かるじゃろう。今の日本列島にこんな景色は存在せん」

「え……？」

クウェンサーはわずかに動きを止めて、

「日本列島？」

尋ねられて、婆さんはわずかに舌打ちした。口を滑らせたと思ったようだ。やがて婆さんはため息をつくと、

「儂は『資本企業』からの移民じゃよ。亡命と言っても差し支えはないがのう」

そう、日本列島は『資本企業』の領分である。

実際には東西に分かれ、朝廷制度の復活を願う勢力が列島西部を掌握し『信心組織』への大規模な離脱を果たしていたり、その朝廷制度は『信心組織』と『正統王国』のどちらの力で叶えるべきかで対立があったり、『資本企業』側も高度な情報インフラの整備と共に価値観が変質し『情報同盟』的な体制に移行しつつあると揶揄されたり……極めて曖昧な火薬庫となっているものの、一応公式には日本列島は『資本企業』として登録されていた。

「とはいえ、見れば分かるじゃろうが、儂は生粋の東洋人ではないぞ」

「まあ、少子高齢化の影響で移民を大量に受け入れていますからねえ」

「そのせいでオブジェクトの技術情報が一気に広まってしまった、という歴史もあるがの」

「亡命ってのは？」

「娘夫婦」

拒まれるかと思ったが、意外とあっさり婆さんは答えた。

「ちょっとした慈善事業を行っておってな。食糧難地域に安定した農業技術を伝える活動をしておった。で、その時に使っていた『お昼に食べるコンビニ弁当のグレードを少し下げるだけで、作物が採れずに苦しんでいる人達を助ける事ができます』ってキャッチコピーが亡命のきっかけになった」

「どうして？　何も問題ないじゃないですか」

「大ありじゃ。『資本企業』は経済と企業が政治と戦争を掌握する勢力じゃ。そして大手コンビニグループが激怒した。言論を利用して経済に深刻なダメージを与える情報テロだという事にされ、娘夫婦は危うく警察の対テロ鎮圧部隊に狙撃されるところじゃった」

「……うえ」

「そんな訳で、儂らは『資本企業』の手の届かない地域へ移住する事を余儀なくされた。……しかしまあ、血統の連なりを重視する『正統王国』も楽園ではなかったがね。何しろ、その『連なり』のない移民は何かにつけて不利益を被る。まっとうな暮らしをするためには、そういった不利益を吹き飛ばすほど『絶対に必要な技術を身につけた人物』になるしかない」

元いた『資本企業』や日本列島という場所に、未練がないと言えば嘘になるのだろう。その時の婆さんの顔には、確かにそんな色があった。ただし、それでも婆さんは家族を守るために全てを捨てた。彼女の人生は、ひょっとしたらこんな戦争よりもよっぽど険しい戦いの道のりだったのかもしれない。

「で、その娘夫婦さんはどの辺に引っ越したんですか。南グレートブリテン方面とか？」

「……ヴィクトリア島東端、移民居住都市じゃよ」

戦火と真ん中になるかもしれないじゃん、とクウェンサーは地雷を踏んだ事を後悔した。

道理で婆さんの様子がおかしい訳だ。

「ウォーターストライダーから今回のラッシュまで続いた騒乱の間は、一時的に欧州へ避難し

ていたんじゃ。その騒ぎが治まって、恐る恐る戻ってきた直後にこれじゃよ」

「一応聞いときますけど、避難状況は？」

「整備基地に取材に来ていたＣＳのスタッフすら取り残されるような状況じゃぞ。あれだけの人数を退避させられる余力があると思うか？」

4

下位安定式プラズマ砲に使う特殊ガスを主砲内部に充塡する作業を興奮して見守っていたクウェンサーだったが、ヒートアップし過ぎて肝心の技術情報は何も頭に入って来なかった。何で上手くいかないかなぁ、と首をひねりつつ整備場を出ると、ライフルの銃身内部の掃除を終えたところのヘイヴィアと合流した。

「ようクウェンサー、ばあさん落とせた？」

「あのばあさんもなかなかヘビーな人生を歩んでいるみたいだった。でも和風マニアのフローレイティアさんなら目を輝かせそうな話だった」

「あん？」

怪訝な顔をするヘイヴィアだが、それ以上説明している時間はなかった。クウェンサー達としても、ここから先はゆっくりしていられない。

輸送機を使ってインディゴプラズマの予想進行ルートへと先回りした以上、敵は必ずやってくる。ぐずぐずしていても不利になるだけだ。

大型特殊車両で構成された兵舎の外に出ると、中年の少尉が隊員の割り振りを行っていた。班ごとに分けて乗り物に乗せている最中らしい。

「AからD班はヘリ、EからH班は軍用トラックだ！　隠密のI班は電動のスノーモービル！　出発前にチェーンの調子をチェックして走行時のデシベルを確認しろ!!」

「やだやだ、俺らトラックだってよ。一番泥臭いぜ。じゃがいもみてえな扱いだな」

「対空レーザー満載のオブジェクトと戦うってのに、輸送ヘリに乗せられるよりかはマシだと思うよ」

「半端な高度だとパラシュートも使えねえってのがアレだよな」

「圧縮空気で水を噴射して落下速度を落とすユニットが開発されているってウワサがあるけどあれ本当？」

世間話をしていると中年の少尉に怒鳴られた。クウェンサー達は慌ててF方面行きの軍用トラックの後部へ乗り込む。幌のついた荷台には、一〇人以上の兵士が乗り込んでいた。

「クウェンサー、トランプ持ってるヤツがいるってよ。暇潰しにポーカーでもやろうぜ」

賭けるものがない勝負なんてやる気ありません」

弱いくせに何言ってんだ、と吐き捨ててヘイヴィアはトランプ組に加わっていく。クウェン

サーは布地の隙間から厳寒の風景に目をやりながら、ぼんやりとこんな事を思っていた。
（……こんな揺れる所で細かい数字を追い掛けていたら、あっという間に乗り物酔いすると思うんだけどなあ）

5

『うるさいな。お前達の事情なんぞ知った事か。作戦は通常通り決行!!』
二〇分後。乗り物酔いでゲロ吐く寸前に陥っている兵士達に向けてフローレイティアが掛けた言葉は、予想通りと言えば予想通りなものだった。
「……クソッたれが。久々に痛感させられたけどよ、あの爆乳は本物のドSだな」
「単なる自業自得だろ」
「サラリと言うなよ。分かってたんなら忠告してくれりゃ良かったんだ」
「個人の時間の使い方にまで言及する主義じゃないんでね」
停車した軍用トラックから降りた面々の内、半数近くが乗り物酔いだった。トランプに参加していなかった者、参加はしていたけど耐性の強かった者などはケロリとしている。
クウェンサーは背負ったバッグからプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出しながら、

「ほら、通り道への爆弾の設置はこっちでやるから、お前は見張りと称した深呼吸でもやってなよ」

カムチャッカ半島の教訓か、今回支給された無線機はかなり高性能なものだった。これ一つで相当広い距離をカバーできる。

クウェンサーが爆弾を設置しようとしているのは、広い雪原の中にかろうじてライン引きされているような細い道だ。舗装らしい舗装は何もない。土を固く踏みしめたようなものでしかなかった。

これだけ広くて何もない場所であっても、人は高確率で『道』を進もうとする。倒木や岩の突起などがタイヤをパンクさせる恐れがあるし、ぬかるんだ場所にタイヤを突っ込ませれば立ち往生してしまうからだ。

見渡す限り何もない極寒の北極圏でのトラブルは、想像をはるかに上回るリスクを生む。

「お利口さんめ。そんなもんジャミングされたら使い物にならなくなるんじゃねえの？」

「実際に、全ての爆弾がターゲットを吹き飛ばす訳じゃない」

と、クウェンサーは言う。

「連中には『どこに爆弾が仕掛けてあるか分からない』と思ってもらう。向こうは怯えた分だけ自由に動けなくなる。その間に俺達は先手先手を取り続ける。連中の足を止められればそれで良いんだ。どうせ戦争を終わらせるのはお姫様の役目だろ」

「そうかよ、うぇえ……。くそ、一度吐いちまった方が気分楽になんのかね」

その場に屈んで呻くヘイヴィアを無視して、クウェンサーはさっさと自分の仕事をこなす事にした。電気信管をつけた『ハンドアックス』を、舗装もされていない道路に埋める。この場合、二四の歩兵部隊を怯えさせるため、後で回収して戦場をクリーンにするため、多少わざとらしく土や雪を被せておく方が効果的だ。

「クリーンにねえ。すっかり支配者のお言葉じゃねえか。ついこの前までオブジェクトぶつけて派手にドンパチしてやがったくせによ」

「トゲトゲしてるのは吐き気のせいか？　時代は刻一刻と変わっているんだよ。東端とかのプレハブの街、避難していた住人が戻ってきたって言うじゃん」

「ホントに大丈夫なのかよ。『資本企業』軍とか『情報同盟』軍とかさ、アラスカ方面からの撤退時に見捨てられちまった兵士達が、雪原でカマクラ作ってるってウワサもあるぐらいなのによ……うっぷ」

この辺りに仕掛けているのは、最前線の兵士達にとどめをさすためのものとは少々違う。敵の歩兵部隊が整備基地ベースゾーンを直接襲う兆しが出てきた際に、道路上の敵車両を吹き飛ばして足止めし、その間に防備を固めるための策なのだ。

「行こう。他のルートも封じるんだ」

「二四がビビって道路を使わなくなっちまったら？」

「倒木、岩の突起、雪に隠れた段差、ぬかるみ。天然のトラップに引っ掛かってくれる事を祈ろう。それに向こうはこっちがどんなルールで爆弾を仕掛けているかは分からない。どこを進もうがおっかなびっくりだから、進行が遅れる事に変わりはないはずだ」

軍用トラックに戻る事を嫌がる乗り物酔い組を強引に押し込み、クウェンサー達は未舗装の道路を進む。十字路や分かれ道など、複数のルートが繋がる地点に停まるたびに、爆弾を設置していった。

「お姫様だぜ」

ヘイヴィアが遠くを仰ぎ見た。クウェンサーもそちらへ目をやると、全長五〇メートル以上の金属の塊がやってくるところだった。カムチャッカ半島ではウィングバランサーに苦戦を強いられていたが、ここに来るまでの間に整備を終わらせておいたのだろう。新品同様になっていた。

クウェンサー達が軽く手を振ると、カメラで発見したのか、お姫様の方も主砲を軽く振って応じた。彼女の機体は一足早くインディゴプラズマの待つ海岸線へと向かっていく。

クウェンサーは上げた手を下ろしながら、

「他のオブジェクトは？　確かスノウクエイクも陸上から反逆者を襲うんだろ」

「あっち」

ヘイヴィアが指差した方を見ると、数キロ先の高台の上を巨大な影が通行している最中だっ

た。その巨体の関係上気にしても仕方がない事なのかもしれないが、どうやら敵から隠れて進むという事は全く考慮していないらしい。銃弾一発で戦死する歩兵からすれば羨ましい限りである。

「海上じゃインディゴプラズマが通ったルートをなぞるように、アクティブスレッジが近づいてんだろ。やっぱ、これで決まりじゃねえの？」

「一通り爆弾は設置し終わったけど、この後どうするんだっけ」

「AからD班の連中と合流。インディゴプラズマの周囲に隠れて妨害工作を行おうとしているであろう二四の歩兵部隊の駆逐。泥と煤にまみれて元気良く撃ち合いだよ」

「なら銃を渡してほしいよね。俺学生なんだよ？　身を守るもの何にもないってどういう事」

「俺なんかレーダー分析官だぜ。レーダー！　どこだよ!!　あの爆乳はその内ピザの配達とかも頼んできそうだぜ!!」

ぶーぶー言いながらもクウェンサーとヘイヴィアは移動を開始する。最前線の海岸まではあと数キロしかない。ここまで来ると、オブジェクトのレーダー上に大きな金属反応を表示させてしまう軍用トラックに乗っているのは逆に危険だ。二〇人以上いたF班の兵士達は、各々が二～四人単位のグループを作って散開し、時間を空けて海岸へ向かっていく。

「ちょっと待って俺達何で先頭なの？」

「頼りにされてんだと判断しようぜ。後ろの連中は全員アヒルの赤ちゃんだ」

「だからそれなら銃を渡して欲しいよねって話。二丁拳銃あれば二六〇度バンバン活躍する確信があるのに」

『クウェンサー、ヘイヴィア。馬鹿話はやめてさっさと前に進め。B班が一四の歩兵と交戦を開始したぞ』

何で無線機の双方向モードがオンになってんの!?　と顔を歪めるクウェンサーとヘイヴィア。あの分だと今までの愚痴も全部聞かれていたはずだ。現に、フローレイティアはどこか突き放すような調子で、

『B班が良い感じに手こずっている。応援に行って戦場の友情を確かめて来い』

「面倒臭せえな」

「脇役の皆さんには主役が到着するまで死ぬなと伝えておいてください」

ズズゥゥウン!!!!!　という低い轟音がヴィクトリア島の雪の大地を揺さぶった。おそらく海岸線でベイビーマグナムとインディゴプラズマも戦闘を始めたのだ。

「よおクウェンサー。こんな戦争すぐに終わるんだしよ、ここはどっかに適当な穴を掘って隠れんのが一番賢い選択肢なんじゃねえのか？」

「その場合、後でフローレイティアさんにしこたまぶん殴られそうだから、安全策とは言えないと思うよ」

低い丘を越えようとしたところで、クウェンサー達はゆっくりとした動作でうつ伏せになっ

た。その先に広がっているのは海岸線だ。二〇〇メートルほどのなだらかな大地の先に、白く凍りついた海が待っている。

そして、その海岸線に、

「いるいる。敵味方で二〇対二〇って感じだな」

オブジェクト同上の砲撃音にかき消されがちだが、ヘイヴィアの見ている先で銃撃戦が行われていた。味方のB班は着陸間際にヘリを落とされたのか、横倒しになった複数の機体を盾にしてライフルを構えている。対する二四の兵士達は、4WDや装甲車などで遮蔽物を作っていた。二四の歩兵達は、一般的な軍服とは違った。タコのような防護マスクを被り、輪郭が分からなくなるようなずんぐりとしたスーツを着込んでいる。

ちょうどテニスの審判のように、側面から銃撃戦を観察しているクウェンサーがわずかに呻く。

「何だあれ。パワードスーツか？」

「だとすりゃ遮蔽物なんて使わねえで真正面から接近してんだろ。ただの防護スーツか何かじゃねえの？」

「……細菌とか毒ガスとか使って来ないよね？」

「その割にしちゃ気密性はそれほどっぽいぜ。火炎放射器系じゃねえのかなあ。消防士みてえな印象があるぞ」

言われてみれば、二四の背中には大型のボンベがあった。それは大型ライフルの後部にホースで繋がっていた。酸素ではないとすると、火炎放射器用のナフサか何かが入っているのだろうか。まさかと思うが、銃口とノズルを兼ねている……かもしれない。

「ともあれ」

ヘイヴィアは伏せたままアサルトライフルを構え直し、中距離狙撃に必要な各種センサーのスイッチを入れ、五〇〇ミリのペットボトルほどの大きさの消音器を取り付けながら、

「お仕事開始だ。後で爆乳に優しく踏んづけてもらうために頑張ろう」

「やる事なーい」

「双眼鏡で着弾分布の確認でもやってろよ」

「『正統王国』軍同士で戦う事に何も感じていないみたいだね」

「敵と味方の間違いだろ。人にもよるがよ、あいつらに関しちゃ同情の余地なしだ。フライドん時と同じ」

「俺達、なんか逞しくなったよな。アラスカで震えながらスコープ覗いていた頃が懐かしいよ」

無視してヘイヴィアは引き金を引いた。

二四の遮蔽物は、あくまでも海岸線と平行に展開されていた両陣営の間でのみ、盾として機能していた。横から割り込むように狙撃を行ったヘイヴィアの弾丸に対しては、何の効果も生み出さなかった。

バスン!!　という、内に籠った発砲音と共に、装甲車の陰に隠れていた防護スーツの兵士が弾き飛ばされた。

「おいふざけんな」

ヘイヴィアは眉をひそめ、銃口近くへ目をやった。

「安物め。音漏れしてんじゃん」

直後に反撃が来た。

バガバガバガッ!!　と大量の銃声が鳴り響いた。クウェンサーとヘイヴィアが慌てて後方へ下がり、丘を遮蔽物にする。二四は完全にこちらの位置を捉えていた。しかしヘイヴィアの狙撃から逃れるために移動し、装甲車の盾の使い方を変えようとしたところ、今度はB班の射線上へ入ってしまう。

典型的な十字砲火だった。

逃げ場を失った二四の兵士達が、あっという間に雪の大地に沈んでいく。ヘイヴィアも狙撃を続けた。制圧まで五分もかからなかった。

ヘイヴィアはライフルの銃口から消音器を取り外し、

「制圧完了。一人も両手を挙げなかった事だけは褒めてやるぜ」

「ヤツらの無線機を調べよう。使っている機材は同じなんだ。周波数と通信暗号方式が分かれば向こうの通信を傍受できるかもしれない」

「銃撃戦の次は死体漁りかよ。テメエだって負けず劣らずじゃねえか」

念のため、周囲に狙撃兵などが残っていないかどうか警戒しながら、クウェンサー達とB班は合流し、倒れた二四の歩兵達や遮蔽に使われていた装甲車などを調べていく。しかし、相手の通信を傍受するための材料は揃わなかった。無線機本体も番号でロックされている。

「気になるのは、このボンベぐらいか」

クウェンサーは二四の歩兵が背負っていたボンベに目をやった。ホースの先端はライフルに接続されていて、驚くべき事に銃口はノズルも兼ねているようだ。やはり、火炎放射器か何かの一種だろうか。

「装甲車ん中にも似たようなタンクがあったぜ。こりゃ歩兵達の補充用ってだけじゃねえ。屋根に鎮圧用の放水車みてえな砲塔があんだろ。そこから直接撒き散らせるようになってるらしい」

「何でまた？」

クウェンサーは眉をひそめた。

「核爆発にも耐えるオブジェクトに対しては効果なんてないだろ。それとも整備基地ベースゾーンを直接狙うつもりだったっていうのか？」

「知るかよ。そもそも火炎放射器ってのも予測でしかねえんだ」

ドォオオン!!　という轟音が鳴り響いた。

砲撃戦を続けていたベイビーマグナム、スノウクエイクとインディゴプラズマの位置が変化したのだ。複数の巨体が少しずつこちらへ近づいてくる。

インディゴプラズマ。

その名の通り、下位安定式プラズマ砲の性能を最大限に引き出すべく開発された第二世代だ。一〇〇門以上ある砲の威力はどれも脅威的だが、やはり一番の特徴は前面へ平行に飛び出した二門の主砲だろう。側面には特殊ガスを封入した予備のタンクらしき物が並んでいる。

推進方式は基本的にお姫様と同じ静電気を使ったもの。前方に二本、後方に五本のスキー板に似たパーツで地面を滑るように移動している。

ただ、速度には圧倒的な差があった。ベイビーマグナムとスノウクエイクの二機に挟まれる形で戦闘を行うインディゴプラズマは、ダンスを踊るように敵機を翻弄し続けている。

「何だありゃ。出力の桁が違うみてえじゃねえか」

「機体を浮かばせているのは同じ静電気。でも、前へ進ませるために空気を爆発させる方式が違う。下位安定式プラズマ砲の技術を流用しているんだ」

クウェンサーは携帯端末の画面を操作しながら言う。

インディゴプラズマは同じ『正統王国』軍の機体だ。基本的な設計図はデータベースに保存されている。

ヘイヴィアは眉をひそめて、

【インディゴ・プラズマ】
INDIGO PLASMA

全長…140メートル(主砲含む)

最高速度…時速580キロ

装甲…1センチ×1000層(溶接など不純物含む)

用途…対オブジェクト用駆逐兵器

分類…換装式水陸両用第二世代

運用者…『正統王国』第24機動整備大隊

仕様…静電気式推進システム(プラズマ式加速システム)

主砲…下位安定式プラズマ砲

副砲…レールガン、コイルガンなど

コードネーム…インディゴプラズマ
(下位安定式プラズマ砲を兵装の至る所へ利用しているため)

メインカラーリング…ディープブルー

INDIGO PLASMA

「そんな有効なもんならよ、ウチのお姫様にも回してくれりゃ良いのに」

「速度は出るが耐熱系に不安がある。熱が大きすぎるんだ。インディゴプラズマは電子制御で乗り切っているみたいだけど、普通にやったら自分の足元を溶かすのがオチだな」

「……歩兵との連携が得意ってホントなのかよ。なんかスゲェ爆風出てんぞ。あんなもんに巻き込まれたら味方の兵士だってただじゃ済まねえだろ」

彼らが比較的冷静に会話を続けていられるのは、やはり双方のオブジェクトの数に後押しされているからだろう。インディゴプラズマは確かに強い。速度の面でもお姫様達では追い着けない。だが、逆に言えば、インディゴプラズマはそれぐらい常に高速移動を続けなければ、戦闘を維持できないぐらい追い詰められているという事でもあるのだ。

そして極端な高速移動の維持は、オブジェクトを操縦するエリートを確実に苦しめる。『情報同盟』軍のラッシュのような例外でもない限り、怪物兵器を操っているのは基本的に人間だ。体力的な消耗が続けばオブジェクトの動きは鈍っていく。インディゴプラズマの挙動が及第点を下回った時、お姫様達の主砲が反逆者を容赦なく撃ち抜くだろう。

クウェンサー達がそう思っていた時だった。

ピッ、という電子音が聞こえた。

音源を確認する前に、ガスの元栓をひねったような音が周囲に響く。さらに異臭が鼻についた。プラスチックが溶けるような嫌な匂いだった。

「がはごはっ!?　おいクウェンサー、何だこりゃ!!」
「ヤバい、二四の歩兵の死体どもだ!!　ボンベに繋がったライフルの銃口……ノズルからなんか出てる！　装甲車の方からも!!」
「どうやって!?　死体がノズルの操作なんかする訳ねえだろ!!」
「知るかよ!!　誰かが遠隔操作で開放したのかもしれない!!」
クウェンサーの足元の空気が、砂糖水をかき混ぜたように揺らいでいた。どうやら無色透明のガスか何かのようだ。
「ちくしょう、やっぱ化学兵器か!?」
「専用のガスならコンドーム一つ分で一〇回死ねるだろ！　何か別のものだ！　とにかく空気より重たそうだから、向こうの丘の上まで逃げよう!!」
クウェンサーの言葉を聞き、ヘイヴィアは周辺の味方に身振りで丘の方を示した。そして二人は走る。B、F班合わせて四〇人以上いた歩兵達も続く。丘のてっぺん、稜線までの距離は三〇〇メートルほどだった。
軍服にまとわりついた嫌な匂いを振り払うようにしながら、クウェンサーは顔をしかめた。
（まさか……）
毒ガスでも可燃物でもないガスボンベ。
インディゴプラズマの主砲は下位安定式プラズマ砲。

動力炉から得た莫大な電力を特殊ガスに浴びせる事で、高温のプラズマを人工的に作り出す方式の兵器。

（嘘だろおい!!）

筋力の差か、一足先に稜線に辿り着いたヘイヴィアが、こちらへ振り返っていた。荒い息を吐き、それでもどこかホッとしたような顔をこちらに向けている。

クウェンサーはその体を両手で突き飛ばした。

地面へ飛び込むような格好で、クウェンサーも丘の向こうへと転がっていく。

「ぐえっ!?　てめっ、何してん――!!」

「伏せろ!!」

ヘイヴィアの文句を無視して、クウェンサーは周りの歩兵達へ叫んだ。

「二、四の歩兵の役割は下位安定式プラズマ砲用の特殊ガスの散布だ!!　オブジェクトからの砲撃で反応して誘爆させるための!!」

高速戦闘を続けるインディゴプラズマの砲がわずかに動いた。

一〇〇門以上ある兵器の中でも、特に小さい砲だった。

本筋の戦闘の合間の、片手間のような砲撃。

にも拘らず、

海岸線が爆発的な閃光に襲われた。
下位安定式プラズマ砲を浴びた噴霧地域一帯が、まとめて一気に起爆したのだ。

一〇〇メートルか、一、〇〇〇メートルか、二〇〇〇メートルか。
クウェンサーには被害範囲を理解できなかった。それどころではなかった。眼球と鼓膜から同時に衝撃が走り抜けた。のたうち回る事もできず、手足の先をガクガクと痙攣させた。強引に反らされた背の戻し方がしばらく分からなくなった。天と地の位置すらも不明になってしまった。
これでもマシだったのかもしれない。本来の噴霧地域は、風向きなどを考えればもっと広大のはずだ。爆発にあたって、最適な濃度というのがあるのだろう。
「か、は……」
声が出ない。喉が渇く。
張り付くような喉を動かして、クウェンサーはかろうじて息を吸い込む。周囲を見回すと、丘の稜線の雪が消し飛んでいて、その下に隠れていたはずの地面でさえ、わずかに溶けていた。その向こうがどうなっているかは想像もつかない。とにかく、土や砂が別の物質に変わるほどのエネルギーが生じたのだ。
「ヘイヴィア、おい、ヘイヴィア。生きているか？」

「……クソッたれ。向こうのエリートはバーベキューの時にも肉を黒焦げにして叩かれまくるタイプだな」

「この味気ないレーションしかない戦場で料理の話はやめてくれよ」

うんざりした調子でクウェンサーはヘイヴィアの腕を摑み、強引に起こさせる。周りにいる味方のB班F班の歩兵達の中に、自力で立ち上がれる者はいなかった。

「……まさか、全滅……？」

呆然と呟くクウェンサーだったが、倒れている兵士の方へ近づいたヘイヴィアが、簡単に様子を確かめながらこういう風に答えた。

「熱でやられた訳じゃねえ。衝撃波で軽く脳を揺さぶられてるだけだ。多少の火傷は負ってるみてえだが、この分なら痕が残る事もなさそうだ」

「ヘイヴィア、手当てを任せられるか？　俺はお姫様と連絡を取る。一二四の歩兵の使い方を教えないと死角から下位安定式プラズマを浴びせられる羽目になる!!」

「まさか、今のでお姫様も狙われるってのか!?」

「元々そのための装備だろ。インディゴプラズマが敵の注目を集めておいて、一二四の歩兵がその隙に特殊ガスを散布。後は最適な濃度に調整した、帯の『見えない爆弾』を起爆して予想外の方向からオブジェクトに牙を剝く。それが『歩兵との共同作戦を得意とする一二四の戦い方』だ!!」

その時、再び巨大な爆発が丘の向こうで炸裂した。閃光と爆音が炸裂し、地面を舐める衝撃波がクウェンサー達を薙ぎ倒す。これでも丘という壁があり、オブジェクトまでの距離が開いているはずだった。にも拘らず、余波に過ぎない衝撃はクウェンサー達の体をミシミシと軋ませていく。

「く、そ……遅かったか!?」

ふらふらとした状態で起き上がり、丘の稜線に向かうクウェンサー。

稜線の向こうは数百メートルにわたって大きく抉れていた。そしてオレンジ色に輝いている。冷えれば地面はガラスになるかもしれない。こんな所に足を踏み入れれば焼身自殺の出来上がりだ。

そして。

立ち止まり、双眼鏡を覗くクウェンサーの視線の先。数キロ前方で、二機のオブジェクトが戦っていた。味方であるスノウクエイクの足元に、この丘と似たようなオレンジ色のクレーターが生じていた。足元の推進機関に深刻な損傷が生じたのか、スノウクエイクの動きは鈍い。そこへインディゴプラズマの一門ワンセットの主砲が正確に向けられていく。

ベイビーマグナムがスノウクエイクの側面に突っ込んだ。

静電気を使って浮遊する機能だけは生き残っていたのか、スノウクエイクの二〇万トンの巨重が、抵抗なく横滑りしていった。巨人のビリヤードのような、ある種滑稽にも見えるダイナ

ミックな光景だった。

直後、インディゴプラズマの主砲が蠢いた。

（ヤバ……!?）

慌てて双眼鏡から目を離した直後、クウェンサーの網膜へ閃光が突き刺さった。とっさに回避行動を取ったベイビーマグナムの端を掠り、装甲を弾き飛ばし、七門ある主砲の一つを飴細工のように溶かしてしまう。

「ちくしょう!!　あのお人好しめ!!」

遅れてやってきた衝撃波に、クウェンサーは両手で顔を庇う。

先ほどの爆発に比べれば、まだ易しい方だった。薙ぎ倒される事もない。どうやら平地で全方位に撒き散らされる爆発と、一方向に整えられる砲とでは撒き散らされる衝撃波や熱に差が生じるらしい。

インディゴプラズマの必殺のコンビネーションは失敗した。

そしてベイビーマグナムもスノウクエイクも黙っていなかった。

慌てて高速移動状態へ戻ろうとするインディゴプラズマだったが、そこで一機のオブジェクトから主砲を浴びせられた。かろうじて中央の動力炉を撃ち抜かれるのは避けたようだが、球体状本体の側面を大きく抉り取られていく。

（いけるか……?）

スノウクエイクの推進機関に深刻な損傷を与えられたのが痛いが、こうしている間にも、海から別の味方のアクティブスレッジは接近している。二機を設置型の砲台として扱い、お姫様が戦闘の主導権を握れば、ここでインディゴプラズマを吹き飛ばせるかもしれない。

クウェンサーがそう思った時だった。

無線機から、管制官の信じられない言葉が飛んできた。

『アクティブスレッジ大破!!』

「な……んだって……？」

『繰り返す、アクティブスレッジは大破し沈没した!!　操縦士エリートの脱出を確認。戦闘の継続は不可能!!』

「どうやって!?」

思わず無線機を摑み直し、クウェンサーは叫んでいた。

「二四のオブジェクトはインディゴプラズマだけのはずだ!!　なのにアクティブスレッジはどうやって沈められたんだ!?」

『分からない。いきなり吹き飛ばされたんだ。今こちらでも衛星の映像を確認している!!』

くそっ、と毒づいてクウェンサーは携帯端末を取り出した。ＧＰＳ地図なら彼でも閲覧できる。アクティブスレッジの通行していた海域のデータを呼び出すと、確かに友軍の影は消えていた。海の底へと沈められてしまったのだ。

そして、意味の分からないものが映っていた。
六つの巨大な影。
アクティブスレッジの代わりとでも言うかのように、アクティブスレッジと同規模の影が六つも表示されている。
海上の友軍を吹き飛ばしたものの正体。
それは、まさか……、

「この六機が全部……オブジェクト……？」

呻くように呟いたクウェンサーの耳に、無線機から管制官の言葉が飛んでくる。
『録画されたデータを巻き戻して確認した。海だ。ヤツらは海中から浮上してきたんだ!!　海面からのレーダー用電波は分厚い氷で減衰させられ、海中までは届きにくい。そもそも対オブジェクトに照準を合わせていて、衛星もレーダーも海中とはピントがズレている状態でもあった。こちらも海中に潜水艦を出して警戒するべきだった!!』
「海中？」
ヘイヴィアがどこか悪い冗談でも聞いたような表情になった。
「海中って何だよ!?　今度のオブジェクトはシャチやイルカからレプリカント的なインスピレ

ーションでももらったっつーのか!?」

「ちくしょう……」

丘の上にいたクウェンサーは、呆然と遠くへ目をやった。

白い水平線の向こうから、何か巨大なものが近づいてくるのが分かる。

「見えてきた!!　やっぱりオブジェクトだ。二四のヤツら、インディゴプラズマの他にも本当にオブジェクトを六機も保有していたんだ!!」

全体的なシルエットはインディゴプラズマと似通っていた。主砲は二門から一門に、後部推進装置は五本から二本にそれぞれ数を減らしているが、基本的な設計は同じものを流用しているようだった。

しかし、オブジェクトはオブジェクトだ。

彼らの進軍を止められる者などどこにも存在しない。

六機のオブジェクトは海面に張った氷を勢い良く砕き、一直線にこのヴィクトリア島へと向かってきた。二等辺三角形状の海戦用フロートを取り付けていたが、浜辺に近づいたところで自動的に切り離された。太い金属音と共に解き放たれた六機のオブジェクトがスムーズに上陸し、そのまま戦場の最前線へと投入されてしまう。

何もできない。

できる訳がない。

間近に迫るオブジェクトに対し、クウェンサーはとっさに真横へと跳んだ。そのままうつ伏せになり、後頭部に両手を当てて身を守る。すぐ近くを五〇メートル以上の巨体が通過していった。こちらなど見てもいなかった。

「ヘイヴィア？　おい、何だよ!!　しっかりしろよ!!」

クウェンサーがそう叫んだのは、ヘイヴィアが伏せたまま起き上がらず、手足の先を不気味に震わせ始めたからだ。オブジェクト六機追加。あまりのショックで意識が飛びかけているのだ。

ヘイヴィアの肩を揺さぶりながらも、クウェンサーも極限の精神状況に追い込まれていた。何が起きたか分からない。

どこで失敗してこんな事態に陥ったのか理解できない。

呼吸をするのもままならず、頭の中の思考の繋がりがブツリブツリと千切れていく錯覚がする。

だが。

七機に増えた二四の軍勢は、考える暇も与えずにこの戦争に決着をつけてしまう。

手始めに、推進機関に損傷があり、動きの鈍いスノウクエイクが撃ち抜かれた。

友軍二機を失い、孤立無援となったベイビーマグナムが続けて襲われた。

個としての能力など無力だった。

様々な角度から時間差を空けて放たれた下位安定式プラズマ砲が、お姫様の装甲を次々と抉っていく。行動不能に陥るまで、六〇秒も必要なかった。

（……ば、かげて、る……）

声を音として絞り出す余裕すらなかった。

加勢など、考える暇もなくオブジェクトは喰い破られていた。

その破壊行為は、これまでオブジェクトに抱いていた、野蛮で圧倒的な暴力という印象とは違う。完全な分業。巨大なケーキが的確に切り分けられ、小さな一人前として自分のテーブルにやってくるような、ちょっとした虚しさまで感じられる。

（……これが、二四の戦い方……。あまりにも、早すぎる。最適化し過ぎて人間の感情が全く読み取れなかったぞ……）

雪原の鉄クズと化した二機のオブジェクトを放り捨て、第二四機動整備大隊のオブジェクト七機編隊は悠々と戦場を去る。

「なん……だ……？」

クウェンサーは、呆然と呟いた。

「あいつら、何でお姫様にとどめを刺さなかったんだ」

そう、二四のオブジェクト七機編隊はベイビーマグナムの外殻を徹底的に削り飛ばしていたのだが、中央にある動力炉やコックピットまでは撃ち抜いていなかったのだ。その気になれば

いつでも爆破できたはずなのに、敢えて見逃していたのである。
合理的な答えなどある訳がない。
しかし、答えは意外なところからやってきた。
クウェンサーの持っている無線機から。

6

無線機特有の、ノイズの混じった声だった。
だが、太い男の声色に宿る愉悦は、機器を通しても十分に伝わっていた。
『けいあいすべき「正統王国」のゆうぐんのしょくんへ。私は「正統王国軍第24機動整備大隊」のエリート、プライズウェル＝シティ＝スリッカーである』
整備基地ベースゾーンの士官室で、フローレイティアは顔をしかめた。
『いささかのごかいもあるようだから、ここでふっしょくするいみも込めて、せんげんしておく。我々は「正統王国」のてきではない。このせかいてきせんそうの中で、本当に「正統王国」をしょうりさせるためにこそ、我々はこうどうをかいししした』
廊下で自前の缶詰ラザニアを頬張っていたCS放送のレポーターの少女は、巡回の兵士が身に着けていた無線機の方へ目をやっていた。

『せんそうのげんどうりょくは、いうまでもなく「けいざい」だ。そして、「正統王国」のけいざいはとどこおっている。りゆうはなぜか。「正統王国」のじょうほうのそくどぶそくにげんいんがある』

オブジェクトの整備場で『ピットイン』の準備を進めていた整備兵の婆さんは、作業の手を止めていた。

『我々には「正統王国」公式のげんごがあるにもかかわらず、その他のたしゅたようなげんごがどうじにしようされている。これが、我々のじょうほうのそくどをむように下げている。そして1分1秒でせかいけいざいがうごく中では、そのわずかなロスのつみかさねが、ちめいてきなそんしつを生み出してしまう。我々「正統王国」がせんそうをけいぞくし、さいしゅうてきなしょうりを手にするためには、このもんだいをかいけつしなければならない』

自軍のベイビーマグナム、スノウクエイク、アクティブスレッジは破壊され、敵側の一四には七機のオブジェクトが確認されていた。

その優勢を強調するかのように、プライズウェルは力強く語る。

『すなわち、他のげんごの「こんぜつ」』

もはや、反論できる者はいないとでも断言するかのように。

七機ものオブジェクトがあれば、現在大西洋の守りを固めている『正統王国』軍の第二陣五

機をも突破できると声高に勝利宣言するように。

『正しいことばによって正しいけいざいを行う。それによってじょうほうのそくどをまし、こくいっこくとへんかするせかいけいざいへと対応する。……これはぎゃくにいえば、正しいことばをはなせぬものには、けいざいかつどうへさんかするしかくなど存在しないことをもいみしている』

支配階級の言葉だった。

何があっても自分の立場だけは揺るがず、そのために周囲がどれだけ迷惑を被っても構わない。そう思っている者の声色だった。

『ゆえに、私はこうどうする。「正統王国」の民としてふさわしいものはふさわしいばしょへ、ふさわしくないものはふさわしくないばしょへと「さいぶんぱい」する』

しかし止められない。

圧倒的な兵力が、七機のオブジェクトという具体的な数が、あらゆる暴虐を肯定せざるを得ない状況を作り出してしまう。

『「さいぶんぱい」は、「正統王国」としてさいていげんひつような、「せいしきげんご」のしようによってけっていしよう』

接近、という管制官の言葉をフローレイティアは聞いた。

「総員退避!!　敵の狙いはオブジェクトの整備能力よ。生身の兵力なんてハナから気にしても

いない!!　至急建物から、ベースゾーンから離れて!!」

『正しいことばを扱えるものは民としてうけ入れよう。扱えずとも、必死でまなぼうとするものは「どれい」という「ろうどうりょく」として生きるしかくを与えよう。……だが、扱えもせず、まなぼうともしないものを守るために「正統王国」のしげんをしょうひするひつようはない。我々は、こうしたきせいちゅうの存在をようにんするつもりはない』

複数の下位安定式プラズマ砲が整備基地ベースゾーンを襲った。

たっぷり猶予を与えてからの砲撃だった。

殺す気はない。

皆は同じ『正統王国』軍なのだから。

（……逃げる時間を与えたのは、自分達の正当性を主張するためか!!）

火の海になったベースゾーンを眺めながら、フローレイティアは歯軋りする。

『「正統王国」のさいこうきかん「君主議会」へは、ひつようなレポートをすでに「そうしん」しておいた。民を束ねる王は、すみやかにレポートにしたがい、各地方のがっこうで民のげんごテストをじっこうすればいい。そうすれば、我々も「たいせいよう」をわたってヨーロッパの「本国」へじかだんぱんを行うひつようもないだろう』

戦う力を失ったベースゾーンの跡地のすぐ横を、七機の巨大な影が通過していく。後に、二四の歩兵部隊を運搬するトラックや最低限のメンテナンス車両なども合流していった。まるで

凱旋パレードそのものだった。

彼らは笑顔だった。

為す術もないフローレイティア達にライフルの銃口を向け、引き金を引くふりをして遊んでいる者までいた。

今の連中は、もはや『正統王国』軍のデータベースにある第二四機動整備大隊ではない。

戦力の大きさも、兵士のモラルも。

そもそも、一つの大隊が七機ものオブジェクトを保有している事自体がまともではない。

『だが、きょひするのであれば我々にもかんがえがある』

敵の通過後にも、通信は続いた。

『我々がどのていど本気なのか、どのていど力があるのか。それをりかいしてもらうために、今からちょっとした「ぐんじえんしゅう」を行う』

軍事演習。

とてつもなく嫌な響きの言葉だった。

七機ものオブジェクトを保有する反逆者達は、どこかにその矛先を向けると明確に告げているのだ。

『「アラスカ方面ヴィクトリア島東端」にある「移民居住都市」。ここに住むものは他のせいりょくのしはいちいきからやってきた上、我々の文化に合わせるつもりもないおにもつである。

てはじめにかれらをつかって「えんしゅう」を行い、我々のめざすビジョンをりかいしてもらう。へんとうによっては、ヨーロッパでも同じことがおこるのだと。「君主議会」は、このこうどうのけっかをもって、我々に対するへんとうを決めるべし』

そして、プライズウェルーシティ　スリッカーは標的の名を口にした。

戦争ではない。

相手は抵抗するための兵力など持っていない。

それを、十分に理解した上で。

『我々はこれより7きのごうどうえんしゅうを行い、オブジェクトのふくすうこうどうのうりょくをじっしょうする。また、せんりょくはこの7きだけではない。「せいぞうこうじょう」ではだい2じんが完成をまっている』

圧倒的な戦力。

一個人が保有して良い量を超える兵力の提示。

『どうじに、我々はエリートのこうりつてきなりょうさんたいせいもかくりつした。正しいことばは正しいちしきをきょうきゅうする。これは我々のしそうをたんてきにひょうげんするけっかである』

とてつもないデモンストレーションだった。

その総括として、プライズウェル＝シティ＝スリッカーはこうまとめた。

『正しいことばを扱えるものは民として、扱えずともまなぼうとするものは「どれい」として、扱えずにまなぶ気もないものには死を。それこそが、この「正統王国」のけいざいをうるおし、せんそうのしょうしゃへとみちびくゆいいつのほうほうである』

通信が、切れた。

実質的に、待っているのは大量虐殺だ。

元々よその文化圏からやってきた人達の大半は、『正統王国』の正式言語など扱えないはずだ。それが当然だし、何の問題もないはずだった。しかし言語保護活動家のプライズウェルは許さない。おそらくほんの少しイントネーションがおかしかっただけで、『正しい言語を愛する』あの男は容赦なくオブジェクトの砲を向けるだろう。

その上、彼は血統主義者でもある。よそからやって来た移民なんて認めるはずがないし、彼の掲げるビジョンは『部下か奴隷か死か』を選別するだけの、一方的な押しつけに過ぎない。

（……『本国』からの救援は……）

フローレイティアは少しだけ考えたが、首を横に振った。おそらく追加のオブジェクトは来ない。アラスカ方面のオブジェクトを全て行動不能にさせられた以上、『本国』のお偉方は絶対に自分の身の安全を最優先させる。大西洋の防衛ラインさえ確実性が危ぶまれる状況だ。『本国』がどれほどオブジェクトを保有していても、その全ては大西洋の防衛に回される。このアラスカ方面まで差し向けられる事は絶対にありえない。

（……かと言って、二四の横暴を許す訳にはいかない、か）

散々たる状況だが、フローレイティアは無線機を摑み直した。周波数を合わせ、あちこちにいる部下達と連絡を取り合う。

「クウェンサー、ヘイヴィア!!　オブジェクトの損害状況は分かる!?」

『スノウクェイクからはエリートが脱出したようです。お姫様は持ち堪えています。装甲はボロボロですが、一応は動けるみたいです』

「了解、管制機器が生きていればこちらでもデータを確認する。整備兵!!　瓦礫の中から使える機材を探して掘り起こせ!!」

フローレイティアの言葉に対し、整備兵はうろたえたように、

『え……？　待ってください、え？』

「積み込めるだけ車両に積んで、『ピットイン』は最前線で直接行う!!　戦力差があろうがなかろうが、二四のオブジェクトを止められる可能性を持っているのは同じオブジェクトのベイビーマグナムだけよ!!　あのイカレ野郎どもが都市を襲う前に、できるだけベイビーマグナムを使い物にできる状態へ修理するの!!」

『違います、違うんです!!　ちょっと待ってください。……おい、どうなってるんだ!?　主任のばあさんはどこへ行った!?』

後半部分はフローレイティアではなく、別の人物に向けて発せられたようだった。

眉をひそめた彼女は、
「どうした、何があった」
『すみません、主任が見当たらないんです!!』
フローレイティアは苦虫を噛み潰したような顔になり、周囲の火の海へ目をやった。
「……逃げ遅れたか」
『いっ、いえ!!　先ほどまではいたはずなんです!!　一緒にシティ・スリッカーからの通信……宣戦布告を聞いていましたから!!　なのに、ちょっと目を離した隙に……!!』
（……待てよ）
報告を聞きながら、フローレイティアはわずかに目を細めた。
「ばあさんは『正統王国』出身ではなかったな。確か、『資本企業』の日本列島からの移民だったという話を聞いた事がある」
『え、ええ。それがどうかしましたか』
「娘夫婦は？」
フローレイティアからの質問に、整備兵は答えられなかった。
彼女はもう一度尋ね直す。
「ばあさんは一人でやってきた訳ではなかったはずだ。娘夫婦と孫娘がいる。彼女達はどこに住んでいる？　この広い『正統王国』の一体どこに!?」

やはり整備兵は答えられなかった。
しかしフローレイティアが懸念している事は伝わったらしい。
『まさか……』
「移民居住都市。嫌な符合ね」
重い息を吐いて、フローレイティアは片手で頭を掻き毟る。
「あのばあさん、七機ものオブジェクト相手に一体何ができると思っているの!?」

7

フローレイティアからの通信を聞いて、クウェンサーの顔が青ざめた。
「じゃあ、ばあさんは移民居住都市にいる娘夫婦を助け出すために!?」
『そうよ。まったく、「黒軍服」が別行動でいてくれて助かった。あいつらに見つかっていたら容赦なく射殺されている状況よ、これ』
声色から察するに、フローレイティアは呆れ返っているようだった。馬鹿は二人だけだと思っていたらしい。
『これからお前達のいる現場へ整備部隊の車両を回す。お前達は負傷兵の手当てをしつつ、必要な受け入れ準備を整えろ。敵兵が残っていないかを確認し、通行に邪魔な障害物があれば爆

弾で吹き飛ばしておけという事よ。分かった？』

「間に合うと思います？」

『難しいが、不幸中の幸いだったのは、二四はオブジェクトだけでなく歩兵達と共に行動しているところね。軍用トラックや装甲車の速度に合わせている。今ならお姫様の推進装置さえ直せれば追い着けるかもしれない。だから可能な限りタイムロスは短くする。下拵えで手を抜くなよ』

通信が切れた。

とはいえ、もはやクウェンサー達にやるべき事はない。負傷兵の手当ては終わっているし、このだだっ広い雪原の中に障害物らしい物も見当たらなかった。実質的には、そこでじっとしていろという事なのだろう。

「おいクウェンサー！　さっきの通信聞いてたぜ。今の爆乳の台詞どう思うよ!?」

「どう考えたって無理だろ!!　今動けるのは俺達だけだ。ばあさん助けるにしても移民居住都市を守り抜くにしても、さっさと行動しないと!!」

「待てよ。悪りぃが俺は、ここから『フローレイティアは待機を命じた訳だし、残念だけど今回は諦めるしかなさそうだな』的な方向に持っていこうと思っていたんだぜ!?　あ、何だよ、おい、やめろ、何だよ!!」

「良いから聞けよヘイヴィア」

肝心なところで弱腰になる馬鹿の襟首を摑みながら、クウェンサーは言う。

「二四はこうしている今も移民居住都市に近づいている。歩兵部隊と一緒に動いているっていうのも、絶対のルールじゃない。ちょっとした気紛れでオブジェクトが全速力を出せばあっという間だ。……考える暇なんてあると思うのか。今すぐにでも動かなくちゃならないんだ。そして車を運転できるのはお前しかいない」

「馬鹿じゃねえの!?　雰囲気にあてられてんじゃねえぞ!!　良いか、分かってねえようだから改めて俺の口から言っておく。七機だぜ。敵のオブジェクトは七機もいるんだぜ!!　俺ら二人で立ち向かってどうにかなんのかよ!?　一機だって相手できねえっつーのによ!!」

ヘイヴィアは自分の胸ぐらを摑むクウェンサーの手を振りほどいて、首を横に振った。今まで押し殺してきた震えを表に出すように、彼は怯えた子供そのものの顔になる。

「戦争の目的って何だよ!!　俺は『貴族』の家を継ぐために必要な箔をつけるため、テメェは手っ取り早くオブジェクトの設計士になるためだろ!?　こんな所でくたばるためにライフル握ってる訳じゃねえんだよ!!　俺らがやる必要ねえじゃん！　今までだって頑張ってきたじゃん!!　何で俺らだけが毎回こんな地獄の中を進まなくちゃならねえんだよ!!」

オブジェクトに対する圧倒的な恐怖。

絶対にひっくり返らない事が大前提という理不尽な状況。

ヘイヴィアの言は、この時代の人間ならばごく自然なものだ。むしろ、あれだけの怪物兵器

の前に立てと言われて、何も感じない人間の方がおかしい。
クウェンサーだって分かっている。
だが、
「冷静になれよヘイヴィア」
「なれる訳ねえだろ!!　テメェは今自分が何言ってんのか分かってんのか!?」
「ヘイヴィアこそ、オブジェクトが本当に七機もあるとでも思っているのか!?」
クウェンサーの叫びに、ヘイヴィアはようやく言葉を中断させた。興奮が冷めたというより、訳が分からなくて混乱しているようだった。
「ベイビーマグナムを動かすのにどれだけの人間がいる。大隊一つ、八〇〇人だぞ。一機で八〇〇人も必要なんだぞ。七機も運用するとしたら、どれだけの人数、設備、費用が必要になると思う。操縦士のエリートだって、一人育成するのにどれぐらいの手間がかかると思ってる。あの連中がそれだけのコストを払い続けられるはずがないだろ!!」
「じゃああれは何なんだよ!?」
「オセアニア軍事国!!」
クウェンサーはいきなり関係のない単語を口走った。
だが違う。彼は続けてこう言ったのだ。
「あいつらはガスタンクを使って『存在しないオブジェクト』を見せつけようとしていた!!

見た目でごまかそうとするやり方で敵軍を混乱させる作戦は珍しくない!!」

嘘だろ……。現に、あいつらはお姫様の装甲を撃ち抜いていたんだぜ」

「今回のはガスタンクとまでは言わない」

クウェンサーは首を横に振ってから、

「でも、莫大なコストを消費し続ける最先端のオブジェクトとも思えない。おそらく廉価版なんだ。〇・五世代以下の。職人技も使ってない、装甲だってずっと薄くて脆い、主砲以外の砲が動くかどうかも分からない。そういう『費用のかからない』ダミーを用意して、お姫様を混乱させるのが狙いだった!!」

「分かんねえよ!!　テメェの言ってる事も、理あるとは思う。七機ものオブジェクトがいきなり出てくるなんて普通じゃねえ。でも、何の確証もねえじゃん！　ただの憶測じゃん!!　万が一にも最先端のオブジェクトだったら俺ら生き残れる確率〇%だぜ!?　予想や推測で賭けるにしちゃリスクがデカすぎんだろうがよ!!」

「なら証明してやる」

「おい待てよ、どこ行くんだよ!!　おい!!」

クウェンサーは下位安定式プラズマ砲の余波で熱せられていない場所を選んで歩を進め、海岸線に向かった。そこには、海からやってきた六機のオブジェクトが使っていた、海戦用のフロートが乗り捨ててある。簡単に着脱して使い回せる装置は、設計士として少し興味があるが、

今はそんな事を論じている場合ではない。

「……基本的には二等辺三角形。五〇メートルと二〇メートル。高さは二メートルか。厚さは多分……使っている材質は……」

「何だよ、何を調べてんだよクウェンサー」

「装甲内部は空気より軽い比重のガスだと思う。AB-22辺りを液化状態で保存しておいて、必要に応じて気化させて必要な浮力を得る。でも、それだと話がおかしくなってくる」

「？」

「体積の問題だ。このサイズのフロートじゃ、AB-22を充塡させても二〇万トンは浮かばせられない。せいぜい五万トン辺りが関の山だ。言いたい事分かるか？」

「じゃあ……」

「五万トンしか積めないフロートに、二〇万トンのオブジェクトが載ってると思うか!?　こんなチャチなフロートだけで本物のオブジェクトを海に沈めたら二度と浮かんでこない！　連中の編隊はブラフだ!!　本当に七機分の兵力がある訳じゃない!!」

手の甲でフロートの壁面を軽く叩いてクウェンサーは言う。

「装甲の厚さは四分の一以下！　こんなところを削るほどなら、職人技の高耐火反応剤の処理だって行われていない!!　タマネギ装甲としての柔軟性もかなり低下している！　動力炉の出力だって疑問だらけだ！　歩兵部隊と一緒に行動しているのは、速度を出せない事を隠して

いるだけなんじゃないのか!?　だとすれば、主砲以外の兵器をまともに発射できるかどうかも怪しいだろ!!　オブジェクトを使わなくても、俺達の兵器だけで風穴を空けられるチャンスが残っているかもしれない!!」

ヘイヴィアは、しばらく黙っていた。

彼の頭の中で、クウェンサーの言葉を吟味しているのだろう。その中には、どうすれば自分が生き残れるか、何を選ぶのが一番得をするのか、そういった醜いものもあったと思う。

やがて、ヘイヴィアはゆっくりと口を開いた。

「……オブジェクトを一度に七機も吹き飛ばしたなんて話になったら、相当の功績になるよな」

「ああ」

「こんな所で燻ってねえで、さっさと『貴族』の家を継ぐためには、それぐらいインパクトのある事をやらなくちゃ駄目だよな」

「次々とオブジェクトのいる戦場を転戦させられるぐらいなら、ここでケリをつけた方が最終的に生き残れる可能性は高くなるんじゃないか」

クウェンサーは肩をすくめて、

「しかも、シティ＝スリッカーの火種は、放っておけば大西洋を超えてヨーロッパに届く可能性もある。それで『本国』が倒れる事はないだろうけど、クリーンな戦争から外れた争いは、ちょっとした経済危機を生むかもな。煽りを受けるのは『平民』だけじゃない。……お前の家

は大丈夫か？　継ぐ前に家が傾いたりしないって言えるか？」

「クソが」

ヘイヴィアは吐き捨てるように言った。

「良いよ。乗ってやるよ!!　ただしこれが最後だぞ!!　俺はとっとと箔をつけてウィンチェル家の当主になる！　それでおしまいだ！　戦争なんてもううんざりだぜ!!　二度と俺の命をベットするギャンブルなんてやらねえからな!!」

「車が欲しい。連中の移動ルートはＧＰＳ地図で摑めるはずだ」

「なあクウェンサー、ダミー機はフロートをそこで使い捨てたんだろ。だとしたら、どうやって大西洋を渡る気なんだ？」

「この辺りにはシティースリッカーの部隊や兵器工場があるって話だっただろ。ヴィクトリア島の東海岸にフロート取り付けのための別働隊でも待機しているんじゃないか」

クウェンサーは置き去りにされたフロートの側面を軽く手の甲で叩きながら、

「連中にそんなものを使わせるチャンスなんて与えるつもりもないし、移民居住都市を襲わせるつもりもない。だからヘイヴィア、車を用意してくれ。一刻も早くインディゴプラズマを追わないと」

「ちくしょう、どこだ運転手は。キーがなくちゃ話にならねえぞ。さっきの下位安定式プラズマ砲の爆発で鍵ごと溶けてねえだろうな」

「映画みたいにコード繋げて点火できないの？」
「やろうと思えばできる。でもミスったらそれまでだぜ。キーがあんなら素直にそっちを使った方が確実だ」
言いながら、クウェンサーとヘイヴィアは負傷兵達を休ませている丘の方へ戻ろうとする。
その時だった。
パン!!　という銃声が響いた。
クウェンサー達がつい先ほどまでいた、海戦用フロートの壁面に火花が散る。
（……二四の歩兵が残っていたのか!?）
「伏せろクウェンサー!!」
しかし、彼らが遮蔽物を探す前に次の銃弾が足元の地面へ正確に撃たれた。明らかな警告だ。しかも一方向からではなかった。身を低くした程度でやり過ごせる状況ではない。
中途半端な中腰のまま体を強張らせ、未練がましく周囲に目をやるクウェンサー。キーがあるかどうかは不明だが、少し離れた所に４ＷＤのオフロードカーが停めてあった。
直後。
グワッ!!　と爆炎と衝撃波を撒き散らし、オフロードカーが爆発した。
離れていたにも拘らず、思わず両手で顔を庇ったクウェンサーは、携行型対戦車ミサイルが発射されたのだと、遅れて気づかされる事になった。

すでに『布陣』は終わっている。

ここから逆転できるとは思えない。

ゆっくりと両手を上げるクウェンサー達。一見すると平らな、だが実質的には海面のように波打っていた凹凸の陰に身を隠していた歩兵達が顔を出した。五人一組だった。

「(……中距離狙撃用ライフルに携行型対戦車ミサイルの組み合わせ。最悪すぎるぜクウェンサー。妙な動きしたら即座に天国行きだ。くしゃみをするにも了解を取らねえと誤解されそうだ)」

「(……何だあのとんでもない軍服？　それよりあの銃器の機種)」

「(……分かってるよ。おかしい。何でこの場面で『資本企業』軍が出てきやがる)」

「はい、内緒話はそれまで」

『資本企業』軍の襲撃者が遮るように、妙に明るい声でそう言った。

金髪に褐色の肌の女だ。クウェンサーより少し歳は上か。服装は……奇怪だった。布地こそ軍服のそれだが、デザインはいわゆるメイド服に近い。猫耳までくっついていた。ふざけているとしか思えないが、戦闘機の機首に顔を描くようなものなのだろうか。

敵兵五人は皆同じような年齢の女性達だった。彼女達はクウェンサー達など気に留めず、自分達の間だけで会話を進めていく。

「手土産はこんなもんで大丈夫かな？」

「良いでしょ別に。そうでないと困る」

「そろそろレーションも底を尽きたし、ここらでヒットしてくれないとまずいって」
「そうね。とりあえず救援が来ないとどうにもならないしね」
ものすごく嫌な予感がしてきたクウェンサーは、両手を上げたまま発言する。
「おい。おい何だよこれ、アンタ達は何なんだ。何をしようとしているんだ」
「私達は戦場お掃除サービス」
金髪に褐色の肌の女は笑顔で答えた。
「PMCの一種よ。分かる？　傭兵会社の事。格好がアレなのは、まあ、そういう需要があるから、そしてサービス業の哀しさってトコかしら。名刺は切らしちゃってるから勘弁してね。……って言っても、オブジェクトの整備を任されているほどの最大手じゃなくて、その補佐のための派遣社員みたいなものだけど」
「『資本企業』の金の亡者か……」
ヘイヴィアは吐き捨てるように言ったが、褐色の女は気にも留めなかった。
「もー。あなた達『正統王国』軍がアラスカ方面を支配しちゃった事で、こっちはホントに大変だった訳よ。元々『正統王国』と『情報同盟』の戦いで消耗を待ってから、どさくさに紛れてウチのオブジェクトを出撃させるつもりだったんだけどね。あなた達、あっさり『情報同盟』軍を叩き潰してアラスカの覇権を握っちゃうんだもん」
「……ウチのお姫様がラッシュのおほほと戦った時か……？」

「ん？　『正統王国』じゃそんな味気ない名前で呼ばれてたの？　……ともあれ、その後の『資本企業』はバタバタ。大規模な撤退作戦も連絡ミスだ何だの混乱で、私達は輸送機にも乗せてもらえずに取り残されちゃったって訳。分かる？　取り残されたんだよ!!　辺り一面敵だらけ、氷点下は当たり前で寝泊まりだって命懸け。冗談じゃないよね。もうこうなったら絶対に自力で『本国』に帰ってやるしかないじゃん。……ま、とてもじゃないけど国境まで装甲車の燃料はもちそうにないから困ってるんだけどね。西米は遠すぎるよー」

クウェンサーは思わず舌打ちした。

撤退作戦に失敗してアラスカ方面をさまよっている兵士がいる、という話は聞いた事があった。彼女達もそうした連中の一部なのだろう。

ヘイヴィアは慎重に言葉を選んで相手に話しかける。

「……温かいスープと毛布が欲しいなら投降しろよ。一時的に捕虜って扱いにはなるだろうが、政府と取り引きすりゃ『資本企業』側へ送還してもらえると思うぜ」

「そんな事したら会社の信用に関わっちゃうよ。ウチは貯金の大小で人権の順位が変わる『資本企業』よ？　広告・宣伝はお馬鹿にできないのです」

「なら、どうするつもりなんだ」

「あれ」

と言って、褐色の女が指し示したのは遠方で待機しているベイビーマグナムだった。詳しい

状況は分からないまでも、中破して身動きが取れない事ぐらいは遠方から観察して摑んでいるのだろう。

「整備兵のふりをして、エリートに緊急脱出してもらえないかな？　動力炉に深刻な損傷があって臨界爆発しそうとか何とか言ってさ。そしたら私達でエリートを確保する」

「……おい」

「アラスカ方面の現状は理解しているつもりよ。あれは『正統王国』軍最後のオブジェクト。反逆者七機はじきに大西洋へと離脱する。そうなったらどうなると思う？　アラスカ方面はがら空きになる。再び覇権を巡って『資本企業』軍がやって来てくれる。私達としては、できるだけ早い方が良い。一日でも、一時間でも早く。……そろそろレーションも切れそうだし、いつでも鹿やトナカイを仕留められるって保証もないんだしね」

ヤバい、とクウェンサーは思った。

こいつらは『資本企業』だ。『正統王国』の事情なんて一ミリも斟酌していない。

「……念のため聞くけど、現状は理解しているって言ったよな」

ええ。あんな暗号も使っていない通信で堂々と宣言されりゃあね。でもそんなのはどうでも良い。移民の中には『資本企業』出身の連中も混じっているでしょうけど、自ら望んで国籍を変えた訳だしね。気にする必要はない。……何より、あいつら気にかけたって儲からないし」

最後の一言が本音なのだろう。

資金と利益のみという傭兵らしいロジックに、クウェンサーはどうしようもないほど暴れたくなる。だが、彼はかろうじて堪えた。代わりにこう言った。

「アンタ達は傭兵だったよな」

「PMC。傭兵会社。ご用命の際は公式ウェブページの専用フォームからどうぞ。料金プランは多少複雑ですが大丈夫。自動計算を行うプログラムもございます」

「時間がない。ここで雇うぞ。そうすれば、アンタ達は俺達の味方になる。それで良いか」

冗談のような言葉に、クウェンサーは真顔で応じた。

クウェンサー!!　と『貴族』のヘイヴィアが遮るように叫んだが、クウェンサーは気に留めなかった。ただ褐色の女の目を正面から見据える。

対して、女の方は嘲笑った。

「ははは!!　ばっかじゃねえの!!　相場が分かっていないようねおぼっちゃん!!　あなたの小遣い程度で私達を雇えるはずがないでしょうが!!」

笑いながら、女はクウェンサーの襟首を摑んだ。

そのまま引き寄せられる。褐色の女は笑っているが怒りを宿していた。

「財力と経済を第一と考える私達はね、お金の事を馬鹿にされるのが大嫌いなの。代金とは労働に対して真摯に支払われる報酬よ。緊急事態だからとか、慈善や正義のためだからとか、そんな理由で勝手に減額できると思っている事自体が屈辱。それは、私達の命の価値をあなたの

都合だけで変動できると言っているようなものよ」

「誰もそんな事は言ってない」

返答しながら、クウェンサーは軍服のズボンのポケットに手を突っ込んだ。彼を手前に引き寄せ過ぎた褐色の女は逆に見逃してしまったようだった。周囲の傭兵達が反応して銃口を跳ね上げたが、クウェンサーは無視してポケットの中身を取り出し、褐色の女の顔に叩きつけた。それはラバー製の小さな箱だった。

直後にぶん殴られた。

雪の上に倒れ込んだクウェンサーを見下ろしながら、褐色の女は吐き捨てるように言った。

「……まだ自分の立場が分かっていないようね」

「そっちこそ」

クウェンサーは、褐色の女が受け取らず、地面に落ちて留め具の外れた、小さなラバーの箱を指差しながら、笑って応じた。

「俺は大事なお客様だぞ？」

「ちょっと待って。これ何よ」

「『資本企業』の方が詳しいんじゃないのか？　それともアンタ達は現金や電子マネーばっかり追い掛けていて、宝石には疎いのか」

雪の上に散らばった透明な粒を凝視する褐色の女に、クウェンサーは呆れたように言う。

「ダイヤモンドだよ。カムチャッカ半島にあった軍用採掘場のもの。『信心組織』が軍資金を獲得するために隠していたヤツだ」

「チャーム」

褐色の女が人名を呼ぶと、傭兵の中の一人が特殊なルーペを取り出した。透明な粒を拾い上げ、グローブの中で転がし、レンズ越しに確認しながら、

「本物みたいね。混じりっけもない。一五カラット級がぎっしり詰まっているみたいよ。等級も悪くない。証明書がないのが大減点だけど、ロンダリングすれば相場の八割ぐらいで換金できそうね」

「それは前金だ。ここで俺達を殺して奪うって選択肢もあるけど、整備基地の近くの石の下には同じラバー製の箱が一つある。協力してくれれば、作戦の成否に拘らず残りも払う。……傭兵の相場っていくらだよ。これだけ稼ぐのに何年かかる？　っつか、死ぬまで働いても稼げるのか？」

「……」

ふるふると、褐色の女は震えていた。

明らかに歓喜の含む、快感にも似た震えだった。確かに、敵国に協力すれば傭兵としての信頼は失う。だがその仕事で一生働いても稼げない額の二倍、三倍も稼げれば、仕事の数が激減しても問題はない。貯金の大小で人権の順位が変わる『資本企業』の中では『遊んで暮らす』というのは、どれほどの価値があるのだろうか。

「さっき、代金は労働に対して真摯に支払われるべきだって言ったな。その通りだ。だから俺はここまで払う覚悟を決めた。どうする。この依頼、引き受ける気はあるか？」

とどめの言葉を放つと、褐色の女はその場で跪き、顔の前で両手を組んで、瞳をキラッキラに輝かせてこう答えた。

「それを早く仰ってくださいご主人様!!」

8

『資本企業』軍の零細PMC、戦場お掃除サービスの車両は一〇輪の装甲車だった。内部はかなり広いが、小回りは利かなさそうな車体だった。搭載火器による制圧よりも兵員輸送能力を優先させたモデルではないだろうか。

内部に入ったクウェンサーは、そこでわずかに眉をひそめた。

「……女の子の部屋の匂いがする」

「さあさあ奥へ!!　手狭で申し訳ありませんが、我々一同お客様をおもてなしさせていただきます!!　チャーム！　お茶はまだ余っていたっけ!?」

「出涸らしをさらに二周ぐらい使い回したのしか残ってないよ。あるのは雪を解かした飲料水と、お茶請けにはレーションの余りぐらいだけど？」

「使えないヤツめ。そうだ、申し遅れました、私はワイディーネ＝アップタウンと申します！斥候偵察、砲撃支援から肩揉み、耳かきまで仰っていただければ何でもします!!」

「そ、そう。とりあえず移民居住都市へ向かってくれると助かるかな」

にこにこにこにこー、と笑顔だらけなワイディーネに、クウェンサーはやや引き気味に応じる。ワイディーネは律儀に運転席へ声をかけ、装甲車を発進させた。そこへ、横からヘイヴィアがにやにや笑いながら口を挟んできた。

「おいクウェンサー、やってくれるって言うんだから、もらえるもんは全部もらっちまおうぜ。ちなみに俺は膝枕で耳かきが良いな!!」

すると、ワイディーネは一切の表情を消して、

「テメェは余計な事を言うな。隅っこで大人しくしていろ」

「……この差は何？」

「きちんと料金を払ってくださるお客様と、一セントも出さねえクソ野郎様の違いです☆　乗せてもらえるだけでもありがたく思いやがれ」

「良いよもう！　テメェには何にも期待しねえよ!!　ただし覚えておけ、俺は冷たい目で見下されると気分が高まるタイプの男だからな!!」

拗ねるヘイヴィアは、そこで気づいたように、

「でもよ。ＰＭＣとの契約ならダイヤじゃなくても、『ハンドアックス』でも良かったんじゃ

ねえの？　グラム単位の値段はプラチナよりも高いんだろ」

「あれは製造に必要な触媒の事。完成品の爆薬にそこまでの換金性はないよ」

適当に答えるクウェンサーは、思考を切り替える。

第二四機動整備大隊。七機のオブジェクト。

「いかがいたしました？」

「……今さらながら、まともな戦況じゃないと思ってね。ダイヤで釣った以上、偉そうな事は言えないけど、かなり消耗の激しい戦いになるはずだ」

クウェンサーはため息をつきながら、

「七機の内、六機は〇・五世代以下のダミー機だっていうのは想像がつく。でも、それにしたって主砲は使える。さらに、本命のインディゴプラズマは正真正銘の第二世代。何の言い訳も通用しない、正真正銘の怪物兵器だ」

「そう言えばよ」

ヘイヴィアはびくびくした目でワイディーネ達の方を見ながら、クウェンサーに話し掛ける。

「機体は廉価版のダミー機だったとしてもよ、それを操縦しているエリートの方はどうやって調達したんだ？　それとも、操縦士の方もエリートじゃなくて、そこらの兵士を無理矢理に乗せているだけなのか」

「んん！？　それはですね、多分エリートじゃなくて戦略ＡＩですよ」

「何だって？」

クウェンサーが眉をひそめると、ワイディーネは同僚の傭兵の女性へ声を掛ける。

「レミッシュ、お客様に説明してあげて。モニターを使って、分かりやすく」

「ええ」

ツインテールの女性傭兵はクウェンサーの隣に座ると、携帯端末をこちらへ見せてきた。

「これが、六機が海岸線から上陸した時の挙動。赤い矢印で表示してある。動きに特徴があるのは分かるかな？」

「やけに直線的だな……。編隊行動中だったから、っていうのもあるかもしれないけど」

「そして、こっちがリーダーのリリイマリア……そっちじゃインディゴプラズマって呼んでいたっけ？　この緑の円を見て。リーダーから半径五キロ圏内に入ると、ダミーの六機が……」

「挙動が……変わった!?」

「動物的な流線挙動に切り変わったよね。おそらく普段は戦略ＡＩに挙動を任せておいて、リーダーはマニュアル操作でいつでも補正を利かせられるようになっているんでしょう。……奇襲でなければ、海上のオブジェクトはああも簡単にやられなかったかもね」

「オートとマニュアルの切り替え。『情報同盟』軍といい一、四のオブジェクトといい、戦略ＡＩの開発ってのはあっちこっちで流行っているのか？」

クウェンサーはヘイヴィアの方を見た。

「ダミー機が本当に戦略ＡＩを使っているとしたら、『情報同盟』軍のラッシュの時みたいに、アンジェリナ・リストを応用して動きを止められないかな？」

「余裕がねえよ。色々とな」

ヘイヴィアの意見は否定的だった。

「ラッシュの時は、敵軍のエリートの視線はウチのお姫様に釘付けだった。だから俺らは自由に動けたんだ。でも、今はそんな余裕はねえ。チョロチョロ動きゃあ向こうは主砲を突きつけてくるぜ。それに、戦略ＡＩの学習機能に影響を及ぼすような『オブジェクトの残骸』だって都合良く転がってる訳じゃねえ」

「アクティブスレッジは海に沈んだとして……スノウクエイクは？」

「数の差ってのも前の時とは様子が違う」

うんざりしたようにヘイヴィアは息を吐く。

「ウォーターストライダーの主砲は八門。その内、実際に使ったのは三門。ラッシュ一に残骸二だ。残骸の方が多い。……対して、今回は残骸一にダミー機六インディゴプラズマ一だ。仮にスノウクエイクの残骸をフル活用したって、向こうのＡＩはそれを脅威とは判断しねえ。残骸を取り囲んで袋叩きにして、動かねえのを確認しておしまいさ」

「まあまあ」

レミッシュは、何の文脈の繋がりもない合いの手を利用して、クウェンサーとヘイヴィアの

ネガティブな思考を断ち切った。

その上で、自分の言いたい方向へ話題の方向を修正していく。

「重要なのは、ＡＩと手動修正の切り替わる半径五キロという範囲。おそらく、赤外線や電波を使って遠隔操縦できる領域なんだと思う。でも、だとすると」

「……そうか。そこまで近づけば、逆手に取れるチャンスがあるかもしれない……？」

「お客様。当ＰＭＣは武器、弾薬、兵糧、通信機、電子妨害装置、一通り取り揃えております」

ワイディーネが合成樹脂でできた巨大な箱を蹴り倒すと、中から大量の火器がゴロゴロと飛び出してきた。

彼女はにっこりと微笑んでこう言った。

「必要な物があれば何でも仰ってくださいませ」

「大半がダミー機とはいえ、第二世代を含むオブジェクト七機編隊が相手だ。しかもプライズウェル＝シティ・スリッカーは相当イカれている。『白旗』を揚げても両手を上げても攻撃の手を緩める事はない。一度出撃すれば途中退場はできないぞ」

「金をもらえりゃ何でもやりますよ。そして、すでに十分な料の金額はいただいております」

9

第三七機動整備大隊所属、オブジェクト整備主任のアヤミーチェリーブロッサムはオフロードカーを停めて、飛び出すように地面へ降りた。

アヤミとは整備兵の婆さんの事である。

元々、彼女は『資本企業』の人間だった。

経済と資金が全ての価値の基準点となるその考え方は彼女の心にも染み付いていたし、貯金の大小で人権の優先順位が変動するという事についても特に疑問は抱いていなかった。元々習得していたオブジェクトの整備技術にしても、当時の彼女はその行為そのものに誇りを持っていた訳ではない。それが多大な利益を生み出す事にプライドを持っていたのだ。

娘夫婦の行っている活動を知った時も、馬鹿な事をしているな、というのが率直な感想だった。食糧難に見舞われている地域への農業支援。お涙頂戴にはもってこいだが、それ以上の価値があるとも思えない。具体的な収益の期待できない行動のために、具体的な資金を消費し続ける。そんな事は、『資本企業』では学校教育を受ける前の幼児でさえ『無駄遣い』だと言って切り捨てるだろう。

そんな行動の結果として娘夫婦が『資本企業』から追われる事になった時、彼女はまず自分の娘を本気でぶん殴った。それから彼女達の手を取った。やはり見捨てられなかった。経済や資金とはかけ離れたその未練が、ひょっとしたら娘夫婦が農業支援を経て手に入れようとしていたものの一端だったのかもしれないと、彼女は思った。

『資本企業』にはいられない。他の地域へ亡命するしかない。その逃避行の中で、彼女は世界的勢力という巨人の存在を強く認識するようになる。

それは、単に『資本企業』だけが大きな影を持った組織だったという訳ではない。

亡命先のゴール地点として設定していた『正統王国』にしても、影の大きさに違いはなかった。

ゴールの向こうに待っていたのは、決して楽しい生活ではない。

戻ったら戻ったで、進んだら進んだで、それぞれの苦難が待っているだけ。

だが。

巨人に踏みつけられれば踏みつけられるほど。

彼女はより強く思ったのだ。

この大きな影から、何が何でも家族だけは守り抜く。

そのためなら軍もオブジェクトも利用してやる、と。

「シキブ!!　イエカズ!!　中におるのか!!」

家庭向けのマンションの前で、大声で名前を呼びながら婆さんはエントランスに向かう。特徴的な街並みを造る一部として、このマンションも他とは違う特色があった。基本的には薄い

プレハブなのに、きちんと高層建築を構成している。エレベーターもオートロックも完備している。壁や床は、本来窓に使う方式であろう、二重構造で断熱効果を得ていた。資材不足でプレハブを使っているのではなく、自ら好んでプレハブを使って街を造っているのだ。看板や標識には、平仮名、片仮名、漢字などが混在していて、『正統王国』としてはかなりの異彩を放っていた。そう、プライズウェル＝シティースリッカーを苛立たせるほどに。

婆さんは娘夫婦の名を呼んだが、反応はなかった。いちいち相手を待っている暇はない。階段で三階まで上がって目的のドアを目指す。

ちょうど、娘のシキブが玄関のドアを開けたところだった。

二〇代後半の黒髪の女性は、キョトンとした顔で近づいてくる婆さんを眺めている。

「どうしたの母さん？　そもそも休暇はまだ先じゃ――」

「イエカズはおるか。あと孫のオリヒメも!!」

「ちょっと、いる訳ないでしょう。今日は平日よ。パパはお仕事だし娘は小学校です。まったく、軍人さんって曜日の感覚も分からなくなるのかしら」

「連絡するんじゃ」

遮るように、婆さんは切羽詰まった調子で言う。

「早く!!」

「なに、なに、ええ？　もう、遊びに来るなら事前に連絡してよ母さん」

玄関へ強引に入った婆さんは、入口近くにあった固定電話の受話器を取る。あらかじめメモリに登録されていた番号に掛けたのだが……、

「駄目か。電話が通じん」

一瞬、一四の部隊が電話回線を断ったのかと思った。が、違うようだ。表が騒がしくなってきている。オブジェクトは五〇メートル以上の巨体だ。遠くからでも接近は分かる。

「電話回線が混雑している……」

「何がどうなっているのよ」

パチパチと瞬きしながら、シキブは尋ねてくる。

「さっきいきなりテレビが試験放送に切り替わったかと思ったら、今度はインターネットのどのページを見ても『繋がりません』。もー、お昼ご飯の料理のレシピどうすれば良いのよ」

「そっちは『正統王国』の『本国』がパニック防止のために封鎖したな。太いラインから順に潰している最中か。どっちみち、混雑していなくても電話も使えそうにないのう」

「？」

「シキブ、冷静に儂の話を聞くんじゃ」

「慌てているのは母さんだけよ」

「もうすぐこの街にオブジェクトが来る」

整備兵の婆さんは、努めてゆっくりと言った。

「インディゴプラズマを軸とした七機編隊。『正統王国』軍には彼らを止められない!!　早くこの街から離れないと国家レベルの怪物兵器がこの街を火の海にしてしまうんじゃ!!」

「え、ちょっと」

シキブは一瞬、笑みを作った。

日本列島にいた頃の癖は直っていないようだった。

「オブジェクトが来るって何？　パレードがあるなんて話、聞いた事がないんだけど」

婆さんは無視して無線機を取り出した。

軍用の回線に周波数を合わせ、黙ってボリュームを上げる。

『ベイビーマグナムの修理急げ!!　完全に直せるなんて誰も思ってない！　最低限、主砲が一門だけでも動かせる状態にできれば良い。こうしている今もインディゴプラズマの編隊は移民居住都市へ移動を続けている。ここで遅れれば追い着けなくなるぞ!!』

シキブは笑顔のままだった。

笑顔のまま、ガタガタと小刻みに震え始めた。

「イエカズとオリヒメはどこじゃ」

婆さんは真顔で尋ねた。

「これから拾って街を出る。あの七機が来る前に!!　じゃからお前も準備しろ。時間は一〇分!!」

「待ってよ。何これ何これ!!」
「答えている暇があるように思うのか!?」
「お隣さんにも連絡しないと……。ううん、それだけじゃない!!　このマンションのみんなに、街中の人達に逃げるように言わないと!!」
そこまで言ったシキブの言葉が、唐突に途切れた。
婆さんが平手打ちをしたからだ。
「無理じゃ。どうせ間に合わない。仮に儂らの言葉を真に受けても、そうすれば待っているのは極限のパニックと大渋滞だけじゃ。交通機関は麻痺し、誰も外へ出られなくなる」
「じゃあ見捨てろって言うの!?」
「軽蔑してくれても構わん」
娘からの眼光を受けて、むしろ婆さんは挑むように一歩前へ出た。
「だが儂は家族を守る。そのためなら何でもする。お前達を逃がすのに不都合が生じるなら、この街を見捨てる覚悟も決める」
「そんなの……」
「なら、イエカズとオリヒメは諦めるか。事実を知れば、近隣住人で車両の奪い合いになるぞ。そうなったら誰も二人を回収できない。街の外へ出る事もできない!!　それでも良いのか!?　赤の他人を助けるために、自分の家族を全員犠牲にするのか!?」

「……」

「儂には耐えられん。じゃから部隊を脱走してまでここへ来た。お前はどうじゃ。イエカズとオリヒメ、二人が黒焦げになっても良いのか。儂はオブジェクトを知っている。そんな儂が教えてやる。オブジェクトの砲撃には容赦がない。墓へ埋めるだけの死体なんて残らんぞ」

シキブは一度だけ、無言で壁を叩いた。

大きな音で婆さんを黙らせると、彼女は部屋の奥へと早足で進んでいった。おそらくクローゼットからスーツケースでも引っ張り出そうとしているのだろう。

時間はない。

もう街中でもパニックは起こり始めている。

交通機関へ深刻な影響が出る前に行動しなければ、この街の中に取り残される。そうなったらオブジェクト七機編隊の砲撃に巻き込まれてしまう。

五分ほど待っていると、シキブが玄関へ戻ってきた。

「準備できた」

「行くぞ」

「私は多分、最悪な事をしているのね」

「背負うな。それは儂の罪じゃ。本来なら、あの七機は儂らの部隊で止めなくてはならなかった」

エレベーターを待っていられない。階段を使って一階まで駆け下りると、軍用のオフロードカーへ乗り込んだ。タイヤのゴムを地面に擦りつけるように急発進させる。

「イエカズとオリヒメ、どっちが近い？」

「どちらかと言えばパパの方。でも、そんなに変わらない。両方とも五キロ以内」

「ならイエカズから回収する。会社まで案内しろ」

信号も一方通行も無視してオフロードカーを走らせた。しかし誰も注意しなかった。それどころではなかったのだ。すでにパニックは始まっている。赤信号で停車すれば窓から人が飛び込んできそうな勢いだった。

何でこんな事に、とシキブは呟いていた。

婆さんは無視してアクセルを踏み込む。

イエカズの勤めている会社は中規模の紳士服販売会社だった。二重構造のプレハブでできたビルの中の一部を借りているらしい。

「どうやって呼び出すの？」

「外線は繋がらなくても、内線はそのまま利用できる。会社の受付は？」

「一階に総合受付が。テナント全部の来客を、外部のオペレーター会社に委託していて……」

「ならまっすぐ向かえ。弁当を届け忘れたとか何とか適当に嘘をついて、内線電話を使わせてもらうんじゃ。そしたらイエカズに、階まで降りてきてもらう。そのまま回収すれば良い」

「母さんは？」

「二人してここを離れたらオフロードカーを盗まれる。お前が行くんじゃ。それとも、こんなもんを振り回して暴漢を追い払う度胸はあるか？」

言いながら、婆さんはオフロードカーのシフトレバーの近くに差し込んであったものを引き抜いた。それは『正統王国』軍のサブマシンガンだ。

シキブは顔を青くしてコクコクと頷くと、オフロードカーを降りて一階総合受付へと走っていく。

婆さんは透明な自動ドア越しに、しばらくシキブの様子を眺めていた。

やがて、シキブはスーツ姿の会社員を連れて戻ってきた。律儀に自社製の紳士服だった。気の弱そうな男を見て、婆さんは小さく舌打ちする。

「時間がかかりすぎじゃ」

「義母さん、大体の事は聞きました。でも……」

「論じている暇はない」

再びアクセルを踏み込み、急発進させながら婆さんは言う。

「オリヒメを見殺しにしても良い理由に心当たりはない」

「……」

街の混乱は時間を追うごとに、加速度的に広がっていく。何を考えているのか、この状況で

建物に火を点ける馬鹿まで出てきたらしい。遠くの方に黒煙が見える。オリヒメのいる小学校に金目の物は集中していないはずだが、婆さんの胸に嫌な重圧が溜まっていく。安全地帯などもはやどこにも存在しなかった。

「義母さん、スピード!!　落として、もっとゆっくり!　ぶつかる!!」

「黙ってお れ馬鹿者!!」

「うあ あ、あっちの男、何か叫んでる。ねえ、あれ、こっち向けてるの、鉄砲じゃ!?」

婆さんは無視してさらにアクセルを深く踏み込む。速度計の針が一気に動く。数回、乾いた銃声のようなものが聞こえたが車体を掠める事もなかった。元々、本気で人間を射殺する度胸もなかったのだろう。

小学校へと辿り着く。

校門からオフロードカーを突っ込ませ、教員用の駐車場で強引にターンする形で急停止させる。すでに授業は中止になっているようだった。しかし子供達を帰すつもりもなかったらしい。大勢の顔が、窓からこちらを覗き込もうとしている。どの顔にも不安があった。

街の混乱を考えると、教員達の判断は正しい。だが足りない。それではシティースリッカーの率いる七機編隊からは子供達を守れない。

「シキブ、イエカズ。オリヒメを連れて来い。教員が邪魔をするようならこいつを使っても構わん」

言いながら、婆さんはサブマシンガンをイエカズに突きつける。
「ただしコッキングレバーは引くな。薬室の中は空にしておけ。それなら万に一つも弾が出る事はない」
「やめてください。弾が出るとか出ないとか、そんなの関係ありませんよ」
「ふん。なら早くしろ。急がんとあの七機がやってくる」
「ええ。でも……」
オフロードカーから降りながら、イエカズはわずかに言い淀んだ。
「分かっておる」
婆さんは遮るように言った。
イエカズは、他の子供達の不安そうな目を直視できないようだった。それは婆さんも一緒だ。確実に娘夫婦を逃がすため、今から彼らを見殺しにしようとしているのだから。
「分かっておる!!　だが最善の選択などできん!!　早く行け。オリヒメだけでも一刻も早くここへ連れて来い!!」
怒鳴るように言うと、イエカズは慌てて校舎の扉の方へと走って行った。シキブもその後を追う。
その時だった。
遠くから雷雲が近づいてくるような、不気味な音が響いてきた。婆さんは顔をしかめる。聞

き覚えがあった。静電気だ。オブジェクトの巨体を浮かばせるために、人工的な手段で大量に発生させている静電気の音だ。

ベイビーマグナムのものではないだろう。

となると、答えは一つだ。

（間に合わなかった……!?）

ここから音が聞こえるという事は、すでにあの七機は街の外周部へ到達しているだろう。いつでも砲撃できる。言語保護活動家の大虐殺が始まってしまう。ひとたび開始されてしまえば、もう婆さんにも逃げられないだろう。ビルは折れ、高架道路は崩れ落ち、あらゆる交通機関が遮断される。オフロードカーは何の意味も持たなくなる。

整備兵の婆さんは思わず奥歯を噛み締めた。

その時だった。

『ヘイばあさん！　まだ生きているか。ナイト様のご登場だ!!』

無線機から、聞き慣れた少年兵達の言葉が飛んできた。

『なあクウェンサー。こいつはやっぱり損な役回りだぜ!!　誰がどう考えたって、七機ものオブジェクトと戦うとか普通じゃねえだろ!!』

『黙れよヘイヴィア。せっかくの晴れ舞台だ。ド派手に決めて今回もヒーローになってやろう』

『テメエはいっつもそんな調子だよな！　「安全国」で菓子ばっか食ってる「貴族」達にも教えてやりてえよ!!』

『ヘイヴィアだってさ、ブツブツ言いながらもしっかりついてきてくれるじゃん』

何だこいつらは、と婆さんは思った。

戦況は最悪だ。一機だけでもまともに戦う事が許されないオブジェクトが七機も迫っている状況で、何故、立ち向かうという選択肢を選ぶ事ができる。オブジェクトの設計士になるという夢に対して、何のプラスにもならないというのに。

『ばあさん。アンタに死んでもらっちゃ困るんだよ』

クウェンサーがそんな事を言った。

『アンタからは、まだまだ目で見て盗むべき技術情報が山ほどありそうだからな。優れた技術者を失うのは、俺の夢にとっても障害になる。それに』

「……、」

『ウチのお姫様が拗ねているんだよ。ばあさんがメンテしてくれないとやる気が出ないんだとさ。ベイビーマグナムが動かなくなったら俺達はおしまいだ。だから協力してくれないとすごく困る』

お前ら……と、婆さんは呟いた。

壊滅状態の部隊を見て、婆さんは彼らを見限った。軍規に反してでも家族だけは守ろうとした。しかし彼らは違ったのだ。フローレイティアの指揮する第三七機動整備大隊は、まだ動いているのだ。

決して諦めずに。

街の皆を救うために。

『今から第二四機動整備大隊と交戦に入る。作戦目的は移民居住都市の防衛！　俺達だけじゃない。ベイビーマグナムもじきに動く。だから、プライズウェルシティースリッカーのクソ野郎を吹き飛ばすまで、そっちも絶対に死ぬんじゃないぞ』

戦闘が始まろうとしていた。

最先端の七機のオブジェクトと、ちっぽけな生身の兵士達の戦いが。

10

「いやあ、燃える展開ですね」

急停止する装甲車の中で、褐色の傭兵ワイディーネはわざとらしく目元を拭った。

「私、お客様の熱意に感極まってしまいそうです」

「その世辞、多分サービスの一環なんだと思うけど、ちょっとイラッとするよ」

装甲車後部のハッチから雪原へ飛び出しながら、クウェンサーはそう応じた。

「どうする？」

「まずは連中を足止めしましょう。注意を引いて、こちらへオブジェクトの砲を向け直させるのです。最低でも、都市の外で戦うという状況は作っておきたいものですね」

「おいおいおいってばよ!!」

ヘイヴィアが慌てて口を挟んだ。

「馬鹿じゃねえの！　注意を引くって何だよ!!　携行型対戦車ミサイルでも撃ち込むってのか!?　居場所バレたら反撃一発で灰になっちまうだろうが!!」

「うるさいな無銭飲食野郎。何も真正直に私達の手で撃つとは言っていません。バードかアニマルを使えば何とかなるでしょう」

「何それ？」

クウェンサーが尋ねると、ワイディーネはパッと顔を輝かせ、

「我が戦場お掃除サービス自慢の無人機でっす!!　バードが航空機でアニマルが六輪車両。基本的にはラジコン電波で操る偵察機ですが、単発のロケット砲を装着させる事もできます。移動式の迫撃砲のような物をイメージしてください。発射時の衝撃で機材が壊れる事もありますけど」

傭兵のチャームとレミッシュが、装甲車の奥から小型のユニットを引っ張り出してきた。羽

の長さが五〇センチぐらいの飛行機と、全長四〇センチ程度の平べったい車両だった。車両にはオプションなのか、ソリのようなパーツが強引に付け加えられている。

「全部で何機？」

「バードが一、アニマルが一〇。ラジコン電波の送信位置を特定されないように、ダミーアンテナも複数設置します。これで奇襲しても反撃でこちらが吹き飛ばされる事はありません」

「なら早く始めよう」

クウェンサー雪の上へ並べられていく無人機へと近づく。

「手伝える事は？」

「『資本企業』軍フォーマットですので、無人機のセッティングはこちらでやります。お客様には、ダミーアンテナを設置していただけないでしょうか。現地点から半径五〇〇以内に、ランダムに設置していただけると助かります」

ワイディーネが目配せすると、レミッシュがいくつかのケースを持ってきた。縦横は二〇センチ、厚さは五センチ程度のアタッシェケースのようなものだ。

「ケースを開ける必要はありません。置く時は、こちらの灰色の面を下にしてください。取っ手近くにあるスイッチを親指で押し上げれば準備完了です。周波数はすでにセットされていますのでいじらなくても結構」

「ヘイヴィア、やるぞ」

「へいへい。俺も宝石が欲しいぐらいだぜ」
「開始時刻は？　さっさとやらないとインディゴプラズマが街を攻撃してしまう」
「アンテナのセットに五分。第一陣のバードが射程に入るまでさらに五分。第二陣のアニマルは雪の上を進みますから、かなり時間がかかります。連中がこちらに気づいた後に、歩兵部隊などを攪乱する目的で使用するものと考えてください」
「最低でも一〇分か」
クウェンサーは、ヘイヴィアとダミーアンテナのケースを分配させながら、
「かなり厳しいな」
「ですね。でもやらない訳にはいきません」
「その通りだ。行くぞヘイヴィア、俺は東方向、お前は西南方向だ」
「クソッたれ、雪ん中の全力ダッシュとかやめてほしいぜ」
適当に言い合って、クウェンサー達はそれぞれ別の方角へと走った。こうしている今も、歩兵部隊の車両を伴った七機のオブジェクトは移民居住都市へ近づいている。もう時間はない。
クウェンサーの持っているダミーアンテナは二基だった。似たような場所に設置しては意味がない。かと言って、本命を中心とした馬鹿正直な円形に設置すると、一発で居場所を推測されてしまう。肝心なのは、分布図から本命の場所を特定させられないようなランダムさだ。
（くそ、間に合うのか!!）

深い雪は思ったよりも足を取り、スタミナを消耗させる。クウェンサーはケースの取っ手近くにあるスイッチを切り替えると、ほとんど投げるようにダミーアンテナを設置していく。

（駄目だ。この調子じゃバードがロケット砲を発射する前にインディゴプラズマが砲撃を始めてしまう！　安全策に気を配っているだけの時間はない!!）

クウェンサーは次のダミーアンテナの設置場所を目指して走りながら、無線機を取り出した。ワイディーネへ連絡を入れる。

「もう良い、バードを飛ばせ!!」

『ええっ!?　無茶ですよ。連中は無人機のラジコン電波を逆探知します。矛先はダミーアンテナの方に向きますけど、そこからお客様が十分に離れてくれないと結局巻き込まれ――』

「良いから!!　もたついている間に砲撃が始まったら元も子もない!!　早く!!」

『知りませんからね!!　多分こんな状況じゃ生命保険会社も良い顔しませんよ!!』

『おおいクウェンサー！　ちなみに俺も同じピンチに陥るって事を忘れちゃいねえだろうなアアアあああ!!』

一つ目のダミーアンテナのスイッチを入れて放り投げたクウェンサーは、遠くへ目をやった。装甲車のある辺りで、レミッシュの小さな影が斜め上に向けて、ボウガンに似た射出装置の引き金を引く。バードが上方へ滑らかに放たれ、模型用のプロペラが回転し、一五メートルほどの低空へと飛んでいく。高度が安定すると、そのままインディゴプラズマの方へと向かって行

った。

「最高速度は？」

『時速一七〇キロ。ある程度速度を出して機体が安定してしまえばあっという間です。ただ、強い横風を受けると一気に失速するリスクがあるんですけどね』

ワイディーネの声が続く。

『お二人とも、急いでダミーアンテナから離れてください!!　ロケット砲で砲撃すれば、すぐさまオブジェクト側からの反撃が来ます!!』

その言葉を聞きながら、クウェンサーは二つ目、最後のダミーアンテナのスイッチを入れて横合いへ放り投げた。適切な位置に置いた、というよりも、単に邪魔な錘を捨てるような格好だった。

シュポン、というシャンパンのコルクを抜くような音が聞こえた。

バードの下面に懸架されたロケット砲から、爆発物が放たれた音だ。しかし四〇ミリの砲弾がオブジェクトの装甲に当たる事はなかった。それより前に、インディゴプラズマの細いレーザーが放たれる。オレンジ色の閃光と共に、空中で爆発があった。随伴していた歩兵部隊の車両が急ブレーキをかけたが、部隊全体の動きは滞りなかった。被害らしい被害もないだろう。

そして。

当然ながら、どんなに些細なものであっても、牙を剝かれればオブジェクトは反応する。前

の戦闘で多少損傷したままのインディゴプラズマは即座に反転した。
複数の砲台が小刻みに動く。周辺を走査しているのが分かる。クウェンサーはその間も走り続ける。深い雪に足を取られ、ほとんど転がるような格好で、少しでもダミーアンテナから遠ざかるように足を動かし続ける。
そこで、インディゴプラズマからの砲撃があった。
ドォン!!!!!　という太鼓のような太い音は、巨大な砲弾が音速超過で衝撃波を撒き散らすものだった。
「レールガンか!?」
音の方が早く聞こえたのは、砲弾の軌道のせいだろう。地上を狙っていない。まるで野球の遠投のような、上方へ大きく弧を描く軌道だった。クウェンサーの頭上一〇〇メートル辺りを飛んでいる。
不意に、レールガンの砲弾の動きがピタリと止まった。
パラシュートが開いたのだ。
遠くから双眼鏡やスコープで確認しているのか、ワイディーネの声が届く。
『砲弾を確認!!　直径七〇センチ、全長一五〇センチ程度の、ドラム缶のような円筒形です!!　側面には無数の穴のようなものがあります!!』
「何だ、あれ……？」

なおも走り続けるクウェンサーの耳に、蒸気が噴き出すような音が聞こえた。例の、パラシュートにぶら下がったドラム缶からだ。大空が、砂糖水をかき混ぜたように歪んでいる。

「気体……ガス……下位安定式プラズマ砲の!?」

二四の歩兵部隊と戦ったクウェンサー達は、特殊ガスの性質を知っている。あれは空気よりも重い。上空で散布されたガスは、重力と風に従って広範囲に拡散していく事だろう。

そう。

下位安定式プラズマ砲を撃ち込めば、一帯が光と熱の地獄と化すフィールドを作るために。

ギチギチギチギチ、と六機のダミー機が、主砲をこちらへ向けていた。

『クウェンサー!!　連中は明らかにテメェのトコのダミーアンテナを狙ってやがる!!　丘でも何でも良い、とにかく遮蔽物を探して身を伏せろ!!』

（上空から降ってくる特殊ガスからそんな方法で逃げられるかっ!!）

特殊ガスの範囲は一〇〇メートルを超えている。この雪の中では範囲の外へ逃げ切るのは難しいだろう。クウェンサーは背中のバッグからプラスチック爆弾の『ハンドアックス』を取り出した。電気信管を突き刺すと、それを勢い良く頭上へと放り投げる。

高さが最大に達したところで、クウェンサーは無線機のボタンを押した。

パガッ!!　という爆発音と共に、頭上で衝撃波が撒き散らされた。

周辺の気体を吹き散らすような衝撃波を。

直後。

ダミー機六機から、主砲の下位安定式プラズマ砲が放たれた。頭上五〇メートル、最も特殊ガスの濃度が適したポイントへと。

閃光が目を焼き、爆音が脳に突き刺さった。

まるで真上から踏み潰されるように、クウェンサーの体が雪の上へと倒れ込んだ。寒冷地仕様の分厚いコートを着ていたはずなのに、地肌にビリビリとした痛みを感じる。軽度の火傷を負っているのだと、その痛みで理解した。本来あるべき『熱い』という感想はなかった。

「がアアアあああああああ

たった一発でこれだ。

そして当然、敵には一発で留める理由はない。

『クウェンサー!!　離れろ！　今の「ハンドアックス」で連中がテメェの位置に気づきやがったぞ!!』

無線機を通して、ヘイヴィアの叫び声が届いた。

クウェンサーは気持ちの悪い泥の中から身を起こし、波打つような低い丘を越えて斜面を転がった。

タッチの差だった。

帯状の爆竹に火を点けたように、大量の乾いた音が戦場を埋め尽くした。

オブジェクトによるものではない。

随伴していた一四の歩兵部隊が軍用トラックから降車し、次々とアサルトライフルの引き金を引いたのだ。七〇、八〇もの銃口から五・五六ミリの尖ったライフル弾がばら撒かれ、クウェンサーが盾にしている丘の上が舞い上がっていく。

即座にオブジェクトによる第二陣がやって来なかったのは、大規模過ぎる攻撃では小さな標的を狙うのが面倒だと判断されたからか。

あるいは、

（七機全部で砲の総数は七〇〇門以上。一斉射撃すればそれでおしまいなはずだ。となると

……やっぱり、ダミー機の動力炉は完璧なものじゃない。主砲を撃つのに精一杯で、副砲は全部飾りなんだ）

歩兵達は射撃を続け、こちらの身動きを封じてくる。このままオブジェクトが突っ込んできたらおしまいだ。しかしこれだけの銃弾の雨では、迂闊に顔を上げる事もできない。

その時だった。

インディゴプラズマが動いた。

「ちくしょう！　またあのレールガンか!!」

クウエンサーの見ている前で、大きく弧を描くようにドラム缶のような砲弾が放たれる。歩兵部隊はあくまで足止め。共同作戦と言っても、主従関係は明解。インディゴプラズマを操るプライズウエルの人格が垣間見えるというものだ。

しかし、レールガンで放たれたドラム缶がクウエンサーの頭上に届く事はなかった。

その前に、地上から携行型対戦車ミサイルが放たれたからだ。ミサイルはレールガンの砲弾に当たる前にレーザーによって撃ち落とされたが、爆風の影響は無視できない。急激に角度を変えたドラム缶は、パラシュートを開く事もできずに、歩兵部隊とクウエンサー達の中間地点へと落下する。

『お客様！　後金をいただく前に死なれてしまっては困ります!!』

「ありがとうワイディーネ。その正直すぎる生き方はちょっと尊敬するよ」

地上に落ちたドラム缶からも特殊ガスは散布されるだろうが、上空から放たれるよりは効果範囲は狭まるはずだ。その上、こちらは風下ではなかった。

なのに。

『おいクウェンサー!!　インディゴプラズマの主砲が動いているぜ!!』

「うそ、だろ……!?」

疑問を放った直後、主砲の下位安定式プラズマ砲が放たれた。

白い起爆。

クウェンサーの体が真後ろへと吹き飛ばされた。何メートルもノーバウンドで宙を舞った。内臓を内側から絞られるような激痛が走った。自分の眼球が壊れていないのが不思議なほどの閃光だった。

「……あの、野郎」

仰向けに倒れたまま、クウェンサーは口を開く。

「自分の部下を迷わず巻き込ませたのか……!!」

丘の向こうがどうなっているか、確かめる気力もなかった。収束すればオブジェクトの装甲を撃ち抜けるほどの熱と衝撃を生み出す、下位安定式プラズマの圧倒的な爆発だ。大惨事、などという言葉で収められるレベルの破壊ではないだろう。

『正気じゃねえぜ。二四の連中は何であんな独裁者に従ってやがんだ!?』

『それ以外に道がないからでしょう。投降したって反逆の罪に問われるだけです。間違っていようが何だろうが、戦勝者の栄誉を得るためには二四を敗北させる訳にはいきません』

『来やがるぜ。今度は七機編隊だ!!　野郎、仲間の死体をすり潰してこっちへ近づいてくるつもりだ!!』

ヘイヴィアの声を聞きながら、クウェンサーはのろのろとした動きで起き上がった。ここで立ち止まっている訳にはいかない。少なくとも、七機編隊はクウェンサーの位置を特定しているはずだ。

『敵はダミー六機を水平に並べて突撃させ、その後に本命のリリイマリアが走行しています!!』

『テメェの部下は迷わず切り捨てるくせに、自分の命になると慎重な野郎だ!!　こりゃあダミー機は戦略ＡＩってのもマジっぽいぜ!!』

クウェンサーの予想では、ダミー機は動力炉の出力が低く、主砲以外の砲は全て飾りでしかないと思っていた。おそらくそれは間違いではない。だが主砲でちっぽけな歩兵を狙うのも適さないだろう。

となると、

「ヤバい、走破して俺をすり潰す気か……!!」

『相手は二〇万トンの巨体を静電気で浮かばせてやがる怪物兵器だ。押し倒されたら莫大な電

気量で体が弾け飛んじまうぜ!!　おまけに推進装置の一部にプラズマまで使ってるって話だろ!!』

水平に機体を並べる、という配置自体、まるで巨大な農業機械のように地均しを行おうとしているためなのだろう。幅三〇〇メートルのトラクター。今から左右に走って逃げ切れる状況ではない。

そこへ、地上からロケット砲が放たれた。

いきなり間近から発射された爆発物に、ダミー機は反応できなかった。狙われたのはクウェンサーから一番近いダミー機だ。球体状の本体に直撃したのは、やはり主砲以外の砲が使えないからだろう。装甲の表面が薄く剝離し、ビチビチと音を立てて地面へ突き刺さる。

攻撃を受けたダミー機だけが動きを止め、重い主砲をわざわざ向け直す。直後、ロケット砲の発射地点が白く染まった。下位安定式プラズマ砲が放たれたのだ。

「嘘だろおい!!」

『無人機のアニマルです！　ご心配なく!!』

直後。

五機のダミー機とインディゴプラズマがクウェンサーの真横を突き抜けていった。一ケ所だけぽっかりと穴が空いたため、クウェンサーの体が静電気の電気量で爆発する事はなかった。

「戦略ＡＩ……所詮は単純な優先順位ルーチンの膨大な組み合わせか」

インディゴプラズマはプライズウェルの手で直接操られているため、マニュアルで軌道を修正すればクウェンサーを殺せたはずだ。

遊んでいるのか、ＡＩのテストを兼ねているのか。

『西南西二〇メートルに洞窟があります！　とにかくそこまで逃げ込んでください!!　主砲以外使えないなら、戦略ＡＩには状況に対応できない可能性があります!!』

「オーケー、大人げない砲がブチ込まれない事を祈ろう!!」

そこでクウェンサーは、地面に千切れた金属板が転がっているのを見つけた。ロケット砲を受けたダミー機から剝離した、装甲表面の破片だ。縦横二〇センチ、厚さは一・センチほど。ズシリとしたが、両手で持ち上げられないほどではなかった。

（……やけに、軽い……？　高耐火反応剤を使って鍛えた鋼どころか、ただの鉄よりもずっと密度が……）

良く見てみると、鋼板の厚さは五センチほどで、残りはそれよりも薄い灰色の素材が貼り付けてあるようだった。断面は金属板とは違う、石に近い砕け方をしていた。

そもそも、ろくに鍛えていないクウェンサーの腕では、こんな塊を持ち上げられるはずがない。ロケット砲で破れる厚さでもないはずだった。にも拘らず、クウェンサーはこうして破片を手にしている。

何かあるかもしれない。

『クウェンサー急げ!!　ダミー機がフォーメーションを組み始めた!!　また向かってくるぞ!!』

「了解。そっちだって安全じゃないんだ!!　居場所を知られるような真似をするんじゃないぞ!!」

ヘイヴィアの声に急かされるように、クウェンサーは破片を抱えたまま走り出した。深い雪、受けたダメージ、そして装甲の破片。どれもこれもが移動速度を低下させた。肘の関節の辺りに鈍い痛みが走る。こんなガラクタなど捨ててしまえと何度も心の中のささやきが聞こえた。

しかし無視して足を動かし続ける。

雷雲が近づいてくるような音が聞こえた。クウェンサーの心を肉体以上に急かす。理想と現実の間にギャップが生じる。自分で足を動かそうと思っている位置と、実際に動いている位置が食い違って転びそうになる。もう限界だった。これ以上は無理だ。役に立つかどうかも分からない装甲の破片を後生大事に抱えて殺されるなんて割に合わない。やはりここで手放すべきなのだ。

そこで、ようやく洞窟の入口に辿り着いた。

ゴツゴツした地面も気にせず、クウェンサーはダイブするように中へと飛び込んでいく。緩い下り坂を転がり落ちていく。一〇メートルほども進んでいった。

あちこちがすり剝けたが、そもそも全身には軽度の火傷の痛みがある。今さらあまり気にな

るようなものではなかった。

（くそ、すぐにインディゴプラズマやダミー機六機が撃ち込んで来るぞ!!）

クウェンサーは背中から『ハンドアックス』を取り出し、信管を突き刺して自分の来た道へと放り投げた。躊躇している暇はない。即座に無線機のスイッチを押す。

密閉された空間に爆風が躍る。

「がっ!?」

クウェンサーの体が洞窟の内部で転げ回ったが、それでもマシだっただろう。

プラスチック爆弾によって、岩石のシャッターが下りていた。

その向こうから、ズズゥウウンン!!　という重たい震動が響き渡ってきたのだ。インディゴプラズマが、洞窟の入口近辺に砲撃をしたのだろう。岩盤を崩して遮断しなければ、洞窟内を熱風が席捲し、クウェンサーは焼き殺されていたはずだ。

（……主砲って感じじゃなかったな）

背筋をゾッとさせながらも、クウェンサーはそう分析する。

ダミー機の主砲ではなく、インディゴプラズマの対人砲が利用されたのは幸いだった。向こうは向こうで『主砲では殺しにくい』と善意ゼロの判断を下したのだろうが、仮にあそこで主砲クラスを撃ち込まれていれば、洞窟内部まで焼き焦がされていたはずだ。

無線機を操作したが、どことも繋がらなかった。岩盤が電波を遮断しているのだ。ひとまず

は別の出入り口を探すしかない。爆薬で崩落した出入り口に風穴を空けるという選択肢もあるが、この密閉された洞窟内では、衝撃波で自分の身を傷つける可能性が高い。

クウェンサーは装甲の破片を抱え直すと、無線機の液晶パネルを操作し、バックライトを点灯させた。

微かな光をゆっくりと振り、クウェンサーは洞窟の奥を見据える。

戦闘はまだ続いている。

やるべき事は山積みだ。

11

洞窟は水の力でゆっくりと掘られたものらしい。足元には水溜まりを傾けた程度の流れがあった。端の方を歩けば濡れる事もない。その程度のものだ。

最初はとてつもなく不安だったクウェンサーだったが、二キロほど進むとあっさり出入り口が見つかった。どこかの川と合流していたようだった。

河原に出たクウェンサーは、いい加減に痺れが出てきた腕から、装甲の破片を地面へ落とした。自分の足に直撃させそうになり、彼は慌てて飛び退く。鉄より不自然に軽いと言っても、河原の石を砕く程度の重量はあった。

「……、」

この装甲には何かがある。鋼板と謎の灰色の素材を組み合わせた二層構造だが、普通のオブジェクトの装甲とは明らかに違う物だ。

しかし一方で、クウェンサーは所詮、派遣留学の学生だ。装甲板の検査方法など分からないし、今ある機材だけで代用するとなると、さらに難易度は跳ね上がる。

自分だけでは無理だ。

だが諦める訳にはいかない。

少し考え、クウェンサーは無線機の周波数を再調整した。ヘイヴィアやワイディーネと連絡を取るためではない。

話をするべき相手は……、

「ばあさん!!　聞こえますか、クウェンサーです！　協力してほしい事があります!!」

『小僧……？』

返事はあった。

という事は、まだインディゴプラズマやダミー機は移民居住都市の中へは侵攻していないはずだ。

「インディゴプラズマに関する新しい情報が手に入りそうなんです！　でも、それは『学生』の俺だけじゃ荷が重すぎる!!　プロのばあさんの手を貸してください!!」

『馬鹿、それ以上言うな！　今の儂は軍から離れておる。現場の情報を伝えると小僧まで罪に問われかねんぞ!!』

「だったら一緒に営倉でも何でも入ってやる!!　だから協力してください!!　あの街を守れるのは俺達しかいないんだ!!」

街を守る。

その言葉に息を呑む婆さんに、クウェンサーは言葉を放つ。

「七機編隊の内、六機はダミー機。そのダミー機から剝離した装甲の破片を手に入れました。鉄と……何だこりゃ、灰色の素材の二層構造になっているんですけど、これが異常に軽い。職人技で鍛えられた鋼鉄どころか、単なる鉄と比べても。おそらくコスト削減のために何かをやっています。材質の検査方法を教えてください!!」

『待て、一つずつ順番に話せ。ダミー機？　検査方法？』

「この局面を逆転させるために必要になるかもしれないんです!!　だから早く!!」

『……』

整備兵の婆さんはわずかに黙ったが、クウェンサーに指示を出し始めた。まず、クウェンサーがどんな装備品を持っているのか、材質の検査に使える物はないか、その割り出しを行ったのだ。

『よし、携帯端末と無線機はあるな。それなら電波式が使える。まずは装甲板の破片の下に、

適当な穴を掘れ、砂遊びのトンネルと同じじゃ。掘ったら携帯端末の無線ＬＡＮをオープンにして、横から破片の下へと配置しろ』

ここは河原だったので、クウェンサーは剝離した破片の下にある大きな石の間に携帯端末を差し込んでいく。

「やりました」

『次に無線機の周波数を合わせろ。無線ＬＡＮで使われているものと同じ周波数じゃ。そしたら破片の上側に無線機を押し付けて、一〇秒間適当な電波を送信しろ』

ズズン!!　と遠くから地響きのようなものが伝わってきた。こうしている今も、ヘイヴィア達は危機的状況にあるはずなのだ。焦らされるが、正確な行動を取る事が最短の道に繋がるとクウェンサーは自分に言い聞かせる。

「終わりました。次は!?」

『携帯端末を取り出して、システム画面を呼び出して電波の受信状況を確認しろ。それで大雑把な含有率が分かる』

「含有率？」

『さっさとやらんか!!　最初に急かしたのは小僧の方じゃぞ!!』

慌てて携帯端末の画面に目をやると、クウェンサーはそこに表示されていた数字を読み上げる。

「三四・二ってあります!!」

『ふん。高耐火反応剤を使っていれば、そんなに電波が貫通する訳がない。そいつは職人技を省いた粗悪品じゃ』

無線機を通して、婆さんの冷静な分析が入る。

『だが二層構造となると、これだけでは正確な事は言えんな。小僧、二つの素材を引き剥がす事はできるか？』

「ダミー機とはいえ、オブジェクトの装甲板ですよ？」

『なら、ここから先は多少信憑性の低い「憶測」になるぞ』

婆さんはゆっくりと息を吐いてから、

『おそらく灰色の素材の正体はセラミックじゃろう。セラミックで球状の本体を形作り、その上から薄い鋼板で覆って「オブジェクトらしさ」を表現しているという訳じゃな』

セラミックには硬さに加えて、ある程度の弾力がある。これを利用して、オニオン装甲のような『衝撃を吸収・分散させる効果』を狙おうとしたのかもしれない。

しかし、

『これだけでオブジェクトの装甲を再現できるのなら、誰も苦労はせんわな。ダミー機は核で破壊できる程度の粗悪品に過ぎん』

「海戦用フロートを分析した結果、六機のダミー機は五万トン以下の重量だと推測されていま

す。……装甲板の破片の重量からセラミックの比重を考えても、ダミー機の装甲の厚さは、通常のオブジェクトの三分の一程度でしょう。しかも、高耐火反応剤を使った職人技の鋼板でもない。安価なセラミックだけで簡単に組み上げたとすると、実際の強度は……」

『やられたな』

婆さんが唸るように言った。

『見た目のインパクトに騙された。冷静に対処して、一機ずつ対応していれば、ウチのお姫様の主砲で串刺しにする事もできたじゃろう。あのオブジェクトが七機も動いている……その情報でもって冷静さを失わせる事こそが、連中にとって最大の戦果だったんじゃ』

そこまで言うと、婆さんは一度言葉を区切った。

『これがどういう事を意味しているか分かるか、小僧』

「え？　普通のオブジェクトに比べて、極端に装甲が薄いって事ですよね」

『それだけじゃない』

そこで、ジジ……という小さなノイズが走った。

自然発生的な電波障害とも思えない。ノイズは加速度的に大きくなっていく。

『熱に対する……耐性の問題じゃ。……ヤツら、の主砲は……下位安定式プラズマ、砲。そ……し、て……北極圏のア、ラスカ……方面……という……地理、的、状況……。あ、いつ……らは……最強の……兵器を、並べた、気……でお……るよ……うじゃ、が、最、初っか

……ら……弱、点……を、内、包……してい……た……。つ、ま……り……』

「ばあさん？　ばあさん!?　ちょっと……くそっ!!」

ざざざざざ!!　というノイズだけが大きくなり、相手の声は聞こえなくなってしまった。クウェンサーはやたらと耳障りな無線機を顔から遠ざけながら、

「無人機のロケット砲がうざくなってきて、ジャミングでも仕掛けたのか……。インディゴプラズマだってダミー機のマニュアル補正に電波を使っているはずなのに!!」

クウェンサーは河原から雪原の方へ戻り、戦場の方へと近づきながら、無線機を操作する。今度はヘイヴィア達に向けてだ。出力を最大に調整して送信した。

「ヘイヴィア、ワイディーネ!!　聞こえるか!?」

『ジジ……うおお返事したくねえ!!　こうしている今も……怪物兵器が索敵マイクやら電波の逆探知やらやってる最中だって……いうのによ!!』

『お客様!!　良かった、ご無事だったの……ですね！　これで後金も保証された……ようなものです!!』

多少のノイズがあるようだが、こちらは通信できる状態らしい。婆さんのいる移民居住都市の方が距離がある。その辺りが明暗を分けたのかもしれない。

（熱への耐性。下位安定式プラズマ砲。北極圏のアラスカ方面。高耐火反応剤を使っていない、オニオン装甲としても機能していないセラミックの装甲板。ダミー機はどこからやってきた。

最初に奇襲を仕掛けてきたルートは）

「ワイディーネ。無人機はいくつ残っている!?」

『バードは……撃墜。アニマル……は確認できるの……は二。ただしオブジェクト……は広範囲へジャミング……を仕掛けています。ラジ……コン電波は……干渉を受けやすい……んです!!』

「どうにかしてロケット砲を仕掛けろ。場所は携帯端末で送る。アドレスをこっちに教えろ!!」

『わお、上得意様……の個人情報入手……のチャンス!!　今日は……ついてるーっ!!』

「ちなみにもちろん暗号化して送るからな」

クウエンサーは言われた通りのアドレスを携帯端末に打ち込み、印をつけた地図データをワイディーネ達に送信する。

『これって……』

「言われた通りにやればヤツらを巻き込める。対人センサーにも反応しない小型無人機だからこそできる作戦だ。何とかなりそうか？」

『壊れかけ……のアニマルがちょうど……近くに。向こうは破壊……したと思い込ん……でいるみたい……ですから、今なら狙い放題……です。ジャミング……領域を強引に……貫くため、多少強い……出力を発しなければ……ならないので、居場所を特定……されるリスク……は増

しますけどね』

「頼む。……ついでに言っておくと、インディゴプラズマのジャミングにはおそらく穴がある。ダミー機をマニュアル補正するための周波数には干渉しないようにな。ジャミング電波を分析して穴を見つけろ。それがリーダーとダミー機を繋げるラインだ。上手に利用すれば、こっちから妨害を仕掛けるチャンスができるかもしれない」

『ザザザ――仰せのままに、お客様☆　……ほら、働け無銭飲食!!』

『クウェンサー、この戦いが……終わったら俺の愚痴を……聞いてくれよ』

二キロほど向こうで、七機のオブジェクトが蠢いていた。無人機のアニマルがいるのは、ちょうどその中央。ヘイヴィア達は中心点から西へ一キロほど進んだ所に隠れているようだった。見つかったら一発で終わりな状況だが、今ならやれる。ダミー機を操る二四の戦略ＡＩはそれほど高度ではない。

『つまり、彼らをつついて刺激して、ガガ……編隊中央で下位安定式プラズマ砲を……わざと誤射させる。装甲の薄い連中をまとめて……吹き飛ばさせるって寸法ですね』

『でも、インディゴプラズマ自体は第二世代……だぜ。ジジジ……あれが残っているだけでも十分に脅威的だ』

「何とかなる。だから今は言われた通りにやってくれ。陣形が変わってしまえば水の泡だ!!」

携帯端末のＧＰＳ地図で戦況を確認しながら、クウェンサーは相手を急かす。

その時だった。

ダミー機の一機が、不意に大きく方向を転換させた。主砲を向けた先には、ヘイヴィア達が隠れている丘がある。

（まずい、出力を強くしたラジコン電波を読み取られた!!）

だが、ダミー機はそれ以上動かなかった。ザザザガガガガジジジジジジジ!!　と無線機から激しいノイズが走り、ＧＰＳ地図の更新が止まった。

（ジャミング電波の穴を見つけて、インディゴプラズマとダミー機を繋ぐラインに妨害を仕掛けたのか!?）

爆発音が響いた。

オブジェクトのものではない。もっと小規模だ。おそらくダミー機六機の中央で、アニマルがロケット砲を撃ったのだろう。ダミー機の装甲に直撃し、爆発したのだ。

即座に戦略ＡＩが反応した。

プログラムは積み重ねられた優先順位のリストから判断し、自らを襲撃した者へ反撃を始めてしまう。

そう。

唯一稼働できる兵装である、主砲の下位安定式プラズマ砲を使って。

純白の爆風が生じた。

六機のダミー機を呑み込むように、大規模な爆発が巻き起こった。こんなに距離が開いているのに、マグネシウムの発火を直視するようにクウェンサーの目が眩んだ。ダミー機が足元に放った下位安定式プラズマ砲の威力だけではない。蒸し焼きにされた一四の歩兵達は、オブジェクトと共同作戦を行うため、特殊ガスのボンベやタンクを装備していた。そちらとぶつかって、さらに大きな爆発を巻き起こしたのだ。

だが、

『ちくしょう』

敵味方のジャミングが途切れていた。

クリアになった音声で、ヘイヴィアは絶望を口にする。

原因は七つの巨体。

多少なりともその表面は溶けているようだが、シルエットは崩れていない。

敵は、まだ動く。

『駄目だ。通じてねえぞ!!　インディゴプラズマだけじゃねえ！　ダミーの六機も壊れちゃいねえ！　いくら装甲が薄いって言っても、やっぱ生身の歩兵でどうにかなるもんじゃなかったんだ!!』

「いいや」

クウェンサーは無線機に向かって話しかける。

「無事に六機を巻き込んだ。これでチェックメイトだ」

『どこがだよ!!　多少装甲の表面は溶かしちゃいるが、連中はまだ動くみてえだぜ!!　……なあおい姉ちゃん、いい加減に逃げようぜ。報酬なんかどうでも良いだろ。死んじまったら何の意味もねえんだぜ!!』

台詞の後半はワイディーネ達に向けて言ったようだが、傭兵達は応じていないみたいだった。金目当てのPMCは、依頼料金にだけは真摯であるらしい。

「ヤツらは元々弱点を備えていた」

パニックを起こしかけているヘイヴィアに、クウェンサーはゆっくりと告げる。

「装甲には高耐火反応剤は使われていない。タマネギ装甲としての効果もない。安価なセラミックの塊だ。つまり、極端な寒暖の差に対する耐性は低い」

『何だよ、それがどうしたっていうんだよ!!』

「連中の主砲は莫大な熱を生み出す下位安定式プラズマ砲。そしてここは氷点下が当たり前のアラスカ方面。挙げ句に、ダミー機は北極海の底から奇襲を仕掛けてきた。機体全体が冷え切っていたんだ。そこへ下位安定式プラズマの爆発の余波を浴びて、急激に温度を跳ね上げた。そうすると……」

クウェンサーは一度だけ言葉を切って、息を吸い込んだ。
そして言う。

「セラミックの材質は大きく変質する！　歪みが大きくなれば、後は勝手に自壊するはずだ!!」

ゴキン!!!!!!　と、金属製の関節が外れるような音が聞こえた。
六機のダミー機が、まるでガラス細工を床に落としたように、次々と亀裂を走らせて崩れていった。本来の接合方法を完全に無視した砕け方だった。
クウェンサーは携帯端末に目を走らせる。
そうしている間に、友軍からの声が飛んでくる。
『鍛造タイプの刃物を作る際は、炉の加熱と水の冷却を利用して金属の材質を変質させて、より強い硬度を得るって聞きますもんね。一番有名なのは日本列島の刀でしたっけ』
ワイディーネは、感心したように呟いた。
『でも、あれは高度な技術を持った職人でなければ逆効果。作業場のドアを開閉しただけで致命的な温度変化が生じて金属は本来以上に脆くなり、作品は失敗するって話を聞いた事があります』

「こういう状況での運用を想定しているなら、装甲板の間に電熱線でも通しておいて、機体が極端に冷えないようにする措置を取るのが普通なんだろうけど……そもそも装甲板の厚さすらケチるような状況だ。そこまで手が回らなかったんだろ」

『喜んでいるところ申し訳ないんだけどよ』

ヘイヴィアが割り込むように言った。

『本命のインディゴプラズマはまだピンピンしていやがるぜ!!　流石は一機五〇億ドルの第二世代だ！　この程度で砕けてくれるような相手じゃなかったらしい!!』

ぎちぎちぎち、という不気味な音が聞こえた。

二キロ先で、多少損傷のあるインディゴプラズマの、主砲が大きく動いていた。ダミーとはいえ、六機もの大戦力を失ったのだ。エリートであるプライズウェルーシティースリッカーの怒りは相当なものだろう。

その感情を証明するかのように、下位安定式プラズマ砲の主砲がちっぽけな生身の兵士へと向けられていく。

そう、クウェンサーのいる方に向けて。

（……いい加減に、無線機の電波を逆探知されたかな）

「ヘイヴィア、それからワイディーネ達も。あいつはもう終わりだ。耳を塞いで伏せてろ。つまらない爆風に巻き込まれて失明や難聴にはなりたくないだろ」

『クウェンサー!!』

『お客様!?』

引き止めるような声が飛んできたが、クウェンサーは無視した。どのみち、今から走ったところで回避できる訳もない。

そこで、クウェンサーは遠くから雷雲が近づいてくるような音を聞いた。

後方から。

「待ってたよ、お姫様」

呟く。

ダミー機六機の爆破後、クウェンサーが携帯端末で確認していたのは、ベイビーマグナムの位置情報だった。

あれだけ大きく状況が変化すれば、お姫様は必ず動く。

クウェンサーはそう読んでいた。

『駄目だぜクウェンサー……』

ヘイヴィアが、呆然とするような口調でそんな事を言った。

『インディゴプラズマは正真正銘の第二世代だ！　万全のお姫様が七門の主砲を全部使って、ようやく撃ち抜けるかどうかの怪物なんだぜ!!　今のお姫様に使えるのは一門だけ。そいつにしたって壊れかけで一〇〇%の出力を出せる訳じゃねえ!!　そんな状態じゃ直撃したってイン

ディゴプラズマを黙らせる事はできねえぞ!!』

そして。

一撃でとどめを刺せなければ、返す刀で吹き飛ばされるのは確実だ。

だが、クウエンサーの表情は変わらなかった。

「これで良いんだ」

無線機を持つのとは別の手で、携帯端末を握って、拳銃のように真正面へ突きつけた。照準補正機能として使えるかどうかは疑問だったが、端末から通信用の赤外線を照射して、インディゴプラズマへと浴びせかける。

レイピアの先端を突きつけ、攻撃の指示を飛ばすように。

「やっちまえよ、お姫様。差別愛好家のクソ野郎にとどめを刺そう」

直後。

二機のオブジェクトから、同時に主砲が発射された。

そう。

下位安定式プラズマ砲を。

インディゴプラズマの周辺には六機のダミー機が『砕け』、機体が蓄えていたであろう下位安定式プラズマ砲用の特殊ガスが充満していたであろうにも拘らず。

当然、訪れる結末は一つだった。

ボバッ!!!!!!　と。

インディゴプラズマが、純白の閃光の中へと呑み込まれていった。

ダミーとはいえ、主砲は動いていた。主砲六門を十分に機能させるだけの膨大な特殊ガスがインディゴプラズマの周りにあった。大量の特殊ガスはインディゴプラズマが放った主砲に反応し、即座に起爆。いかに『砲』として方向性を整えられていなかったとしても、元の爆発の規模が違う。その全てが意図的に調整された最適な温度と同じとはいかなくても、自然と濃度を変動・拡散させていく一部分は、確実に起爆の条件を満たしていた。

装甲は耐えられない。

核兵器ですらも一発二発は受け止めると言われるオブジェクトの表面が、飴細工のように溶けていく。その柔らかくなった所へ、お姫様の下位安定式プラズマ砲が貫いていく。さらに莫大な出力を生み出す動力炉が致命的な損傷を受け、連鎖的な爆発を巻き起こしていった。

「――――、!!」

遠く離れていたはずのクウェンサーの目と耳が、おかしくなりそうだった。

しかし、これでもマシな方だったと直後に気づかされる。

いつの間にか、巨大な壁がクウェンサーを守るように立ちはだかっていたのだ。それはオブ

ジェクトだった。ボロボロにされたベイビーマグナムが割り込み、盾として機能したのだ。

『やっほー。生きてる？』

「今にも死にそう……」

『どうせならこっちの心配もしてくれねえかな!!　俺らはテメェの半分ぐらいの距離からあの爆音と閃光にさらされたんだぜ!!』

ヘイヴィアの泣き言が無線機から聞こえたが、お姫様は無視する方向で決めたようだった。

『シティースリッカーは？』

「死んだろ。あれだけの爆発だ。脱出装置で外へ出ていたとしても、空中で蒸し焼きになっている」

『じゃあ、さいごのしごとをしなくちゃね』

「そうだな」

クウェンサーは無線機に向かってこう告げた。

「ばあさん達に、もう大丈夫だって知らせよう」

12

移民居住都市の混乱は治まりつつあった。

きっかけはテレビだった。本来の放送局は放送を中断していたが、ベイビーマグナムの軍用アンテナを使って強引に海賊放送を流したのだ。画面に映し出されたのは、七機の怪物兵器の残骸。それから遅れて合流した第二七機動整備大隊の兵士達が抱き合って歓喜の声を上げている映像だった。中継には、CS放送のスタッフも協力してくれた。

当初は作り物かと疑った者もいたらしい。

が、街の外れから双眼鏡で実際にオブジェクトの残骸を目視できる事が分かると、恐怖に彩られた街の雰囲気は一変した。今まで騒いでいたのが信じられないほどに、急速に暗い熱意は萎んでいく。

「よう、ばあさん。運転手つきの高級車でお出迎えだぜ」

移民居住都市の一角にオフロードカーを停め、ヘイヴィアはそんな事を言った。助手席のクウェンサーと婆さんの目が合ったが、学生は軽く肩をすくめただけだった。

婆さんは娘夫婦や孫娘らと一緒だった。

家族と離れ、オフロードカーの方へと向かいながら、婆さんは言う。

「覚悟はできておる。儂の処分は？」

「保留ですって」

クウェンサーは上官から頼まれた伝言をそのまま話す。

「緊急時につき部隊の統制能力を一時的に失ったとして、フローレイティアさんが始末書を書

かされるそうですが。あの人からの伝言です。失態は結果で埋め合わせろ、ここで切り捨てるのをためらう程度の技術力があって良かったな。だそうです」

「……そうか」

婆さんは、それだけ言った。

おそらく、言葉では表現できない様々な感情を胸の内にしまって。

「おばーちゃん」

その時、婆さんの孫娘らしき少女が、彼女を呼び止めた。

少女は遠くにあるものを指差して、こんな事を尋ねてきた。

「あれ、おばーちゃんが作ったの？」

街の外を移動していたベイビーマグナムだった。この距離からでも望遠レンズで捉えられるのか、指を差す少女に対し、主砲を小さく振ってあいさつしているのが分かる。

整備兵の婆さんはしばらく黙っていた。

「……そうじゃよ」

やがて、ポツリと彼女はこう答えた。

「あれが、儂の作った正義のロボットで、こいつらが自慢の仲間達じゃよ」

オフロードカーの運転席でハンドルを軽くさすっていたヘイヴィアは、助手席にいるクウェンサーにこう尋ねた。

「（……突っ込まねえの？）」

「（……今ぐらいは良いだろ）」

整備兵の婆さんを乗せて、オフロードカーは発進した。

移民居住都市の外へ。

お姫様の待つ、整備基地ベースゾーンへ。

終章

ほとんどの車両を失った第二七機動整備大隊は、アラスカ方面の軍用空港へ臨時に滞在していた。今はスノウクエイクやアクティブスレッジといった、『正統王国』軍のオブジェクトのあった整備基地から、使えるパーツを輸送機で回してもらっている最中だ。

アラスカ方面の情勢は再び不安定になってきた。

この一帯を支配していた『正統王国』軍のオブジェクトが片っ端から失われていったのだから、逆転を狙う勢力からすれば千載一遇のチャンスである。

とはいえ、悲観的になる必要もないらしい。

大西洋で待機していたオブジェクトの内の何機かは、そのままアラスカ方面の防衛に回されるらしい。インディゴプラズマやダミー機を含む、二四の大勢力が崩壊したため、こちらへやってくる事をためらう理由が消えたから、という事だ。

なので。

ひとまずの危機が去ったと判断したクウェンサーは、すっかり肩の力を抜いた様子で軍用空

港の食堂のテーブルに上半身を預けたまま、
「えっ？　じゃあウチに来てたテレビ番組って、『CS☆ミリタリーチャンネル』だったの!?」
「あんだよ。芸能人のファンだった？」
「いや、ファンって訳じゃないけど、うわ、ヤバいな。これきっとホントにヤバいぞ。絶対に根に持たれる。あの子は『没落』した後もメチャクチャ気位が高いからなぁ」
「？」
眉をひそめるヘイヴィア。
彼はクウェンサーが幼少期にどんな元『貴族』のご令嬢と交流していたかなんて知らないのである。当然、一家を食料倉庫の奥に匿っていた事も、その後どうなったのかも。
「いやー、ひどいひどい」
自分の肩を適当に揉みながら、フローレイティアがやって来た。
「この期に及んで誰が手柄を分配するのかで上は大騒ぎ。スノウクエイクやアクティブスレッジは身を呈して勝利に貢献したって主張して、優遇措置が欲しいみたいね。ま、オブジェクトを再建させなきゃならないんだから、追い風が欲しいのは分かるけどさ。そんなもんに私を巻き込まないでほしいよね。書類の量が半端じゃない」
「良くブチ切れてお偉方の顔面をぶん殴りませんでしたね」
「クウェンサー。お前は私をどんな人間だと思っているの。心優しく平和を愛し正義を貫く純

情可憐な女性将校フローレイティア カピストラーノちゃんよ？　そんなはしたない真似ができると思って？」

「……ホントにそんな人間なら、インディゴプラズマ戦の直後でヘロヘロになってる俺らを捕まえて、三時間以上も説教したりはしねえんじゃねえですかね」

「ヘイヴィア。説教が嫌なら無言で営倉にブチ込むけど？　北極圏の牢獄はアバシリどころの騒ぎじゃないって話よ」

言うだけ言うと、フローレイティアは食堂のテーブルの上に何枚かの紙を置いた。

「何ですかこれ。俺達にも始末書の嵐が？」

「違う。例のミリタリー系のCS放送。スタジオでトークするための材料として、いくつかのアンケートに記入してほしいんだと。ま、あれだけエキサイティングな映像が撮れたんだ。マニアのスタッフどもは歓喜の涙を浮かべているでしょうね」

「あんな『正統王国』間の内輪揉め、放送できる訳がないでしょうが」

どれどれ、とアンケート用紙を眺めているクウェンサー達へ、今度はお姫様が近づいてきた。流石に今回の戦いでは彼女も体力的にかなり消耗しているはずだ。

彼女はクウェンサーの後ろに回り、肩越しにアンケート用紙を眺めながら、

「何してるの？」

「テレビ番組のアンケート」

クウェンサー、ヘイヴィア、お姫様、フローレイティアの四人は、テレビ局が用意した質問を目で追い掛けていく。

そこにはこう書いてあった。

『質問四、近年は軍人の低年齢化の傾向が顕著になっていますが、未成年の青少年が最前線へ向かう事に対し、拒否感情を抱いた事はありますか？』

すると四人は、口を揃えてこう呟いた。

己の抱える闇に気づかずに、キョトンとした調子で。

「「「「……いいや、全く？」」」」

「そうそう」

一通りアンケート用紙の記入を終えたフローレイティアが、細長い煙管の先端に火を点けながらこんな事を言った。

「クウェンサー。ヴィクトリア島で『資本企業』軍の零細ＰＭＣを金銭で雇ったそうね？」

「のう!?」

新たな説教の予感に、クウェンサーは肩をビクッと震わせた。

「な、何の事やら……」

「カムチャッカ半島のダイヤモンド採掘場から盗み出した宝石を報酬として支払ったそうね？」

「きゃあああああ――――っ!?」

完璧にばれていた。

朝まで正座オプションでブーツぐりぐり付きは確定だ、と思い知らされたクウェンサーは、真っ白になった。おそらくなんだかんだで今回も、オブジェクトを破壊した功績は丸ごと失われ、良くてもプラマイゼロに収まるのだろう。しかし、あの状況ではワイディーネ達、『資本企業』軍の零細ＰＭＣの力を借りるしかなかった。そうしなければ、移民居住都市は火の海にされていただろう。クウェンサーは、自分の力を過大評価したりはしないのである。

「説教は後でするとして、今は確認作業が先ね。クウェンサー、その零細ＰＭＣの名前は？」

「せ、戦場お掃除サービスです。確か」

「ふうん。無線電波でのやり取りにあった通りか」

どうやらそちらから洩れていたらしい、と今さら気づかされるクウェンサー。しかしフローレイティアは本気で怒る気はないようだった。彼女の表情には、怒りよりも疑問の方が強い。

そう。

疑問。

「クウェンサー」

「は、はい!!」

「現地契約した零細ＰＭＣの名前は、戦場お掃除サービスで良いのね？　通称ではなく、それが正式名称って事で」

「いや、詳しい事は分かりませんけど。彼女達はそういう風に名乗っていましたよ」

「良く聞け」

フローレイティアは煙を吐き出しながら、不意に真顔になった。

「作戦後会議デブリーフィング用の資料を作るために、『資本企業』軍と連絡を取った。あそこはあらゆる活動の基盤に財力と経済がある。軍についても完全ＰＭＣ制で、オブジェクトの整備からセコいボディガードまで、ありとあらゆる傭兵会社は登録される。しかし……戦場お掃除サービスなんて愉快な名前の零細ＰＭＣは、登録されていなかったそうよ」

「なん、ですって？」

「『資本企業』軍の窓口がシラを切っているのか、戦場お掃除サービスっていうのは未登録のモグリだったのかは不明。分かっているのは、少なくとも『資本企業』軍の公式には、そういった名前の傭兵会社は存在しないって事よ。一応諜報部に洗わせる予定だけど、この調子じゃ詳しい事は分からずじまいになりそう」

クウェンサーの顔色を見て、フローレイティアは何か諦めるように苦笑した。

会話を打ち切るように、彼女はこう付け加える。

「知らない間に、厄介な相手と知り合っていたようね、クウェンサー」

一〇輪の装甲車が、整備基地ベースゾーンへと帰ってきた。後部のハッチが開き、五人の女性傭兵が降りてくる。先頭にいたのは金髪に褐色の肌の女性、ワイディーネだった。

「やっほー、ただいま戻りましたー」

わざわざ女性将校が迎えに来た。本来なら必要はないはずだが、おそらく暇なのだろう。少しでも運動したいのかもしれない。彼女のエクササイズは趣味ではなくノルマに変わりつつあったはずだ。

女性将校は、身振りで装甲車を示す。ワイディーネは気づき、装甲車の側面へと向かう。

「いけね。チャーム、レミッシュ。戦場お掃除サービスの社章のラベル剝がしちゃって」

「それ偽名なんだけど」

「悪かったね。なんか染み付いちゃって。コードネームとして残しておく？　とにかく、まずはラベルの除去。『資本企業』のラベルも忘れずに剝がすように」

「今回はぼろ儲けだったよね」

「ええ。まさかダイヤがザクザク出てくるとは思わなかった。毎回こんな感じだと諜報任務も楽しいんだけど」

「『資本企業』じゃ、あれが普通みたいじゃん。憧れちゃった？」
「冗談。ボーナスとしてもらえるなら嬉しいって話よ。誰が好き好んでお金に振り回されっ放しの生活を送ろうって言うの」
わいわいと世間話をしながら、彼女達は装甲車のラベル除去作業を続けていく。あっという間に、『資本企業』らしい特徴はなくなってしまった。
そこで、女性将校が口を開いた。
「例の、戦略ＡＩを使ったダミー機は？」
「木っ端微塵ですっ」
ワイディーネという偽名を使っていた女は、即座に答えた。
「データや集積回路が残るかなって心配もあったんですけど、下位安定式プラズマの爆発をド派手にやりましたから、多分復旧は不可能でしょう。『正統王国』軍の正式開発計画ではなく、プライズウェル＝シティ＝スリッカーの独自研究の成果だったようですので、あれさえ破壊してしまえば、『正統王国』軍全体に波及する事はありません。……ちなみに、二四の開発部門は？」
「すでに別働隊を派遣して捜索し、爆破している。戦略ＡＩに関する研究成果は全て失われた」
「ヤツらもセコい真似しますよねえ」
ワイディーネはニヤニヤと笑って、
「『正統王国』軍内での地位が危うくなったからって、私達『情報同盟』軍のプロジェクトへ

スパイを送り込んで、戦略ＡＩの研究を導入しようとするなんて」
「複数のダミー機との連携を図っていたようだったが、思ったよりエリートの量産がはかどらなかったのが、彼らの敗因ね」
「『ジュリエット』を代表とする戦略ＡＩは『情報同盟』軍の専売特許。それを他勢力が開発する事は許さない、ですか」
ダイヤモンドの入ったラバー製の箱を取り出し、中身を確認しながら、ワイディーネは肩をすくめる。
「えげつないですねえ」
「『正統王国』には彼らの影があったのと同じく、『情報同盟』にも私達の影があるって事よ」
女性将校は意に介さなかった。
「理想郷なんて都合の良い場所は、そうそう簡単に作り出せるものではない」
「おやまぁ。理想を守るために兵力を預けられている指揮官の台詞とは思えませんよ。レンディ＝ファロリート中佐」
名を呼ばれ、女性将校はうっすらと微笑んだ。
ワイディーネは周囲を見回し、
「ウチのアイドル、エリート様はどちらに？　いい加減に誤解は解けたんですか」
「……ええ、何とかね。情報のスペシャリストである我々に、その情報でダメージを与えよう

と考えるとは、あの『正統王国』の学生、なかなかに皮肉好きなようね。おかげで少しは興味が湧いてきた」

すると、カツンという足音が聞こえた。

かなり高い位置からだ。

彼女達が振り返ると、そこには第二世代のガトリング033があった。アラスカで一度失ったはずだが、建造途中のプロジェクトを急遽横取りし、兵装を組み直して同じ機体を用意したのだ。エリート候補だった兵士や整備部隊の連中からは相当恨まれただろうが、上層部の正式な決定なので覆る事はない。これは彼女達の部隊というより、戦略AI『ジュリエット』の存在が大きく働いたのだろう、と分析されている。

そのガトリング033の周囲には整備用の足場が組まれており、そこに一〇歳ぐらいの少女が立っていた。

若干の棘のような視線を残しつつも、彼女は無線を介してワイディーネ達に話しかけてくる。

『ね？　みりょくてきな「とのがた」だったでしょう？　おほほ』

「ええ。気前も良いし頭も回る。私、お客様に惚れちゃいそうです♪」

あとがき

三冊目となりました。
鎌池和馬です。

……一応三冊目ではありますが、実は一冊目が基本的な設定情報やキャラクターの動き、世界観内部の価値観などの説明を行うスターターパックで、以降は拡張パックのような扱いを想定して書いております。作品内の時系列は今のところ繋がっているものの、一冊目で基本的な情報さえ取得していただければ、後はどこから手に取っていただいても楽しめるものを作れれば……という狙いがあったりする訳です。成功しているのか否か、読者さんの方でもチェックしていただけると嬉しいです。

今回は一章ごとのあとがきでもと思いまして。

基本的には短編形式ですが、ある章の中で出しておいた伏線が他の章で回収されるなど、一部イレギュラーな構成を意図的に組み込んでおります。

第一章について。

今まではオブジェクトという怪物兵器のすごさばかりを描写してきましたので、ここではオブジェクトを操るエリートのすごさを描写できる話を、という感じで書いてみました。主人公のクウェンサーがオブジェクトの内部に乗り込むのはこれが初めてとなります。

お姫様とおほほをケンカさせたかったので、全体的なノリはかなり軽めです。

おほほについては、ヴァーチャルな存在であっても感情移入可能なアイドル、という認識を受けているものであると設定しています。

『情報同盟』が開発している戦略ＡＩは、セキュリティソフトなどを見ると、誤検知・誤判断が怖いんじゃないかなあと思うのですが、いかがでしょう？

第二章について。

今までに登場しなかった、スパイの出てくる話です。

戦闘をオブジェクト任せにして、歩兵の出番が減ってくると、こういう諜報・工作系の人員が増えるのかも？　とは思います。

全体の中で最も分かりやすく『陰謀』を表現した構成にしています。ただ、それに終始して

しまうと『オブジェクトと戦う』という本来のテーマから離れてしまうため、あくまでも味付け程度に、といった感じです。

オブジェクトについては、『冗談みたいに軽快にジャンプする機体』というのを出してみたかったので、ここで登場させる事にしました。

この章でコミカルに入手したダイヤモンドは、次の章の重要アイテムとなります。

第三章について。

オブジェクト七機編隊、という冗談のような敵との決戦です。

この『パッと見どうしようもない相手』をどう切り崩していくかをカギにしています。

プライズウェルーシティ＝スリッカーの戦術は、『採用戦争』のスラッダー＝ハニーサックルとは正反対で、オセアニア軍事国よりも攻撃的かつ高性能……といったところです。

実際、どれほどのコストが削減されたかは明記していませんが、彼らが戦争に勝利していれば、オブジェクトの扱い方は大きく変わっていたかもしれませんね。

戦場お掃除サービスの登場が少々唐突だった、と感じた読者さんは鋭いです。彼女達の素性や目的は、終章で明らかになります。通常、『生身の歩兵はオブジェクトと戦う気も起きない世界』であるにも拘らず、やけに好戦的だったのにも事情があった……という訳ですね。

『採用戦争』では敵との会話に重点を置きましたが、こちらではサラッと流しています。このシリーズのテーマとしては、必ずしも必要なものではない、と認識しております。

イラストの凪良さんと担当の三木さんには感謝を。文章には出てこないような小物にも一つ一つ気を配らなくてはならない、面倒なジャンルの作品だと思います。今回も協力していただき、ありがとうございました。

そして読者の皆様にも感謝を。あとがきの冒頭で触れた作者としての狙いは、最低でも二冊目まで書かなければ試す事もできなかった実験でした。本当にありがとうございます。

では今回はこの辺りで。

この一冊が、貴方にとって小さな糧となる事を願いつつ、筆を置かせていただきます。

……何だか『情報同盟』に愉快なキャラが集まっちゃったなあ

鎌池和馬

◉鎌池和馬著作リスト

「とある魔術の禁書目録（インデックス）」（電撃文庫）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）②」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）③」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）④」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑧」（同）

「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑨」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑩」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑪」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑫」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑬」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑭」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑮」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑯」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑰」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑱」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑲」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）⑳」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉑」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）㉒」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS」（同）
「とある魔術の禁書目録（インデックス）SS②」（同）
「ヘヴィーオブジェクト」（同）
「ヘヴィーオブジェクト　採用戦争」（同）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒160 8326 東京都新宿区西新宿4 34 7
アスキー・メディアワークス電撃文庫編集部
「鎌池和馬先生」係
「凪良先生」係

■

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影（きょじんたちかげ）

鎌池和馬（かまちかずま）

発行　二〇一〇年十一月十日　初版発行

発行者　高野　潔
発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒一六〇-八二三二　東京都新宿区西新宿四-三四-七
電話〇三-六八六六-七三一一（編集）
発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見一-八-一二
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）
装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）
印刷　株式会社暁印刷
製本　株式会社ビルディング・ブックセンター

※本書は、法令に定めのある場合を除き、複製・複写することはできません。
※落丁・乱丁本はお取り替えいたします。購入された書店名を明記して、株式会社アスキー・メディアワークス生産管理部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
但し、古書店で本書を購入されている場合はお取り替えできません。
※定価はカバーに表示してあります。

© 2010 KAZUMA KAMACHI
Printed in Japan
ISBN978-4-04-870051-1 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Times,Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

電撃文庫

ヘヴィーオブジェクト

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868069-1

超大型兵器オブジェクト。その操縦士、「エリート」。雪原の戦場に派遣留学したクウェンサーが出会ったのは、そんな素性を持つ奇妙な少女だった――。

か-12-21　1833

ヘヴィーオブジェクト　採用戦争

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-868594-8

宇宙開発技術採用を巡る戦争の最中。戦地派遣留学生のクウェンサーと、見習い軍人のヘイヴィアの次なる相手は、姿が見えない超巨大兵器、ステルス・オブジェクト!?

か-12-24　1954

ヘヴィーオブジェクト　巨人達の影

鎌池和馬
イラスト／凪良

ISBN978-4-04-870051-1

巨大兵器オブジェクトが世界のバランスを支配する世界。不良兵士のクウェンサーとヘイヴィアは、今日もマイペースに戦場を駆ける。近未来アクション、懲りずに第三弾だ！

か-12-27　2032

とある魔術の禁書目録（インデックス）

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2658-X

〝超能力〟をカリキュラムとする学園都市に〝魔術〟を司る一人の少女が空から降ってきた。『インデックス（禁書目録）』と名乗る彼女の正体とは……!?

か-12-1　0924

とある魔術の禁書目録（インデックス）②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2701-2

学園都市「三沢塾」で一人の巫女が囚われの身となった。上条当麻は魔術師ステイルと嫌々手を組み、彼女を助けに行くことになるのだが――！　学園アクション第2弾！

か-12-2　0951

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）③

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2785-3

補習帰りに、上条当麻は御坂美琴とその妹に出会う。御坂妹も姉同様とにかくヘンな奴で……。そんな普段通りの生活の中、学園都市の能力者が次々と殺されはじめる……。

か-12-3 0988

とある魔術の禁書目録（インデックス）④

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2858-2

海へバカンスに来た上条当麻が見たものは、インデックスが青髪ピアスで、神裂火織がスティルで、スティルが海のオヤジで、御坂美琴が当麻の実妹で!? 全てはとある魔術から……！

か-12-4 1021

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑤

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3025-0

8月31日の学園都市。御坂美琴は、さわやか男子生徒に誘われた。一方通行（アクセラレータ）は、不思議な少女と出会った。上条当麻は、不幸な一日の始まりを感じた……。

か-12-5 1083

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑥

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-2973-2

新学期初日。それは上条当麻が通う学校に転校生が来た日で、インデックスにはじめての「ともだち」ができた日で、学園都市に謎の魔術師が潜入した日だった……！

か-12-6 1113

とある魔術の禁書目録（インデックス）⑦

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3205-9

伝説の魔術師クロウリーが記したとされる魔導書「法の書」と、その解読法を知るシスターが何者かにさらわれた。上条当麻は、“不幸”にもその救出戦に加わることに……。

か-12-7 1167

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑧

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3269-5

ここは学園都市屈指の名門女子校・常盤台中学。御坂美琴が体育の授業後、シャワーを浴びていると……。お姉様とあの殿方が交差するとき、白井黒子の物語が始まるのですの!?

か-12-8　1198

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑨

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3385-3

学園都市最大級行事「大覇星祭」。上条当麻や御坂美琴も参加するその大運動会の開催中に、謎の〝霊装〟を巡って、とある魔術師が学園都市に侵入した……!

か-12-9　1243

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑩

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3428-0

学園都市に、ひとつの波紋が広がった。「使徒十字(クローチェディピエトロ)」。そう呼ばれる存在が、上条当麻の大切な人たちの夢を、破壊していく！科学と魔術が交差するとき、物語は始まる！

か-12-10　1257

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑪

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN4-8402-3581-3

大覇星祭最終日。自分が〝不幸〟であることしか自慢できない男・上条当麻が、なんと大覇星祭「ナンバーズ」に見事当選した。景品は「海外旅行」のチケットで……!?

か-12-11　1327

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑫

鎌池和馬
イラスト　灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3683-6

九月三〇日。学園都市の某所に、御坂美琴は立っていた。待ち合わせである。けれど、あの少年は一向に姿を見せず……。罰ゲームを巡る学園(ワールド)コメディ編スタート?

か-12-12　1372

電撃文庫

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑬

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3801-4

九月三〇日の学園都市に侵入した魔術師『前方のヴェント』。彼女が操る謎の魔術により都市機能は完全麻痺、大部分の人間は倒れた。絶望的な状況下で上条当麻は……！

か-12-13　1411

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑭

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-4062-8

一〇月。ローマ正教徒によるデモが全世界で勃発した。混乱の最中、その元凶が盛装『C文書』にあることを聞かされた上条は、土御門と共にフランスへと飛び立つ！

か-12-15　1506

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑮

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-4145-8

治安部隊がアビニョン侵攻作戦で不在の学園都市。そこでは闇の組織らの暗躍が始まっていた。『グループ』の一方通行(アクセラレータ)は、謎の組織『スクール』の存在を知り……！

か-12-16　1537

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑯

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-8670-86-9

宿敵・後方のアックアがついに動いた。標的とされた上条当麻だが、彼の元には五和がボディガードとしてやってきて……インデックスとの同棲バトル勃発!?

か-12-17　1601

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑰

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-867591-8

『禁書目録召集令状』が布告された。何者かに爆破されたユーロトンネルを『王室』と共に調査せよ、という任務だった。上条当麻が被る今度の〝不幸〟は、英国にて開幕！

か-12-19　1730

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑱

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-867897-1

ロンドンはクーデターにより堕ちた。影響はイギリス全土に及び、市街では『清教派』と『騎士派』が対立する中、ついに上条当麻は「あの男」と出会う……!!

か-12-20　1787

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑲

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868137-7

一方通行ら『グループ』が『ドラゴン』について探る中、それを煩わしく思う統括理事会のメンバーが彼らに牙をむく。同じ時、浜面と絹旗が滝壺を見舞いに行くが……。

か-12-22　1847

とある魔術の禁書目録(インデックス)⑳

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868393-7

上条当麻はインデックスを解き放つため、一方通行(アクセラレータ)は打ち止(ラストオーダー)めを救うため、浜面仕上は滝壺理后を治療するため。三者三様の想いが渦巻く、緊迫のロシア編開幕!

か-12-23　1908

とある魔術の禁書目録(インデックス)㉑

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868762-1

〝大切な少女〟を救いたいと望む少年たちの、絶対に退くことの出来ない戦いは続く……!! 果たして彼らの願いの行方は……緊迫のロシア編、クライマックス突入!

か-12-25　1984

とある魔術の禁書目録(インデックス)㉒

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-04-868972-4

右方のフィアンマが企てる『計画』が、ついに発動する。『ベツレヘムの星』。十字教信者だけでなく、全世界の人間を「救う」と言われるその計画とは……!?

か-12-26　2017

電撃文庫

とある魔術の禁書目録（インデックス）SS

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-3912-7

上条のクラスで行く鍋パーティのゆくえは？イギリス清教ロンドン女子寮の乱れた？一日とは？　一方通行が闇へと堕ちた、その先には……。本編補完のSSシリーズ！

か-12-14　1456

とある魔術の禁書目録（インデックス）SS②

鎌池和馬
イラスト／灰村キヨタカ

ISBN978-4-8402-8673-42-6

ジーンズ切り裂き魔を追う神裂、半蔵に恋する郭（くるわ）ちゃん、謎の魔草売り少女と出会う上条刀夜、微妙な強さの超能力者（レベル5）・ナンバーセブン。圧倒的な登場人物で送るSSシリーズ第2弾。

か-12-18　1676

クロノ×セクス×コンプレックス①

壁井ユカコ
イラスト／テンソー

ISBN978-4-04-868145-2

平凡な高校生になるはずだった三村は、なぜか魔法学校の入学式に迷い込んで、しかも女子になっていて!?　性転換×魔法学校×タイムリープ・ストーリー！

か-10-17　1855

クロノ×セクス×コンプレックス②

壁井ユカコ
イラスト／村上ゆいち

ISBN978-4-04-868405-7

ミムラが男子寮で起こった事件に巻き込まれる。本来、同性であるはずの男子にミムラは気安く接するが、女子になっている身ではいろいろ問題があるわけで!?

か-10-18　1920

クロノ×セクス×コンプレックス③

壁井ユカコ
イラスト／村上ゆいち

ISBN978-4-04-870045-0

念願の現代日本に戻ったものの、幼なじみの小町は存在ごと消えていた。意気消沈するミムラのためにオリンピアが使った時間魔法で――学園に恐竜が登場!?

か-10-19　2039

電撃文庫

官能小説を書く女の子はキライですか？

辰川光彦
イラスト／七

ISBN978-4-04-868766-9

氷川月は俺の幼馴染み。まさに大和撫子といった女の子。でも久々に会った彼女は俺にお尻触らせたり風呂にスク水で乱入したりと、どうやら事情があるようで……？

た-24-1　1988

官能小説を書く女の子はキライですか？②

辰川光彦
イラスト／七

ISBN978-4-04-870059-7

突如現われた天真爛漫な中学生・ひみこはえっちな同人作家だった!?　しかも月と真一の事情に気がついてしまい……？　好評のギリギリひめごとラブコメ第二弾！

た-24-2　2038

藍坂素敵な症候群

水瀬葉月
イラスト／東条さかな

ISBN978-4-04-868278-7

「しゅ、しゅじゅちゅします」私立千歳井高校医術部。そこで出会ったのは白衣を身に纏った元気な美少女だった!?　水瀬葉月が贈るフェチ系学園ストーリー登場！

み-7-25　1883

藍坂素敵な症候群2

水瀬葉月
イラスト／東条さかな

ISBN978-4-04-868545-0

涅槃皇終と宇奈月仁央。スカートの裾をぎりぎりまで捲り上げたり、突然紙袋を被ったりする二人と共に、素敵と浩介は色々な部活の手伝いをすることになるが!?

み-7-17　1945

藍坂素敵な症候群3

水瀬葉月
イラスト／東条さかな

ISBN978-4-04-870046-7

なぜか黒崎空の奴隷にされてしまった浩介。なにかと行動をともにする二人に、素敵はやきもき。そんな中、街全体を危機に陥れる《恥溺症候群（フィリア・シンドローム）》罹患者が現れて!?

み-7-19　2040

いとうのいぢ画集

文庫でのイラストを中心に、美麗なイラストを完全再現。
多数の描き下ろしイラストも収録した、進化する『いとうのいぢ』に刮目せよ。

いとうのいぢ画集

紅蓮（ぐれん）

『いとうのいぢ』に刮目せよ。
『灼眼のシャナ』絵師・
いとうのいぢが贈る初画集！

いとうのいぢ画集Ⅱ

華焔（かえん）

初画集から二年――。
進化するイラストレーター
いとうのいぢの世界が
ここに！

いとうのいぢ画集Ⅲ

蒼炎（そうえん）

これは、『灼眼のシャナ』
挿絵師いとうのいぢが
描いてきた軌跡、
その詳録である。

好評
発売中!!

著／いとうのいぢ　発行／アスキー・メディアワークス
定価：2,940円　装丁／A4変型・128ページ・オールカラー

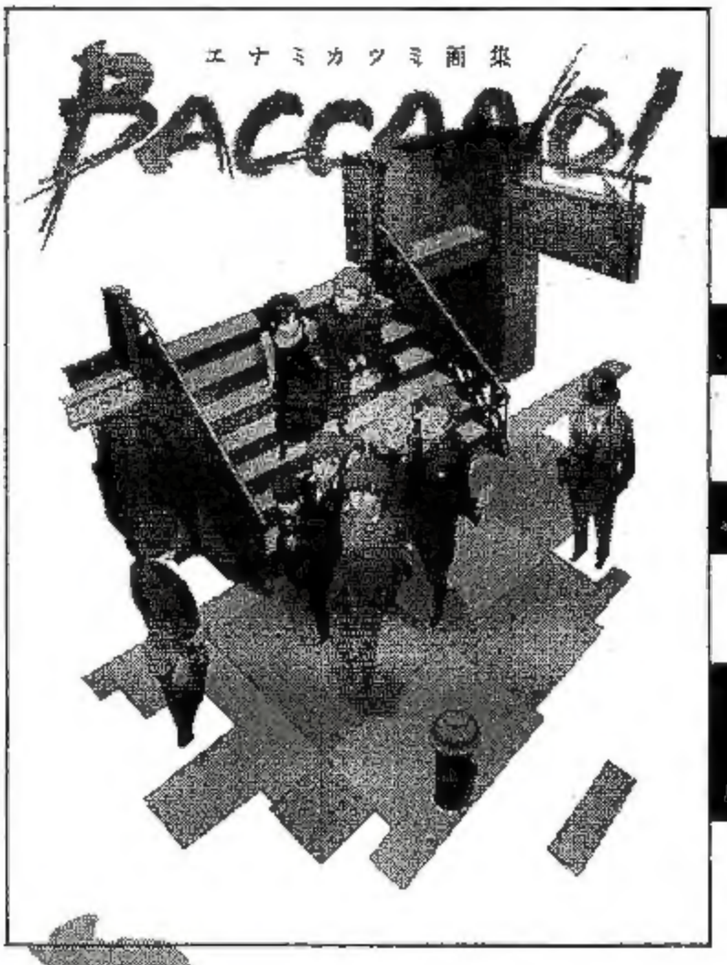
画集

好評発売中! イラストで魅せるバカ騒ぎ!(バッカーノ)

エナミカツミ画集
『バッカーノ!』

体裁:A4変形・ハードカバー・112ページ　定価:2,940円(税込)

人気イラストレーター・エナミカツミの、待望の初画集がついに登場!
『バッカーノ!』のイラストはもちろんその他の文庫、ゲームのイラストまでを多数掲載!
そしてエナミカツミ&成田良悟ダブル描き下ろしも収録の永久保存版!



注目のコンテンツはこちら!

BACCANO!
『バッカーノ!』シリーズのイラストを大ボリューム特別掲載。

ETCETERA
『ヴぁんぷ!』をはじめ、電撃文庫の人気タイトルイラスト。

ANOTHER NOVELS
ゲームやその他文庫など、幅広い活躍の一部を収録。

名作劇場 ばっかーの!
『チェスワフぼうやと(ビルの)森の仲間達』
豪華描きおろしで贈る『バッカーノ!』のスペシャル絵本!

※定価は税込(5%)です。

BACCANO!
画集

おもしろいこと、あなたから。

電撃大賞

自由奔放で刺激的。そんな作品を募集しています。
受賞作品は「電撃文庫」「メディアワークス文庫」からデビュー！

上遠野浩平(『ブギーポップは笑わない』)、高橋弥七郎(『灼眼のシャナ』)、成田良悟(『バッカーノ！』)、支倉凍砂(『狼と香辛料』)、有川　浩・徒花スクモ(『図書館戦争』)、川原　礫(『アクセル・ワールド』)など、常に時代の一線を疾るクリエイターを生み出してきた「電撃大賞」。新時代を切り開く才能を毎年募集中!!!

電撃小説大賞・電撃イラスト大賞

●賞(共通)

大賞……正賞+副賞100万円
金賞……正賞+副賞 50万円
銀賞……正賞+副賞 30万円

(小説賞のみ)

メディアワークス文庫賞
正賞+副賞 50万円
電撃文庫MAGAZINE賞
正賞+副賞 20万円

編集部から選評をお送りします！
小説部門、イラスト部門とも1次選考以上を
通過した人全員に選評をお送りします！

詳しくはアスキー・メディアワークスのホームページをご覧ください。
http://asciimw.jp/award/taisyo/

主催：株式会社アスキー・メディアワークス